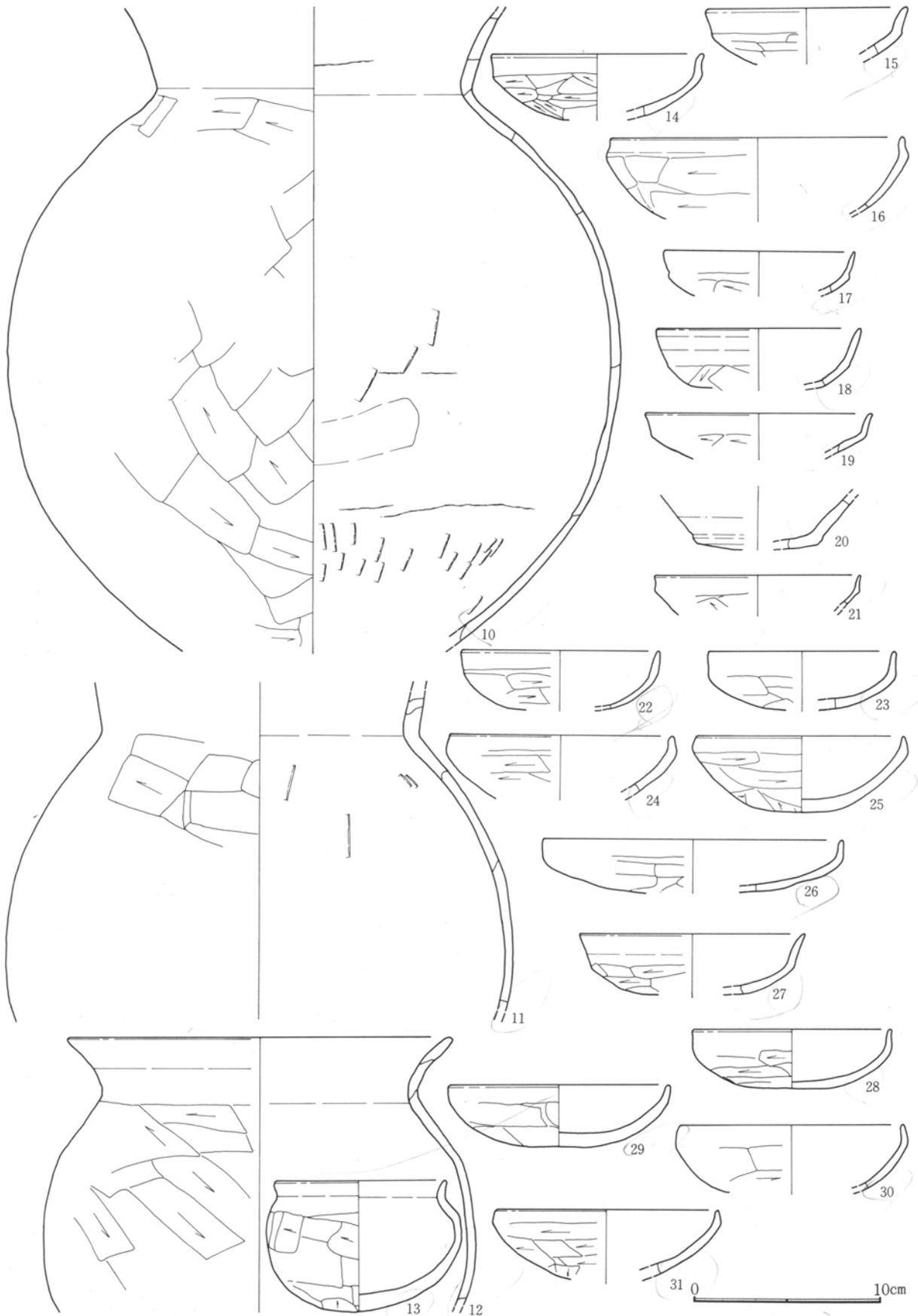
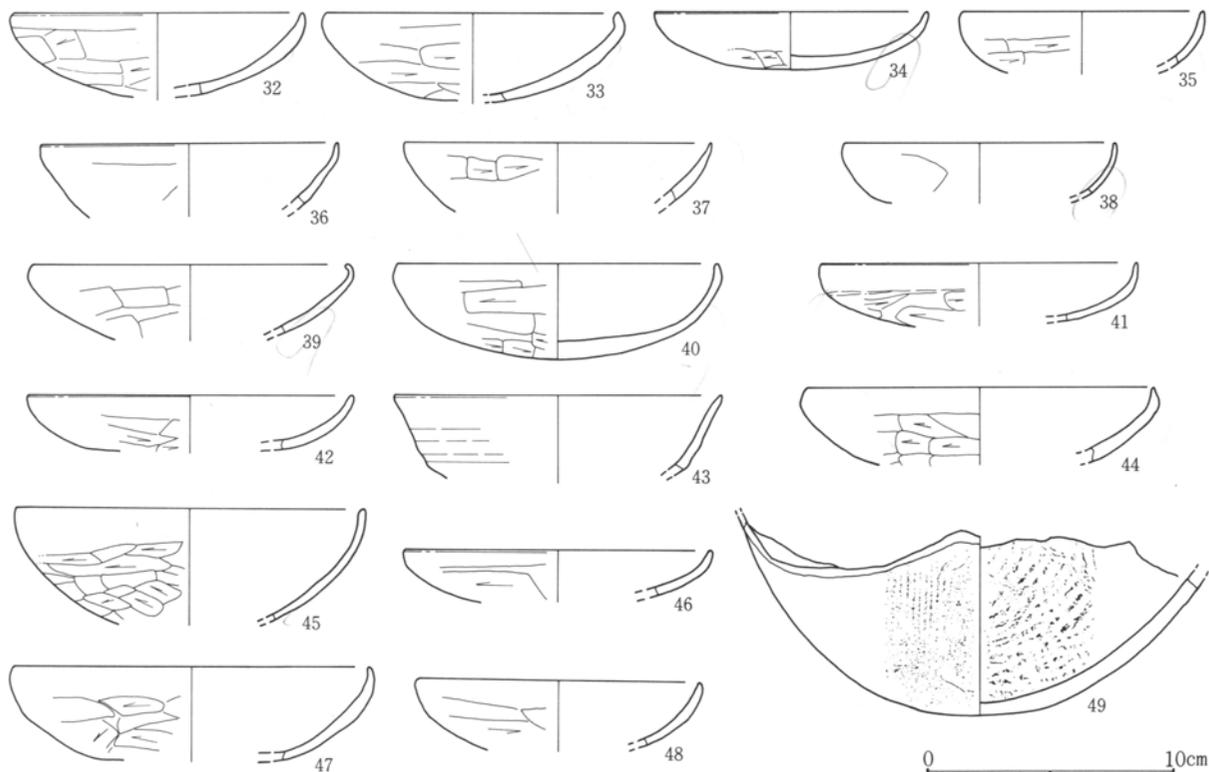


第4節 遺構と遺物



第148図 5号住居址出土土器(2)

第I章 三原田城遺跡



第149図 5号住居址出土土器(3)

表8 5号住居址出土土器観察表

図番号	器種	法量(cm)	器種の特徴	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	甕	口径21.8 器高36.5 底径 4.1	ほとんど膨みを持たない砲弾型の胴部に小さな底部。口縁部ゆるく外反。	口縁部 内外面横撫で 外面 胴部縦篋削り、底部 篋削り、内面 横篋撫で	砂粒(0.5 ~ 1.5mm) を含む	良	にぶい橙色胴 上部黒斑	2/3残存 底部黒斑
2	甕	(23) — —	ほとんど膨みを持たない胴部にゆるく外反する口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 斜めの篋削り 内面 篋撫で	砂粒を含む	良	外面内面とも にぶい橙色	1/4残存 内面有機物付着
3	甕	17.0 — —	ゆるく外反する口縁部、口縁下篋の当り痕明瞭。	口縁部 横撫で 外面 胴部斜めの篋削り 内面 横篋撫で	砂粒を含む	良	明赤褐色一部 にぶい赤褐色	1/3残存
4	甕	(22.9) — —	肩部やや膨み、口縁部外反する。	口縁部 横撫で 外面 胴部斜めの篋削り 内面 篋撫で	砂粒を含む	良	外面にぶい赤 褐色・内面明 赤褐色	1/4残存
5	甕	(23.1) — —	肩部やや膨む。口縁部外反する。	口縁部 横撫で 外面 胴部斜め篋削り 内面 篋撫で	砂粒を含む	良	外内面ともに ぶい橙色一部 黒斑有	1/3残存
6	甕	(19.8) — —	膨みを持たない胴部に、外反する口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 肩部縦篋削り 内面 横篋撫で	細砂粒を含 む	良	外内面ともに ぶい橙色	1/3残存
7	甕	(23.0) — —	膨みのない肩部からやや強く外反する口縁部となる。	口縁部 内外面横撫で 外面 斜め縦篋削り 内面 横篋撫で	細砂粒を含 む	良	外内面ともに ぶい橙色	1/3残存
8	甕	(20.2) — —	胴部膨みを持たず、口縁部外反。	口縁部 横撫で 外面 胴部縦篋削り 内面 撫で調整	砂粒を含む	良	外面は暗赤褐 色・内面は明 赤褐色	1/4残存
9	甕	(23.0) — —	胴部膨みを持たず口縁部外反する。	口縁部 横撫で 外面 斜め篋削り 内面 篋撫で	砂粒を含む	良	外面橙色・内 面にぶい橙色 黒斑有	口縁部のみ一周

第4節 遺構と遺物

図番号	器種	法量(cm)	器種の特徴	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	甕	— — —	球形に近い胴部にやや外反する口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 胴部横斜め篋削り 内面 横篋撫で	砂粒を含む	良	外内面とも橙色・胴部下位黒斑有	1/4残存 外面荒れている
11	甕	— — —	丸みを持った胴部から直立気味の口縁部となる。	外面 横篋削り 内面 横篋撫で	砂粒を含む	良	外面明赤褐色・内面にぶい赤褐色	1/5残存 外面荒れている
12	甕	(20.5) — —	丸味を持って膨む胴部から外反する口縁部となる。	口縁部 横撫で 外面 横・斜め篋削り 内面 撫で調整	砂粒を含む	良	外面灰褐色・内面明褐色	1/3残存
13	小型甕	9.0 7.0 —	丸底の底部から胴部膨み肩部最大径となり、口縁部やや外反する。	口縁部 横撫で 外面 篋削り 内面 撫で調整	砂粒を少量含む	良	外面明赤褐色・内面にぶい赤褐色	2/3残存
14	坏	(11.4) — —	ゆるやかに外反しながら立ち上がる胴部から直立気味の口縁となる。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で		良	にぶい橙色	1/3残存
15	坏	(10.8) — —	外稜を持ち、口縁部やや外傾する。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で		良	外内面ともぶい橙色	1/5残存
16	坏	(15.7) — —	やや深い体部に、弱い稜を持った口縁部が付く、口縁部やや外傾。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	砂粒を含む	良	外内面ともぶい橙色	1/4残存
17	坏	(10.2) — —	膨らみを持った稜を持つ口縁部は弱く外側へ膨む。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	砂粒を含む	良	外内面とも橙色	1/6残存
18	坏	(11.0) — —	強い稜を持つ、口縁部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部 横撫で 外面 篋削り 内面 撫で		良	外内面とも明赤褐色	1/6残存
19	坏	(12.0) — —	外傾する体部からくの字に折れる口縁部となる。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で		良	外内面とも橙色	—
20	坏	— — —	浅い体部から段を持ち、大きく外傾して立ち上がる口縁部となる。	口縁部 横撫で 外面 篋削り 内面 撫で	砂粒を含む	良	外内面ともぶい橙色	1/5残存
21	坏	(11.0) — —	体部からくの字に屈曲して口縁部となる。口唇端部はやや外傾する。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で		良		1/12残存
22	坏	(10.6) — —	外稜部に弱い凹線を持つ。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で		良	にぶい赤褐色	1/8残存
23	坏	(10.0) — —	外反して立ち上がる体部に、ほぼ直に口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	砂粒を含む	良		1/6残存
24	坏	(12.0) — —	やや深い体部に、弱く内傾する口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 篋削り 内面 撫で		良	にぶい橙色	1/6残存
25	坏	(11.2) 4.0 —	体部にゆるく外反して立ち上がり、弱く内傾した短い口縁部となる。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	大小砂粒含む	良	にぶい橙色外面口縁部黒色痕有り	3/4残存
26	坏	(16.0) — —	やや浅めの体部に短く立つ口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で		良	にぶい橙色	1/9残存
27	坏	(12.0) — —	外稜を持つ、口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	砂粒を含む	良	にぶい橙色	1/3残存
28	坏	(10.6) (3.15) —	浅く丸みを持った体部に短かく立つ口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	細砂粒含む	良	外内面とも橙色	1/4残存
29	坏	(11.9) (3.3) —	丸みを持って外反する体部から短い口縁部となる外稜は不明瞭。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	細砂粒含む	良	外内面ともぶい橙色	1/4残存

第I章 三原田城遺跡

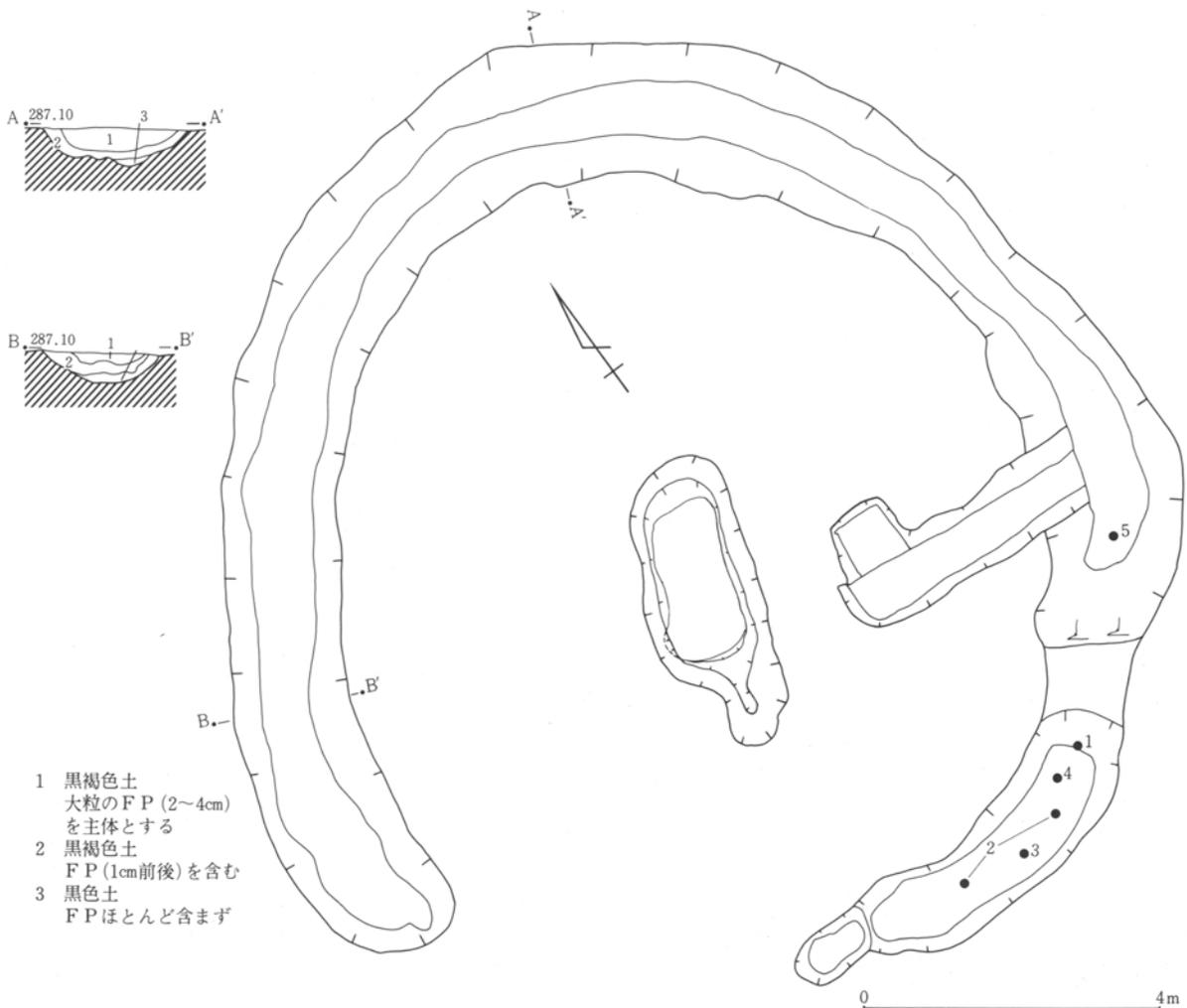
図番号	器種	法量(cm)	器種の特徴	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
30	坏	(12.0) — —	やや深めの体部から丸みを持って内傾する口縁部となる。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で		良	外内面とも ぶい橙色	1/10残存
31	坏	(11.9) — —	深めの体部と短く内傾気味の口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 右→左 内面 撫で		良	外内面とも橙 色	1/3残存
32	坏	(12.0) — —	丸みを持って立つ体部から口縁部は内傾して終る。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 右→左 内面 撫で	砂粒を含む	良	にぶい橙色	内外面タール状 の有機物付着
33	坏	(12.0) — —	丸みを持って立ち上がる体部にやや内傾した短い口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 左→右 内面 撫で		良	にぶい橙色	1/6残存
34	坏	(11.0) — —	やや浅い体部に内彎する口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 右→左 内面 撫で		普通	外内面とも灰 褐色一部黒褐 色あり	1/10残存
35	坏	(9.0) — —	弱く内彎する口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 左→右 内面 撫で	砂粒を含む	良	外内面とも橙 色	1/8残存
36	坏	(12.0) — —	口縁部やや内傾する口縁下部がやや凹む。	口縁部 横撫で 外面 篋削り 内面 撫で		良	にぶい褐色	1/10残存
37	坏	(12.3) — —	口縁部やや内彎する。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 左→右 内面 撫で	砂粒を含む	良	外内面とも明 赤褐色	1/8残存
38	坏	(11.0) — —	口縁部やや内彎する。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で		良	灰褐色	1/10残存
39	坏	(13.0) — —	外反する体部から強く内側へ内彎する口縁部となる。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	石粒を含む	良	橙色	1/5残存
40	坏	(13.0) — —	平底気味の体部より丸く立ち上がり口縁部に内彎する。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 右→左 内面 撫で	砂粒を含む	良	橙色	1/8残存
41	坏	(12.8) — —	口縁部やや内傾気味に立ち上がる。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	砂粒を含む	良	外面橙色一部 赤褐色・内面 橙色	1/8残存
42	坏	(13.0) — —	浅い体部に内彎気味の口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 左→右 内面 撫で		良	外面にぶい褐 色・内面灰褐 色	1/8残存
43	坏	(13.1) — —	弱い稜を持つ・外傾する口縁部。	口縁部 横撫で		良	外面明赤褐色 ～黒褐色・内 面橙色	1/10残存
44	坏	(14.0) — —	やや浅めの体部から内彎する口縁部となる。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 右→左 内面 撫で		良	橙色	1/6残存
45	坏	(14.0) — —	丸く外反して立ち上がる体部から口縁部やや内彎する。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	砂粒を含む	良	明褐色	1/3残存
46	坏	(12.4) — —	やや浅い体部にやや内傾気味に立つ口縁部が付く。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で	砂粒を含む	良	外内面とも ぶい橙色	1/10残存
47	坏	(14.4) — —	平底気味の体部より口縁部やや内彎気味に終る。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 内面 撫で		良	橙色	1/8残存
48	坏	(11.4) — —	丸味を持った体部から内彎気味の口縁部となる。	口縁部 横撫で 外面 横篋削り 左→右 内面 撫で	砂粒を含む	良	外内面とも ぶい橙色	1/8残存
49	須恵器 甕	— — —	丸みを持った底部片	外面 格子叩き目 内面 青海波文様の当て目 一部撫で痕	石英粒若干 含む	良	灰白色	底部のみ

(2) 古 墳

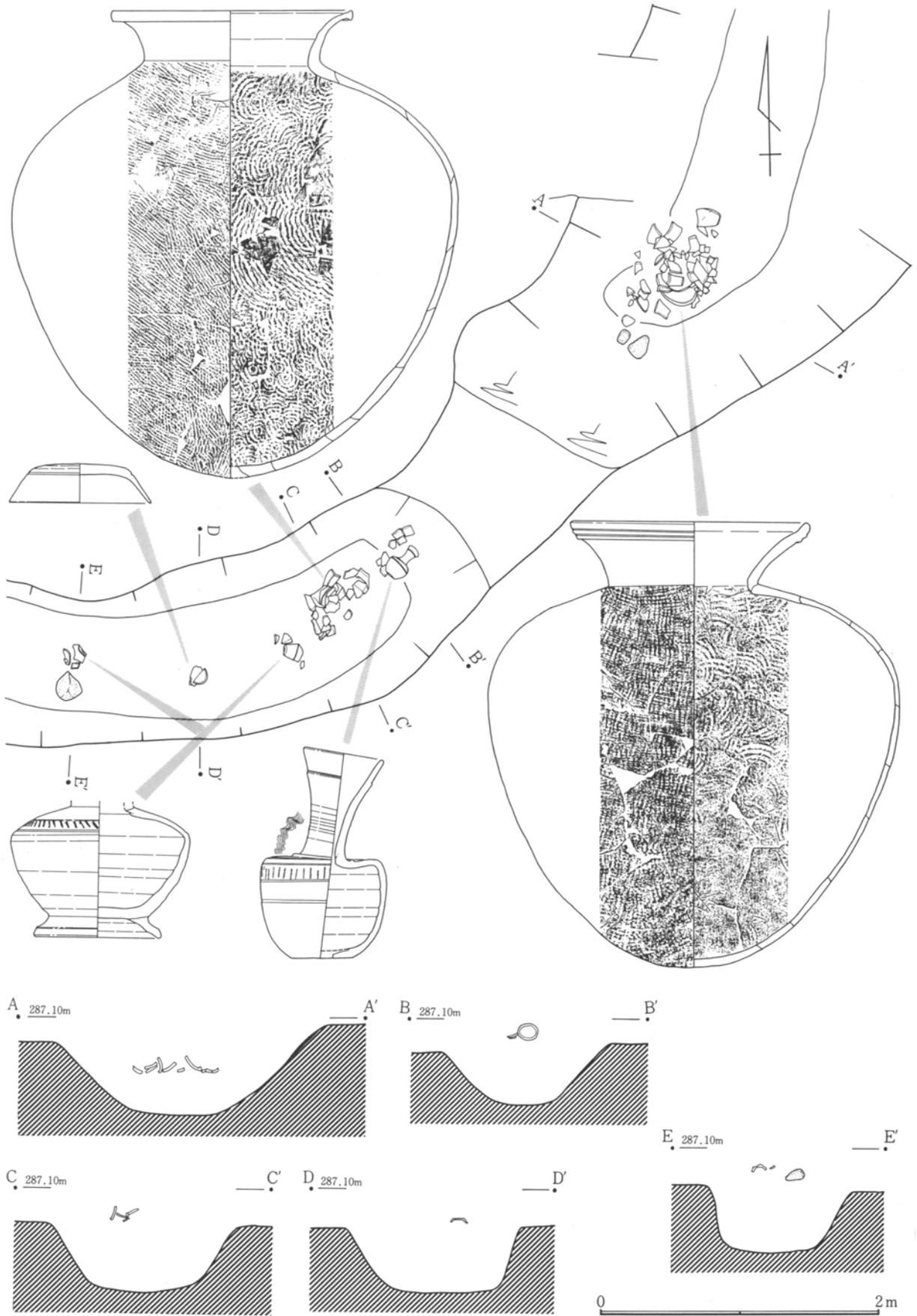
1号墳 (第150図)

調査開始時には墳丘と思われる高まりは見られず、古墳総覧等にも記載はない。調査区中央東寄り、12～18—B 17～23グリッドに位置する。円形の周堀のみを検出した。外径は約14mで南西部が2.5m程途切れ、南東部にも一部浅くなったところが見られる。周堀の上幅は約1.5m、深さ約60cmで断面形は半月状を呈す。近世の土壌、溝によって一部切られた部分もあり、逆に縄文時代の土壌44号、93号、99号、100号、102号、103号を切っている。主体部は認められず、想定される場所には長さ2m、幅1m、深さ1.9mの土壌が検出された、中より石室を構成していたと思われる石が多量に見られ、その中に混じって本古墳に副葬されていたものと思われる直刀、鉄鏃と若干の土器片が出土した。このことから、古墳の墳丘および主体部は三原田城址を築城する際に平夷され、同時に主体部を作っていた不要な石はこの穴に投げ込まれたものと想像される。

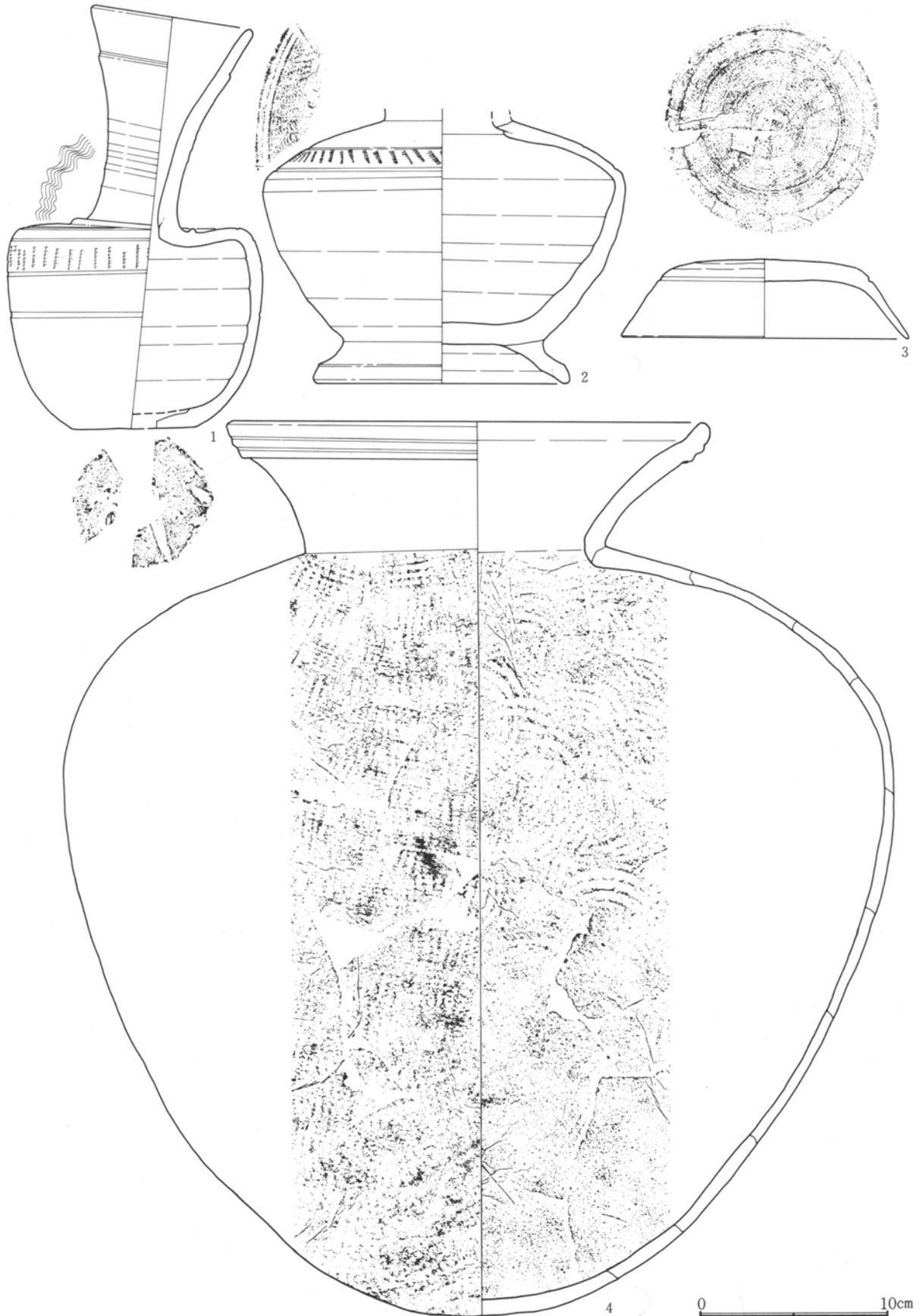
周堀の覆土は上層がF Pを多量に含む黒色土で、下層に行くに従ってF Pの混入度が少ない。周堀の南東部、やや浅くなった部分の両側で須恵器の大甕が潰れた状態で、また長頸壺が2点、内1つはほぼ完形で底部に穿孔がみられる。他に須恵器蓋の破損品がいずれも堀の上層で出土している。(第151～153図)



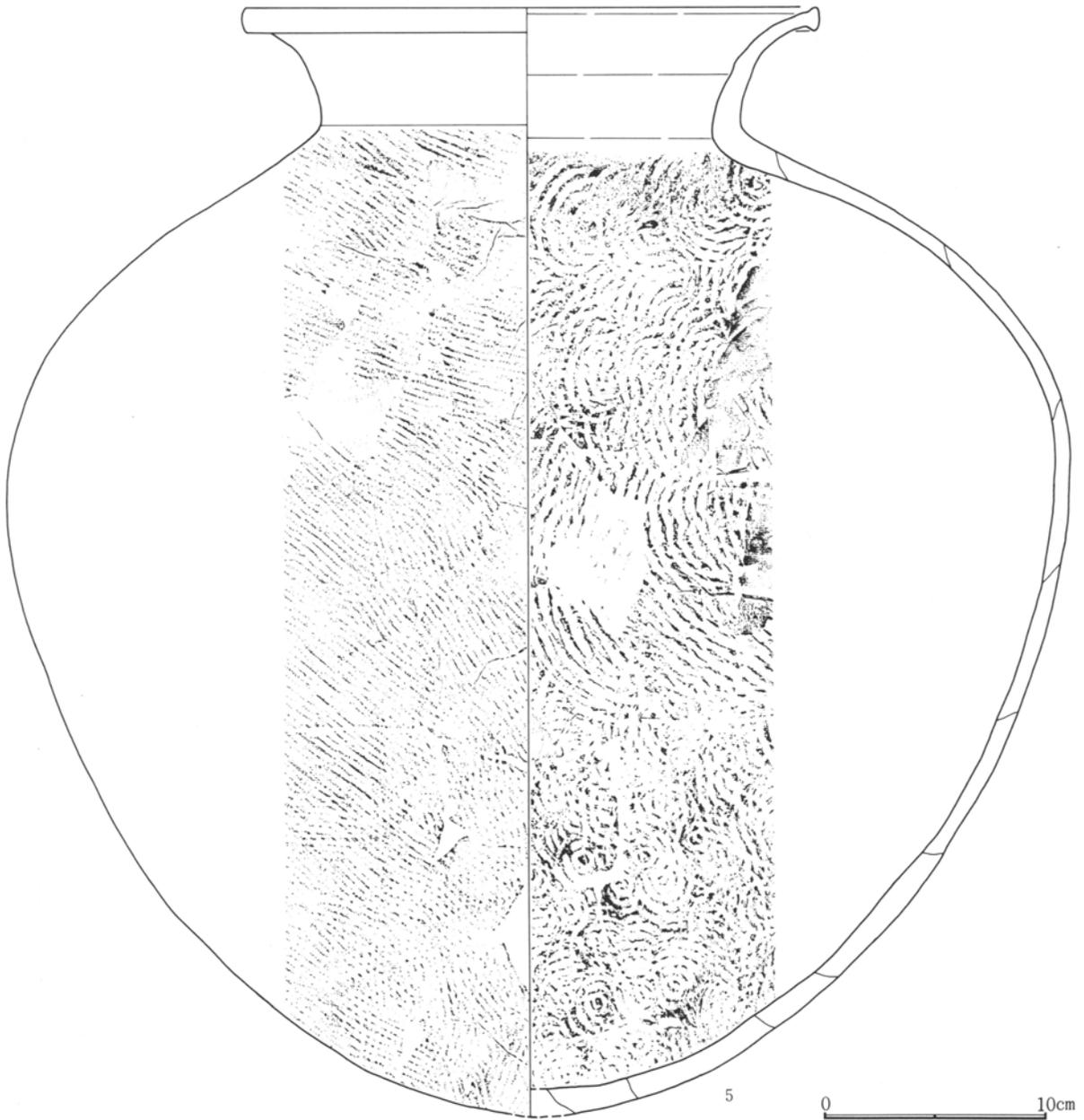
第150図 1 号 墳



第151図 1号墳遺物出土状態



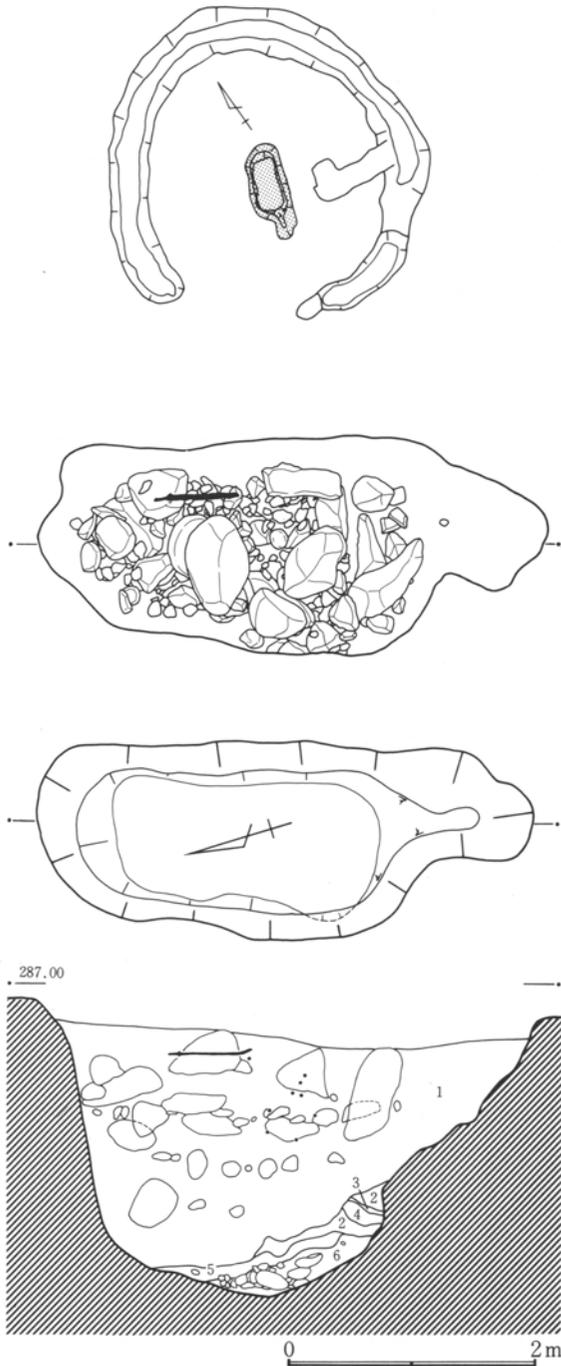
第152図 1号墳出土土器(1)



第153図 1号墳出土土器(2)

表9 1号墳出土土器観察表

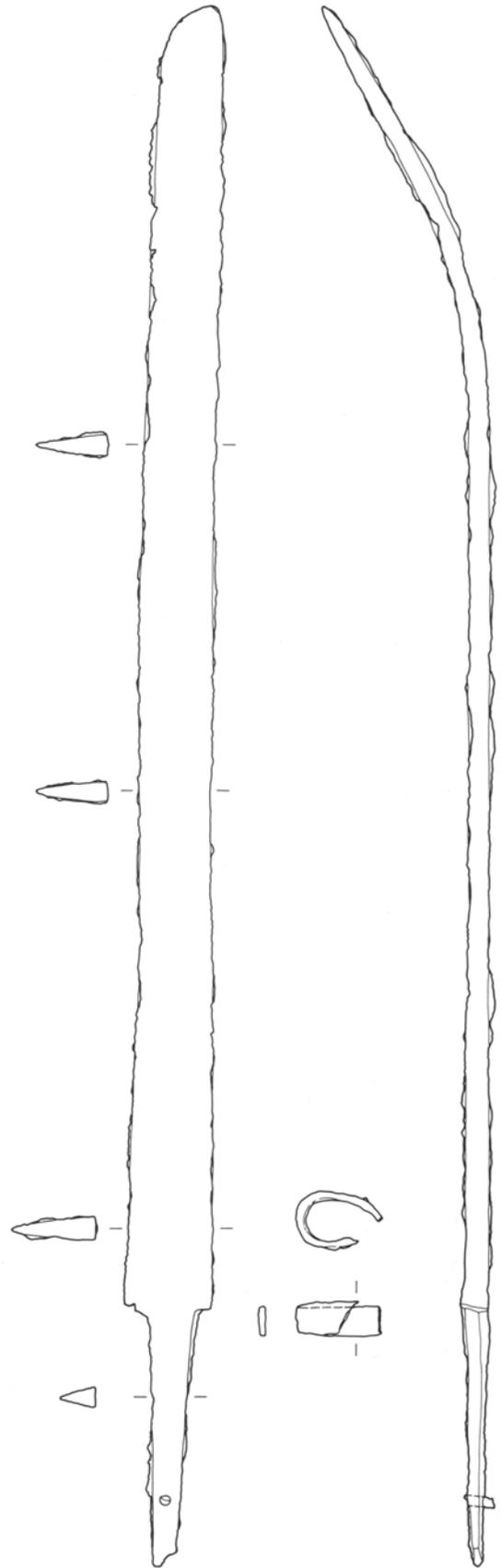
図番号	器種	法量(cm)	器種の特徴	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 長頸壺	口径 8.7 器高22.2 底径 6.7	平底・胴部は張らず頸部との接合面はやや落ち込む、口縁部は外反する。	焼きひずみ有り、肩部・櫛歯による連続刺突文、上面波状文、底部寛切り。	細砂粒を混入	堅緻	オリーブ灰色	ほぼ完形・底部中央欠損
2	須恵器 長頸壺	— — 13.6	胴部は外反して立ち上がりくの字に屈曲し肩部に至る。八の字高台付。	肩部に2本の凹線を巡らしその間に櫛歯による連続刺突、轆轤成形。	細砂粒を混入	堅緻良好	灰色	頸部欠損
3	須恵器 蓋	15.2 4.2 —	平らな天井部から体部八の字に開く、凹線が一周する。	天井部外面、回転寛切り体部撫で。	細砂粒を混入	酸化 ざみ	灰赤色	2/3残存
4	須恵器 甕	25.7 46.9 —	口縁部外反、端部は外側が膨み2本の浅い凹線が巡る。丸底で肩部最大径。	口縁部横撫で、胴部外面格子目叩き、内面青海波文様の当て目。	細砂粒を含む	良好	外面暗赤褐色・内面灰褐色	ほぼ完形・底部欠損
5	須恵器 甕	(25.9) 49.1 —	口縁部外反し、端部は上下がやや尖る。丸底で胴上半部で最大径となる。	口縁部横撫で、胴部外面平行叩き目・内面青海波文様の当て目。	砂粒混入	良好	外内面とも灰白色	ほぼ完形底部欠損



- 1 ロームを多量に混入する黄褐色土層、多量の石を含む
- 2 黒色腐粘土 3 ローム粒含む 4 ソフトロームブロック
- 5 暗褐色土層 6 砂質土壌(黒色土層)礫を含む

直刀観察表

出土状況	土城内北東寄り、確認面より35cm程下がった所で横になった形で、鋒方向をやや低くした状態で出土。破損していたが把縁も関の部分に装着された状況であった。投げ込まれたような状況で、多くの石を伴っており、石の重みによって先端部が上に折り曲がっている。				
計測値	全長69.5cm(現長67.3cm)	刃部幅	最大厚	重さ	
	刃部長 58.5cm	茎部長 11.0cm	3.8cm	1.1cm	670g (把縁含む)
形態の特徴・遺存状態	刃部の幅は関の部分から鋒部に向かって僅かに狭くなり鋒は丸みを持つ。背は厚手で角を持つ、茎の部分は断面三角形を呈し、先は細くなる。目釘穴一つ持ち、目釘が残っている。全体に錆びているが、かなり形状はしっかりと留どめている。				



第154図 古墳内土城・平面・セクション図・出土遺物

## 第I章 三原田城遺跡

### 1号墳内土壙（第154図）

本土壙は古墳周掘のほぼ中央に検出された、南北に長い長円形を呈し、南側がやや突出した形である。規模は長軸4.0m、短軸1.6mで深さは2.3mである。各壁の掘り込みは垂直に近いが南側は、やや斜めに立ち上がる。土壙の中からはかなり大形のものを含む多量の石が出土しており、遺物としては直刀、鉄鏃が検出された。直刀は土壙のかなり上層から出土しているが投げ込まれたような状況で、石の重みによってであろうか先端部3分の1程のところで折れ曲がっていた。土器については小破片のため図示できなかったが、土師器の坏が若干出土している。石は大きなものは60cm程もあり、古墳の主体部に使われていたものと思われる。この土壙の帰属時期については、検出時の状況、土壙埋土の様子からも古墳との直接的な関連は考えられず、三原田城を築くために古墳を平夷した際に露出した石室の石を埋めるために掘られたものと思われる、その際出土した直刀なども同時に投げ入れられたものであろう。

## 第5節 三原田城址

### 1 外堀（第156・157図）

三原田城は、赤城山の西麓に長く伸びた台地上にあり、南側に深い谷を作って流れる天竜川を臨み、東西約500m、南北約300mの範囲に築かれている。今回の調査区は城の西端部、台地がやや細くくびれるあたりで、外堀と想定される部分が調査区のほぼ中央に位置している。

調査の結果、調査区北東部より上幅5m、深さ2.2mの南に向かって掘られた薬研堀を検出した。それは南に行く程広く、また深くなっており、南端では上幅約30m、深さ5mにもなる。またこの堀の底は水の流れた跡が顕著に見られ、数多くの水流によって作られた穴が見られ、中より摩滅した礫に混ざって多くの縄文時代から平安時代にかけての土器や石器が出土しているが、中世以降のものは見られない。さらにこの堀に重なる形で中央に「折り」を持つ箱堀がほぼ南北に掘られている。この箱堀の幅は10m程で、底は幅3～4mの平坦面を持つ。両者の関係は土層断面の観察から、薬研堀のほうが古いことがわかる。この薬研堀については、土層断面の中位に浅間山B軽石の堆積が見られることから、掘られた時期は平安時代末期以前ということになり、三原田城址の中にあつたとされる。寺院との関係を考えたい。また箱堀については当初の築城時に掘られたものか定かではないが、いずれにしても城に関する防御施設としては重要なものであつたのであろう。

城の現況は、南側、天竜川沿いの部分は各曲輪の遺り具合が良いが、本丸周辺の堀に関しては近年住宅等の建築に伴いそのほとんどが埋められてしまい、わずかにその痕跡を認めうるに過ぎない状況である。しかしながら興禅寺周辺には僅かではあるが土居が観察される所があり、あたりを流れる水路も一部堀であった場所を流れている。

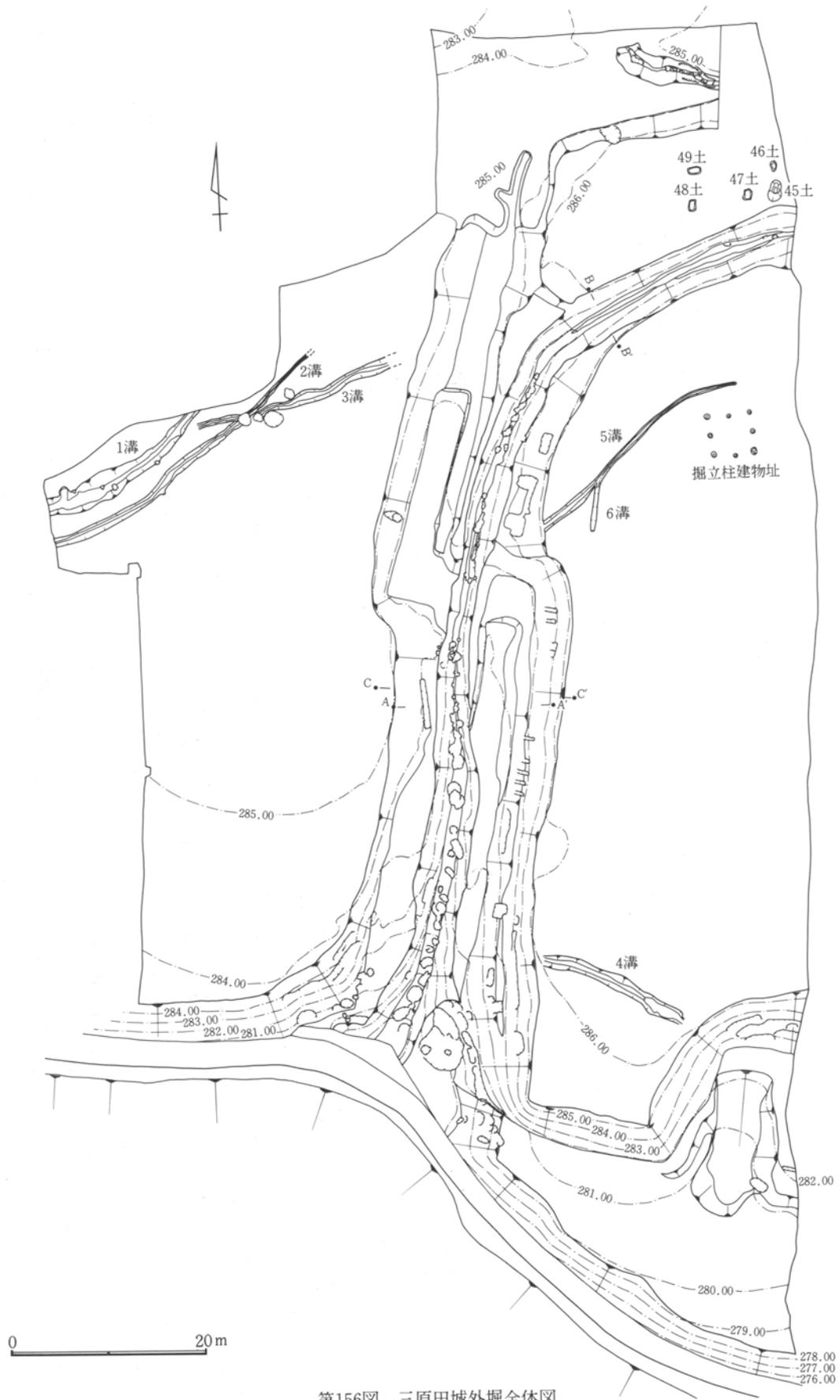
### 外堀内出土遺物（第158図）

調査区中央を南北に貫くこの外堀の占める面積の比率は、調査区全体の実に30%以上を占めており、堀の覆土中から前述したように縄文時代の石器、土器を中心に、近世に至るまでの、各時代にわたる遺物が出土している。ここではこうしたなかから古墳時代以降の遺物について説明を行う。

外堀は少なくとも、2時期にわたる大掛かりな掘削が行われていることは前節で述べたが、古い時期の所産と考えられる薬研堀は、浅間山B軽石の堆積が示しているように、一次埋土中からは中世以降の遺物は検出されていない。多くは縄文時代のもので、他には、少ないが（第158図）に示すような古墳時代から奈良・

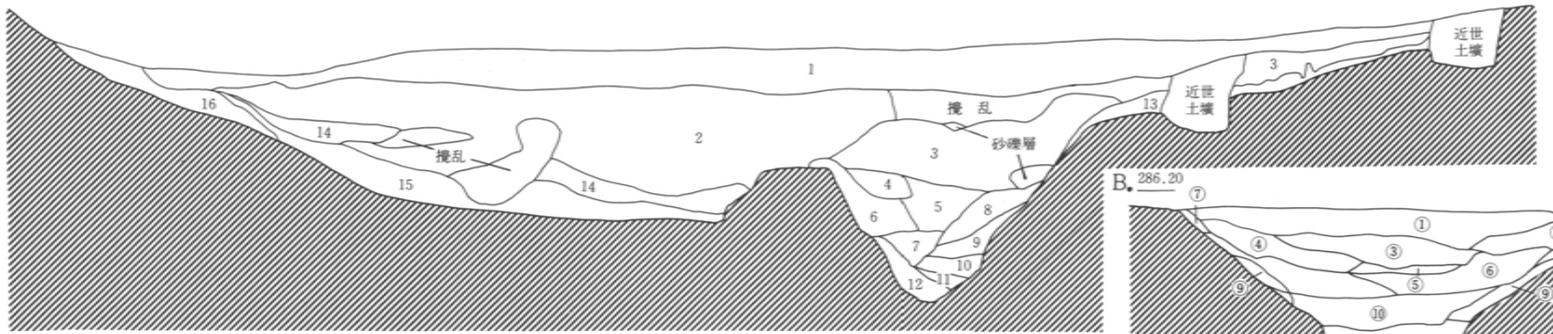


第155図 三原田城址地形図



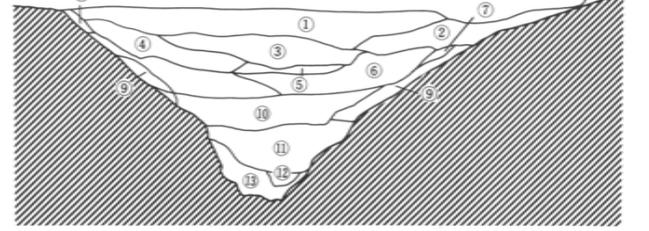
第156図 三原田城外堀全体図

A. 285.20



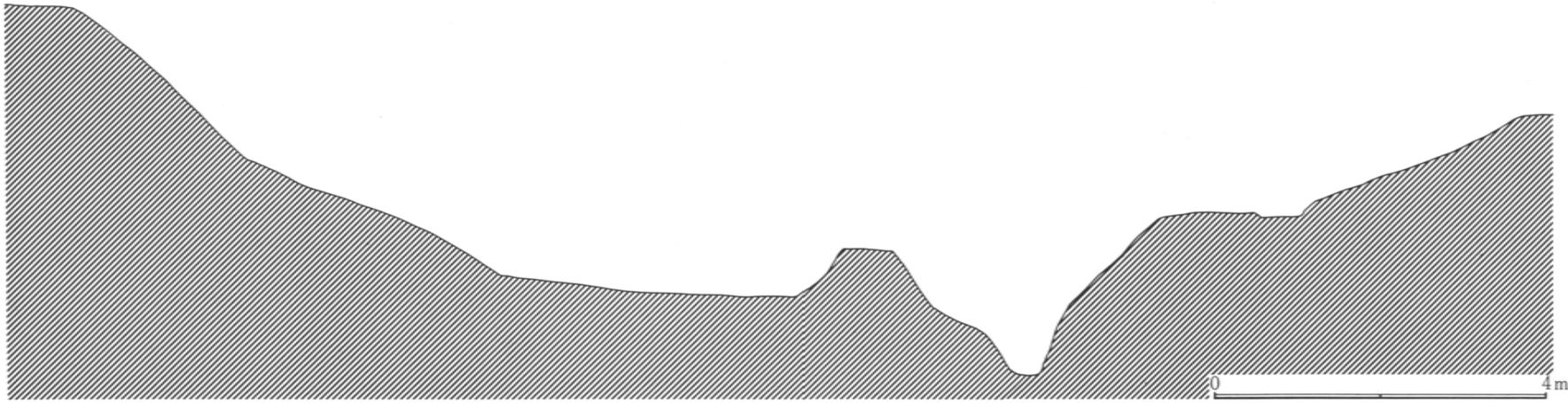
- |         |                    |          |                    |
|---------|--------------------|----------|--------------------|
| 1 表土    |                    | 9 黄黒褐色土  | 8層に近似するが、ロームやや多く含む |
| 2 黒褐色土  | FP多く混入             | 10 黄褐色土  | ロームを混入する           |
| 3 黒褐色土  | FP多く混入、2よりやや黒味を帯びる | 11 黒褐色土  | FPを混入する            |
| 4 黄褐色土  | ローム粒子多く混入          | 12 淡黒褐色土 | ローム及び砂利を含む         |
| 5 黒褐色土  | FPを若干混入            | 13 黄褐色土  | ロームブロック多量に含む       |
| 6 黄褐色土  | ローム粒、FP粒子を混入       | 14 黄褐色土  | ローム多量に含み、ややふかふかする  |
| 7 黄褐色土  | 6層に近似するが、やや黒味を帯びる  | 15 黄褐色土  | ロームを多量に含む          |
| 8 黄黒褐色土 | ローム粒若干含み、ややさらさらする  | 16 黄褐色土  | ロームを主体とする          |

B. 286.20



- |         |              |         |                |
|---------|--------------|---------|----------------|
| ① 黒褐色土  | ローム・FPを混入する  | ⑩ 黄褐色土  | 9層に近似するがFPが目立つ |
| ② 黒褐色土  | 1層よりややローム多い  | ⑪ 黄褐色土  | 10層に近似、やや黒っぽい  |
| ③ 灰黒色土  | ローム・FPを混入する  | ⑫ 灰黒色土  | FP、砂利を含む砂礫層    |
| ④ 灰黒色土  | 3層に近似する、FP多い | ⑬ 黄黒褐色土 | ロームを混入する       |
| ⑤ 黒色砂質土 | BPの2次堆積層     |         |                |
| ⑥ 黒褐色土  | FPを混入し、やや砂質  |         |                |
| ⑦ 黄褐色土  | ローム・FPを混入    |         |                |
| ⑧ 黄黒褐色土 | FPを混入する      |         |                |
| ⑨ 黄褐色土  | ローム多量に混入する   |         |                |

C. 287.00

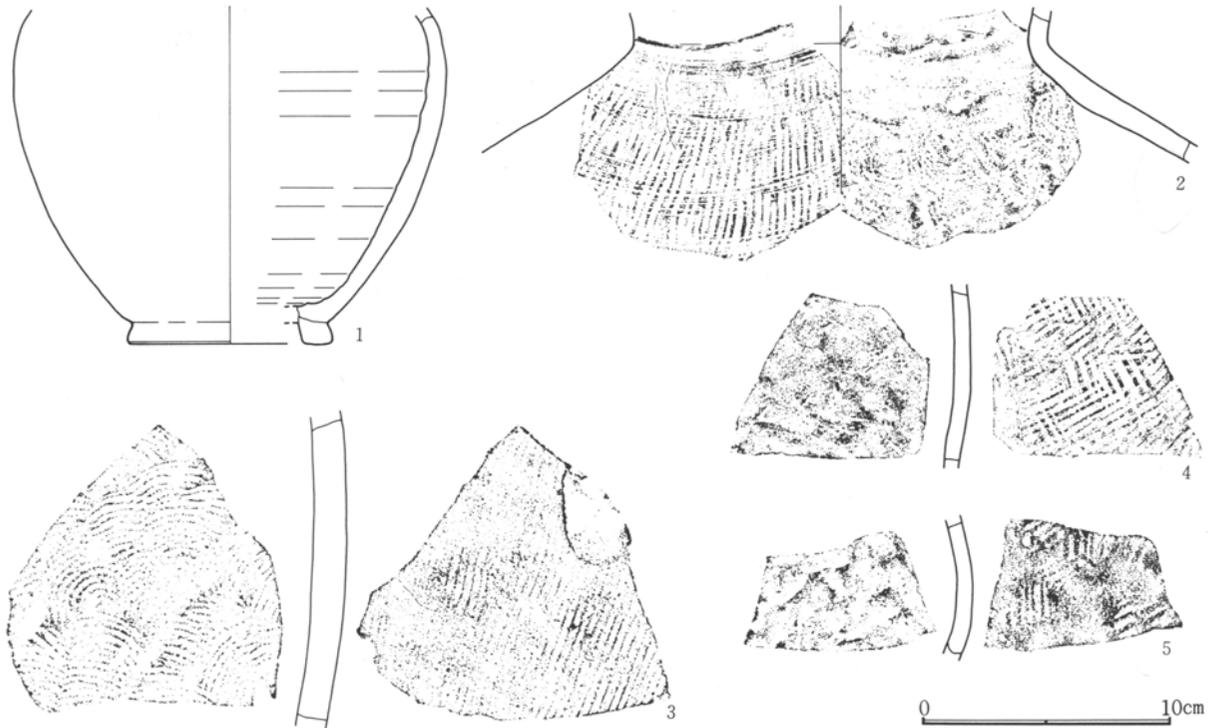


第157図 外堀・セクション・エレベーション

第I章 三原田城遺跡

平安時代にかけての須恵器片であり、遺物の多くはかなり摩滅している。

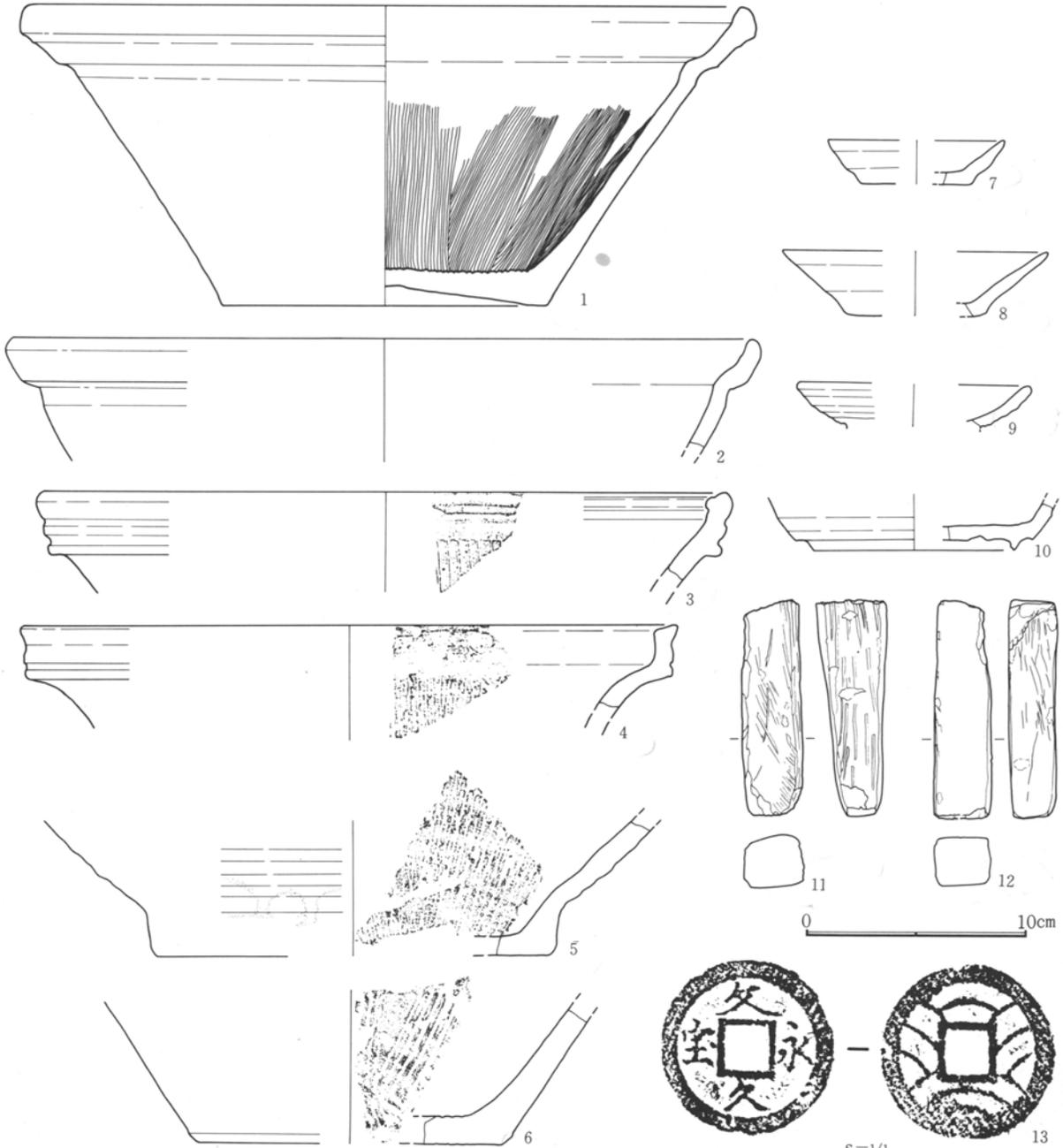
さらに、三原田城址と直接関連すると思われる箱堀の埋土に関しては、かなり最近まで土が幾度となく動かされていることもあり、中・近世の遺物は層位的な出土状況は認められない。いずれもかなり上層から出土しており、播り鉢類を中心に陶磁器、砥石、古銭などである。(第159図)



第158図 外堀内出土土器

表10 外堀内出土土器観察表

図番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	色調	胎土	備考
1	外堀内	須恵器壺	底径 (8.2)	胴部でやや膨み底部は縮り、低くしっかりした高台が付く。	轆轤成形	灰白色	砂粒若干含む	かなり磨滅している
2	外堀内	須恵器甕	—	直線的に肩が開く。	外面 平行叩き目。櫛状工具による平行線。 内面 青海波文様の当て目	黒灰色	砂粒若干含む	頸部から肩部にかけての破片
3	外堀内	須恵器甕	—	—	外面 平行叩き目 内面 青海波文様の当て目	灰色	砂粒若干含む	胴部破片
4	外堀内	須恵器甕	—	—	内面 格子叩き目後撫で調整 内面 撫で調整	灰色	砂粒若干含む	胴部破片
5	外堀内	須恵器甕	—	—	外面 平行叩き目後撫で調整 内面 撫で調整	灰色	砂粒若干含む	胴部破片



第159図 遺構外出土遺物

表11 遺構外出土遺物観察表

図番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	色調	胎土	備考
1	外堀上層	播り鉢	口径 32.6 器高 13.5 底径 14.8	底部から口縁に向かって直的に開く。口縁端部やや肥厚し内外面に弱い稜を打つ。	器面は横位の撫で。櫛目は15本1単位で15単位の放射状に密接。底に渦巻状。	茶色		ほぼ完形
2	外堀上層	播り鉢	(34.0) — —	口縁部外反、内側に弱い稜。	内外面横撫で、口縁部に指頭痕。	茶色	乳白色、夾雑物少ない。	口縁部片
3	外堀上層	播り鉢	(31.2) — —	口縁部外側へ折り返し。	口縁内側に突帯が廻る。	茶色	茶色、砂粒含む。	口縁部片
4	外堀上層	播り鉢	(30.0) — —	口縁部受け口状に立つ。内外面に稜を持つ。	内外面横撫で、櫛歯6本。	灰褐色	灰色、石粒目立つ。	口縁部片

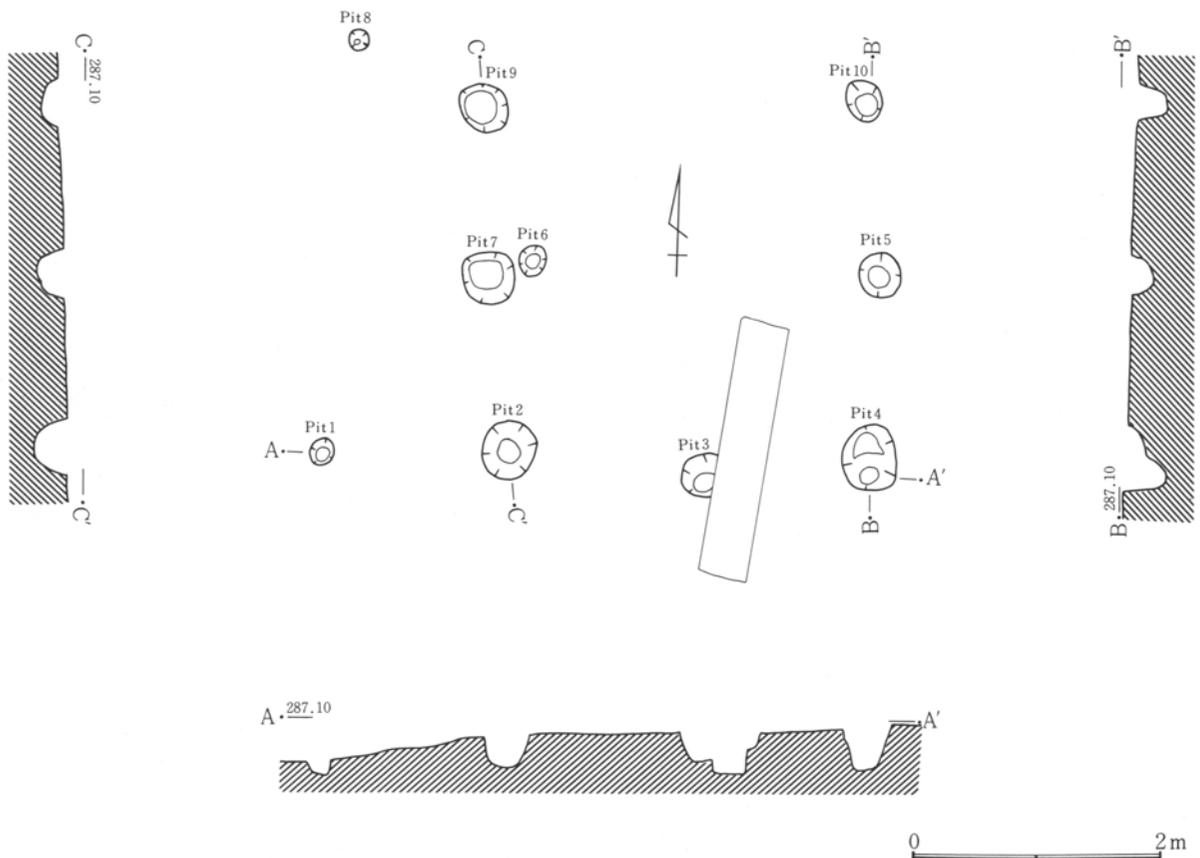
第I章 三原田城遺跡

図番号	出土位置	器種	法量(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	色調	胎土	備考
5	外堀上層	播り鉢	— — (17.8)	底から屈曲して開く。	輪積み、櫛歯は細く鋭い。5本単位か？	薄茶色	夾雑物目立つ	底部片
6	外堀上層	播り鉢	— — (13.7)	直線的に開く。	外面横方向の撫で、櫛歯は7～8本単位。	内外面黒茶色	灰白色、夾雑物少ない	底部片
7	外堀上層	かわらけ	(8.0) 2.0 (5.0)	口縁部やや内彎	左轆轤回転、轆轤痕は弱い。	淡褐色	緻密、焼成やや軟	底部にスス付着
8	外堀上層	かわらけ	(12.0) 3.0 (5.4)	口縁部は直線的に開く。	左轆轤回転	淡褐色	砂粒若干含む。焼成良	
9	外堀上層	皿	(10.6) — —	体部は浅い。口縁端部は丸くなる。	長石釉。外面下方を除き施釉。釉は淡黄灰色。	乳白色	乳白色、軟質夾雑物少ない。	美濃・瀬戸系、17C
10	外堀上層	皿	— — (9.1)	やや底い高台から稜を持った体部となる。	内外面に施釉、削り出し高台。	淡灰緑色	淡黄灰色、軟質	美濃・瀬戸系。17C
11	外堀上層	砥石	長さ 9.6, 横 3.2, 厚さ 2.3	断面方形で、上下両面が使用面で平滑である。両側面は、粗い条線痕が見られる。石材は流紋岩。重さ120gである。				
12	外堀上層	砥石	長さ 9.8, 横 2.6, 厚さ 2.2	断面方形を呈す。上下両面に顕著な使用面を持つ。石材は流紋岩である。重さ105g				
13	外堀上層	銭貨	径 2.6, 重さ 3.4g	遺存状態は良い。裏面に波文あり。 鑄造年 文久3年(1863)				

2 掘立柱建物址

1号掘立柱建物址(第160図)

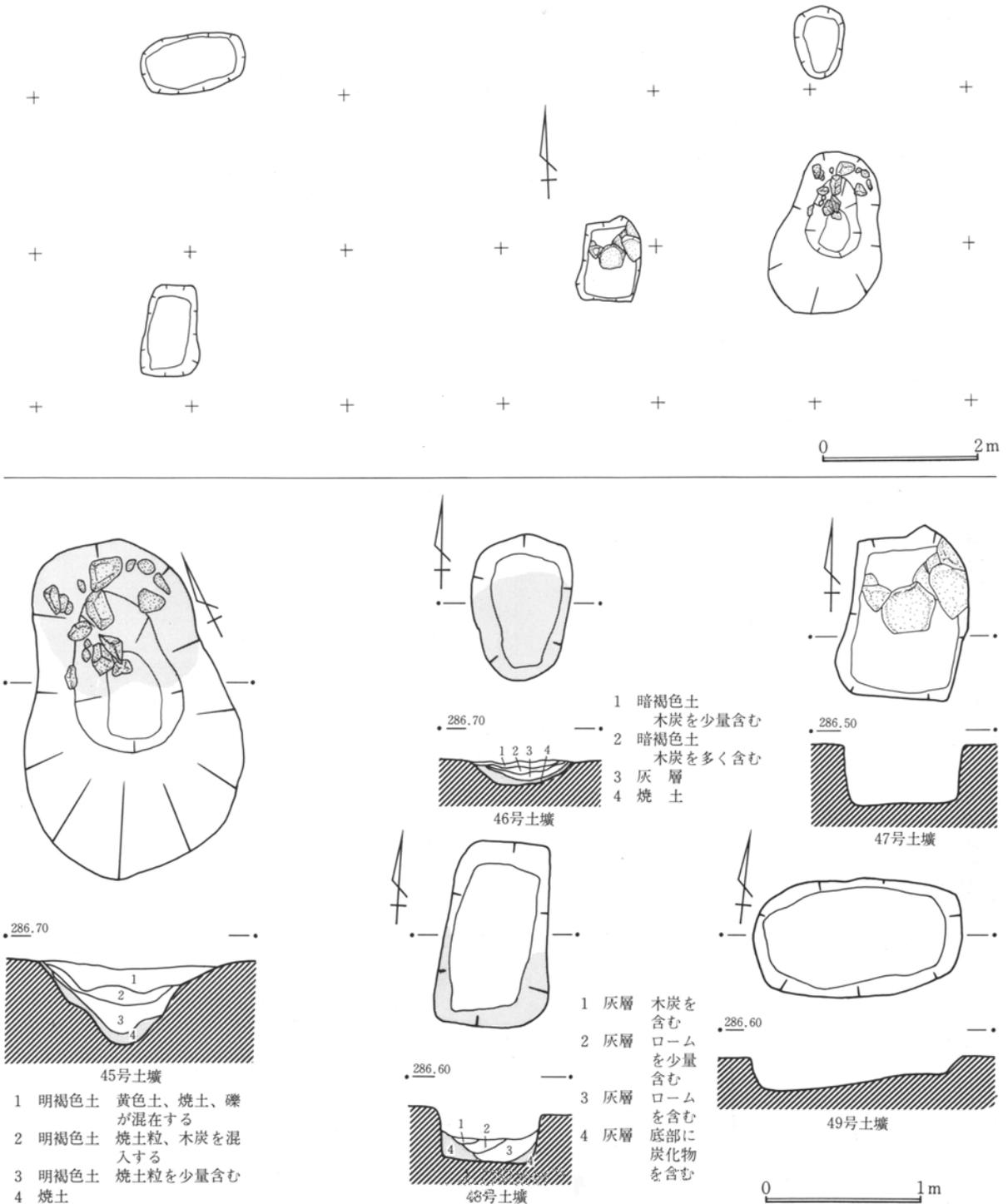
1号墳の北側に近接して検出、13～16—B 25～27グリッドにある。2間×2間で西側に庇を持つ構造である。



第160図 1号掘立柱住居址

各柱穴間の距離は約2.0mであるがやや不正形である。主軸方向はN-4.5°-Wである。

柱穴の覆土は、いずれもほぼ同じで上下2層に分けられ、上層がF Pを含む黒色土で下層はF Pの混入が少ない。どの柱穴からも柱痕は認められなかった。Pit 4 以外は底は平らである。Pit 3 は近世の掘り込みにより東半分を切られている。本址の時期に関しては、判断を下しがたいが覆土の様子からして、中世以降の所産と考え、三原田城に関連するものとして捉えておきたい。



第161図 45・46・47・48・49号土坑

## 第I章 三原田城遺跡

### 3. 土 壙 (第161図)

調査区の北東部、外堀が東へ屈曲する外側に5基まとまって検出された。5基中3基から焼土、灰、木炭が出土しており、火葬墓の可能性もあるが、歯、骨片および銭貨等は出土していない。いずれも土器等の出土遺物は無く、時期判定を下しがたいが、覆土の状況等から見て中世以降の所産と見られる。

45号土壙 長軸をほぼ北にとり、長円形でややくびれた形を呈す。規模は215×118cm、深さ48cmで底は掘り鉢状に狭くなる。底の北側半分に焼土、礫が検出されている。

46号土壙 48号土壙の北に位置する。卵型を呈し、規模は93×63cm、深さ15cmとやや小さい覆土上層および下層に木炭、焼土が検出されている。

47号土壙 45号土壙の西に近接する。形は長方形で規模は103×78cm、深さ38cmである。壁は垂直に掘り込まれ、底は平坦である。南北に軸をとり覆土中に7個の角礫が検出されている。

48号土壙 15～16-B37グリッドに検出した。長方形を呈し、規模は120×65cmで深さ33cmである。覆土は焼土灰を主体としており、上層および最下層に木炭が認められる。

49号土壙 15～16-B37グリッドに位置する。やや長辺の膨らんだ長方形を呈す。規模は135×75cm、深さ18cmと浅く底は西側がやや下がっている。

### 4. 溝

総数6条を検出しており、いずれも覆土にFPを混入する。1～3号溝は調査区北西部に在り、東西に走っているが東端の部分は浅くなり消失している。断面はV字状を呈し水の流れた跡が認められる。4号溝は城内にあり、南側天竜川に向かって張り出した所の付け根部分に検出、両端は切れている。幅は2m程で深さは20～30cmである。5号溝は断面U字状を呈しており西南流し、外堀にぶつかっている。6号溝は短く5号溝に繋がる。このうち4号溝は城の施設と関係があると思われるが詳しいことは不明である。

## 第6節 三原田城考

山 崎 一

三原田城は、勢多郡三原田の字八幡峯という紡錘状の台地に築かれている。ここを内出という。

この台地は、南の天竜川と北の黒沢川との間に挟まれ、川からの比高15m内外、標高は北部で280mを示し、南に緩傾斜している。

城の中心部は東半に偏り、本丸は東西80m、南北100m、囲濠は最大幅10m、深さ5mに達している。南北二郭に分かれ、北郭は南郭より5mも高く、境目の崖下には堀があり、水路になっていたが、近年埋められてしまった。

最初の本郭は南郭であったと思われ、背後に高所を負った南北朝期居館から創始したのではあるまいか。そのような遺構は、同郡新里村の善昌寺館、多野郡鬼石町の浄法寺館、太田市の狸ヶ入館、群馬郡箕郷町の和田山館、吾妻郡吾妻町の丸山城、沼田市の発知館等、各地に見ることができる。台地上は、本丸の東に三筋、西二筋の堀切りで断たれて、並郭式の基本構造があったように思われるが、後に東から導入された用水路と道路開設のため攪乱され、原形誤認のおそれなしとしない。

東端の堀切は、本丸東堀からの距離240m、南北の長さ70m、幅15mを計ることができるが、新道以北は不明である。

その西100mのものは、南北の長さ220m、北から100mの所で角度30度程東南方にそれる。そこを流れる

用水は、屈折部以南も直進する。

本丸東西両側の堀から、それぞれ10乃至20mの線に、南北に並走する堀があったと推定されるが、それらは北の崖端には達しないで、本丸北堀の北25mの現用水路で連結し、本丸の三方を囲む囲堀となっていたと思われるが、用水路は規模が小さく、城堀に該当しない。

本丸西堀から75mの所にあった南北の長さ90mの堀切は、中央部に「折」のある顕著なものであったが、関越道路造成のため失われてしまった。その際の発掘調査では多大の得るところがあり、それについては別項で報告されるが、城址の説明に必要なので、用水に関する部分だけ記載する。

この用水は東の地頸部を通して導入され、ほぼ北部の新道に添って西流するが、途中三か所で南に分水しつつ城の西部に達する。

現在はそこから南に折れ、本丸西堀南部に流入し、本丸西南角から、城の南側脚部に添って流れ、その後天竜川に注ぐ。

ところが発掘調査の結果この水路は、本丸西北角の北30mの所で、一時期旧道の線を西北に流れて崖下に入り黒沢川に向かっていったことを知る事ができた。その流路は鋭い薬研堀状を呈し、南端部は溪谷状になっていた。この堀切りは箱型の平底であったのを、後に用水が窄流したこともわかった。当堀だけでなく、三原田城の城堀はすべて箱型の空堀であった。

用水末端は、最初西北向かい、次に西に転じ最後に南に向かって現流路になったのである。いずれも江戸時代以降のことと考えられる。

本丸の東北100m、鬼門に当たり天台宗の興禅寺がある。

上杉家古文書の「関東幕注文」中に、

「横瀬雅樂助、五のかかりの丸の内十方

新田殿御一家

西谷五郎殿、二ひきりやう

同

三原田弥三郎殿、おなしもん」

とある。

横瀬雅樂助は、実質上の新田金山城主由良刑部少輔成繁で、新田殿とは名目上の金山城主岩松氏をさし、三原田弥三郎もその一族で、西谷五郎と同じく「二引き両」の幕紋であったことがわかる。

新田氏の「大中黒」でなく、源義家以来、足利氏の伝承する「二引き両」を用いたのは、足利時代を経過する間、大中黒を用いることを憚ったのであろう。しかもここに新田殿とあることは、永禄三年(1560)当時、越俊、関東の人々に新田氏をたたえ、足利氏をする意識のあったことが注意される。岩松氏の祖は足利義純(妻は新田義重の孫)の孫経兼である(長楽寺系図による)から足利殿とするか岩松殿としても然るべきであったであろう。

しかし、金山衆中の三原田氏がその頃、この城のある三原田に在住していたとは思われず、岩松氏の三原田とのかかわりを考究する必要があるであろう。

寛文十二年(1672)、三原田に住んでいた永井権兵衛実平が、米沢に居た長尾権四郎景光(元白井城主の裔)の質問に応じて書いた返書(勢多郡赤城村榎の須田氏所蔵)に、「八崎の上に三原田の寄居と申而御座候、是は三原田六朗義高と申より三原田伊豫守と申迄代々居城候、御先祖の時御手に入申より以来我等共罷在候。」とあり、貞治年間(1362~67)、長尾氏が上野守護代として白井(子持村)に入部するまで、三原田に

## 第I章 三原田城遺跡

は三原田氏が居り、その後永井氏が長尾氏からそこを預けられたと伝えている。この書状には「寄居」とあるが、三原田城は「内出」と呼ばれていた。これは異例であって、長尾氏支配の地には「寄居」と呼ぶ小城が多いのである。それは、14、15世紀頃、各地の地衆（国人）達は、集団防衛のためそれぞれの地に「寄居」と呼ぶ小城を構えて有事に備えていたが、そこへ長尾氏が守護代という一種の官僚として入部、支配態勢を作った結果であった。然るに三原田では、従来の領主に替えての被官の永井氏を置いたのであって、そのようなものは「内出（出城）」と呼ぶのである。

但し後には、「寄居」は小城の別命として使用された場合もあって、永井書状の称呼はそれに該当しよう。

だがこれではまだ、三原田義高が「関東幕注文」の三原田弥三郎の祖系という理論は成立せず、世良田長楽寺の松陰西堂が記した「松陰私語」を資料として用いる要がある。

その第一中に、「明純御父子共御義絶、号西國行脚御出行、三原（田）興善寺迄宗悦舍弟金竜和尚送着申婦城。」という条がある。明純御父子とは、金山城主岩松家純の子明純とその子尚純のことで、興善寺は今の興禅寺、宗悦は横瀬國繁の法号である。

当時、上総國古河に拠った足利成氏と、武蔵國五十子（本庄市）を前線拠点とした山の内、扇が谷、越後の上杉諸将との間に熾烈な抗争がつづいたが、文明九年（1477）正月、上杉方を叛した長尾景春が五十子を襲い、上杉諸将は上野國河内（那波郡、群馬郡）や細井（勢多郡）、白井城等に難を避けた。

まもなく太田道灌の赴援で五十子は奪環されたが、五十子から金山城に帰った岩松家純は、あくまで上杉方に味方しようとする明純の意をしりぞけ、成氏方にね返ってしまった。その際、明純父子と義絶し、明純は尚純を伴って金山を去り、三原田の興禅寺に入った。（尚純はその後武州鉢形城に移る。）

それまで金山城に阻止されて西上州に進むことのできなかつた成氏は、機を得て滝、島名（共に高崎市）に進出し、平井城一五十子と白井城一越後との間を分断する戦畧行動に出た。

上杉諸将は急ぎ白井城に撤退し、12月27日、両軍榛名山麓広馬場附近に展開、将に決戦が開始されようとした時、折からの大雪にはばまれて戦線交綏し、翌正月2日、和議が成立したのである。

明純父子が興禅寺に入ったのは、その寺がおそらく三原田氏の菩提所で、白井に集結した上杉方の勢力圏内にあったからである。

三原田氏の館は、本丸南半であったとおもわれるが、その頃は既にここを放棄して新田地方に移っていたことであろう。

これにより、岩松氏と三原田とが結びつき三原田氏は三原田を名所とした岩松氏の一族であるとの推定が成立する。

三原田城遺構の大部分は、永井氏時代の構築と考えられる。

最後に、家純、明純の和解につき次のように附記する。

松陰私語にはまた、「先年山内当國総社陣之上源慶院殿明純御勘当及数年雖然御息尚純公為源慶御名代…明純御父子以下一統ニ御対面。」と、源慶院（家純）と明純、尚純一和のことを伝える。上杉顕定（山内）惣社の陣といえ、文明十八年（1486）11月、顕定が総社（蒼海）城主長尾顕忠を援けて長野尚業と戦った時のことである。

義絶以来9年、場所を総社に選んだことは、明純が三原田興善寺に居たためと考えられる。この和解は横瀬國繁父子の努力で顕定が肝煎りとなったのだという。

尚純が家純の後を継ぎ、明純は金山に復住することはなかった。

## 第Ⅱ章 八 崎 城 址

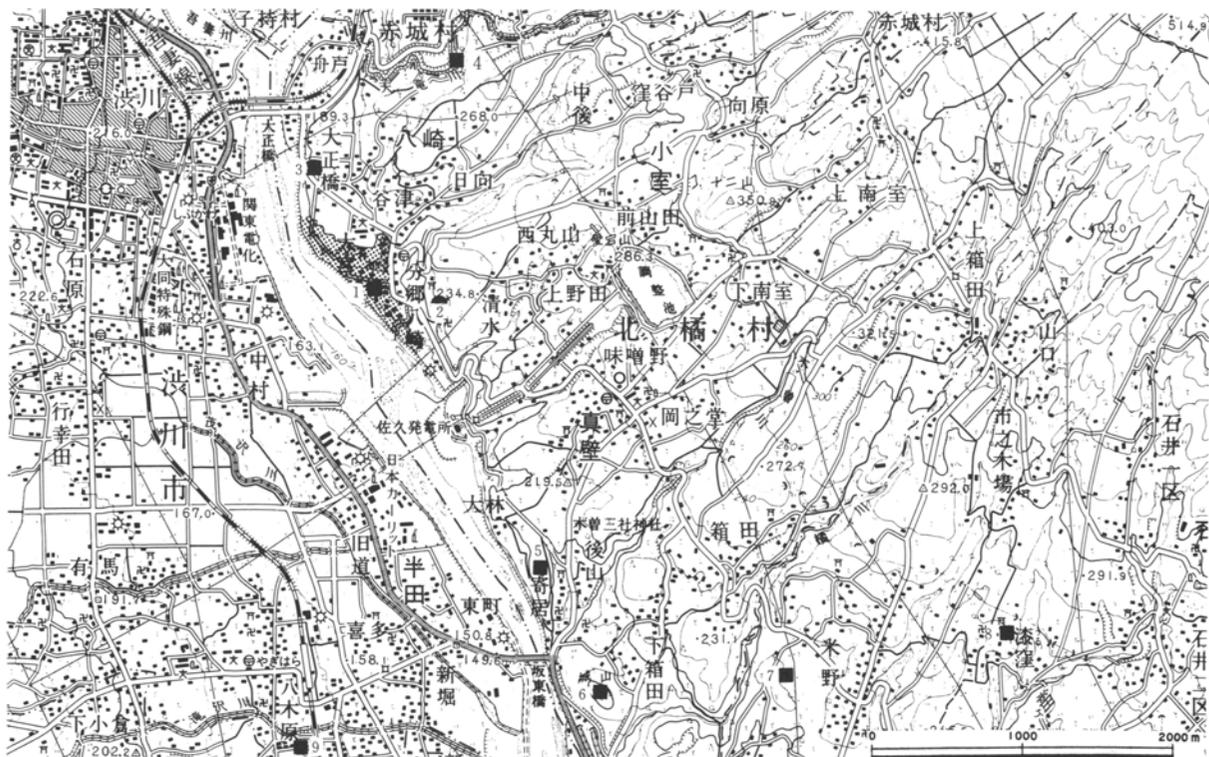
### 第1節 調査に至る経過

本遺跡の発掘調査は一連の北橋・赤城村地区の試掘調査に続き、昭和57年6月より行った。関越自動車道が渋川市より利根川を渡り北橋村に入った場所に本遺跡が位置しており、幅約200mの利根川を渡り赤城山の山麓に掛る橋の橋脚建設部分となるために調査を行った。今回の調査は八崎城の最南端にある新曲輪と呼ばれる範囲で、堀の一部も調査対象範囲に掛かった。

### 第2節 遺跡の立地と概要

八崎城址は、勢多郡北橋村大字分郷八崎字城に所在しており、西曲輪、本町、横町の区域に分かれている。南側は、利根川を臨む急崖となっており、その比高差は30mを測る。城は、梯郭式の構造で、本丸を含む曲輪の一部は、利根川の侵食によってかなり失われている。各曲輪の配置は利根川寄りにある本丸を囲むように西の曲輪、二の丸が深堀によって区切られている。本丸の東には、新曲輪と呼ばれる東西40m、南北150m程の場所があり、本丸、二の丸との間には東川が深い谷となって利根川へ流れ込んでいる。この新曲輪の東堀は、現況でも良好に認められ、中央に「折り」を持ち、そこから陸橋が城外へと続いている。さらに、陸橋の北には土居も認められる。

今回の調査は（第165図）に示すように、新曲輪の中央部を幅約25m、長さ約100mにわたって調査を行っ



- |       |       |        |         |
|-------|-------|--------|---------|
| 1 八崎城 | 2 八崎塚 | 3 八崎寄居 | 4 房谷戸館址 |
| 5 真壁城 | 6 箱田城 | 7 丸山城  | 8 漆窪城   |
| 9 剣   |       |        |         |

第162図 遺跡位置図

(国土地理院・5万分の1・「前橋」使用)

## 第II章 八崎城址

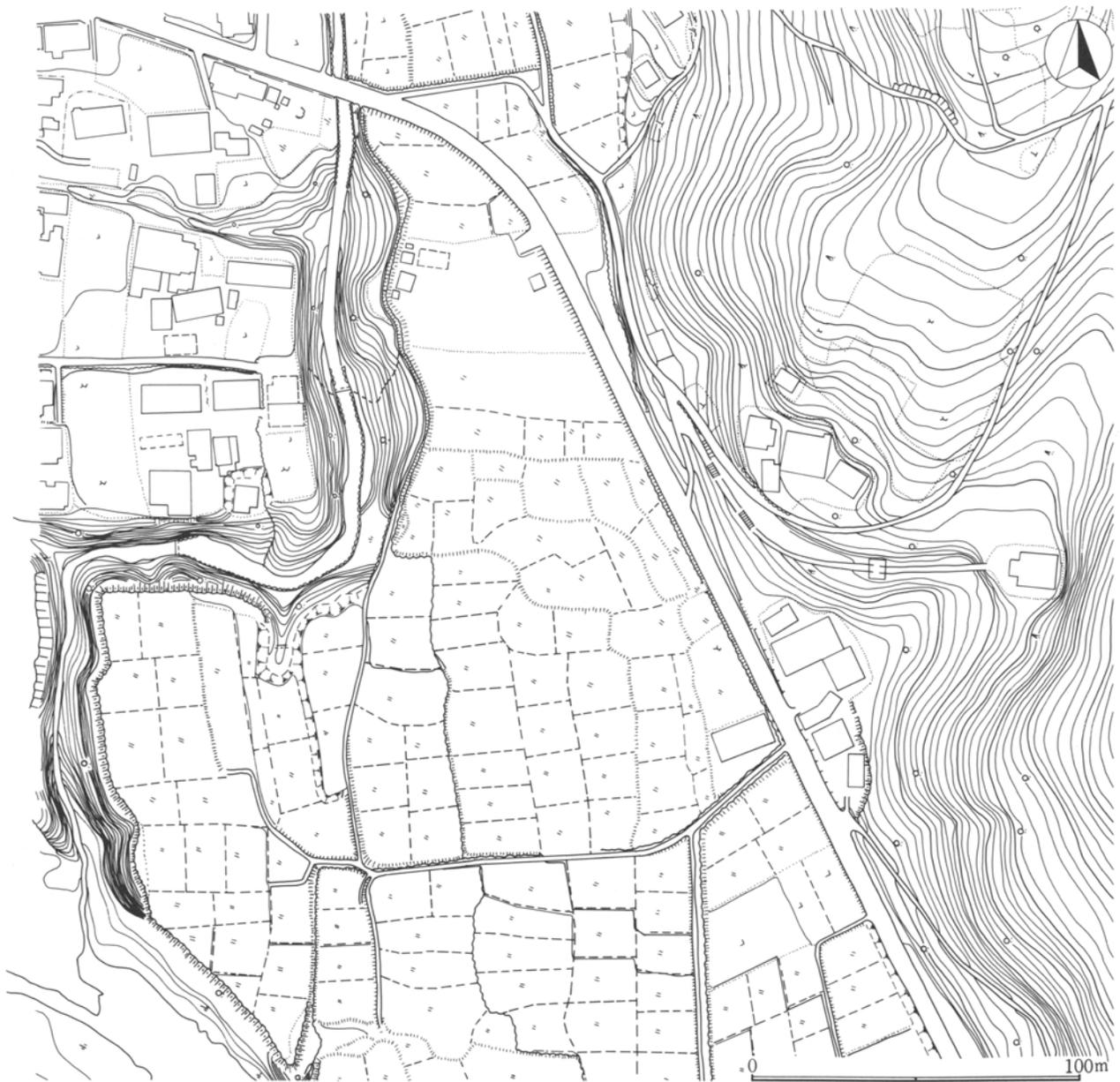
たもので、新曲輪内、および東堀の一部が対象地域となった。

本城の北約1kmには主城である白井城が、また東方約1kmには真壁城、箱田城がある。

### 第3節 調査の方法と経過

センター杭STA8とSTA9を結び、このラインを基準とし左右に20mの方眼を設定し、さらにこの方眼を2m単位に分割した。そしてSTA8の杭を基点に手前をA区STA9までをB区とし縦ラインと同様に横ラインも2m単位の小グリッドに分割した。

調査区内の地目はほとんどが水田であり、新曲輪内については、削平されてしまったところも多く見られた。調査区は堀の部分を中心に幅25mで広げ、新曲輪内は、排土の関係から、中央部を残し両側をトレンチ状に広げた。堀の部分については、現況からもその存在は明らかであった。調査は、曲輪内の遺構検出と平行して堀の調査を行った。

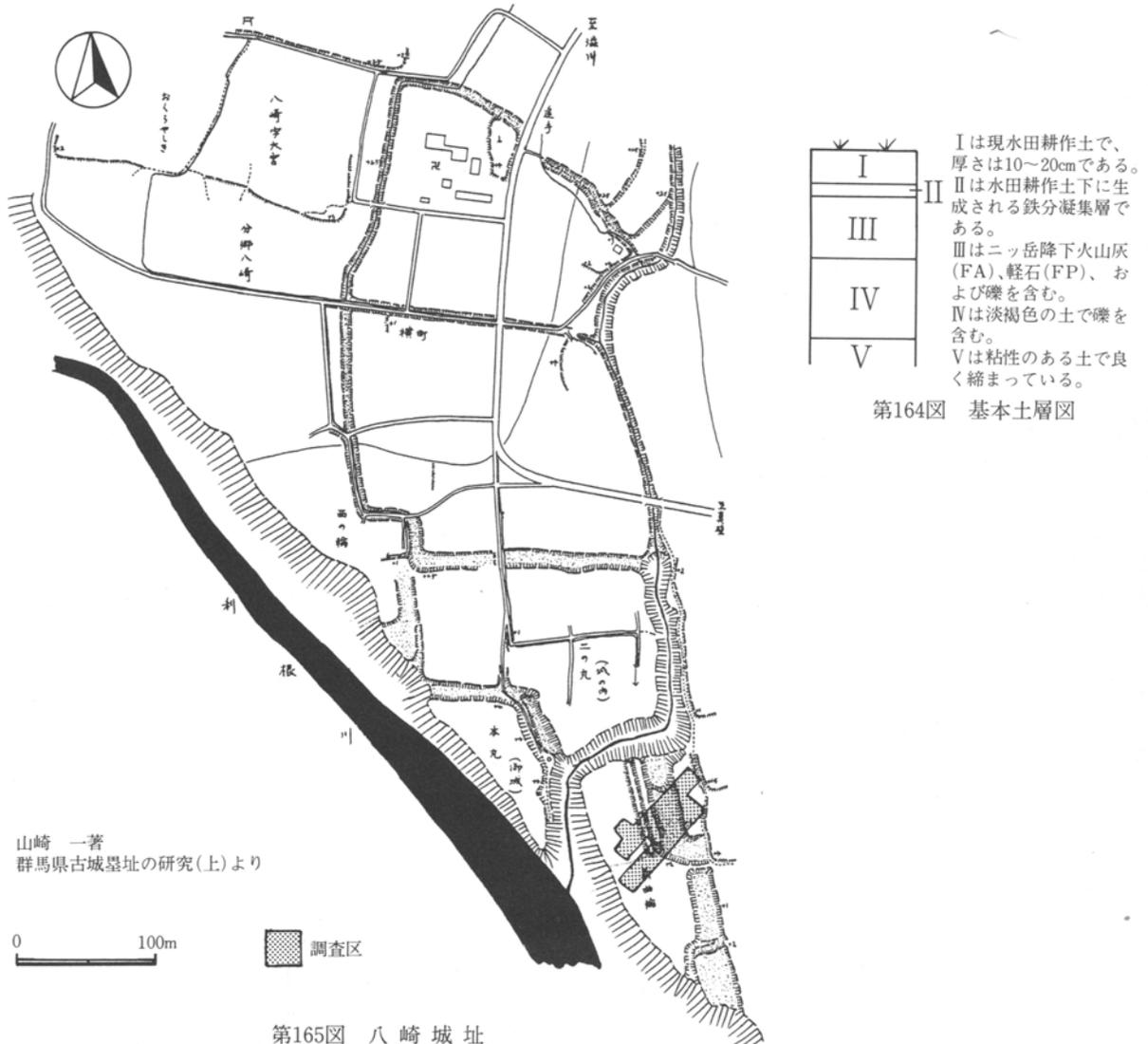


第163図 地形図

遺構図は、20分の1または、40分の1で作成した。

調査日誌抄

- 6月8日 晴れ      グリッド杭を設定し、調査に入る。
- 6月9日 曇り後雨      グリッドに沿ってトレンチを設定し調査開始。ピット、溝等を検出。
- 6月11日 曇り後雨      トレンチ内の実測、堀の両側にて堀と平行する暗渠を検出する。
- 6月16日 晴れ      溝、ピット列平面実測、土居セクション実測。堀の調査、下層より杓文字、板材。
- 6月22日 曇り後雨      暗渠精査。堀の調査。
- 6月24日 曇り      堀の写真撮影。曲輪内、遺構検出作業。山崎一氏より指導を受ける。
- 6月30日 雨      曲輪内調査。ピット列実測。堀の平面実測、堀り下げ。
- 7月4日 曇り      ピット列エレベーション。堀の調査、湧水に悩まされる。
- 7月8日 晴れ      堀の平面実測。等高線図作成、北側暗渠の調査。
- 7月11日 晴れ      堀の平面実測。エレベーション。全景写真および部分写真。曲輪内平面実測。
- 7月13日 曇り      曲輪内実測。写真撮影。本日をもって調査終了する。



## 第4節 検出された遺構と遺物

### 1 外堀

本遺跡で調査対象の主体となった部分である。この堀は現況で周囲の水田よりも1.5から2.0m低く、やはり水田として利用されており、地形的には良好な遺存状況である。堀の部分の水田幅は、約9mである、また堀の中央部には「折り」が残る。

調査の結果検出された堀の最大幅は、約12m、底部の最小幅は、1.5mである。深さは城外側からは約4.5mを測る。堀の断面は、片葉研掘りで、城内側には幅約2mの平坦面が在り、これに沿って石敷きの暗渠が走っている。暗渠の所々には、堀に向かって排水溝が設けられており、平坦面は常に乾いた状態にしておく工夫が窺える。また対岸にもほぼ同じ高さに暗渠を設けている。

堀の断面観察によると、現耕作土下1m程までは、やや砂質ではあるが比較的締まった土がほぼ水平に堆積していた。その下はやや粒子が細くなった土がレンズ状に三層にわたって堆積しており、最下層には、やや粘性をもった土が堆積していた。堀の下部には常に数十センチの湧水が見られた。

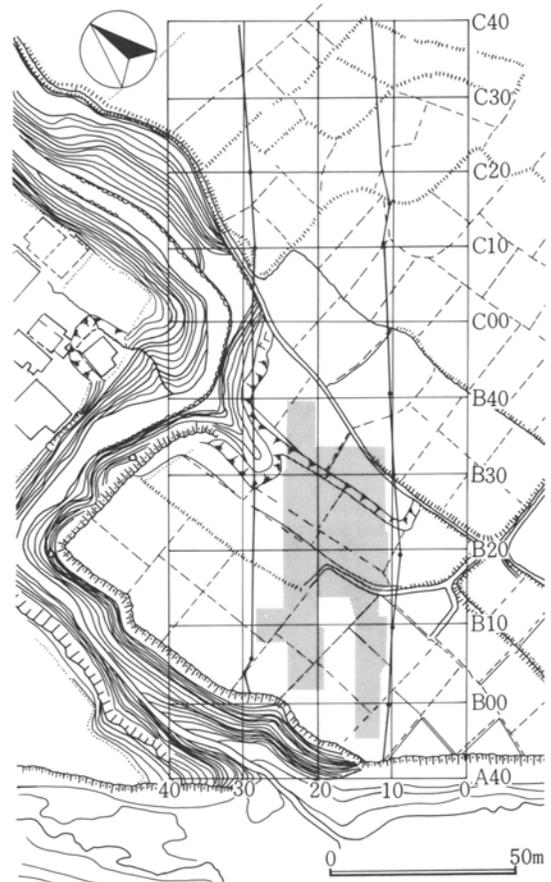
出土遺物 堀の最下層中より（第168図）に示した杓文字と板材が出土している。杓文字は身の部分3分の1を欠失している。長さ29.6cm、幅11.0cm、厚さ約0.9cmである。樹種はヒノキである。板材は、1が長さ33.2cm、幅5.7cm、厚さ0.9cmで、両面には手斧痕が見られる。さらに、鋭い刃物による切痕が認められる。両端には「く」の字に径2mmほどの小孔が3個貫通している。内2箇所には竹釘の一部が残っている。また、中央には径1.5mm程の小孔が3個見られるが貫通はしていない。2は、長さ33.4cm、幅5.4cm、厚さ0.7cm、で1と同様に表面には、手斧痕、切痕が見られ両端には、縦に2個の小孔が貫通している。また中央部両側の側面に、目釘の当り痕が1対づつ認められる。樹種は、ヒノキである。共に似た規格で同一木製品の一部と思われるが、二次的な使用も考えられる。

### 2 土居

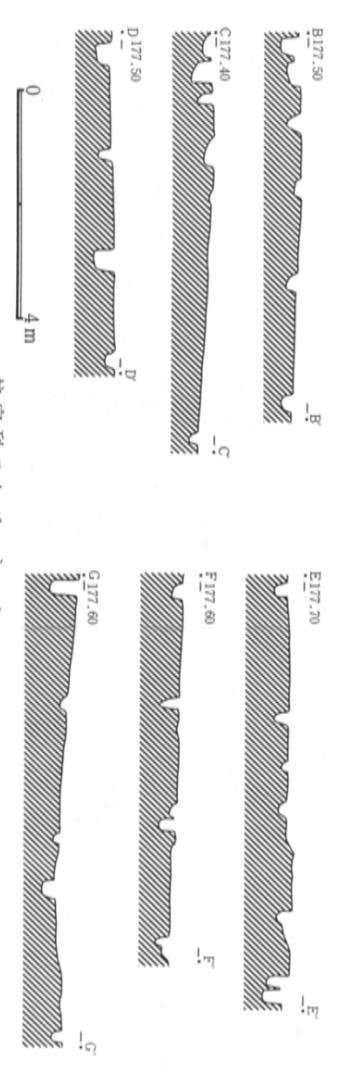
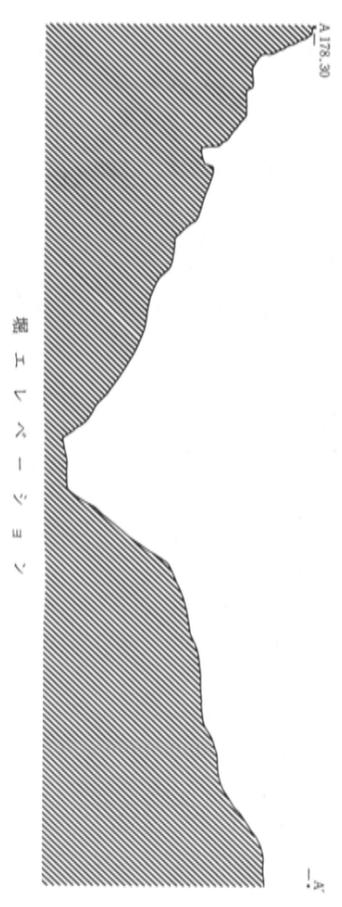
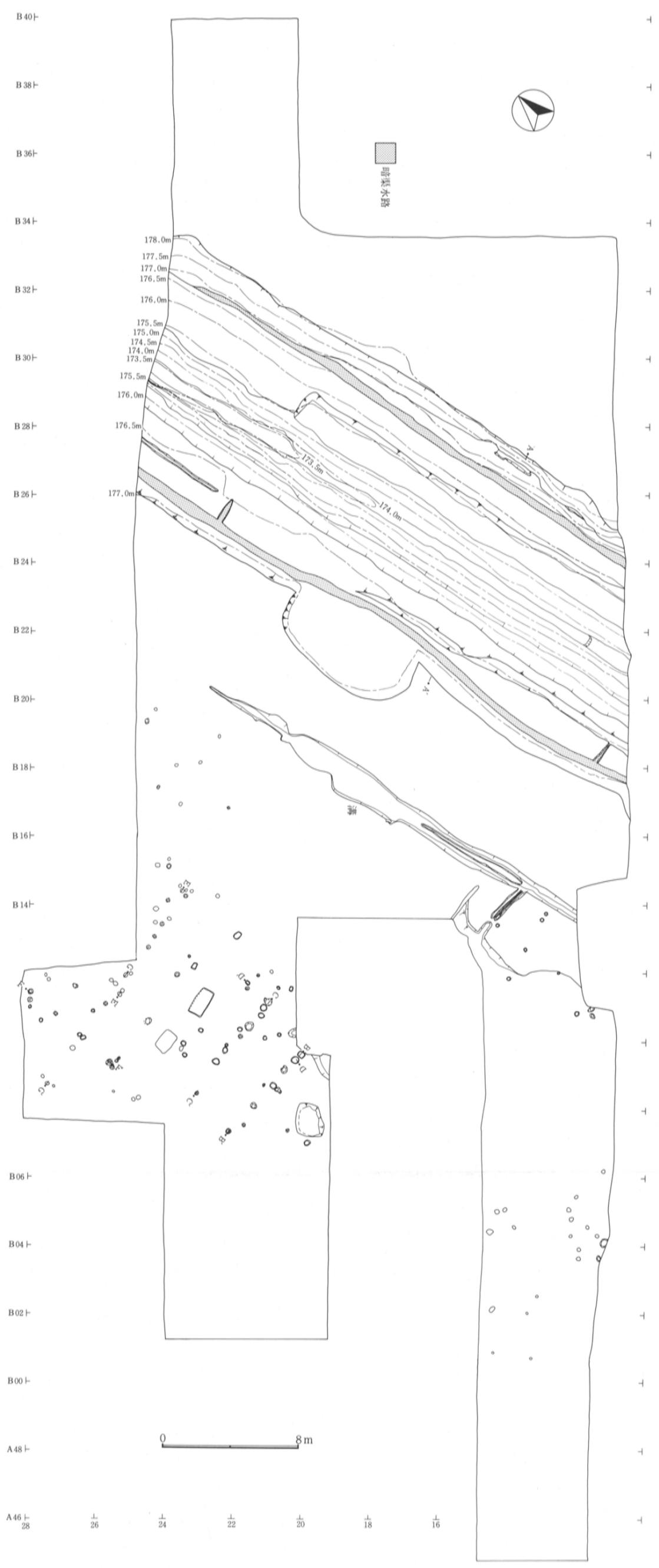
堀の東側については、認められなかったが、曲輪側には下幅2m、高さ約1mで残っており、調査の結果でも盛土の様子が見られた。やや砂を含んだ黒色土を盛り上げているが、版築した状況は窺えなかった。

### 3 溝

調査区の東壁、12—B13付近より始まる。堀とほぼ平行するように北に延びるが、その形状は定まらず、東壁付近で幅50cmであるものが、途中2条となったり幅1.5m程に広がったりし、最後22—B20グリッド付近で終わってしまう。深さは余りなく20~30cmで、壁の立ち上がりも不明瞭な部分が多い。出土遺物は、溝



第166図 調査区域図



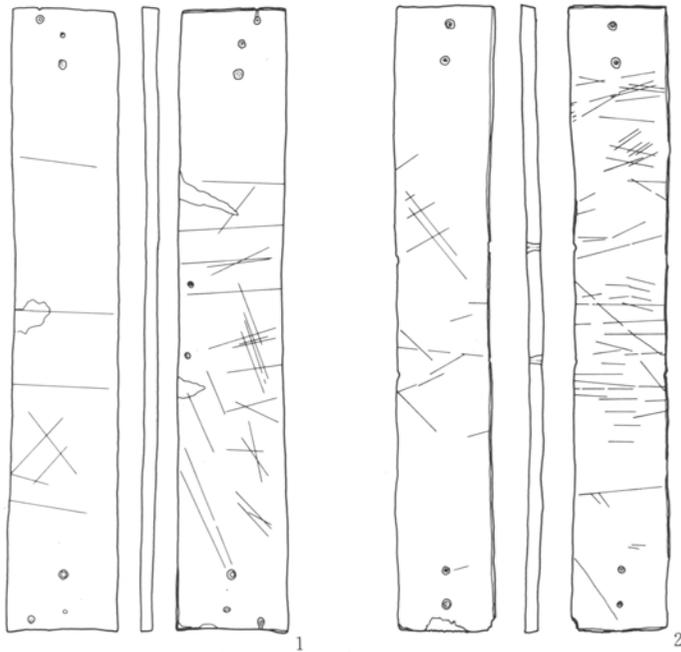
第167図 調査区全体図



が広がった部分において、礫と共に石臼、地輪が投げ込まれたような状況で出土している（第170図）用途は土居の内側にあって流れ落ちた雨水などを処理するためのものと考えられる。

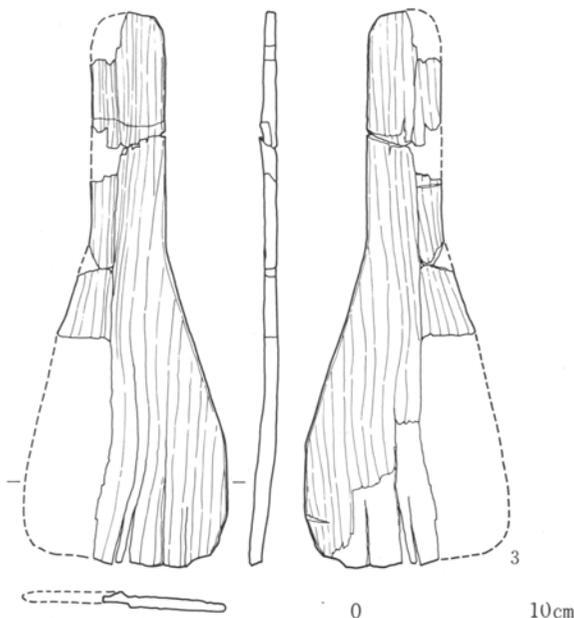
出土遺物 1は上臼である、ほぼ中心に径4cmの孔を持つ、周辺部が欠落する。径は約26cm、厚さ12cm、重さ8150gである。上面僅かに丸みを持つ、石質は輝石安山岩である。2も上臼である。半分を欠く、径約31cm、厚さ12cm、重さ7890gである。上面はやや丸みを持ち、下面は、中央に向かって凹む、石質は輝石安山岩である。3も上臼である。約4分の1の破片である、端部に柄を差し込む孔が見られる。裏面には、7本の溝が彫られておりかなり摩滅している、厚さ10.5cm、重さ2890gである。石質は輝石安山岩である。4は五輪塔の方形地輪である、縦、横約24cm、高さ15.8cm、重さ10400gである。上面は若干丸みを持ち一部

が剥落している、逆に下面はやや凹む。石質は閃緑岩である。表面に薄く煤の付着がみられる。



#### 4 柱 穴 列

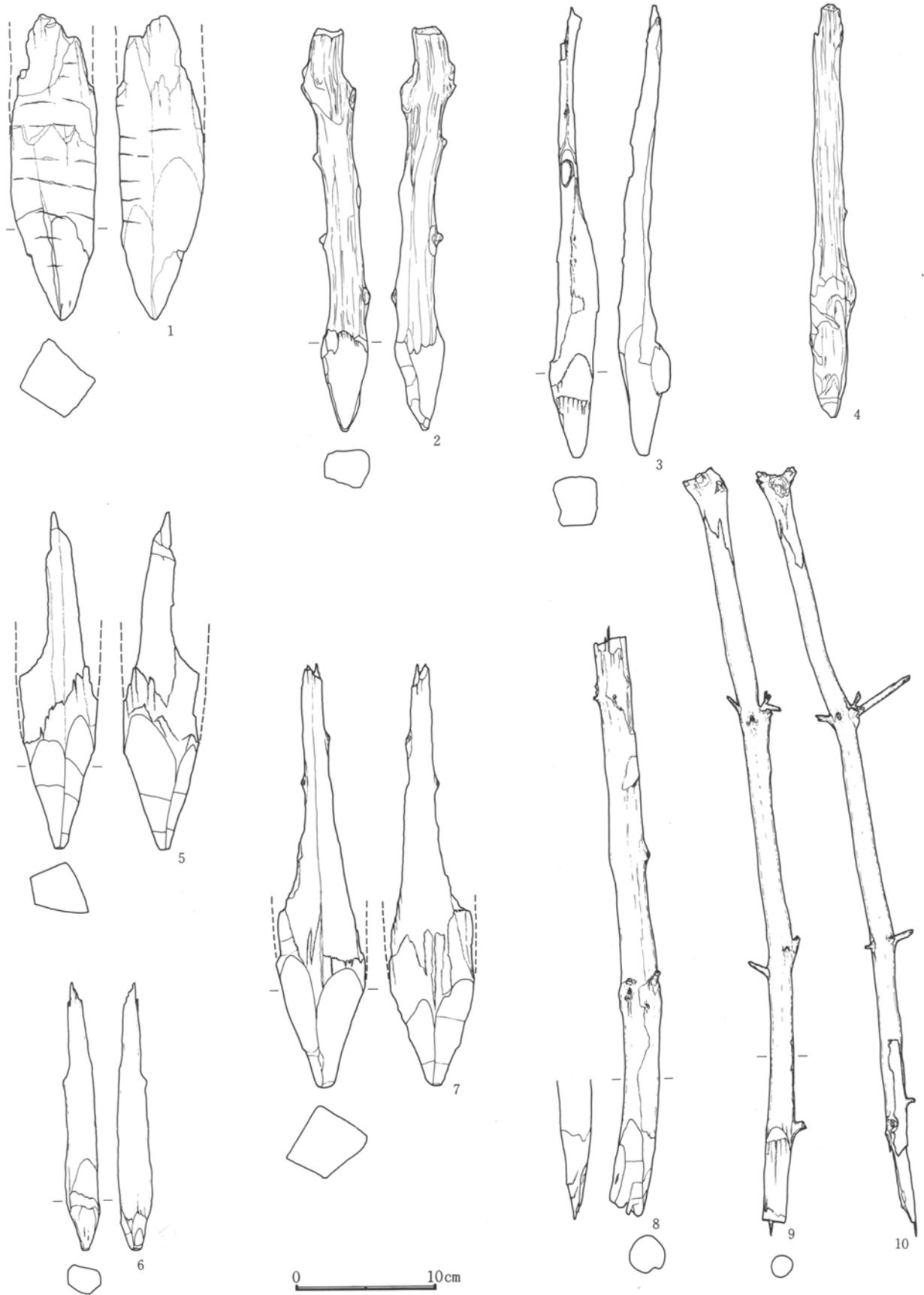
新曲輪に広げた北側のトレンチ内において、検出されている。柱穴（ピット）の総数は100近く検出されているが、建物址となるような配列は見られず、直線的な並びに検出されている。柱穴の規模は、径20~30cmで深さは、15~30cmである。柱穴列は全部で5本見られるが、その走向は、堀に直交するもの3、平行するもの1、それ以外1、である。また各柱穴間の距離は一定ではない。これらは、いずれかの施設の痕跡と思われるが、確定できるものはない。また、南側のトレンチにおいても、30程のピットが検出されたが、散在する傾向にあり、規格性は認められなかった。その他曲輪内には、1m内外の隅丸方形を呈した掘り込み等が見られたが、いずれも近現代のものと思われる。溝の北側、16~20—B20~22グリッド付近に北に向かって不規則な落ち込みが見られたが、その性格等は不明である。



第168図 外堀出土木製品

#### 5 暗 渠

堀の両側に、レベルをほぼ同じに作られている。幅50cmの範囲で河原石を敷き



第169図 暗渠出土杭

詰めている。その下には幅40cm、深さ20cmの溝が掘られている。河原石と粘土で蓋をしたような構造を示すが、東側の暗渠の外側に沿って7本程の杭が検出されている。いずれも径3～5cmの木の枝を利用したもので、土止め用のものと思われる。また西側の暗渠には、堀にむかって排水溝と思われる溝が2本開口している。この施設は東側の暗渠には見られなかった。なお東側の暗渠については、北壁手前で終わってしまう。これらの暗渠は、堀および土居の保持のために設けられた水抜き施設と考えられるが明確な用途は不明である、他に類例が見られず、今後の検討課題である。

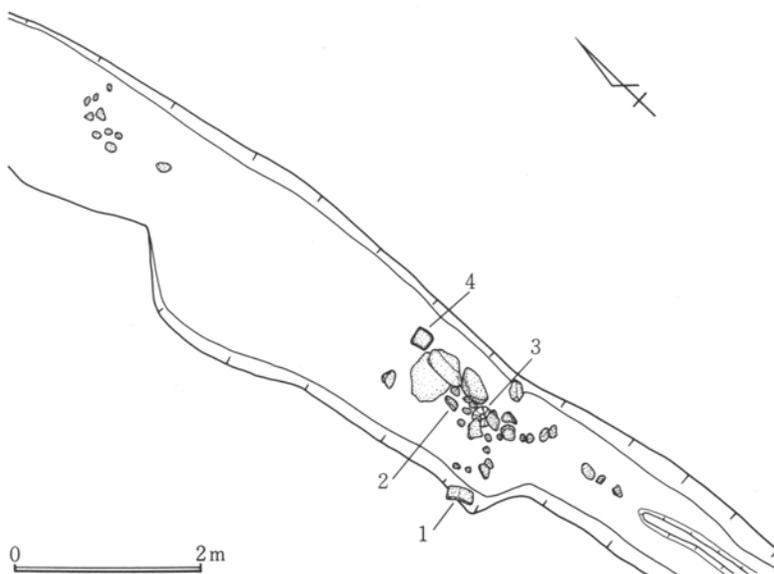
## 6 出土遺物 (第172図)

陶磁器類 ほとんどが遺構外より出土したものである。

1は鉢の口縁部片である。夾雑物少量含む、口縁部は肥厚する。2は灰釉鉢の口縁部片である。白っぽい胎土で夾雑物は含まない、口縁がやや内彎し、口唇部は肥厚する。3は染め付け猪口である。口唇部はやや外反する胎土は夾雑物なく白色外面藍色。4は染め付け椀である、胎土は夾雑物なく白色、高台を欠いている。5は播り鉢片である。口唇内側に隆帯、外側に凹線・隆帯を持ち櫛目は細い。6は染め付け椀である。底部片で夾雑物なく胎土白色、7は青磁片、胎土は夾雑物なく白色。8は染め付け椀の底部、胎土は淡白色。内外面貫入が見られる。9は鉄釉片である。10は染め付け椀である、胎土は夾雑物なく白色、内面に花文。

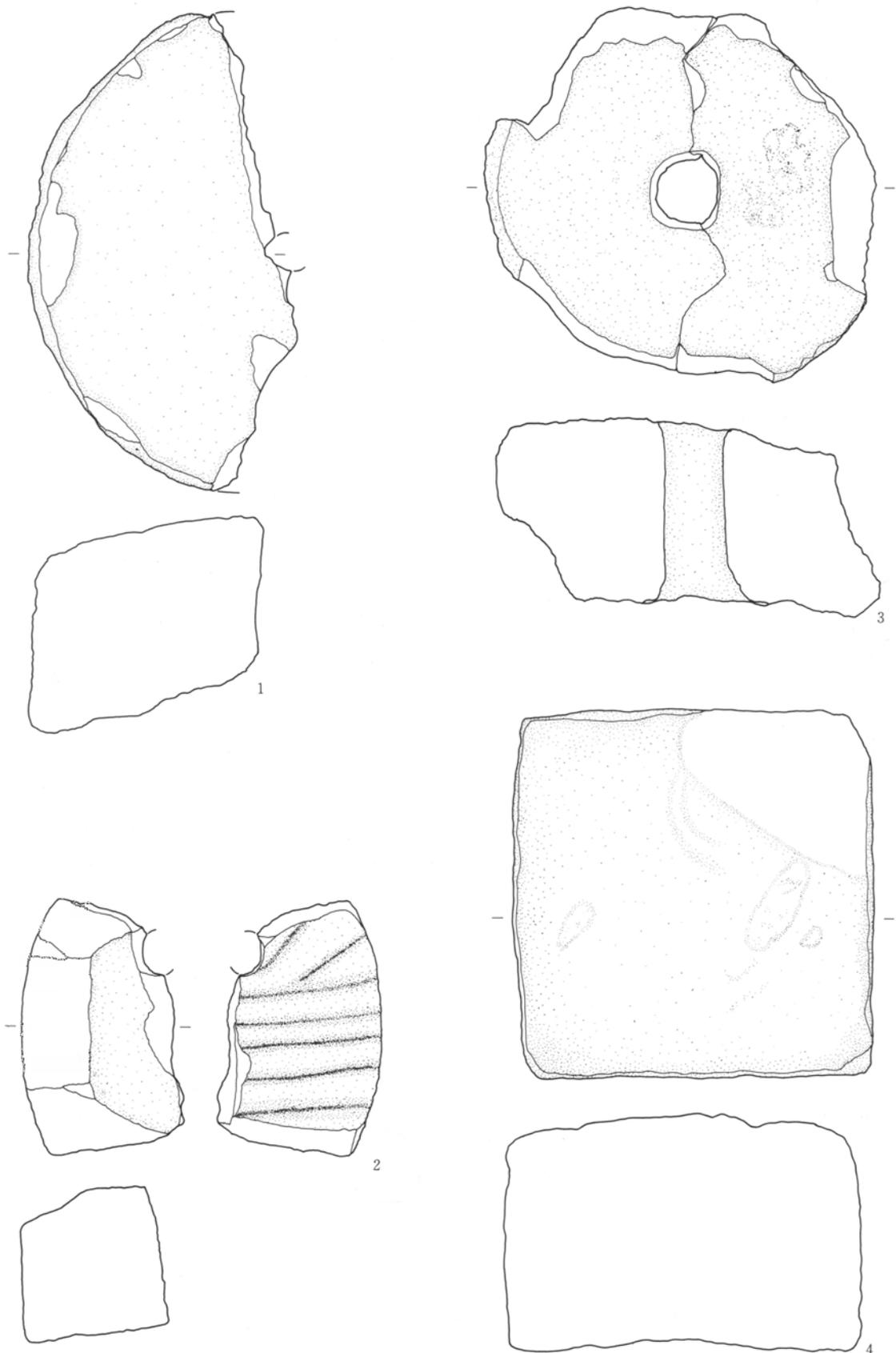
縄文・弥生時代の土器、石器 すべて試掘調査および本調査の拡張時に排土中より出土したものである。

1・2は押型文土器である、縦位に山形文が密接施文されている。色調は共に赤褐色を呈す。3は繊維土器である、ループを持つLRが横位多段施文される。4は半截竹管による平行沈線を多段施文し、さらに円形竹管文を縦に配す。5はLRを地文に持ち、やや太めの浮線を貼り付け、浮線の上に棒状工具による刻みを付す。胎土には砂粒を多くふくむ。6は緩い波状口縁部片である。口唇部、および口縁部に沿って2条、さらに三角形のモチーフを連続爪形文で描き、その中に三角の陰刻文を配す。胎土中に砂粒が目立つ。7は横に平行沈線を巡らし、その間に隆線で楕円文、渦巻文を付す。胎土中に石英粒、雲母が目立つ。8・9・10・11は口縁部片である。8は口縁下に隆線を巡らし胴部にはRLの縄文を付す。9は口縁下に無文を持ちその下にLRの縄文を付す。10も9と同様無文部分を持つ、口縁外側がやや肥厚し断面が三角となる。11は口縁に



第170図 溝出土遺物状態

沿って3本の弱い隆線が巡る、下位にはRLの縄文が施文されている。12はLRの縄文地に縦に磨消帯を持つ。13は棒状の隆帯下にRLの縄文を施文する。14はRLの縄文の上に楕円状に隆線が付される。15は内彎する口縁部である。口縁部は横位、以下縦位にRLを施文し縦に沈線を配す。16は口縁部片である、口唇部が内屈する。口縁に沿って隆線が巡り、以下無文帯沈線、無節Lの縄文となる。17は口縁部である、口縁下に「T」に沈線が見られる。僅かにLRの縄文が見られる。18は無節R



第171図 溝出土遺物

0 10cm



第172図 遺構外出土遺物

沈線を垂下させている。19は口縁部である、口唇部に隆起部分を持ちその両側に棒状工具により、沈線、円形刺突文を付しその下に円孔を通す。頸部屈曲部に横、さらに下方に沈線を付し、交点に粘土塊を貼り付けそこへ2個の円形刺突文を付す。20は口縁下に凹みを持つ微隆帯を巡らす。21は無文であるが良く研磨されている。22は口唇部肥厚し、波状口縁となり波頂部刺突文を持つ、その下位に刺突、沈線を持つ隆線が見られる。23は無文地に沈線が縦位、斜位に付される。24は沈線で三角文を二重に描く。25は3本の隆線を持ちその隆線上には連続に押捺が見られる。口唇内面に沈線が見られる。26は口唇部が内側に屈曲する、口縁に沿って微隆線、沈線が巡る。27は擦り切り状の短沈線が付される。28は逆「V」字の沈線、地文は無筋か。29は2本の微隆線を横に巡らし、これを繋ぐように縦に隆線を貼り付けその交点に刺突を持つ。口唇内側に沈線を持つ。30・31は底部である、30は厚手でやや丸みを持つ、やや太い沈線が付される。31は底面に網代痕を持つ。32は橋状取手の部分であろう、「T」状に隆線が付され、区画された部分に沈線より、「コ」の字状、「U」字状のモチーフを描く。33は口縁取手部分である。端部で膨らみ一方より押圧が加えられる。以下巡りに刺突、小楕円文を配す。34は横「U」字状に沈線が描かれる、地文はLRか。35は弥生後期樽式土器である。7本櫛歯による波状文が施文されている。

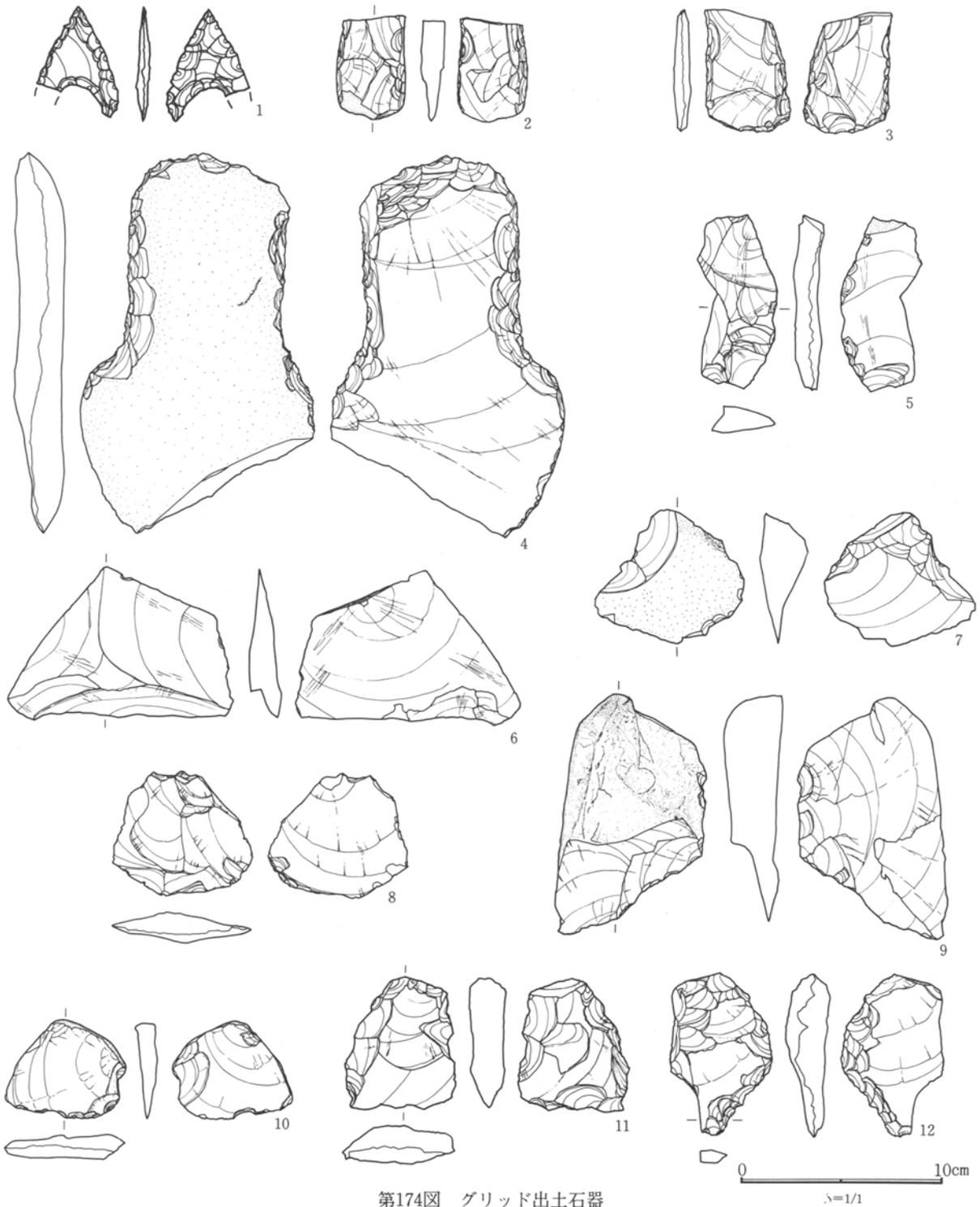
出土石器 1は黒耀石製の石鏃である、丸みのある抉りをもつ凹基鏃である、片面は平らな剝離面をそのまま利用している。片方の脚を欠損する。長さ1.9cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、重さ0.35gである。2は短冊形の打製石斧である、基部を欠損する。刃部は使用による摩滅が著しい。黒色頁岩製である。3は打製石斧。やや薄手の石片を利用している。基部を欠損する。黒色安山岩製である。4は大型の打製石斧である、大振りな礫から剝ぎ取った石材を利用している。片面には大きく自然面を残す、刃部が広がり基部の両側縁は歯潰しにより直線的に仕上げられている。長さ18.7cm、幅11.6cm、厚さ2.4cm、重さ563.9g 黒色頁岩製である。5は縦剝ぎされた不定形な石片の側縁に刃部を作り出したスクレイパーである。黒色頁岩製。6はスクレイパーである、不定台形の剝片の側縁に簡単な刃部を持つ。7・8・9・10はスクレイパーである。いずれも不定形な剝片の縁辺に粗く刃部を作り出す。7・9は片面に自然面を残す。11はやや寸詰まりの打製石斧である。刃部がやや広がり、側縁、刃部ともに粗く調整がなされている。長さ5.6cm、幅6.5cm、厚さ1.8cm、重さ78.5g、黒色頁岩製である。12は大型の石錐である、錐部は太く、片縁に刃部調整がなされている。長さ8.0cm、重さ84.8g。黒色頁岩製である。

第II章 八崎城址



第173図 グリッド出土土器

第4節 検出された遺構と遺物



第174図 グリッド出土石器

参考文献

- |             |               |               |             |
|-------------|---------------|---------------|-------------|
| • 山崎 一      | 群馬県古城壘址の研究(上) | 群馬県文化事業振興会    | 1971 (昭46)年 |
| • 相京健史他     | 小川城址          | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 1985 (昭60)年 |
| • 岩崎泰一・原 雅信 | 諏訪・城平遺跡       | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 1984 (昭59)年 |
| • 群馬県教育委員会  | 箕輪城址          |               | 1982 (昭57)年 |
| • 柿沼恵介・右島和夫 | 分郷八崎遺跡        | 北橋村教育委員会      | 1986 (昭61)年 |
| • 北橋村史      |               |               | 1975 (昭50)年 |

第5節 八 崎 城 考

山 崎 一

赤城村榊の須田氏所蔵、永井実平書状中に、「利根川より東、上州八崎の城是は私先祖永井出羽実利に御預被成候、為在番永井大学、萩野越後、吉田甚之丞、永岡<sup>(ヤマ)</sup>形部左衛門、塩谷勘解由左衛門、蛭川新左衛門、小保方左京、小保方源□□、□□兵庫、中島藤右衛門右十騎足輕五十人相添被差置、厩橋、笠懸、沼田方の御手向の先手被仰付指置候、出羽相果候後、倅岩見に御預け被成、御牢人の砌迄罷在、其時明け申候…永緑の比、信玄公白井表へ御向被成候其刻、八崎の御城へ御籠、八崎にて御越年被遊候由申伝候、又天正八・九年之比と申伝候信玄公より美濃輪御手に被人、白井表へ被御手向者内藤修理正、北城安芸守高広被指向と申伝候、其時八崎城に御籠被成候と申伝候、澁河の御家来に岸大蔵、石北下野と申者信玄公へ一味仕候由、修理正、安芸守は利根河を隔て中村と申処に陣取申由、憲景公より澁河の証人十人御取被成、則澁河の寄居に被差置候を、石北下野、岸大内蔵案内にて、修理正、安芸守方の先手に、綿貫将監、加沼又左衛門、彼大内蔵、下野与四人先懸致、御取被置候せう人共押立罷越候を、憲景公御覽被成、岸、石北を討取可申旨上意有て、其日の御合戦には御自信御さいはい御取被成、おんさいはい次第利根川乗越可申旨被仰出、依去而我先にと面々心懸申所に、永井藤四郎ぬけ懸致し岸大内蔵を討取申し候、其時憲景公より長光の御わき指押領仕候、于今重代所持申候、永井石見は滝口数馬と申者討取申候、斎藤加賀は綿貫将監と申者討取申候由、其外永井大学、萩原越後、津久井南光、山本駿河諸傍輩大方其日の合戦には高名仕、内藤修理正、北城安芸守両勢を判田、漆原と申迄押ちらし、追討に打取申候由、依去甲首四十余打取申候、証人も押留申候由申伝候、それより後は、度々御ほこさきつよくて候て、白井へ帰城被成候と申伝候、…御先祖にて白井の御城のき候事有之哉と被仰越候、…真田より信玄公御責め入、東上州八崎の城御籠、是は三十日過、平井より御見續勢参り白井へ御移り候、…其後、景広公御兄左衛門尉様と申候、天正十一年より憲景公の御跡御取、御領半分相成、氏政公より利根川東は景広公に被為進候、河西は左衛門尉様白井に御座候て御仕置被成候、其時景広は八崎の城に被成御座候、其時川東の侍共二つに分れ十騎景広に御奉仕候、北条氏邦寄親に被成、御幼少より小田原に御証人に御詰候、左衛門様は御病人故に候由申候、」。

これは、寛文十二年（1672）、実平が、米沢に居た長尾景光への返書の一部である。八崎城廃城から八二年後のもので、景光は景広（政景）の孫である。下線の所は明らかに誤りであるが、八崎城に関し欠く事のできない史料といえよう。

この中に見られるように、八崎城は白井城との間に、「別城一郭」の関係を持ち、孫子九地篇に「譬如率然、率然者常山之蛇也、擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至」という思想に拠った相互赴援の城群である。従って、両城の構造もよく似ている。

このような城群が多く生まれたのは、おそらく大永の頃（1504～1527）で八崎城もその頃の創築、白井城はそれ以前に築かれたものと思われる。

天正八・九年頃、信玄が白井を攻めたとあるが、信玄は元龜四年死去であるから誤りで、それには次の文書がある。

- (一) 至于其地武田晴信相動處城内堅固依之無差儀退散之由註進稼之通無比類候一兩日中二厩橋へ可帰城候条其口仕置等申付之不具候謹言 卯月三日 輝虎（花押） 長尾左衛門尉殿（互尊文庫文書）
- (二) 一徳齋計策故白井不日ニ落居大慶ニ候比上仕置等三日之内ニ以使者可申越候其間之儀箕輪在番ニ候条春日彈正忠談合尤候又長尾輝虎帰國爲必然者翌日出馬西上野之備可加下知候猶沼田之是非注進待入候恐々謹

言三月六日 信玄（花押） 一徳斎 甘利郷左衛門尉殿 金丸筑前守殿（金丸文書）

- (三) 以下慮仕合白井落居本望満足可爲同意候 此上の早々箕輪へ相移普請并知行之配当可成下知候猶沼田之模様以速飛脚注進待入候恐々謹言 三月八日 信玄 一徳斎 真田源太左衛門尉殿（真田文書…）
- (四) 此度入道殿利根川を取越敵数多被討取候貴所抽走廻関口新五郎討補候誠無比類候小田原江茂注進申上候於此上入道殿御本意程有間敷候間各鹹味可被相稼事専肝ニ候恐々謹言 卯月廿四日 氏邦 矢野新三殿（赤見文書）
- (五) 此度於度々走廻自由入道殿蒙仰候誠無比類候其地御本意程有之間敷之間弥可被抽武勇所専肝候恐々謹言 卯月廿八日 氏邦（花押） 岸大学助殿（岸文書）
- (六) 御貴礼拝見畏入存候誠此度不思議之仕合を以当地に罷移候殊御祝儀成大鷹一居被懸御意御情之至過当至極奉存候將復兩方之儀先書ニ申上通ニ御座候条弥義重江懇切御ニ尤候猶御使頼入候間令省略候恐々謹言 十月十八日 長尾左衛門入道 越府人々御中（歴代古案）

この外に、長尾寺殿御事蹟稿中に信玄発の文書があるが、宛が真田安房守となり、誤りなので省く。

(二)→(五)では、三、四月、輝虎が沼田に居り、越相同盟存続中の事、武田の先鋒真田幸隆が白井を占領、長尾憲景が八崎に避け、そこから渡河して武田方を攻撃したという状況下のもので永禄十三年（1570）がそれに該当するが、(一)は、輝虎が東方の作戦から厩橋に帰陣する直前という内容で永禄七年のこととなろう（同年三月二十四日付富岡文書、同四月八日付楡木文書）。

信玄は翌八年、渋川の南の漆原に進陣している（永禄日記、三月二十八日付漆原文書）が、その時輝虎は病氣中で、勿論上州には居なかった。

しかし、永禄七年には、この文書のほか信玄白井に迫るという資料はなく、前年奪取した岩櫃城に兵力を増派したことが伝えられ（三月十三日付加沢記所収文書、四月一日付保阪文書）ているので、その際、武田方の一部が白井城に対し威力偵察でも敢行したのであろう。当時尚、倉賀野は落城せず、南から白井に迫る行動は無理である。（倉賀野城は永禄七年六月一日落城）

つまり(一)は永禄七年、(三)→(五)は同十三年のことで、(六)により同年（四月二十三日元亀元年と改元）十月十八日には、憲景はまだ八崎に居た事がわかる。

ところが同月廿四日付輝虎覚書には「信玄出張因滋去廿日越山候處無程敵退散」とあるので、(三)により箕輪に在城、仕置きを行っていた信玄が撤退、白井の真田勢も岩櫃に退って戦線を引きしめた。孫子の謀攻篇に「小敵之堅、大敵之擒」のいましめに依ったのであろう。

そこで、憲景は八崎城から白井へ帰った。

永井実平書状には、この両度が混同され、各所に誤伝を生じている。

内藤修理亮昌豊は信玄の箕輪城代、北城（條）安芸守高広は、はじめ丹後守、後に入道芳林、輝虎（後謙信）の厩橋城代である。

謙信は天正六年（1578）三月死去、後継をめぐり、養子景虎（北条氏政の実弟）と同景勝（謙信の従弟）との間に激しい争いを起こし、上州諸将もそれに捲き込まれた。厩橋の北条景広父子や沼田の河田重親は景虎方で、同じ沼田の上野家成は景勝方である。その頃、八崎城をめぐり争奪戦があった。それを伝える次の文書がある。

今日八崎へ之動入道依機相各々頼入候處 乗<sup>(ママ)</sup> 景自身後陣之衆へ指遣候処何之御手柄故無相違引上候事大慶不過之候然者御内之高橋桂介殿最前ニ入馬請手無無比類動感入候猶明日以面談可得御意候候不具候恐惶謹言 五月七日 重治（花押影）（河田伯耆守人々御中）…奥ウハ書（秋田藩文書）

## 第Ⅱ章 八 崎 城 址

景広の一族北条長門守重治から河田重親に、八崎城に攻めかかった敵を長尾憲景が後詰めして撃退したことを報じたものと思われるが、翌月八日、金山城主由良成繁父子から結城在陣の氏政に送った覚書中には、「不動山者去三日西上州に乗取候事、付自此方差越候目付上州衆之備之内ニ有之爲方之様躰見届昨日巳刻罷歸候」と、西上州衆が八崎城取ってしまったとある。どうやら、越後衆と上州衆との戦であったように思われる。宮田不動尊背後の山上にある見立城の別命を不動山城というが、八崎城も不動山城と呼ぶ。

当時、憲景は由良父子を介して氏政に服属して居り、七月一日には小田原勢が沼田に進駐（七月十八日付武州文書）、六月初から交渉をつづけていた景勝と武田勝頼の和協が八月二十日双方誓詞を交わして成立する。

その過程において、まだ景虎方だった勝頼所属の西上州衆が八崎城を占領して、小田原勢の北上を妨げようとしたのであろう。勝頼、景勝和協によってこれらはすべて解消した筈である。

天正7年（1595）六月、越後の内乱は景虎の敗死によって終結、景虎方であった沼田の城将河田重親は敗色の明らかとなった五月九日、氏政に求め八崎城に移った。

一、不動山望由候間任被申趣旨落着候可被相移事 一、年來被抱來知行度々如申遣相違有間敷事以上 右申定所如件 天正7年巳卯 五月九日 虎印 陸奥守奉之 河田伯耆守殿

重親はその後、現前橋市の関根に移り、更に新田に去って、そこで病死したと伝えられる。

天正十年、武田氏滅び、織田信長の遭難に伴い滝川一益も上方に去り、西上州は一挙に小田原の支配下に属した。厩橋の北条高広（芳林）と、沼田の真田昌幸は、上杉景勝や佐竹、宇都宮らの支援を得て小田原に抗したが、新田金山城が小田原の手に帰するに及んで佐竹らと分断された高広はついに小田原に降った。天正十二年半ばの頃である。

憲景の死去したのは天正十一年四月二日である、次の安堵状があるので、同十年二月には隠退して一井斎と号し、長男輝景が継いだのであろう。武田氏没落直前の事である。

定 一、湯坪併持高之事 一、大滝之事 一、酒運上之事 一、入沢口拾貫文 一、阿久津村武拾貫文 右如前之宛行者地 天正十年二月廿五日 輝景（花押） 木暮下総守殿 （木暮文書）

この時北条氏は、輝景の弟政景（後に景広と改める）を八崎城に据えて白井長尾領を両断し、川東十騎を政景に附した。所属の総力を弱体化する常套手段である。

天正十七年北条氏は、輝景に替えて政景を白井城主とし、小田原進撃の北國勢を阻止しようとしたが、「東上州から攻めて来た軍勢は、発崎（八崎）の館を乗取り、そこから鉄砲をうちかけた…四月十四日の夜利家方から政景に和議を申し入れ…政景は召し人となって加州へ行った」と長尾昌賢影像記は伝える。八崎から白井城に鉄砲のとどく筈はあるまい。四月十四日とあるが、十八年五月の誤りではないだろうか。

八崎城は、この時廃され、利根川の浸食によって本丸の西半が失われ、おそらくその南に附いていた筈のささ郭は影も形もない。現在の深堀は、後に導入された用水が穿った結果このようになったので、今次発掘調査の行われた新郭堀と大差がなかったろうと推定される。

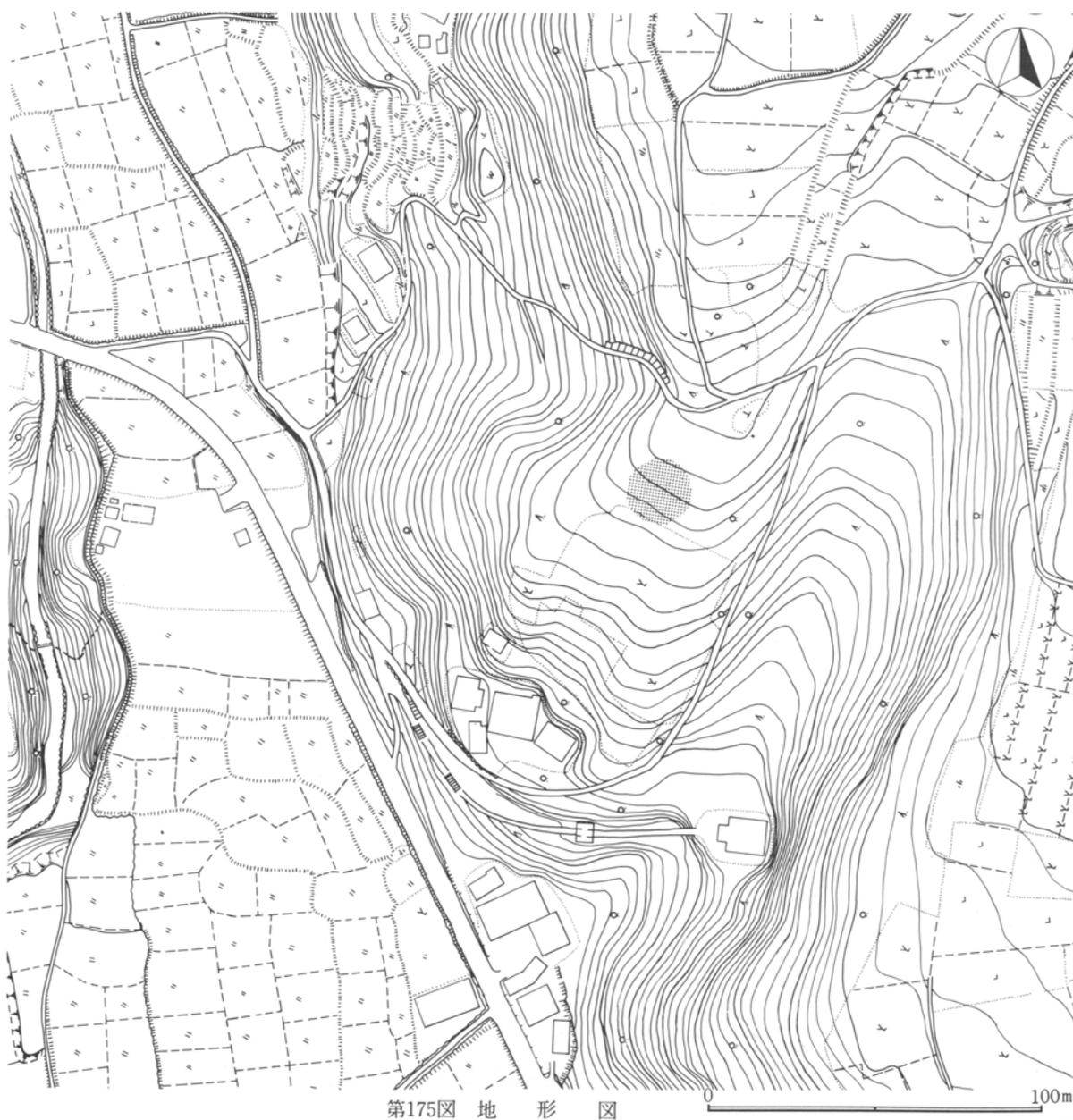
## 第Ⅲ章 八 崎 塚

### 第1節 調査に至る経過

4月より行われた北橋、および赤城村地区の試掘調査が終了後、八崎城の調査を行ったが、これに引き続き八崎城の東、台地上先端部に位置する八崎塚の調査に入ることとなった。この部分は側道取り付け部であり、また工事行程上急がれていたため、公団側と調整を行い8月27日より調査に入った。

### 第2節 立地と概要

八崎塚は赤城山西麓東端に位置し、標高は約210mである。西側は利根川の河岸段丘に面しており、比高差は約30mを測る。地形的には南および東側に谷が入り込んだ地形となっている。占地は丘陵の先端部を利



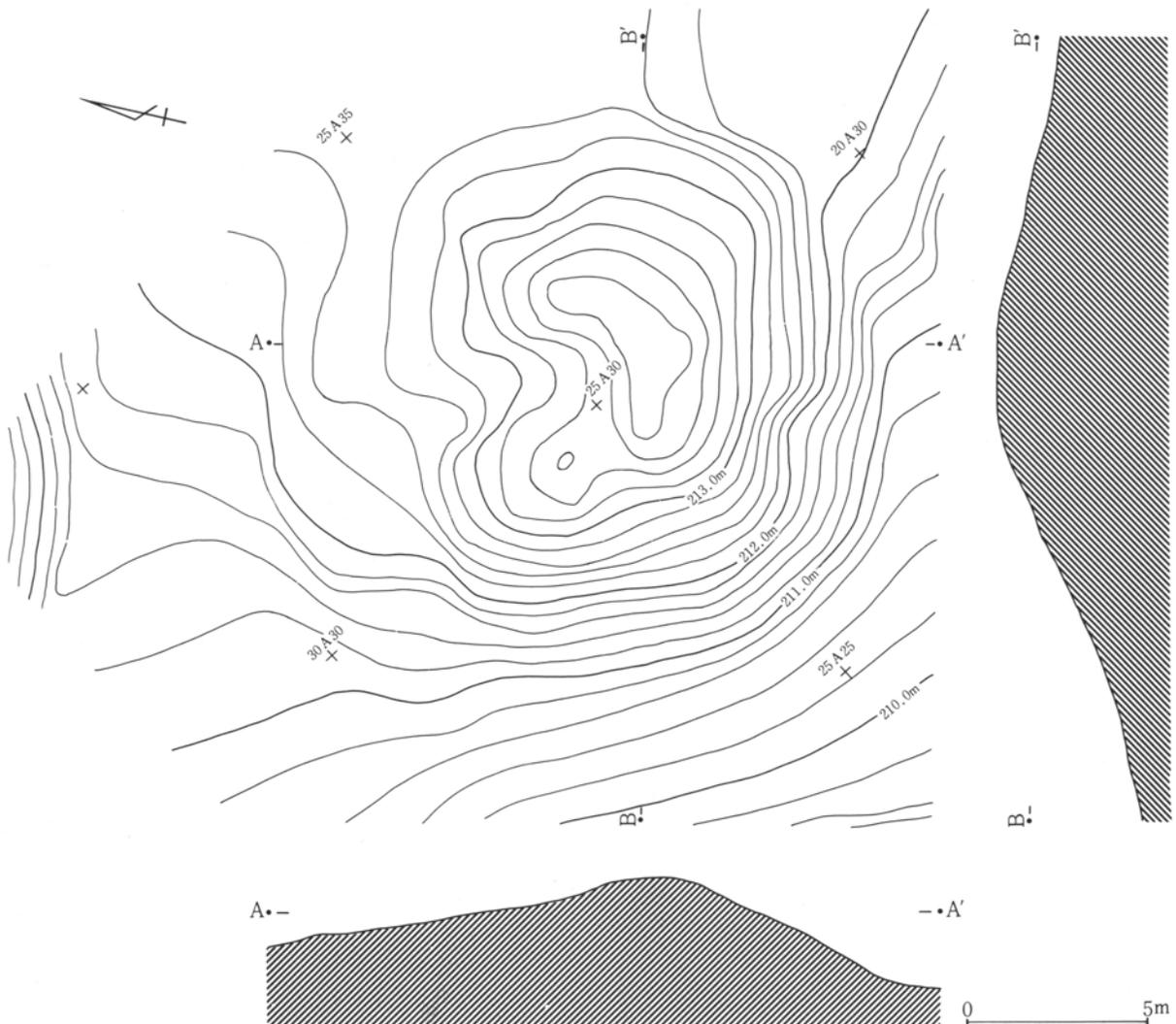
用した形態をとる。盛土は見掛けの高さ約3mで、径は約15mである。形状は当初円形と考えられたが、実測図を検討した結果、方形となることが判明した。

### 第3節 調査の方法と経過

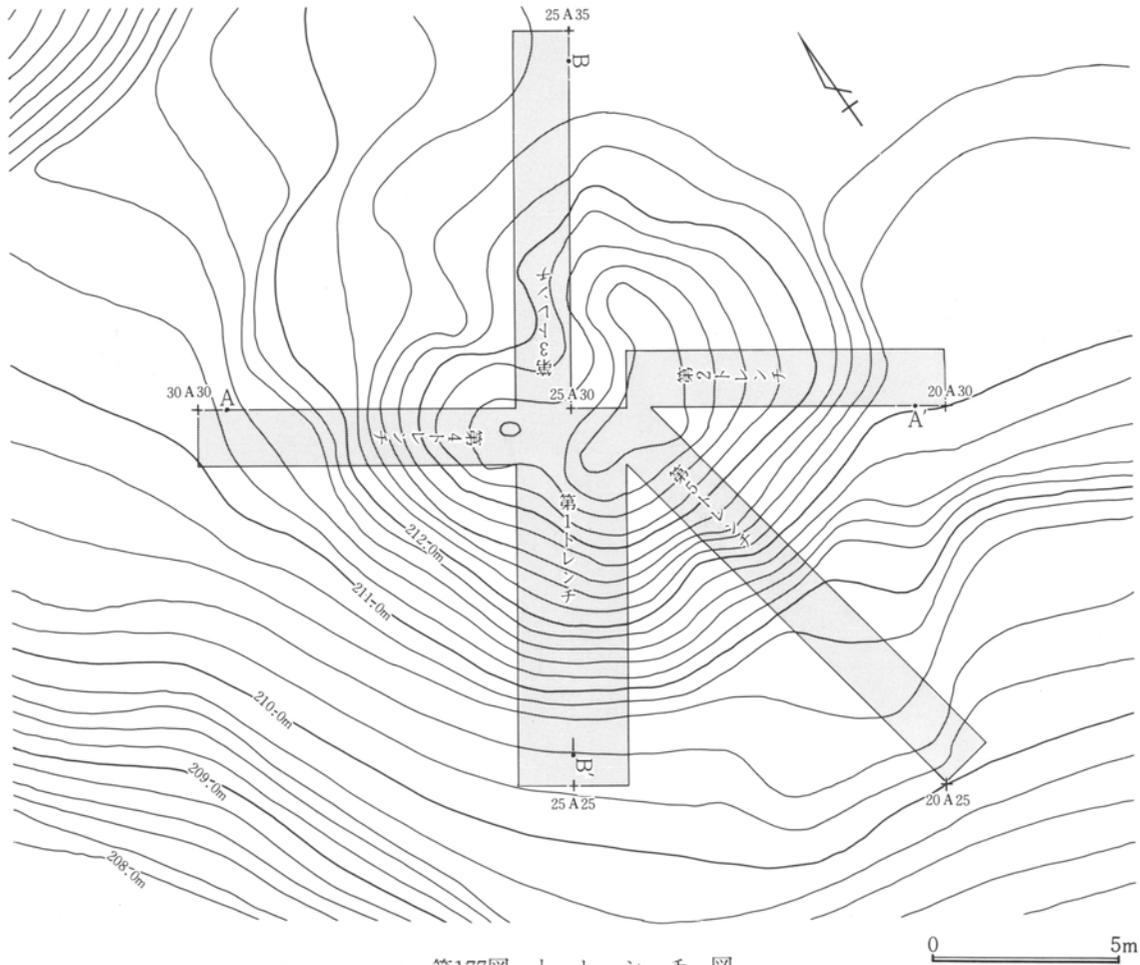
関越道センター杭 STA 11+00と STA 10+60を結んで基線とし、STA 10+60を振り出しに一辺2mの方眼を組んだ。盛土部より放射状にA～Eのトレンチを設定し調査を行った。

#### 日誌抄

- 8月27日 (晴れ) 本日より調査に入る。調査用テントの設営、器材搬入、盛土の下草刈り、トレンチ設定を行う。
- 8月29日 (晴れ) 全景写真撮影、第1～第5トレンチの調査に入る。道路公団との打ち合わせ。
- 9月1日 (晴れ) 第1～第4トレンチ表土除去。葺き石、埴輪等検出されず。
- 9月2日 (曇り) 第5トレンチ表土除去終了、周掘は見られない。第3トレンチにて掘り込みを確認。確認。
- 9月3日 (曇り) 各トレンチの掘り下げを行うと共に、写真撮影。道路公団との打ち合わせ。



第176図 八崎塚実測図

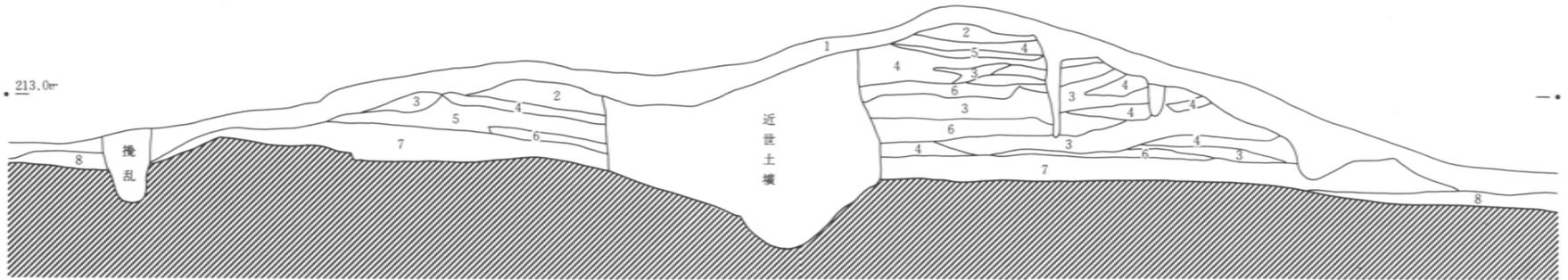
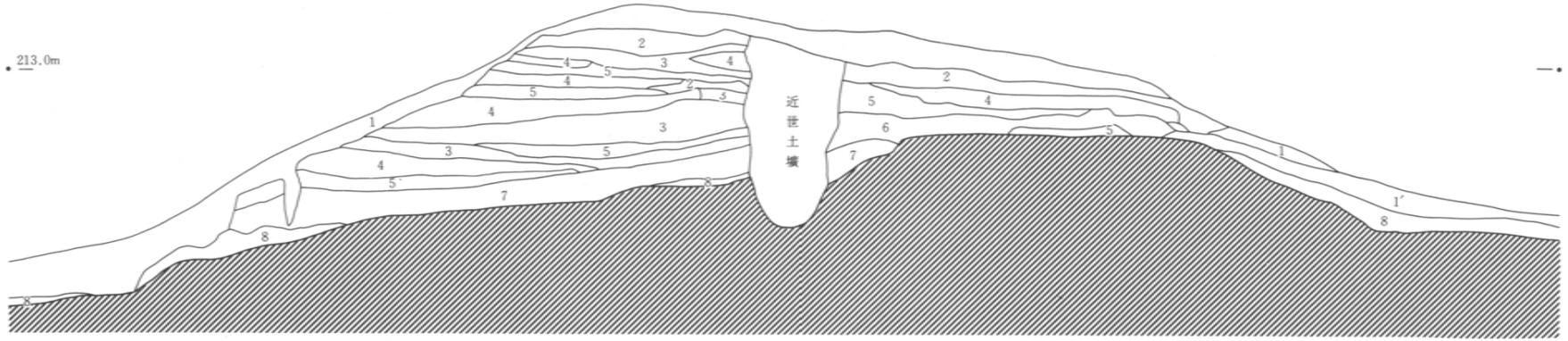


第177図 トレンチ図

- 9月4日 (曇り後雨) トレンチ調査。写真撮影。
- 9月7日 (曇り) 第1～第4トレンチ拡張。旧表土の面まで掘り下げを行う、第3トレンチのセクション実測。
- 9月8日 (曇り後雨) 第1トレンチ南西セクション実測、写真。盛土上に残っていた根の抜き取りをおこなう。
- 9月9日 (曇り) 盛土のセクション実測、写真。旧表土面の追求、削り出し面の露出を行う。
- 9月10日 (曇り) 第3トレンチで検出した掘り込み(土坑)の調査を行う。覆土、出土遺物より近世以降のものと判明する。
- 9月11日 (晴れ) 土坑の平面図作成、および写真。旧地表面のエレベーション。清掃後全景写真。
- 9月16日 (晴れ) 北側トレンチ調査。遺構は検出されず、若干の土器片、石器出土。トレンチ断面実測。
- 9月18日 (晴れ) 器材、出土遺物の搬出。本日をもって調査を終了する。

#### 第4節 調査の結果

調査当初墳頂部に向かって不規則な落ち込みが見られ、盗掘の跡かとも考えたが、調査の結果近世の土坑と判明した。検出された落ち込みは不正形で長径4.5m、短径1.0m、深さ2.0m程で北側に向かって緩く立



- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 1 表土 1' 攪乱を受けた黒褐色土 | 5 2層に近似               |
| 2 ロームを混入する黒褐色土     | 6 4層に近似               |
| 3 ロームを若干混入する黒褐色土   | 7 FP(ニッ岳降下軽石)を混入する黒色土 |
| 4 ロームを主体とする黄褐色土    | 8 ローム漸移層              |

0 4m

第178図 断ち割りセクション

第4節 調査の結果

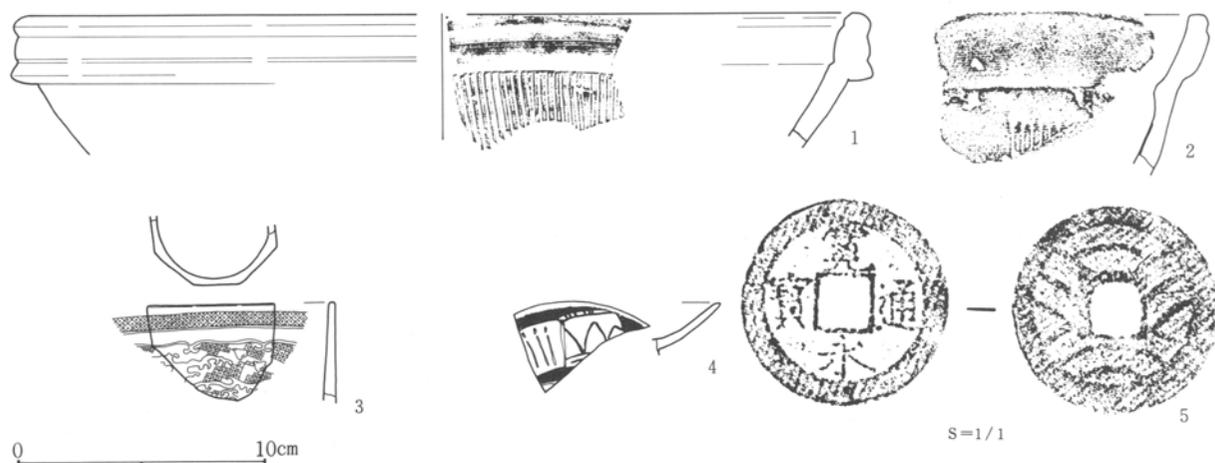
ち上がる。主体部に相当するものは見い出せず、石や土器も全く検出されなかった。盛土の断面は重層版築されており十数層のローム混入土と黒色土がほぼ交互に積み重ねられた状況が見られた。盛土最下層には、FPを混入する旧表土層が認められた。地山面については形を整えるため、北側部分に削平された様子が窺えた。

1 出土遺物

1は土壌の底より出土した播鉢の口縁部分片である。口唇部は外側に折り返しており、断面三角の鏢状となる。櫛目は8本単位でほぼ平行になっている。内外面茶褐色を呈し、焼成は良好である。2は表土中より出土した播鉢の口縁部片である。端部がやや内湾する。口縁部は外側へ折り返されてやや肥厚する。櫛目は6本である。外面黒褐色、胎土は白色を呈す。3は染め付けの八角椀口縁部片である。口縁下に帯状の斜格子目文を描きその下には格子、および波と千鳥を意匠している。4は皿片、5は「寛永通宝」である、径2.8cm、重さ4.2gである。裏面には波文がみられ、遺存状態は良好である。

2 グリッド出土遺物

調査区内より出土した遺物は縄文時代前期から弥生時代後期にかけての土器および石器である。これらは直接遺構には伴っていないが、付近には帰属する時期の遺構が存在することを予想させるものである。出土

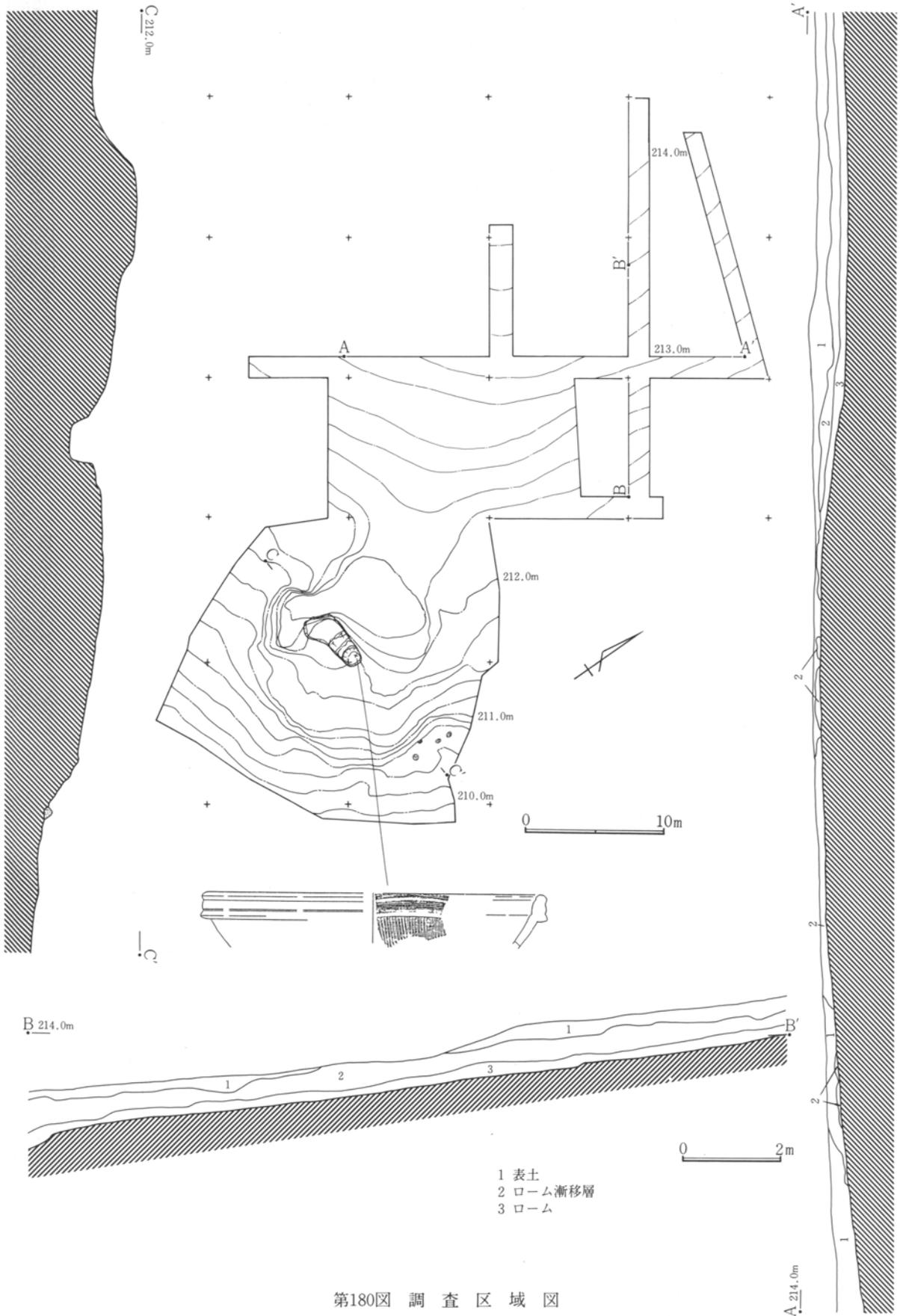


第179図 出土遺物

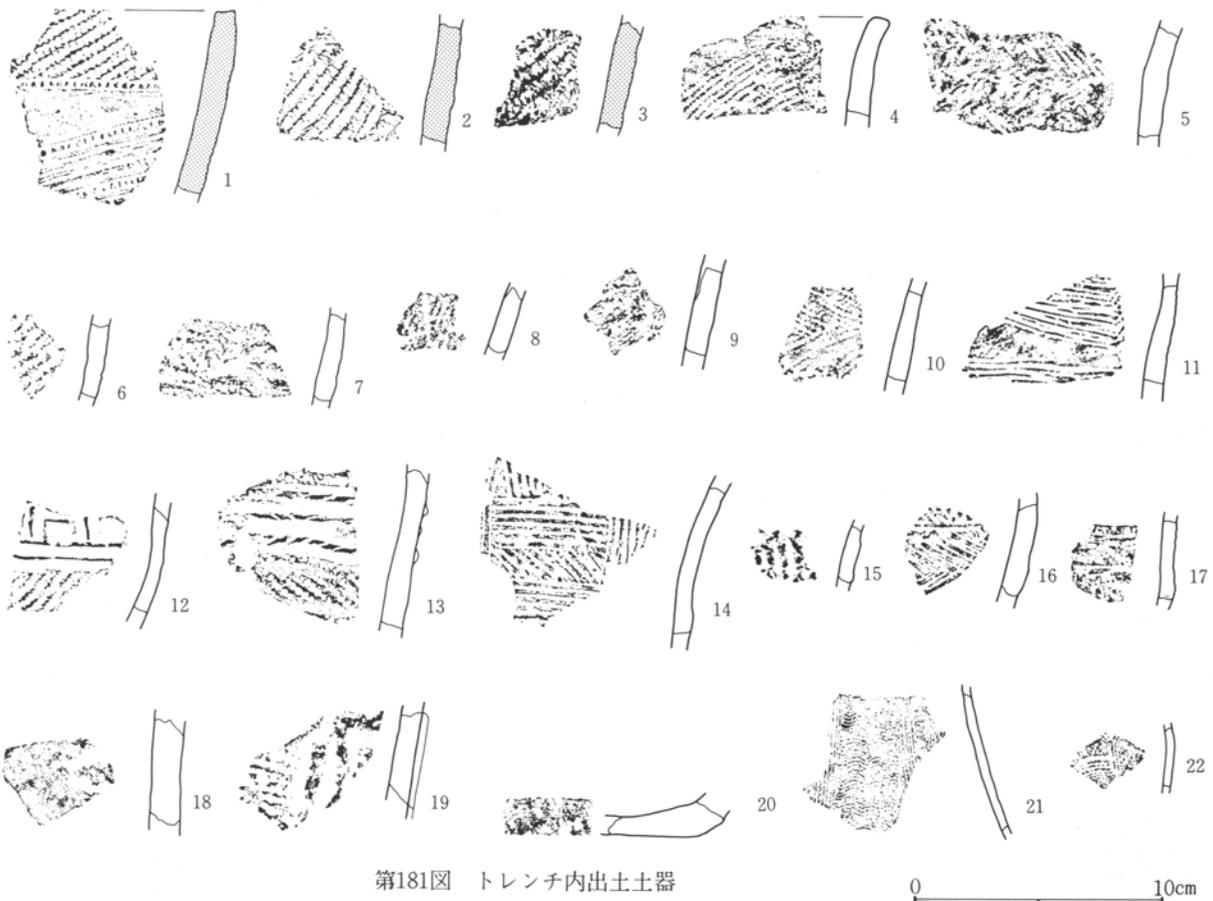
遺物の内訳は土器が22点、石器が4点である。

土器 (第181図)

1～3は縄文時代前期に比定される繊維土器である。1は深鉢形土器の口縁部片で口縁に沿って帯状に0段多条のLRが横位施文され、その下位に半截竹管による連続爪形文で三角形の無文部を作り、さらに斜めに引かれた2本の連続平行爪形文間に沈線を充填させている。口唇部は平らに仕上げられており、内面は丁寧に研磨されている。2・3はLRの0段多条が横位施文されている。4は口縁部片で、やや外反する口唇部下に無文帯をもち、細い縄文LRが横位施文される。堅緻な土器である。5は4と同個体と思われる、胴部であろう。LRとRLの結節を持つ羽状縄文が横位施文される。6はLR、7・8は結節を持ったLRが浅く施文されている。9は捩糸Lを施文する。10はLRとRLの羽状縄文が施文されているが、条間が空いている。11は半截竹管による集合沈線によって三角、ないしは菱形のモチーフを描くものと思われる。12・



第180図 調査区域図



第181図 トレンチ内出土土器

13は浮線文を持った土器である。12は細い粘土紐を横に2本平行に、さらに口状に貼り付け、両脇を竹管により撫でつけている。さらに下位にLRの縄文を横位施文している。外面黒色で堅緻な土器である。13は地文に縄文RLを持ち、3本の異方向の刻みを持った浮線文を横に巡らす。内面は丁寧に研磨されている。14・15は半截竹管による集合沈線を持つ。14は矢羽根状に集合沈線を付す。15は横位、縦位に集合沈線をパネル状に施文する。内面平滑で胎土中に砂粒が目立つ。16は薄手の土器で半截竹管による浅い沈線が横位に施文される。17は縦に平行沈線を持つ小破片である。18はRLの地文上に隆帯を持つ。19は無文土器である、内外面ともに良く研磨されている。20は底部片である。21・22は同一個体片である、6本櫛歯により集合沈線を縦に垂下させ、その間に波状文を多段に、横または縦に施文する。非常に薄手でやや白っぽい土器である。弥生時代後期、関東東部に分布域を持つ十王台式と考えられる。

### 3 出土石器 (第182図)

すべて拡張グリッド内より出土したものである。1は短冊形の打製石斧である。一面に自然面を残す。両側縁に刃潰しがなされ、直線的に仕上げられている。刃部は使用によりかなり摩滅している。長さ11.1cm、幅3.9cm、厚さ1.3cm、重さ72g、黒色頁岩製である。2も打製石斧であるが、基部、刃部を欠いている。板状でやや幅広い石片を用いている。石材は黒色頁岩製である。3は小型の打製石斧である、打点部を基部としている。基部は厚く、刃部は薄くなる。長さ3.9cm、幅2.2cm、最大厚は1.0cm、重さ7gである。黒色安山岩製である。4は縦長の剥片を利用したスクレイパーである。約半分を欠損している。石材は輝石安山岩である。



第182図 トレンチ内出土石器

### 第5節 ま と め

当初古墳と考えていたが、調査を進めてゆく過程でその可能性は無くなった。形状は一辺約12mの方形となるらしく、各辺はほぼ東西南北方向を向いている。盛土部に関しては攪乱、削平によって形状は崩れている。この遺構の性格については、調査結果からも確定できるような成果は得られなかった。盛土は版築構造で、形も整えており人為的なものであることは明らかであり、作られた時期については中世近以降となる可能性が強く、近世の供養塚いわゆる信仰の対象としての塚が考えられる。県内では桐生の十貫山遺跡水上町の小仁田遺跡の例などが知られ、形状や盛り土の様子などに類似性が見られる。さらに可能性として、下段西方にある八崎城の付属施設としての「のろし台」が考えられる。これについては積極的な停証はないが、墳頂に立てば城が一望でき、さらに主城である白井城との連絡には適地であることなどから、考慮しても良いのではないだろうか。

参考文献

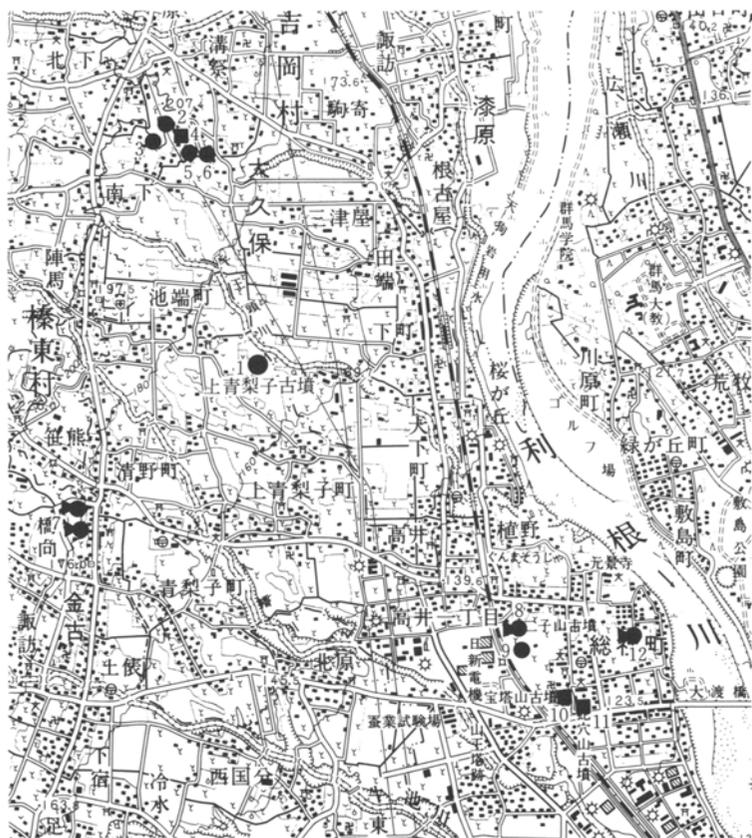
- 十貫山遺跡調査報告 桐生市教育委員会 1985 (昭60)年
- 小仁田遺跡 関越自動車道(新湯線)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書 1985 (昭60)年

## 第Ⅳ章 上青梨子古墳

### 第1節 調査にいたる経過

本古墳は前橋市池端町から北群馬郡吉岡村大久保地区にかけて所在する長久保古墳群に含まれる。榛名山東麓裾部に位置する古墳周辺には榛名山の火山活動にともない形成されたとする陣馬泥流による多くの残丘が認められる。古墳群はこの陣馬泥流による残丘を利用した多くの古墳が造られている。遺跡周辺は昭和55年度に県営畑地帯総合土地改良事業が進み、事業に伴う本古墳群の調査が群馬県埋蔵文化財調査事業団によって実施され、残丘を利用した多くの古墳を調査している。関越自動車道路線内に位置する本古墳は上青梨子A号墳としてマークされているため、土地改良事業に伴う調査の対象からはずれるものであったが、この陣馬泥流丘が古墳であるか問題となる所であった。

工事の優先される本地域では早急に古墳の有無を確認する必要があった。その取り扱いについて県教育委員



- |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|
| 1 上青梨子古墳 | 2 南下D号古墳 | 3 南下C号古墳 | 4 南下E号古墳 |
| 5 南下A号古墳 | 6 南下B号古墳 | 7 高塚古墳   | 8 二子山古墳  |
| 9 愛宕山古墳  | 10 宝塔山古墳 | 11 蛇穴山古墳 | 12 遠見山古墳 |

第183図 遺跡位置図

会との協議を進め、昭和55年3月、試掘調査を実施するところとなった。調査は昭和55年3月18日から3日間、平野を担当として地形図の作成と、簡易ボーリングによる調査を試みた。残丘の南側で石室の可能性を思わせる石の集中している部分、残丘については白灰色のシルト土層が全面に認められ、泥流丘であることを確認した。調査の結果、ほぼ古墳と判断される旨を県文化財保護課に報告し、調査の対象に含めることを要請した。

昭和56年度の関越道新潟線の発掘調査は日本道路公団、県教育委員会との協議の結果、鳥羽Ⅰ、Ⅱ遺跡・国分寺中間Ⅰ、Ⅱ遺跡・大釜遺跡・後田(師A)遺跡、及び工事の優先される吉岡工事区の上青梨子A号墳から調査を実施するところとなった。本古墳の調査は、4月にいたり

準備を進め、平野、小野を調査担当とし、反町嘱託員、地元調査補助員の協力を得て、昭和56年4月22日から5月9日の19日間にわたり実施した。

### 第2節 立地と周辺の遺跡

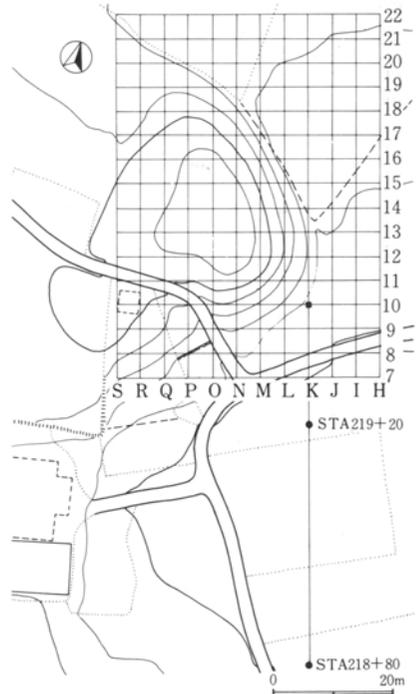
本古墳は前橋市の西端、池端町大字上青梨子に所在しており、標高は160m前後である。榛名山麓より流

第IV章 上青梨子古墳

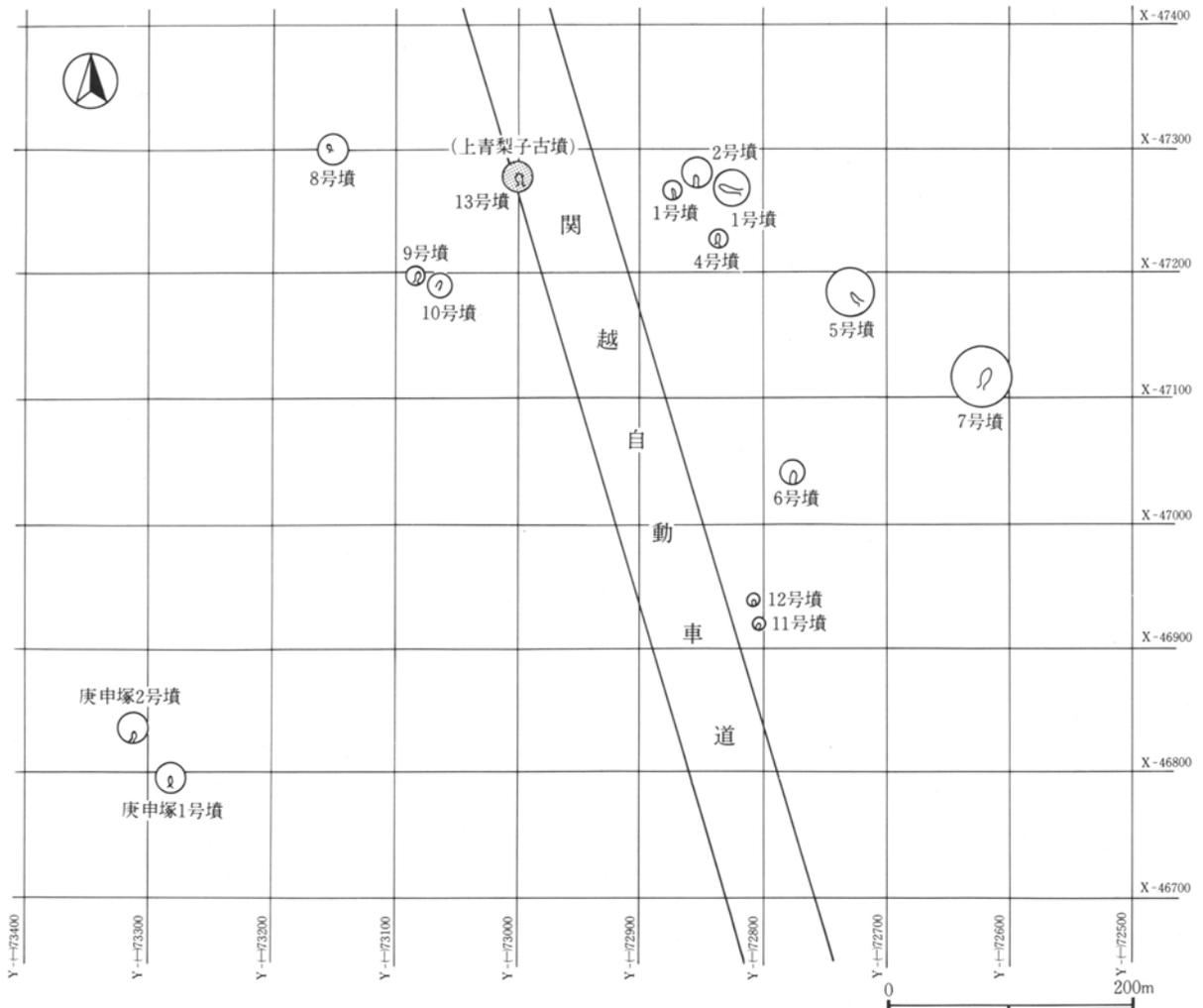
れ下る八幡川と午王頭川とに挟まれた扇状地形に在る。こうした扇状地上には5～10mの高さを持つこぶ状の小丘が形成されている。この小丘は榛名山相馬岳を給源とした陣馬泥流と呼ばれる堆積物に起因するもので、形成された時期はB.P 20,000年頃のものと考えられており、角閃石安山岩の角礫を多量に含み青灰色ないしは、茶褐色を呈す。層位的にはY P（板鼻黄色軽石層、B.P約12,000年）とB.P（板鼻褐色軽石層、B.P約22,000年）との間に比定されるものである。古墳はこうした泥流丘の南端部を利用して主体部を構築している。

本古墳は昭和54年度に調査された長久保古墳群のなかの一つである。この古墳群は前述した泥流丘を墳丘として利用したものが多く集まっており、この上青梨子古墳は13号墳とされたものである。

本古墳の南東2.5kmの所には、全長約90mの前方後円墳、総社二子山古墳、その南には円または方墳と思われる愛宕山古墳や、終末期古墳として知られ、截石切組み積み石室を持つ蛇穴山、宝塔山古墳がある。また北東1.5kmの所には南下古墳群がある。



第184図 グリッド図



第185図 長久保古墳群分布図（清里・長久保遺跡より）



第186図 地形図

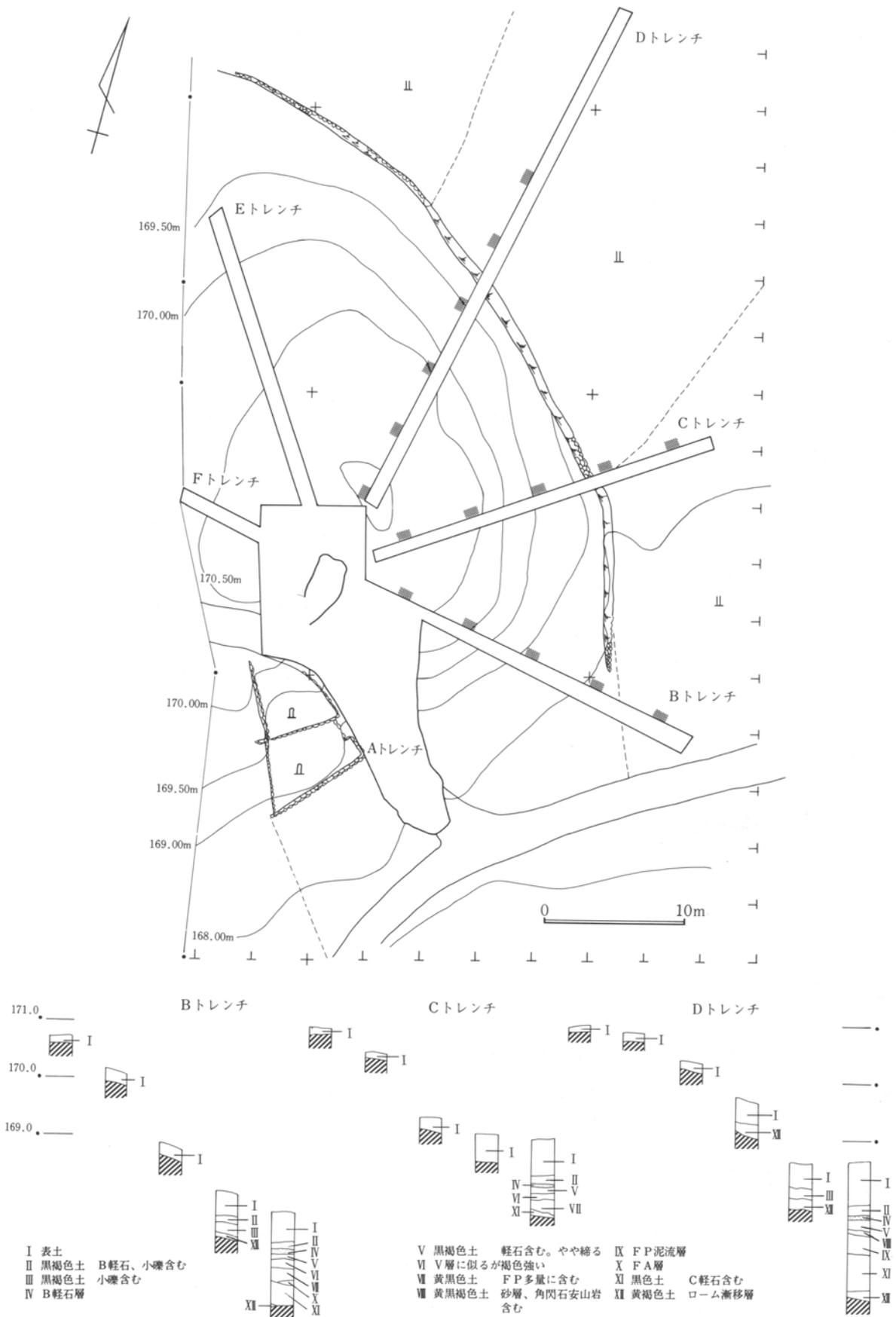
### 第3節 調査方法

古墳の位置する小丘は、径が約40mあり、主体部はこの上部南端に在ると考えられた。グリッド設定は、関越道センター杭（STA219+20）を基点に40m南に在る（STA218+80）を見通し、それを反転して北20mの所に基本グリッド杭（K-10）を設け西および北へ4m単位のグリッドを設定した。また墳頂部に基点を設けそこから放射状に幅約1.5mのトレンチA～Fを配した。主体部については事前のボーリング探査で礫の存在が認められた部分についてグリッドの方眼に沿って掘り下げ、さらに前庭部についてはほぼ全面に渡って調査を行った。

#### 調査の経過

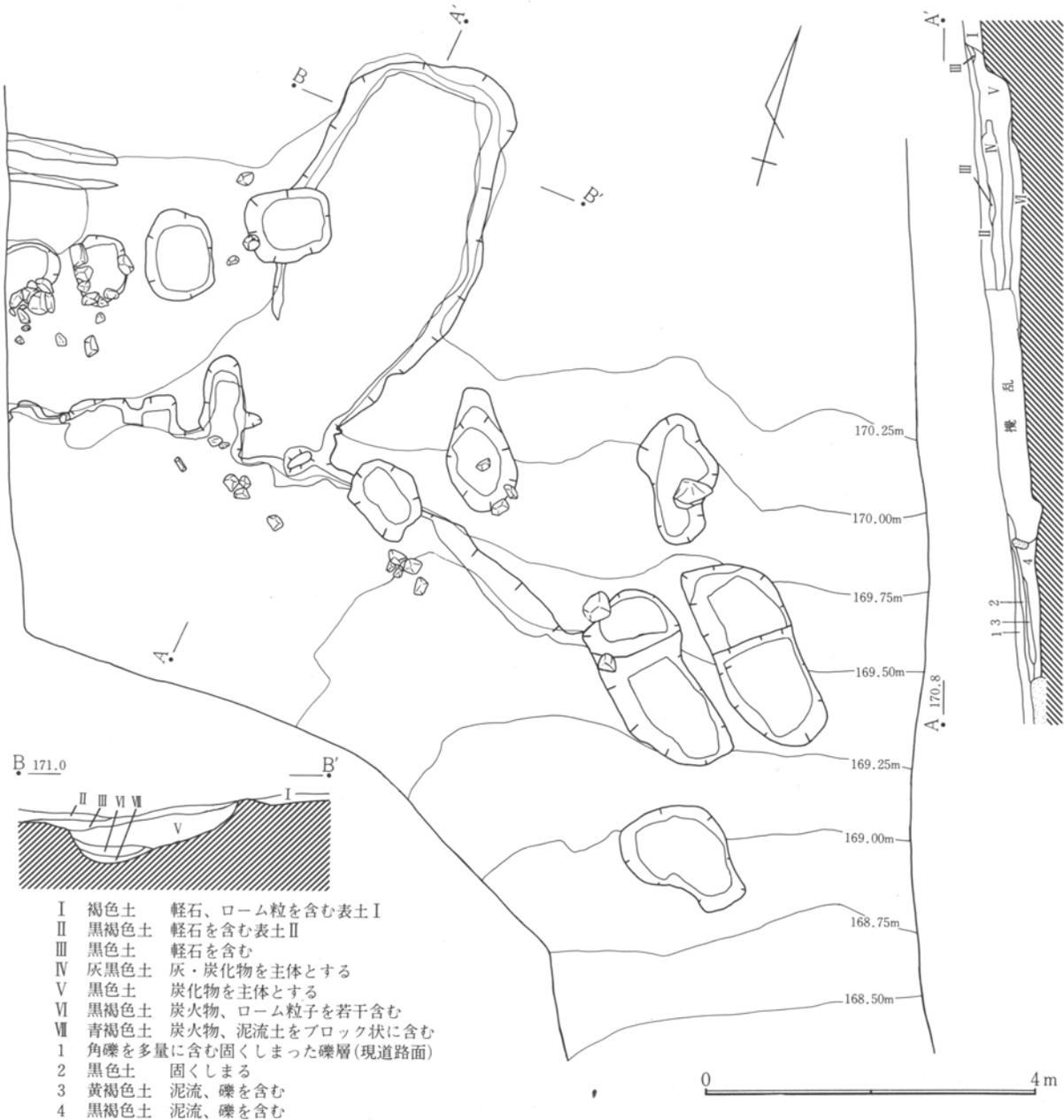
- 4月22日（晴れ） 調査事務所内整理。テント設営。グリッド設定。
- 4月24日（晴れ後曇り） 主体部セクション図作成。攪乱がひどい。表土除去作業。

第IV章 上青梨子古墳



第187図 トレンチ・土層図

第4節 調査の結果

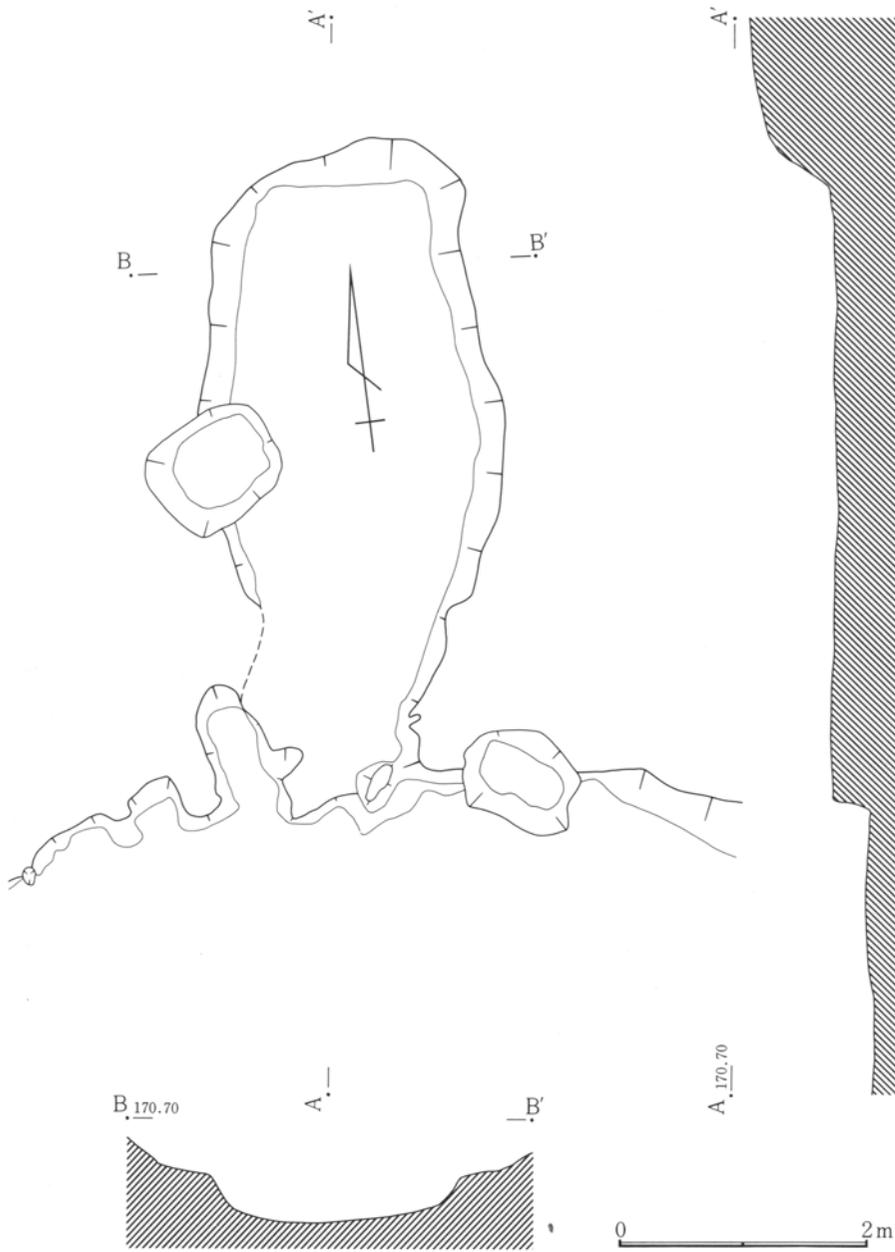


第188図 主体部・墓坑群

- 4月28日 (晴れ) 主体部掘形平面図作成。墳丘トレンチ断面図作成。
- 5月1日 (晴れ) Cトレンチ拡張。B・Dトレンチ断面図作成。周堀は検出されず。
- 5月2日 (晴れ) 各トレンチ写真撮影。主体部掘形等高線図作成。
- 5月7日 (雨) 前庭部に検出した近世墓坑の調査。本日で調査終了。  
調査事務所撤収準備。
- 5月9日 (曇り) 墳丘(陣場泥流丘)、重機にて断ち割りを行う。写真撮影。

第4節 調査の結果

当初から墳丘部については、桑畑として利用されておりかなりの削平を受けていることは予想されていた。



第189図 主体部掘り方実測図

また南西部分についても、農道が通っており施設の遺存状況は余り良くないと考えていた。調査の結果によっても主体部と考えられる部分については、後世の攪乱によってほぼ全面的に破壊を受けていた。主体部を構築していたと思われる石等もほとんど見られず、南へ向かって開く長方形の掘形を確認し得たのみである。また、その周囲には近世の墓坑が等高線に沿って上から4列並ぶように計13基検出されており、農道を挟んだ南にある墓地と関連するものと考えられる。時代的には江戸末期から明治期のものと判断される。

また各トレンチ調査によっても埴輪、周堀などは検出されなかった。

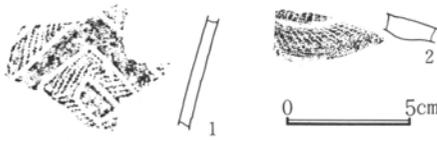
### 1 墳丘

この小丘は前述したように径40m程の泥流丘を利用したものであるが、西側は等高線は回らずに西へ逃げて行ってしまふ。また、見掛け上の高さは3m程で、東側については水田となっており周囲はかなり削り込まれているものと考えられる。

### 2 主体部 (第188図)

断面の観察により下面まで攪乱が及んでいることが確認されたため、掘形面まで一気に露呈させた。その形状はほぼ長方形を呈し、左右がやや張り出しており南へ開口する形となっている。掘形の規模は奥壁が上幅1.8m、下幅1.2m、入り口部上幅1.7m、下幅1.5m、中央部上幅2.5m、下幅1.9mで長さは5.3mである。

各壁の立ち上がりは70度程の角度を持つ、また高さは30~40cmである。入り口部および前庭部は墓坑、農道によってひどく削平されており、正確な形状は把握できなかった。



第190図 出土土器

### 3 出土遺物 (第190図)

土器2点のみである。1は墳丘上のトレンチで出土している。深鉢形土器の同部片である、菱形の磨消し線文を2重に配す。厚さ約5mmで、内面は平滑に磨かれている。色は淡黄褐色で胎土中には微砂粒を若干含む、焼成は良い。縄文時代後期、堀ノ内2式である。2は主体部前面の排土中より出土したものである。須恵器罫の肩部破片である。浅い凹線を巡らし、外側に細い櫛状工具による刺突文を連続させている。灰色を呈し、焼成は良い。

## 第5節 ま と め

本古墳は長久保古墳群に含まれるもので、構築方法、時期、地形的に見てもそれは明らかである。墳丘、主体部ともに削平、攪乱を受けており、主体部構造の細部には言及する事ができない。また古墳に関する遺物についても須恵器罫片が1片のみで比較資料には極めて乏しい。以上のような調査結果を踏まえて本古墳の位置付けを行うこととする。

主体部の構造は掘形のみを検出のため、袖の存否に関しては不明である。また規模については掘形の比較からすれば同古墳群の中では、やや小型の部類に入ろうか。石室の主軸方向はN-10°-Eである。前庭部は石室前面に約180度の広がり石室部から30cm程落ちた状態で見られたが、ちょうど農道の路肩に沿うことから、構築時の状況であるかは、確定できない。築造年代については、埴輪、周堀の無い事、本古墳群の特色として泥流丘の頂部より南西斜面に主体部の位置が移る傾向が指摘できることなどから、7世紀代に比定しておく。

#### 参考文献

- |             |                |                  |             |
|-------------|----------------|------------------|-------------|
| ・史跡天然記念物調査会 | 上毛古墳総覧         | 史跡天然記念物調査会       | 1983 (昭13)年 |
| ・久保泰博他      | 正観寺遺跡群Ⅲ        | 高崎市教育委員会         | 1981 (昭56)年 |
| ・群馬県史刊行会    | 群馬県史 原史・古代3 古墳 |                  | 1981 (昭56)年 |
| ・中沢 悟       | 清野・陣場遺跡        | (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 1981 (昭56)年 |
| ・「年報」I      |                | (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 1983 (昭58)年 |
| ・相京健史       | 清里・長久保遺跡       | (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 1986 (昭61)年 |
| ・鬼形芳夫・依田治雄  | 北原遺跡           | 群馬町教育委員会         | 1986 (昭61)年 |

## 第V章 三原田城遺跡のまとめ

### 第1節 出土遺物

#### 1 土器について

本遺跡より出土した土器については、先の各遺構及び遺構外遺物の項で説明したごとくで、その多くは住居址及び土壇から出土したものが中心である。内容は縄文時代早期から中期前葉までの多期にわたり、これらの土器を大別すると次の通りである。

第Ⅰ群土器	撚糸文系土器
第Ⅱ群土器	前期初頭土器
第1類	花積下層式土器
第2類	木島式土器
第Ⅲ群土器	前期後半土器
第1類	諸磯b式土器
第2類	諸磯C式土器
第3類	浮島式
第4類	十三菩提式土器
第Ⅳ群土器	中期前葉土器
第1類	下小野式土器
第2類	阿玉台式土器
第3類	勝坂式土器

この内、第Ⅰ群土器の撚糸文系土器としたものは、遺構外より1点だけ出土したのみである。第Ⅳ群土器についても同様で、むしろ遺構外出土のものが多い。第Ⅲ群土器は、一部の遺構から出土したもので、本遺跡で最も出土量が多く、その主体をなすものは第Ⅱ群土器であり、検出された各遺構もこの第Ⅱ群土器を出土させたものが大部分を占めている。

この時期の県内での出土例は、現在調査中のものを含めても未だ数少なく、関東地方においても本遺跡のような、花積下層式の中でも単一的時期内での住居址8軒、土壇100余基と、多くの遺構を伴っている例は少ないようである。この点からも、この第Ⅱ群土器は前期初頭の土器を研究する意味で、かなり良好な資料といえよう。ここでは第Ⅱ群土器を中心に検討することとしたい。

第Ⅱ群土器は、大きく、花積下層式と木島式とに分類することができ、花積下層式を1類、木島式を2類とした。各類を順にふれてみると、

#### 第1類（花積下層式）

器形については、大小はあるが、そのほとんどが深鉢形を呈し、先に報告された「菊名貝塚の研究」（桑山 1980）での器形と大方同様である。しかし、（第63図174、第72図367、第79図475）等にみられる胴部において、大きく「く」字状に屈曲する器形を呈するものは、他遺跡でもあまり例をみない特徴といえる。また底部形態についても、平底となるものが主体をなすが、尖底となるものも以外と多い。特に断面観察から（第67図271）のような、整作当所では丸底に近い尖底を造り出しておきながら、最終的に粘土を付け足し、上げ底風の平底にしてしまうものもあり、かなり平底を意識していたことがうかがえる。また（第

79図475) のような、底部が平底となるのか、尖底となるのか判然としないものもある。

文様についての分類は、次の通りである。

- a-1 口縁が折り返しの有段口縁となり、有段上に環状の捺糸側面圧痕、捺糸側面圧痕による渦巻きを施した円形の隆帯をもつもの。
- a-2 口縁部に段をもち、長い環状となる捺糸側面圧痕を施したもの。
- a-3 口縁直下に平行な捺糸側面圧痕を施し、口縁部に刻みをもつ隆帯を巡らせ、捺糸側面圧痕による渦巻き、波状文を描くもの。
- b-1 口縁が折り返しの有段口縁となり、有段上に平行な捺糸側面圧痕を施し、口縁部に捺糸側面圧痕による渦巻き、菱形等を描き、刻みをもつ隆帯を巡らせるもの。
- b-2 口縁が折り返しの有段口縁となり、有段上に平行な捺糸側面圧痕を施し、口縁部に捺糸側面圧痕による渦巻き、菱形や平行線を描き、短沈線状、円形等の刺穴を施したもの。
- b-3 口縁が折り返しの有段口縁となり、有段上に刻みをもつ隆帯、円形刺穴、矢羽根状の短沈線等を施し、口縁部に捺糸側面圧痕による平行、山形、蕨手状を描き、円形刺穴、短沈線を施したもの。
- c 口縁部に刻みをもつ隆帯を巡らせ、沈線で菱形を描くもの。
- d 口縁部に格子目状の回転絡条体圧痕を施したもの。
- e 口縁が折り返しの有段口縁となり、有段上に重弧文状に捺糸側面圧痕を施すもの。
- f 口縁が折り返しの有段口縁となり、有段上に太い沈線で鋸歯状に描き、以下に縦位回転による羽状縄文を施すもの。
- g 口縁が折り返しの有段口縁となり、有段上に平行な捺糸側面圧痕を施し、以下に羽状縄文等の縄文を施すもの。
- h-1 口縁部に沈線による波状文を描くもの。
- h-2 口縁部に沈線を縦に施すもの。
- i 口縁部に捺糸側面圧痕をレンズ状に描くもの。
- j-1 口縁が折り返しの有段口縁となり、口縁部以下に羽状縄文等の縄文を施すもの。
- j-2 口縁が折り返しの有段口縁となり、口縁直下に刻みをもち、以下に羽状縄文等の縄文を施すもの。
- j-3 口縁部以下に羽状縄文等の縄文を施すもの。
- k 無文のもの。

この分類からすると、やはり花積下層式土器の文様のバリエーションが多いことがうかがえる。しかし、口縁部に文様をもつものより、全面に0段多条を用いた羽状縄文等の縄文を施すものが最も多く、花積下層式のメルクマルとされる捺糸側面圧痕を用いたものは以外と少ない。

j-1の中には、胎土に繊維よりも砂粒を多く含有するものもみられる。hについても同様であり、沈線による波状文を施すことも考えると異系統の土器とも思われる。またdとした捺糸側面圧痕による重弧文を描くもの(第62図137)も、異系統の可能性ががあると思われる。ここでは一応、これら系統を別にするものについても花積下層式の中に含めることとした。

a-3の土器(第79図475)については、捺糸側面圧痕による文様を描いてはいるが、その文様構成をみると下吉井式との関係に注意せねばならない。捺糸側面圧痕による渦巻きや蕨手文については、桑山氏(桑山 1980)によると「線文より曲流へ、更に渦文へと発展する……」とし、その過程を5段階に分け変遷を考えられた。たしかに、この文様変遷はスムーズに変化したようにみえるが、花積下層式の終末では渦

## 第V章 三原田城遺跡のまとめ

巻き文よりも蕨手状となるものが盛行し、むしろ渦巻き文の方が蕨手状となるものよりも古い段階に盛行しているように思われる。長い環状となるもの（直線が曲流して放物線ないし半輪状を表わすもの）は、やはり花積下層式の古い段階のものと考えられ、これらの良好な資料として（第72図367）がある。

つまりこの燃糸側面圧痕による施文文様で、この時期の細分が、ある程度可能となるものと考えたい。当然、花積下層式の内容を理解するには、まだまだ様々な要素があり、問題点も多いと思われるが、本遺跡より出土した花積下層式についての指摘は以上である。

### 第2類（木鳥式土器）

木鳥式土器は、本来東海地方を中心として発達し出土する土器群であり、関東地方においてもその存在は南関東で知られていたにとどまっていた。近年では、埼玉県内にもその分布が認められている。群馬県内での出土例これまで知られておらず、本遺跡が初例で、現在のところ木鳥式土器の分布の北限と思われる。

この分類の土器を文様から分類すると

- a 口縁部に刺穴をもつ隆帯を垂下させ、平行沈線、円形刺穴等を施すもの。
- b 突起（指頭によるつまみ痕）をもち、櫛歯状工具による条線が施され、表裏面に指頭圧痕がみられるもの。
- c-1 有段口縁の、段部につまみ状の刺突をもち、口縁部以下に羽状縄文等の縄文を施すもの。
- c-2 有段口縁の、有段上に沈線及び刺突をもち、以下に羽状縄文等の縄文を施すもの。
- d-1 口縁部に半裁竹管具で波状、鋸歯状、横位の「ハ」字状に描き、つまみ状の刺突及び連続する刺突を施したもの。
- d-2 口縁部に沈線で鋸歯状に描き、以下に縄文を施すもの。
- e 胴部に櫛歯状工具による条痕を施し、表裏面に指頭圧痕がみられる。
- f 無文で表裏面に指頭圧痕がみられるもの。

となる。

これらの土器群をみると、所謂「木鳥式」そのものと考えられるb・e・fのものと、それ以外のやや質が変化したものに分けられる感がある。この両者を比較すると、特に胎土・整形において明らかに異なるようで、花積下層式を中心とした地域にあって、客体的な存在である木鳥式土器が、木鳥式の要素をもちつつ同化し、在地的な面をかもし出したものとも考えられる。当然、他型式との関係等、十分な検討を行わなければならない。現段階では、とりあえず木鳥式の中に含め、今後資料が増加した上で、再度検討を要するもので注意していきたい。

花積下層式土器の研究は古く、昭和3年に大山史前学研究所による埼玉県花積貝塚の発掘調査からはじまり、その後「花積下層式」（甲野 1935）が提唱され、江坂輝弥氏の「梶山式→菊名式→下組式→大串式」とする4期細分（江坂 1951）、5期細分（江坂 1959）が唱えられた。その後さらに多くの研究者によって花積下層式の研究が進められ、「菊名貝塚の研究」（桑山 1980）では花積下層式の直前に「菊名式」を、高橋雄三氏は「菊名下層式」（高橋 1981）を提唱し、下村克彦氏は花積下層式の終末に「新田野段階」を想定した（下村 1981）。また小出輝雄氏は花積下層式を3期細分（小出 1982）を、渋谷昌彦氏は4期細分（渋谷 1982, 1983）を提唱している。これら多くの論考は、花積下層式の型式細分と、花積下層式の成立、及び周辺型式との関係（早・前期の区分の問題も含めて）等々、花積下層式をとりまく様々な面から論じられていると言える。

第1節 出土遺物

中でも渋谷氏の説は、本遺跡の第Ⅱ群土器を位置づける意味で興味深いものである。氏は、東海地方の木島式をⅠ式～Ⅹ式までの10型式に細分し、相模地方の下吉井式についてもⅠ式～Ⅲ式までの3型式に、関東地方の花積下層式は4細分している。さらに細分した各型式の位置づけとして、各遺跡で検出された住居址内での供伴出土の例をあげ、木島Ⅲ式と下吉井Ⅰ式、花積下層式の古い段階（有段口縁、隆帯）が併行、木島Ⅳ・Ⅴ式と下吉井Ⅰ・Ⅱ式、花積下層（渦巻き状の捺糸側面圧痕）が併行、木島Ⅵ・Ⅶ式と、下吉井Ⅱ式、花積下層式が併行、木島Ⅷ式と下吉井Ⅲ式、花積下層式（新田野期）が併行関係にあるとした（表12参照）。

本遺跡より出土した花積下層式土器は、決して古い段階のものではなく、また新田野期の土器も含まないことから、この中間の時期に位置する一群で、（第72図367）に代表される口縁部に捺糸側面圧痕で完全な渦巻きを施す類と、（第68図279）に代表される口縁部に刻み目をもつ隆帯や円形刺突、短沈線や渦の巻ききらない捺糸側面圧痕ないしは蕨手状をなす捺糸側面圧痕を施す類とに分離することができる。つまり、花積下層式を4細分するならば、前者が2段階目に、後者が3段階目に位置するものと考えられる。

木島式土器については、かなり在地的なものも多くみられるが、明らかに渋谷氏の細分の木島Ⅶないし木島Ⅷ式に比定されるものが存在する。

下吉井式土器については、所謂「下吉井式」とする土器は出土していないが、しいてあげるとすれば第67号土壙から出土した（第79図475）がある。この土器の口縁部文様は、捺糸側面圧痕による渦巻きと波状文から構成されているが、この工具（捺糸側面圧痕）を沈線に置換えると、渋谷氏の下吉井Ⅱ式に近似することがわかる。

以上、本遺跡より出土した第Ⅱ群土器について、若干その分類及び土器の位置づけを行なってみた結果、渋谷氏の編年案とほぼ同様の様相を示すに至った。本遺跡の出土土器の内容と、ほぼ同様なあり方を呈する遺跡に埼玉県浦和市北宿遺跡（青木、岩井、小倉 1983）があげられる。この北宿遺跡においても、花積下層式、下吉井式、木島式が供伴することが認められることから、渋谷氏の編年案におおむね賛同したい。

最後ではあるが、第5号土壙より出土した土器（第77図469）については、現在のところ群馬県内での類例はなく、異型式のものと考えている。中期前葉に位置づけられると思われるが、今後の検討を要する土器の一つである。

表12 東海・相模・関東地方における早期～前期の編年表(案)

	東海地方	相模地方	関東地方
縄文時代早期(末)	天神山式	(打越式)	打越式
	木島Ⅰ式	神之木台Ⅰ式	
	木島Ⅱ式	神之木台Ⅱ式	
縄文時代前期(初)	木島Ⅲ式	下吉井Ⅰ式	花積下層式(有段口縁、隆帯)
	木島Ⅳ式・木島Ⅴ式	下吉井Ⅰ式・下吉井Ⅱ式	花積下層式(渦巻き状の捺糸側面圧痕)
	木島Ⅵ式・木島Ⅶ式	下吉井Ⅱ式	花積下層式
	木島Ⅷ式	下吉井Ⅲ式	花積下層式(新田野期)
	木島Ⅸ式		ニツ木式
	木島Ⅹ式		関山Ⅰ式

渋谷 1983より転載

## 第V章 三原田城遺跡のまとめ

### 主要参考文献

- ・山内清男 「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻2号 1929 (昭4)年
- ・山内清男 「繊維土器について—追加1」『史前学雑誌』第1巻3号 1929 (昭4)年
- ・山内清男 「繊維土器について—追加2」『史前学雑誌』第2巻1号 1930 (昭5)年
- ・山内清男 「繊維土器について—追加3」『史前学雑誌』第2巻3号 1930 (昭5)年
- ・桑山龍進 「武蔵国北寺尾上ノ宮貝塚調査予報」『史前学雑誌』第7巻4号 1935 (昭10)年
- ・甲野 勇 「関東地方に於ける縄文式石器時代文化の変遷」『史前学雑誌』第7巻3号 1935 (昭10)年
- ・山内清男 「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号 1937 (昭12)年
- ・江坂輝弥 「横浜市神奈川区菊名町宮谷貝塚出土土器に就いて」『考古学論叢』第14号 1939 (昭14)年
- ・桑山龍進 「菊名遺跡と基の文化」大正大学史学会 1949 (昭24)年
- ・江坂輝弥 「縄文式土器について(その7)」『歴史評論』29 1951 (昭26)年
- ・江坂輝弥 「茨城県野中貝塚調査報告」『考古学誌』第39巻3・4合併号 1954 (昭29)年
- ・江坂輝弥 「縄文文化の発現」『世界考古学大系』1 1959 (昭34)年
- ・坂詰秀一 「川崎市新作貝塚調査報告」『川崎市文化財調査報告』第2冊 1963 (昭38)年
- ・村田文夫 「神奈川野川出土の花積下層式土器について」『石器時代』7号 1965 (昭40)年
- ・村田文夫 「花積下層式土器の諸問題」『立正史学』第30号 1966 (昭41)年
- ・渡辺誠・村田文夫 「川崎市新作D地点貝塚発掘調査報告」『川崎市文化財調査集録』第2集 1966 (昭41)年
- ・神沢勇一 「梶山遺跡調査報告(2)」『神奈川県立博物館発掘調査報告書』 1969 (昭44)年
- ・下村克彦他 「花積貝塚発掘調査報告書」『埼玉県遺跡調査会報告』第15集 1970 (昭45)年
- ・岡本 勇 「下吉井遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』 神奈川県教育委員会 1970 (昭45)年
- ・谷井彪他 「内畑遺跡発掘調査報告」『埼玉県遺跡調査会報告』第7集 1970 (昭45)年
- ・吉田 裕 「横浜市菊名貝塚の土器」『考古学ノート』第2号 1972 (昭47)年
- ・荒井幹夫他 「打越遺跡」富士見市教育委員会 1978 (昭48)年
- ・立教大学考古学研究会編 「新田野貝塚」『立教大学考古学研究会調査報告』2 1975 (昭50)年
- ・石岡憲男他 「日立市遠下遺跡調査報告書」 日立市教育委員会 1975 (昭50)年
- ・鈴木保彦他 「菊名貝塚出土の文化遺物と自然遺物」『神奈川考古』第2号 1977 (昭52)年
- ・今橋浩一 「茨城県日立市鹿野場遺跡」『常総台地』9 1978 (昭53)年
- ・鈴木敏昭他 「足利遺跡」 久喜市教育委員会 1980 (昭55)年
- ・高橋雄三 「花積下層式土器の研究」『考古学研究』第28巻1号 1981 (昭56)年
- ・下村克彦 「新田野段階花積下層式土器と二ツ木式土器について」『奈和』19号 1981 (昭56)年
- ・渋谷昌彦他 「木島」 富士川町教育委員会 1981 (昭56)年
- ・桑山龍進 「菊名貝塚の研究」 1981 (昭56)年
- ・小出輝雄 「花積下層式土器の成立と展開」『研究紀要』 富士見市遺跡調査会 2 1982 (昭57)年
- ・渋谷昌彦 「木島式土器の研究—木島式土器の型式細分について—」『静岡県考古学研究11』 1982 (昭57)年
- ・渋谷昌彦 「神之木台・下吉井式土器の研究—その型式内容と編年的位置について—」『小田原考古学研究会会報』11 1983 (昭58)年
- ・青木義脩他 「北宿遺跡」 浦和市遺跡調査会 1983 (昭58)年

## 2 花積下層式土器の口縁・底部形態と器形

本遺跡で出土した縄文土器の総点数は約2500点で、各部位別による点数は口縁部片228点、胴部片2200点、底部片66点であった。時期別には前期初頭花積下層式期のものが9割以上を占めていた。ここでは、この花積下層式に比定される一群の土器について、口縁部、底部および器形を分類し、それぞれの関係を見て行きたいと考える。ただしここでの分類はあくまで形態を中心に行っているために文様との相関関係についてはあまり言及していない。

口縁部形態はその断面形、文様要素から(第191図)に示した17形態に分類される。ここに示したのものの中には1・2・3・13などのように各1点づつのみしか該当するものがないものもある。また11・12のように極めて近似しているものもありどちらかに分類されるのか判断に迷うものもあったが、より多く情報を抽出するために分類を行った。

分類されたものを概観してみると、1～5のように装飾的なもの、7～10のように折り返しを持つもの、11～13のように素口縁のものに大別することができる。1～5は把手、環状の貼り付け文、隆帯による立体的な要素の他に、撚糸側面圧痕文により環状、渦巻き状文を描くが数は少ない。折り返しを持つものは総じて口唇部が尖り気味となるものが多い、短く折り返す7と、やや幅広の8の2種類が見られ、8は外反する

ものが多く、折り返した面には横位に縄文が施文される例が多いが、鋸歯状の集合沈線文が1例ある。7については捺糸側面圧痕文を複数横走させているものが目立つ。11・12は数量的にはもっとも多く149片で全体の約65%を占める。いずれも平縁で、直線的なもの、やや外反するもの、内彎するものがある。小片のために判断のつかないものもあるが、内彎するものは少ない。断面形は尖り気味のもの、丸頭状、角頭状の順に少なくなる。施文は羽状縄文がほとんどである。13は特殊な器形である、頸部が締まり口縁部が外反するもので、口唇端部が稜を持って角張る。無文土器である。

器形 出土した土器の中でその形態を知り得たものは20個体弱で、主なものは図中のごとくであるが底部まで残るものは少なかった。すべて深鉢形土器で、口縁部でやや開くものが多い、花積下層式に特徴的な胴部中位または下位で屈曲をもつものがあり、強く「く」の字に曲がるものと、丸みを持つものがある。他は底部から開きながら立ち上がる器形で、頸部の所で、僅かに締まるものと、ほぼ真直ぐなものがある。Oは特殊で頸部が締まり口縁が大きく外反するもので壺状を呈す。

土器の容量については完形のもものが少なく、正確に計り出してはいないが平均的な大きさと思われるGの容積が約8,600ccである。大形のE・Gは40,000cc以上もある。

底部形態 形状を知り得たものは44点でいわゆる尖底（丸底も含む）が10点見られる。ほとんどが破片であり口縁までの器形を知り得たものはC・D・H・Iの4点のみである。

個々の形状は図に示したようになる。平底としたものの中にはかなりの割合で上げ底が含まれている。断面形で見ると大きく開くもの、やや丸みを持って立ち上がるもの、直線的に立ち上がるものなどがあるが、これは胴部の形態につながるものであろう。上げ底を呈すものは底面の縁が高台の様に突出しているものが多く、明らかに意識して作っていることが窺えるが、断面の観察によればこの高台状の部分は後から粘土紐を張り付けたことが分かる、これは当初から平底を意識したというよりも、基本は丸底で、派生的に作られたものといえる。また底面に縄文または捺糸側面圧痕文による渦巻き文や羽状縄文を施文するものが多数見られるがこのことも、こうした平底の底面部分は胴部の延長として考えられていたことの名残りと考えられる。

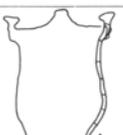
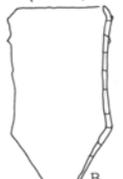
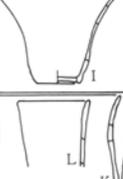
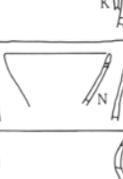
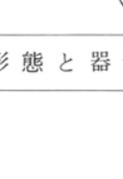
尖底は丸みを持つものと、尖り気味のものに分けることができよう、住居址では3・6・8・10号から出土している。

以上、本遺跡より出土した土器の口縁、器形、底部の分類と特徴の記述を行ってきたが、これらをまとめれば次のような事が言えよう。

口縁の形態1～5については把手、隆帯、貼り付け文、に伴い花積下層式土器のメルクマールである捺糸側面圧痕文による環状、渦巻き状のモチーフを施文し、器形は胴部下半部にゆるい屈曲を持つ特徴を示すが、B・Cに見られるような強く「く」の字に屈曲するのは特異である。底部形態は平底のものが主体をなし、作りの丁寧なものが多いが点数は少ない。折り返し口縁となるものは底部から口縁に向かって比較的単調に開く器形を呈し、かなり大形のものも目立つ。折り返した面には縄文以外に、捺糸側面圧痕文を口縁部外側に沿って横走させるもの、集合鋸歯文を持つものがある。折り返された部分の先端は指で横方向にしっかりと撫で付けられており、器面との密着をはかっている。単口縁のものは量的には最も多く器形も単純なものが多い、胴部でやや膨らみ口縁部は僅かに外反するものが多い、大きさは中位以下のものが占めるようである。施文はほとんどが全面の羽状縄文である。

いわゆる花積下層式土器の器形については1遺跡内において、十分な比較検討を行い得る程の資料が得られないことが多く、これまでまとまった資料として報告されている菊名貝塚の資料との比較を行ってみたい。

第V章 三原田城遺跡のまとめ

	口縁部形態	器形	底部形態
1	打り返されて肥厚し、弱い波状を呈す、その波頂部に獣足を模した把手をもつ。刻みを持った隆帯で円形文を作る。		
2	やや外反し口縁端部が「く」の字に内屈する。口縁下に2本の突帯を巡らし、その間に燃糸側面圧痕文、刺切文、円形竹管文が見られる。		
3	幅広の折返し口縁、口唇部は平坦、4単位の円形文が付される。		
4	やや外反し、端部は丸みを持つ。口縁下に2本の断面三角の隆帯を巡らす、その間に面圧痕文を付す。		
5	口縁部折り返された部分に燃糸側面圧痕文を複数横走させる。下部に隆帯を巡らすものもある。		
6	口縁端部は角頭状となり、外側に隆帯を巡らす、隆帯上には刻みを付す。		
7	口縁部は折り返されて肥厚し端部はやや光る折り返した部分に燃糸側面圧痕文を横走させる。		
8	口縁部は外反し、外側へやや幅広に折り返される、施文は集合鋸歯文または縄文が施される。		
9	口縁は短く内屈し端部は光る、外側へ短く折り返される。		
10	口唇内側に盛り上がりを持つ。		
11	口唇部尖り、施文は羽状縄文。		
12	口縁部やや丸みを持つ、施文は羽状縄文。		
13	頸部でやや締まり口縁は強く外反する。端部は稜を持って作られている。無文。		
14	繊維含まず薄手の土器である、弱い受け口状となる。口唇部は内削ぎ状となる。屈曲部に刺突による、刻みがある。		
15	直線的で端部がやや肥厚、施文は羽状縄文。		
16	直線的で口唇部内削ぎ状となる、口唇端部に篋状工具による刻みを持つものがある。		
17	内湾気味の口縁で、やや波状を呈す、口唇より隆帯を垂下させている。1点のみの出土である。		

第191図 口縁形態と器形

同遺跡から出土した土器の器形分類の詳細は報告書中に詳しいので割愛するとして、分類された器形を概観すれば、尖底からやや開きながら口縁部にいたる砲弾型をしたものと、同様の器形ながら胴部は直線的に開き口縁部が折り返されるもの、そして胴部中位がやや丸みを持って膨らみ頸部が縮まり口縁部は外反するものに大別できる。口縁部形態は平縁がほとんどで、数は少ないが4単位の波状口縁が存在する。

三原田城遺跡より出土した土器は花積下層式期でも後半期に位置付けられるが、土器の口縁部形態、器形に関しては菊名貝塚のものと大差無いように思える。しかしながら極めて発達した把手を持つもの、胴下半部に強い屈曲を持つものなどかなり特異的なものがあり、他の文様構成と共に今後の検討課題でもある。

花積下層式土器に関しては量的にも余り多くの資料が無く、1遺跡内での分析が行われることは少なかつたため、他の遺跡との比較が困難であったが菊名貝塚を始め、打越遺跡などでのまとまった資料が発表されて、該期の研究において明るい材料となつてはいるが、その成立から多くの不明な点を持つ土器形式であり、正に発展期とされる前期社会の入り口部に位置しており、その内包する様々な地方色は複雑に土器に反映している。近年発表されているいくつかの論考は地道ではあるが、絡みあった糸をほぐしつつあるように思われる。本遺跡の他にも県内においては該期の調査が何例も行われており、資料的な不備は序々に補われつつある。

### 3 燃糸圧痕文土器について

土器の口唇部から胴部上半にかけて細い燃糸を唐草様、環状、渦巻き状にして土器面に押し付けて施文する手法は極めて特徴的であり、花積下層式期土器判別の主たる文様の特徴として知られる。それはまた同時に花積下層式期土器を語るうえで重要な判断材料になっている。環状→蕨手状→渦巻きという文様の変遷は時期差として考えられているし、この施文方法から花積下層式土器の出自、系統を考えて行こうとする研究者は多い。しかしながら現時点では花積下層式期の終末段階から次期の二ツ木、関山式への変遷は比較的スムーズにたどれるようになったが、当の花積下層式期土器の分類、変遷、初源については未だ混沌としている状況である。

近年この土器に関してそうした問題を扱ったいくつかの研究が発表されており新たな視点と、問題提起を行っている。

このような中で今まで空白地帯と言っても過言ではなかった北関東において、本遺跡が調査されたことは大きな意味をもつと考える。本項では、三原田城遺跡出土土器の内極めて特徴的な存在である。7号住居址出土の把手付き深鉢形土器(第68図、279)について若干の観察結果と私見を述べておきたい。

この土器は本文中で述べたように、住居址内に設けられた石組み炉に不随して検出されたものである。炉の南側に口縁部近くまで埋め込まれており、その北側には添えられるように口縁に向かって直線的に開く深鉢(第69図 280)が半個体分ほど検出されている。さらにその東側にも2個体の深鉢胴部が埋設されていた。279は内部、周辺にもほとんど焼土は無く、土器の遺存状態も良好であった。把手も検出時には4カ所の内3カ所に認められている。底部を欠失してはいたものの、ほぼ完形に近い状態であった。

器形は図に示すように胴下半で膨らみを持ち、口縁部で段を持って外に広がり肥厚し、やや受け口状を呈し、口縁端部には浅い刻みが連続して見られる。口唇部は僅かに内彎気味となる。そして口縁部に4カ所の把手を持つ。この把手は獣足を模したものと思われ、先端部は外側端部が尖る紡円形を呈す。周縁には刻みを持ち上面には環状の燃糸圧痕文と中央に円形竹管文が施文されている。2対の内対応する1対がやや低くなる。把手の付く口縁部下には隆帯が2本弧状に付けられ、中央で丸く隆帯がつながり中に円形竹管文が

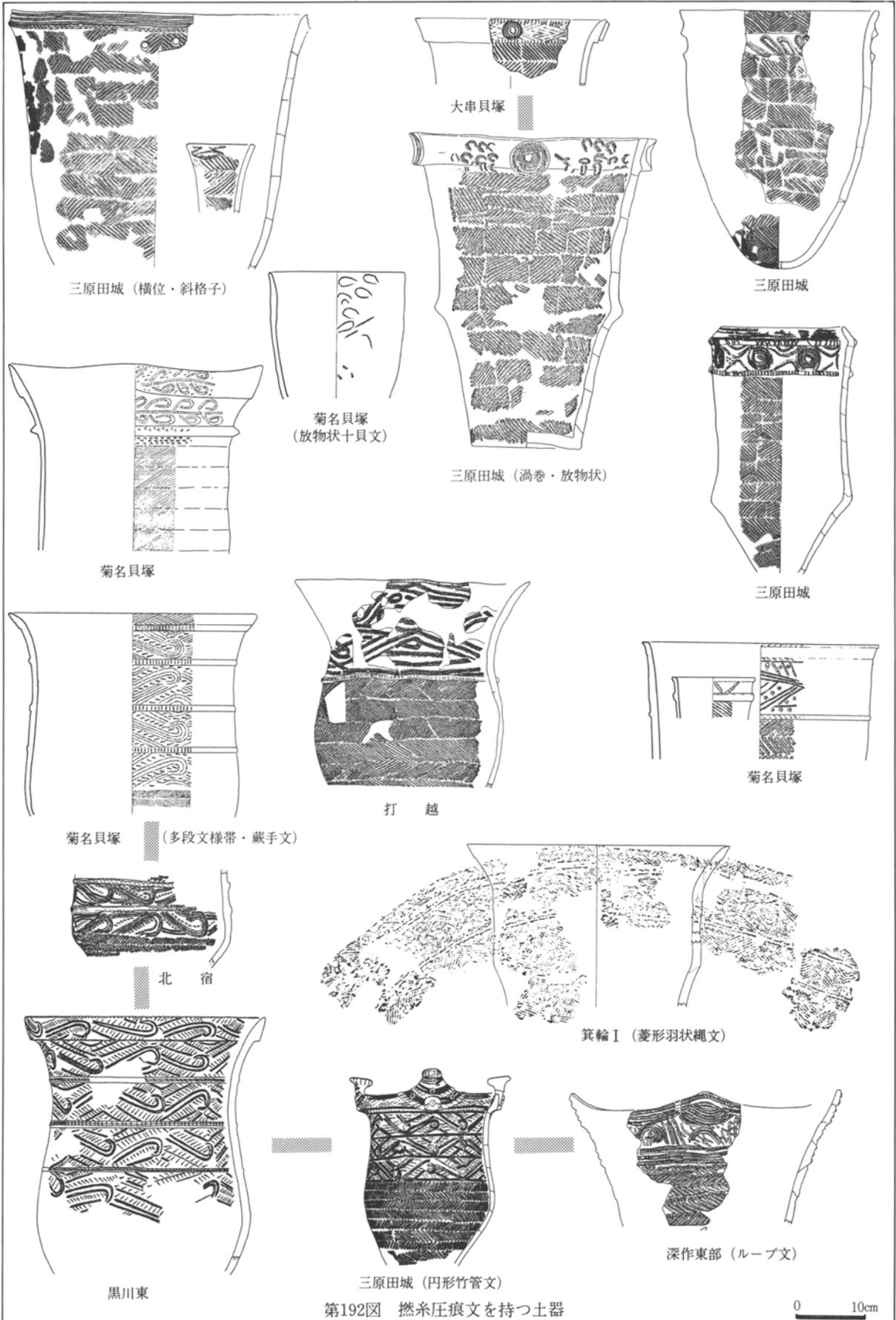
押される。隆帯上には連続して刻みが付されている。隆帯間には2本1単位で捺糸圧痕文が施されている、口唇部とやや外へ張り出した口縁部と胴部の変換部分にも捺糸圧痕文が横位に施される。その間には刺し切り文が4本単位で鋸歯状に充填される。胴部上半には3帯の捺糸圧痕文で区分された文様帯を持つ。それぞれの文様体には2本単位の捺糸圧痕を合わせた計4本で山形に連続文様を描きその端は蕨手状となり、そこに円形竹管文を付す。そしてこの蕨手文の渦巻き方向は右巻と左巻が交互に付され、上がったときは右巻、下がったときは左巻となる。さらにこの捺糸圧痕文間には右に引き抜く様にして付けられた刺し切り文が充填されている。文様帯下、胴部には0段多条RL、LRを交互に用いた羽状縄文が横位に多段施文されている。丁寧な施文で、原体の長さは1.2cm程でかなり短い。内面は丁寧に磨かれており横方向の研磨痕が上部に見られる。土器を上から見ると把手を頂点として四角形に近い形である。

文様の施文順序を見てみると、次のようである。土器の成型後まず行われたのは胴部下位の縄文施文である、LR（0段多条）とRL（0段多条）による羽状縄文を下から上に向かって施文した後、上半部3段の文様帯との区分けである、これは2本1単位で捺糸の異なる捺糸側面圧痕を横に1周させている。細かく見ると、この2本の捺糸は2回の描き継ぎで全周させており、捺糸1本の長さは20~15cmである。

次には、やはり捺糸側面圧痕文により、主文様ともいえる蕨手文の施文である。これは左から右へ行われている。さらにこの蕨手文により画された三角の部分にやはり捺糸圧痕文を鋸歯状に配している。その後空間部分に刺し切り文、蕨手文の中に円形竹管文を付す。口縁部は把手下の隆帯に沿って捺糸圧痕文を付し、縦および両側に円形竹管文を配す。把手上面にも捺糸圧痕文を環状に付しその中に円形竹管文を配している。さらにその周辺部には刻みを連続に配している。

捺糸側面圧痕文の変化に注目し、その変化から土器の変遷を考えて行こうとした論考もいくつか挙げられ、それらの内容については示唆に富むものも多い。これらの内容に共通して見られる指摘として、当初直線文から始まり、それが連弧文状、レンズ状、蕨手状、渦巻き状文へと変化してゆく過程が窺われるが、それは単純なものではなく、多くの複合した要素が絡んでいるのである。例えば口縁部に沿って横走る捺糸側面圧痕文と、蕨手状文の捺糸側面圧痕文が相伴することは珍しいことではなく、さらに渦巻き状文の中心部に円形竹管文が付される例もあり、新しい文様要素である竹管文が当初から、かなり主体的に用いられていたことが考えられる。東北地方にその初源を求められる捺糸側面圧痕は、当初口縁部の加飾に始まったが、次第に拡大し器面上に占める割合が多くなるとともに、多段化してゆく。この時点で文様帯に表われた文様要素は、捺糸側面痕文、刺し切り文、円形竹管文、さらには隆帯で飾り器面の半分以上を文様帯が占めるものも少ない。しかしこれは一種の飽和状態とも取れ、ループ文が現れるのと期を一にするように文様帯は再び口縁部に集約されるようになる。そして捺糸側面圧痕文による蕨手文は崩れ、併行沈線に置換され刺し切り文は梯子状沈線に、円形竹管文は瘤状貼付文へと変化して行ったと考えられる。この時点で側面圧痕による施文法は消滅してしまったと言え、時期の関山期、黒浜期では見られない。

(第192図)は口縁文様帯に捺糸側面圧痕文を持つ土器を集めたものである、いずれも神奈川県(菊名貝塚、黒川東遺跡)、埼玉県(打越、北宿、深作東部遺跡、箕輪I遺跡)、茨城県(大串貝塚)、群馬県(三原田城遺跡)における資料である。菊名貝塚のものには円形竹管文は見られず、多段化した文様帯は隆帯で分けられている。黒川東のものも極めて似ている、これに対して打越遺跡のものは幅広ではあるが単帯で蕨手文のモチーフは主体的ではなく、むしろ幾何学文的なモチーフが目立ち、刺し切り文も見られない。北宿例は主文様は捺糸側面圧痕文による蕨手文であるが、最下段の文様帯と縄文部との境の隆帯が省略されており、また蕨手の向きが交互にならない点が興味を引く。箕輪I遺跡のものは文様体は単帯で捺糸側面圧痕文で画され



第192図 燃糸圧痕文を持つ土器

第V章 三原田城遺跡のまとめ

ている。文様帯は3本単位の撚糸側面圧痕文による渦巻文が上下2段に左右方向に並ぶ、側面圧痕の空隙には刺切文を充填し、胴部には無節Rで菱形縄文が施文されている。口縁部には集合鋸歯文を持つ。

三原田城遺跡出土のものの中には貝殻背圧痕文、条痕文は見られないと同時に次期のメルクマールであるループ文や入り組み縄文も見られない。(3号住居址出土の深鉢78にはループが観察される)ことからかなり限定されたものと見ることができようが、このことが時間的なものなのか空間的なものなのかは、さらに検討が必要とされる問題である。主文様としては、単節の羽状縄文、撚糸側面圧痕文(横位平行、菱形渦巻き、蕨手状)、の他に鋸歯状の集合沈線、波状沈線、竹管による円形刺突文が若干見られる。その他刻みを持つ隆帯、口縁部垂下隆帯が見られ、胴部の縄文には0段多条の羽状縄文が主体を占め、他には無節縄文、網状文が見られる。器形は概ね胴部でやや膨らみ、口縁部が外へ広がる深鉢形を呈す。平縁が多く折り返されて肥厚するものが目立つ、波状口縁となるものは少なく、本遺跡出土のもののように波頂部が極めて発達したものは少ない。(菊名貝塚例に近似したものが見られる)

胴部縄文については結節を持つ羽状縄文、無節のものがやや古く位置付けられ原体の短い帯状縄文はやや新しくなるという指敵がなされており、三原田城遺跡出土土器について観察してみると、無節のものは少なく単節のものがより多く認められる。

花積下層式期の最終段階になると、文様帯は再び単帯化してくる。口縁部の文様帯が集約されて残り、撚糸側面圧痕文は消失し沈線と刻みを持った浮線で文様を構成するようになる。三原田城遺跡7住土器の波頂部下に見られる連弧状のモチーフは深作東部例のモチーフに相通ずるものが見られる。

三原田城遺跡出土の土器について見ると、撚糸側面圧痕文が施されるものはそれほど多いとは言えないが図に示したように、1.口縁部に沿って横方向に押圧されるもの、2.菱形を描くもの、3.放物状となるもの、4.渦巻き状となるもの、5.蕨手状となるものがあり文様モチーフの変化と捉えるか、バラエティーと考えるかはさらに検討が要される問題であろう。

良好な資料に恵まれたものの、筆者の勉強不足と期間的な制約から事細かく検討することができなかった、このため本項がまとまりの無いものになり尻切れになってしまったことを御容赦願いたい。前期初頭の土器に付いては未だに解決されなければならない多くの問題が残されており、今後周辺における関連遺跡との比較検討を含め再考したいと考えている。

引用・参考文献

- |            |                        |                 |             |
|------------|------------------------|-----------------|-------------|
| ・江坂輝弥      | 横浜市神奈川区菊名町宮谷貝塚出土土器に就いて | 考古学論叢 第14号      | 1939 (昭14)年 |
| ・三森定男      | 古式土器に関する考察             | 考古学論叢 第九号       | 1938 (昭13)年 |
| ・竹島国基      | 小高町の原始・古墳文化と考古資料       | 小高町教育委員会        | 1976 (昭51)年 |
| ・荒井幹夫他     | 打越遺跡                   | 富士見市教育委員会       | 1978 (昭48)年 |
| ・桑山竜進      | 菊名貝塚の研究                |                 | 1980 (昭55)年 |
| ・川崎市教育委員会  | 黒川東遺跡                  |                 | 1984 (昭54)年 |
| ・岡崎完樹      | 多摩ニュータウンNo.27遺跡        | 多摩ニュータウン遺跡調査会   | 1980 (昭55)年 |
| ・高橋雄三      | 花積下層式土器の研究             | 考古学研究28-1       | 1981 (昭56)年 |
| ・小出輝雄      | 花積下層式土器の成立と展開          | 研究紀要2           | 富士見市遺跡調査会   |
| ・上尾市教育委員会編 | 箕輪Ⅰ・宿北Ⅰ・箕輪Ⅱ・宿北Ⅱ遺跡      | 上尾市文化財調査報告第24集  | 1985 (昭60)年 |
| ・青木義脩他     | 北宿遺跡発掘調査報告書            | 浦和市遺跡調査会報告書第26集 | 1983 (昭58)年 |
| ・黒坂禎二他     | 深作東部遺跡群                | 大宮市遺跡調査会報告10    | 1984 (昭59)年 |
| ・下村克彦      | 施文原体の変遷—羽状縄文系土器—       | 季刊考古学第17号       | 1986 (昭61)年 |

4 石器について

石器組成

今回の調査で検出された花積下層式期の遺構、遺物は従来空白期とされていた県内の縄文土器の研究に新たな資料を提供することとなったと同時に、南関東との比較において様々な問題提起を行う結果となった。

このような中で特に石器に関してはこれまで貧弱さが目立った組成に対して、本遺跡での在り方は対症的にかなり充実した在り方を示している。小項では石器組成から本遺跡の生産活動の在り方について若干の検討を加えることとする。

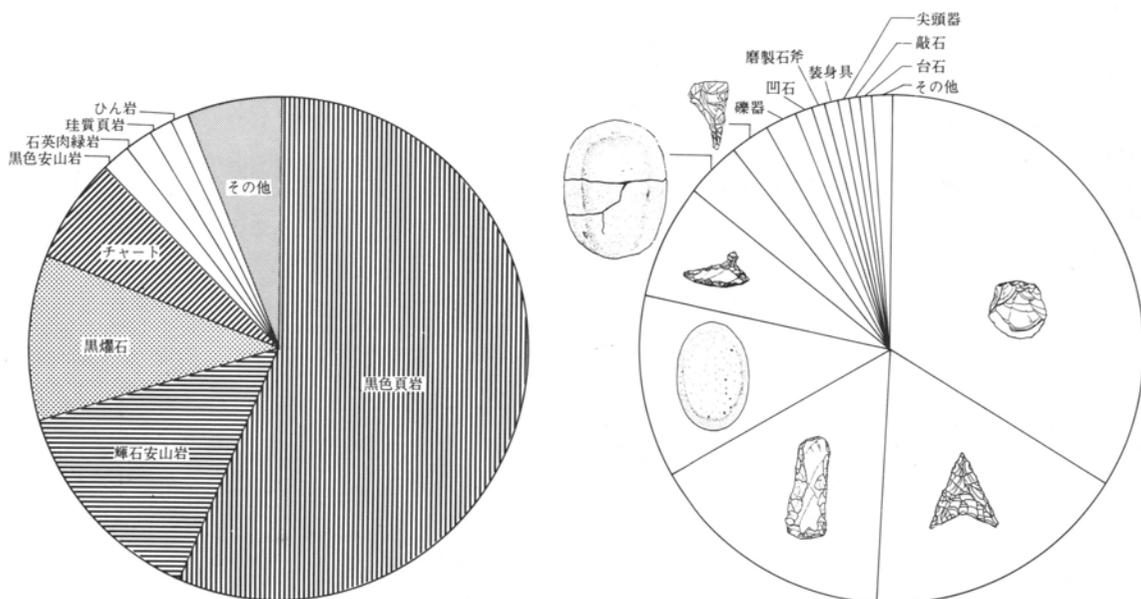
石器の総点数は本文中で述べたように857点である。この数字は住居址9軒（内1軒は諸磯期）という数からして際立って多いとは言えないが、現在までに調査された同時期の遺跡に比べた場合その数字は突出すると思われる。

出土した石器の種類および組成は(第192図)に示すようである。この表から読み取れることはスクレイパーがきわめて多いことである、従来不定形石器と呼ばれてきた1群であるが、当時においては日常の作業に在っては極めて重要な道具であったことが窺われる。ものを切り、削りさらには穴を穿つものとして最も多用されていたと考えられる。本書でスクレイパーとしたものに関しては別項で若干述べたい。次に多いものは石鏃である、全点数は144点で住居址より77点、土壌より16点、遺構外より51点が出土している。いわゆる有茎鏃は皆無である。基部に抉りを持つ凹基のものが最も多く、平基、凸基の順となる。

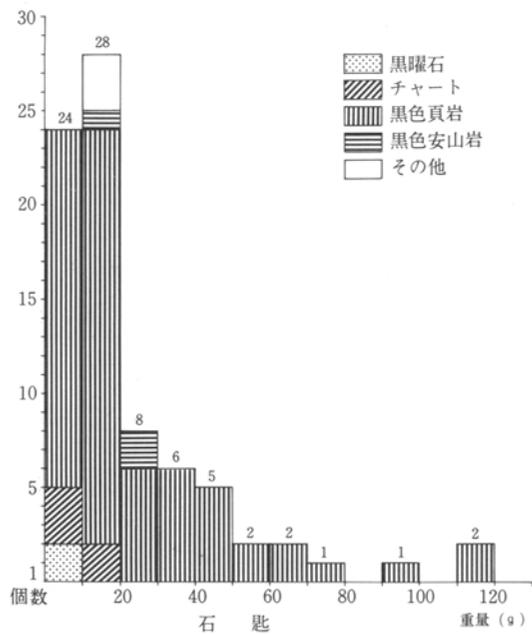
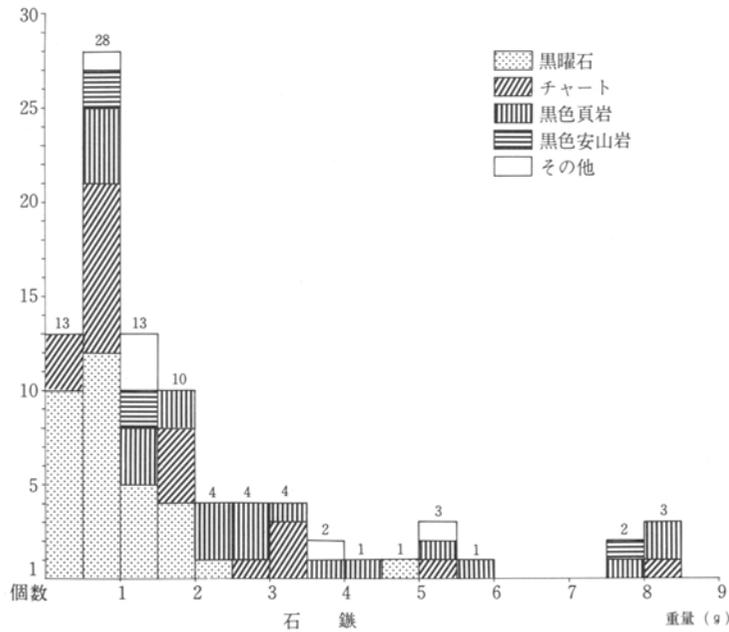
破損しているものが多く全体の約49%にあたる、その部位は先端が最も多く次いで片脚、両脚の順である。石材は黒耀石、黒色頁岩、チャート、が主で石材によって大きさを作り分けている(第193図)

次に多い器種は磨石である。この磨石としたものは分類基準が難しく1つのものが2種類以上もの機能、用途を果たしている場合が多い。しかし機能的には敲く、潰す、擦るの基本的な作業が想定され、これは食物の加工具として、石皿または台石と相関関係にあるものであろう。

石匙は早期末葉からこの前期にかけてその機能的な地位を確立した器種であり、極めて特徴的な形(つまみ部の存在)が完成された。石材は黒耀石、チャート、黒色頁岩で黒耀石、チャート製のものは作りが端正



第193図 石材別・器種別組成図



第194図 石材別重量分布

なものも多く、黒色頁岩製のものは大形で作りの雑なものが多い。形状、刃部の作りから明らかに用途の違いが想定されていたものと思われる。本文中にも記したように縦形の占める割合は、かなり多い。縦形石匙は早期後半から前期にかけて東北地方で極めて多く出土しており、しかもそれらは硬質頁岩を用いた精緻なものが作られている。関東地方の前期縄文時代はその初現段階において東北地方との密接な関係のあることは確かであり、石器に関しても何等かの影響が現れているはずであり、石匙の在り方は注意されるべきところである。

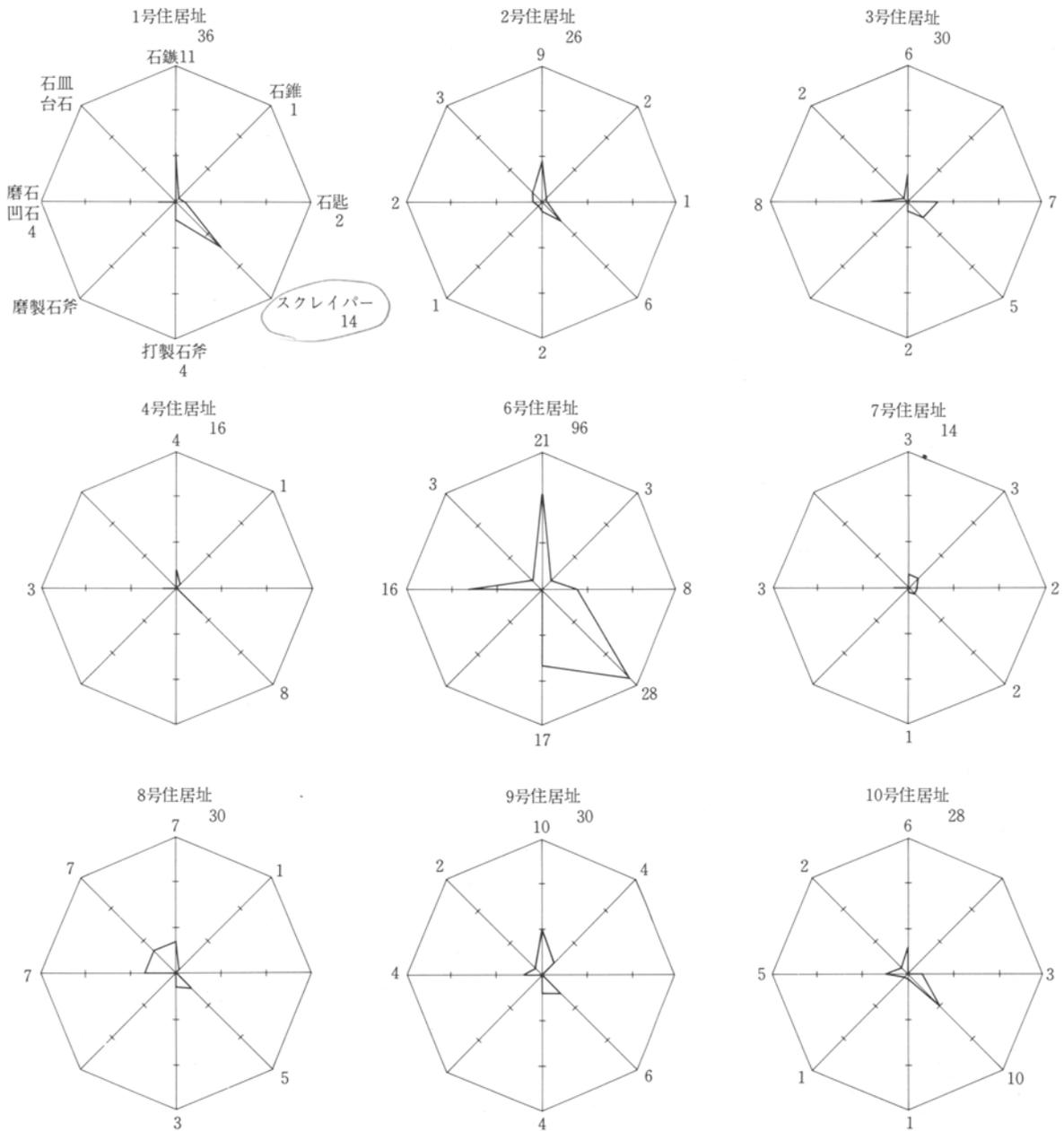
打製石斧は総点数135点であるが、その抽出基準となるものが無く、定形的なものは問題ないがやや不定形なもの、または欠損品に関してはやや不安が残ることを明示しておく。定形的なものに関してはいわゆる短冊形、撓形に分類されるものがほとんどで、希に形態的には分銅形と言うべきものが見られる。量的には撓形が最も多く、中でも刃部に向かって広がる形のもが目立つ、この中には直刃斧様で一面に自然面を残したものが多く見られた。あまり大形のもの無く長さは10cm内外に集中する。短冊形としたものは概して厚

みがあり、中期のものなどに比較するとかなり細身のものが多い。両者は打製石斧ではあるが刃部の形態、摩滅度などから用途の違いが想定できる。特に細身の者に関しては刃部、および下半部がかなり摩滅した状態のものが目立つ、これは石斧の対象物がかなり軟らかいものであり、繰り返し同じ作業が行われたためでは無いだろうか。ここでは一応土掘り具としての機能を考えておく。石材は黒色頁岩が主体を成している。

石錐はそれほど多くは無いが、極めて限定した用途に供されるために各住居址から出土している。また小形品に対して、大形で作りの雑なものも含まれる。ほとんどが錐部先端を欠損している。

以上の他に石槍、礫器、ピエスエスキュー、篋状石器、などが見られ、利器以外にも装身具類、玦状耳飾

第1節 出土遺物



第195図 住居址出土石器組成図

り、管玉、玉篋などがみられる。

次に、各住居址別出土石器の組成図を（第195図）に示した。この図から言えることは数量の差はあるものの、各住居址において高い比率で出土する器種としては石鎌、スクレイパー、磨石がある。このことは狩猟具の中心を成していた石鎌、皮を剥いたり、木を削ったりするための万能具的な役割を果たしていたスクレイパー、物を潰したり、叩いたりする食物加工具として石皿、台石と相対関係を成す器種としての磨石は、それぞれの住居址で主要な道具としての位置にあったことを示している。

ただここで注意しなくてはならないことは、それぞれの石器の数が直ちに生産活動の反映であると考えてはいささか早計であるということである。それはそれぞれの石器が各住居址に属す過程で次の2点が解決しなければならない問題としてあると思われるからである。第1に各石器の石材が比較的居住域の近くで容易

## 第V章 三原田城遺跡のまとめ

に手にすることができるものか、それともかなり遠距離から持ってこなければならないために石材としては貴重なものなのかということである。第2にそれぞれの器種の持つ性格（使用頻度も考慮される）から常に予備としてのものが準備されていたのではないかという問題、また各石器の持つ性的、年令的な面から見た使用者の別、さらには製作が容易かそれとも時間を有するものなのかという問題がある。

以上、本遺跡から出土した石器類について概括的に述べたが、この石器群の示す食糧生産活動とはどんなものであったのだろうか。これについては花積下層式期における石器量の南関東と北関東の違いを先に述べたが、これは別な言葉でいえば貝塚文化と内陸文化の差でもある。菊名貝塚にも見られるようにこの時期の気候の温暖化は狩猟、漁撈、植物採集を行うには恰好の場を提供していたものと思われ、海進に伴う人々の移動は前代の地域的な枠を一気に押し広げることとなった。海という言葉ば無限の生産の場をあえて放棄した形で内陸部での生活を選ばせたものは何であったのであろうか。本遺跡の在り方は利根川という大河川に近接しているとはいえ、標高300mの台地上に営まれたものである。当然その生産活動の主役は狩猟であり、木の実や植物性食糧の採集であったと思われる。石鏃、石皿、磨石の豊富さはこのことを如実に表しているものといえる。

### スクレイパーについて

今回の報告で扱った石器の器種分類中スクレイパーとしたものについては、本来搔器、削器に別けて記述すべきものであろうが、本書ではあえてスクレイパーとして記述している。これは個々の石器について十分な観察が行いえなかったこと、こうした石器について報告されているものについて、報告者によって分類基準、呼称が様々であることなどによるが、実際には形態と使用法とが整理なされていないという現状があることによる。いわゆる不定形石器と呼ばれるものは、形態的にどの器種にも分類され得ないものを指して呼ぶことが多い。石器の器種分類は1遺跡を整理した場合、少なくとも石鏃、石錐、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、凹石、石皿などがあるわけで、スクレイパーと呼ばれるものについては剥片に使用痕があるものに冠されており、それらについて個々に具体的な記述を行うものは少ない。

三原田城遺跡で出土した800点以上の石器の内スクレイパーとしたものは30%を占めている。これらは剥片素材が縦剥離か横剥離かで分け、さらに刃部の形で分けた。これらのスクレイパーの使用法としては手に持ち、物を切ったり削ったりしたものと思われる。大きさにより大小2分類できるようで、小形のものには長さ（刃部長）数cmのものが多い、また大形のものには10cm以上で厚さは様々である。小形のものには扇形のものも目立ち、刃部は凸刃か直刃状である。大形のものには一側縁に自然面を持つものが目立ち、刃部は直刃か凹刃となる。

ここでスクレイパーの使用法について少し考えて見たい。大小2種類のものがあることを述べたが、小形のものについてはおそらく親指、人差し指、中指の3本で扱ったものと思われる。平らな側縁に人差し指の第一関節から先の腹の部分当て両面から中指と親指で押さえて使用したのであろう。また大形のものについては形が不定形な物が主体を占め、刃部は1側縁に作り出されているものが多く、直刃または凹刃で刃の作りは粗く厚みもある。使用法は刃部以外の側縁を人差し指から手の平にかけて当てがい、用いたものであろう。前者の小形品は概して柔らかい物、小さな対象物に対して使用されたと思われる、後者の大形品はこれとは逆に大きな対象物に対して機能し、使用に際してはよりおおきな力（打撃）が働いたものと考えられる。

今回は石材別による詳細な検討は行い得なかったが、今後こうした面からの分析を平行し、より多くの視点から使用法にせまって行くことが機能の限定により近づく方法と考える。

## 第2節 遺 構

## 1 住居址について

## 縄文時代前期の住居址

従来、群馬県内においては縄文時代前期の遺跡は発掘調査例、報告例は極めて少なかった。しかし近年の関越自動車道を中心とする開発事業に伴う発掘で激増した。特に本遺跡を含む赤城山西麓から、北西麓にあたる昭和村、さらには沼田、月夜野地区において多くの遺跡が調査される結果となった。このように前期の遺跡の調査例が増えた背景には、今回の関越自動車道の調査対象地が山裾から延びた台地の縁辺部分を横切るような形であったことも1要素であった。このことは逆に言えば前期の集落の占地を考えて行く上で興味ある課題を提供したともいえよう。ことに北橋村から赤城村にかけての調査では近接した尾根状の台地で前期初頭から末にかけての集落が間断なく営まれていたことが明らかにされた。

縄文時代の住居址形態に関する研究は（関野1938・矢島1941・笹森1981・82・小出1983・宮本1983）などがあり、いくつかの視点が示されているが、群馬県内の資料が増加してきた現在、これらをまとめると共に比較検討することは一つの段階として必要なことと考える。

本項ではこうした遺跡において検出された住居址について、若干の分類を試みると共に時間的な流れをも考えて見たいと思うものである。

ここで資料として取り上げた遺跡は18遺跡で時期的には縄文時代前期に限ってある。土器形式は本遺跡の前期初頭花積下層式から前期末の十三菩提式期まで総数130軒である。以下に取り上げた遺跡名と住居址数（検出された総数ではない）および帰属時期を示す。

- ・三原田城遺跡・・勢多郡赤城村 8軒（花積下層式期）
- ・諏訪西遺跡・・・ 〃 9軒（関山Ⅰ式期・諸磯a式期）
- ・中畦遺跡・・・ 〃 6軒（黒浜式期・諸磯b式期）
- ・見立溜井遺跡・・ 〃 1軒（黒浜式期）
- ・分郷八崎遺跡・・勢多郡北橋村 8軒（関山Ⅰ式期・黒浜式期）
- ・中棚遺跡・・・利根郡昭和村 18軒（黒浜式期）
- ・善上遺跡・・・利根郡月夜野町10軒（黒浜式期・諸磯a、b式期）
- ・三峰神社遺跡・・ 〃 13軒（黒浜式期・諸磯b、c式期）
- ・大友館址遺跡・・ 〃 3軒（黒浜式期・諸磯b、c式期）
- ・前中原遺跡・・・ 〃 4軒（花積下層式期・黒浜式期）
- ・城平遺跡・・・ 〃 1軒（黒浜式期）
- ・小仁田遺跡・・・利根郡水上町 20軒（諸磯b、c式期・十三菩提式期）
- ・北貝戸遺跡・・・ 〃 1軒（諸磯c式期）
- ・賀茂遺跡・・・太田市竜舞 1軒（黒浜式期）
- ・稲荷山遺跡・・・新田郡笠懸村 18軒（黒浜式期・諸磯a、b式期）
- ・中善地遺跡（註1）群馬郡箕郷町 4軒（諸磯c式期）
- ・市之関遺跡・・・勢多郡宮城村 1軒（関山Ⅰ式期）
- ・入野遺跡・・・多野郡吉井町 1軒（諸磯c式期）
- ・道前久保遺跡（註2）・安中市上間仁田 4軒（諸磯b、c式期）

第V章 三原田城遺跡のまとめ

比較する要素として、1 形状、2 規模（面積）、3 柱穴（本数、位置）、4 炉址（形態、位置）、5 周溝を取り出し比較を行った。

次に各時期毎に帰属するものを各遺跡より抽出し述べていく事にする。

花積下層式期のものは県内においては極めて散発的に発見されている（註3）ために、その全容は不明な部分が多い。三原田城遺跡で検出された8軒という数は1遺跡としては初めてであり重要な資料と言える。住居址の平面形状は隅丸長方形のものと不正長円形のものに分けられる。規模は2、4号住居址がやや小形で、他はあまり差は無い、柱穴は隅丸長方形のものは6ないしは8本を基本とするものと思われるが、規格性は無いようである。その他補助的なものも壁よりに検出されている。炉址は総てに見られたが、しっかりとした石組炉を持つもの（3・6・7号）と焼土のみの地床炉（2・8・9・10号）がある。

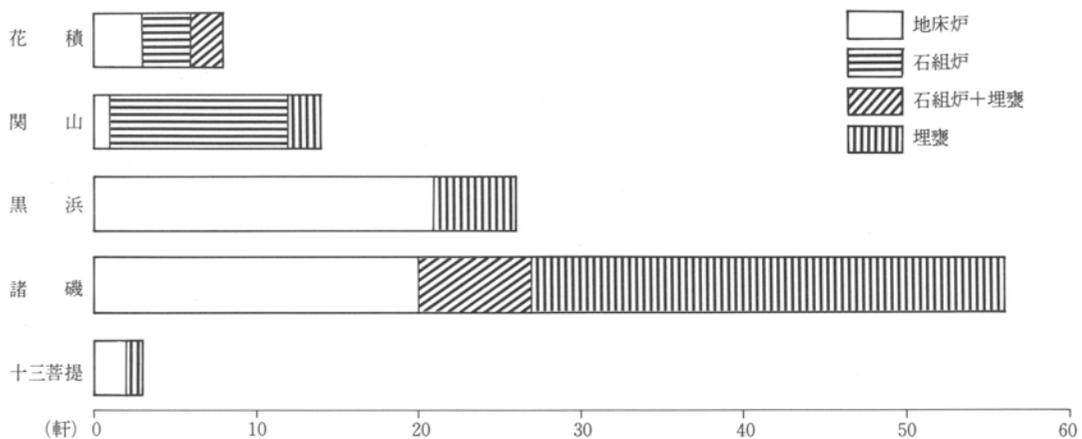
花積下層式期の住居址についての検討はかなりまとまって検出された埼玉県の打越遺跡（註4）や神奈川県黒川東遺跡（註5）などで言及されている。

これらの遺跡で検出された住居址は平面形は台形、（隅丸）長方形、楕円形を呈す。柱穴は4～6本で検出されないものも見られるようである。補助的なものと思われる壁柱穴は多くに見られる。炉の位置は定まらず柱穴間に偏在し、その形態はほとんどが地床炉で石が据えられたものも僅かではあるが見られる。

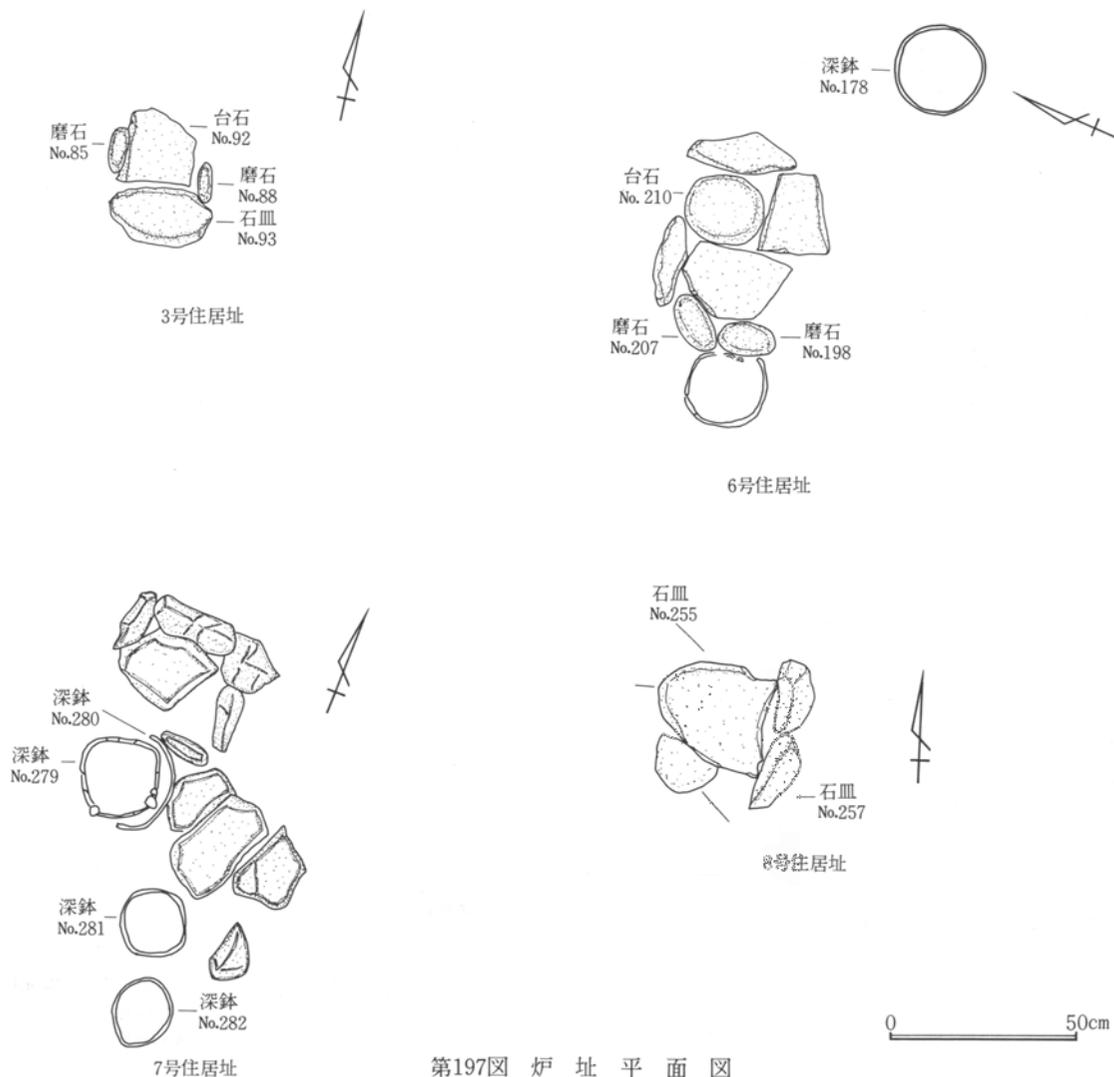
関山I式期のものは諏訪西遺跡、分郷八崎遺跡、市之関遺跡の計13軒である。形状は隅丸長方形を基本としているが、短辺の一方がやや長い台形状を呈すものや、正方形に近いものもある。規模は大、中、小の3種が有るようで最大36㎡から最小12㎡である。

柱穴は基本的に6本持つものと、主柱穴がはっきりせず壁柱穴が多く検出されるものがある。さらに壁周溝を巡らすものが多く見られる。炉址は石組炉または石を据えたものが多く、いわゆる地床炉のみのものは少ない、位置的には中央やや奥まった所に設けられている。

黒浜式期のものは、中畦・見立溜井・分郷八崎・中棚遺跡で検出されており、前代の形態を踏襲しており台形で壁柱穴、壁周溝を持つものが一般的のようである。分郷八崎・中畦・見立溜井遺跡はかなり近接した遺跡ではあるが、規模、形状が極めて似ている住居址が検出されていることは注目される。規模的には大小の2群があるようで、中畦・見立溜井遺跡では大小の住居址が対になる状況で検出されている。柱穴は6本を基本としているが8本、4本のものも見られ、小形のものには無いものも見られる。炉址は中央のやや奥まった所に設けられているが、いずれも地床炉か石が添えられた簡単なものであり、前代にかなりの割合で



第196図 時期別炉址形態



第197図 炉址平面図

見られた石組み炉はほとんど見られない。さらに埋設土器も見られない。赤城山北麓にある中棚遺跡におけるこの時期の住居址は、その形状を見る限りでは縦、横の比率が小さく隅丸方形に近いものが散見されるが、柱穴、周溝、炉址の在り方などに類似性が見られる。またこの遺跡では黒浜式の終末期にあたる時期のものも検出されており、報告者によって形態、炉址の変化から次期への過渡的な在り方であろうと指摘されている。

諸磯期の遺跡は笠懸村の稲荷山遺跡が県内における集落の報告としては古いものである。この遺跡では諸磯a式期のもを中心に住居址18軒を調査している。特に諸磯a式期のものには時間差が窺われ興味ある資料を提供している。個々の住居址を観察してみると形状は隅丸方形を基調としていることがわかる。このことは前期中葉から後期にかけて長方形→方形への大きな形態変化がかなり広汎に見られることから、その原因は置くとしても自然的、人為的な変化があったことは事実であろう。

住居址の規模は前代の平均的なものに比べても小形化する傾向が見られる。主な施設を比較すれば、柱穴が4本、あるいは確実なものが検出されないものが多い、周溝は掘られているものは少なく、在っても部分的なものである。炉址は地床炉のほかに埋甕炉を持つものが目立ち、複数のものもある。面積は20㎡前後に

## 第V章 三原田城遺跡のまとめ

集中するようで、30㎡を越えるようなものは希である。ほぼ同時期に考えられるものとしては、諏訪西遺跡5号住居址がある。

諸磯b式期のものは最も多く検出、報告されており、中畦・北貝戸・小仁田遺跡などに見られる。基本的にはa式期の流れを引くものであるが、隅丸方形のものと不定円形の2者が見られる。前者は対角線上に4本の柱穴を持つ。後者は前者のものが攪乱等を受けて明瞭な壁が確認できなかったものも含まれていると思われるが、各辺が外側へやや膨らみ、かなり円に近い方形を呈すものがあり、前代からの発展的なものとして位置付けられようか。b式期に位置づけられるものの中には方形を基調とするものに混じり、不定円形を呈するものが当初から散見されるようであるが、後半になると明らかに円形を意識して作られているものが見られる。稲荷山遺跡でもその萌芽は見られる。小仁田遺跡などではそうした状況が顕著に現れているようである。

b式期からc式期に入るとどうであろうか。従来県内においてはその検出例が少ない時期の1つであったが、近年本遺跡の1号住居址をはじめ、月夜野町の大友館址・三峰神社裏遺跡、県央部では吉岡村七日市遺跡、箕郷町中善地遺跡、西部では安中市道前久保遺跡、吉井町入野遺跡・黒熊遺跡などで住居址が調査されている。この時期は依然として隅丸方形のものも見られるが、円形、特に長円形のものを目をひく。柱穴は定まった本数は想定されず、不規則に配列されるものが多い。壁周溝は見られない。炉址は地床炉で埋甕を伴うものもある。この時期で方形を基調としたものから長円、円形を基調とするものに移り変わったことが窺われる。このことは従来より前期から中期への事象変化の1つとして上げられていることであるが、その事が内包する様々な個別の変化は各遺跡において徐々に、かつ並行して起こっていたものと思われる。なお昭和村糸井宮前遺跡(註6)ではb式末からc式期にかけての住居址が多数調査されており興味ある資料を提供することになろう。

前期最終末、十三菩提式期の住居址は県内においても調査例はほとんど無いが、そうした中で小仁田遺跡で調査されたものを見ると、形状は円形を基調としているようである。やや不定形で柱穴は4本であるが、配列は定まらない。前期末から中期初頭にあたる時期の住居址はその検出例がほとんど無く、まさに縄文時代における衰退期と言える時期である。こうした事実は住居址構造にも反映されているように思える。規格制のない形状、柱穴の位置、炉址の構造等にそれは現れていよう。このことは人々の生活にどんな事態が生じていたのか、想像を逞くさせるものであるが、資料的に限られている今日では地道に資料の蓄積と検討を行って行く事がより一層要求されていると考える。

最後に県内における前期の住居址の変遷図を第197図に示すとともに花積下層式期の住居址に関して若干のまとめを述べておきたい。

本遺跡で検出された8軒の花積下層式期の住居址は北関東においては、まとまった資料として極めて重要なものである。特に、完掘ではないにしろ1集落のほぼ全容を明らかにしたことは今後該期の研究を押し進めて行く上で重要な視点を与えてくれるものと考ええる。

検出した住居址は形状的には隅丸方形のもの不正円形のもの長円形のものがある。面積的には4号住居址が最も小さく約12㎡、2号住居址が約14㎡で他は20~26㎡の間である。柱穴は6~8本のもを確認しているが不確定なものも多い。壁高は住居址によって異なるが10~30cmで、各壁は斜めに掘り込まれているものが多く、壁から床面へはなだらかに移行する。床面は3号住居址は平坦であったが、他は凹凸が顕著である。壁周溝は4号住居址に一部確認されたのみで他には見られなかった。炉址は総てに検出されている。2・4・9・10号住居址は地床炉で3・6・7・8号住居址は石組炉および埋甕を伴っている。前述したように従来

花積下層式期に石組炉を伴う例は極めて希であり、南関東では絶無と言っても良い程である。本遺跡で検出された炉址は偏平な石や石皿を転用したもので作られている。偏平で大きめな石を床面に据えその回りにやや小振りの石を配しているものや、「コ」の字状に組んだものがある。埋甕は炉址の南側に隣接して埋め込まれておりいずれも底部を欠いていた。7号住居址の埋甕は4つの取っ手を持った美しい土器で底部を除いてほぼ完形である。この土器には添えられる様に半周する深鉢が検出されており、さらに2個体の深鉢胴部が検出されている。本址は掘り込みがほとんど無く、炉址の形態と合わせて考えると特異な存在である。次期にあたる諏訪西遺跡でも検出した9軒の住居址総てにおいて石組、ないしは石敷炉が認められた。これはほぼ同時期である市之関遺跡の例でも見られる。炉址の位置は平面形が不正形のものには中央寄りに在り、隅丸長方形のものには中央からやや奥壁に寄った所に位置するようである。こうした地床炉から配石炉さらには石組炉への変化は単に時期的な段階を踏んだものではないようである。このことは南関東で検出された同時期のものにはほとんど石組炉が見られないことなどから、極めて地域色の強い現象であると言える。

しかしこの時期、南関東と対称的な在り方を示すこれらの現象は単に地域差だけでは説明されない部分も多く、早期末から前期にかけて炉が屋内に取り込まれ、さらには地床炉から石および土器を加えた複合的な在り方というものがある。これが何に起因するものなのか今後の課題でもある。

(註1) 諸磯c式期の住居址5軒が検出されている。調査担当者田口氏より御教示頂いた。

(註2) 諸磯b・c式期の住居址6軒が検出されている。調査担当者大工原氏より御教示頂いた。

(註3) 県内における近年の調査例としては上武道路関連の五目牛清水田・中田遺跡、五目牛南組遺跡、さらに中之条町五十嵐遺跡などで住居址が調査されている。

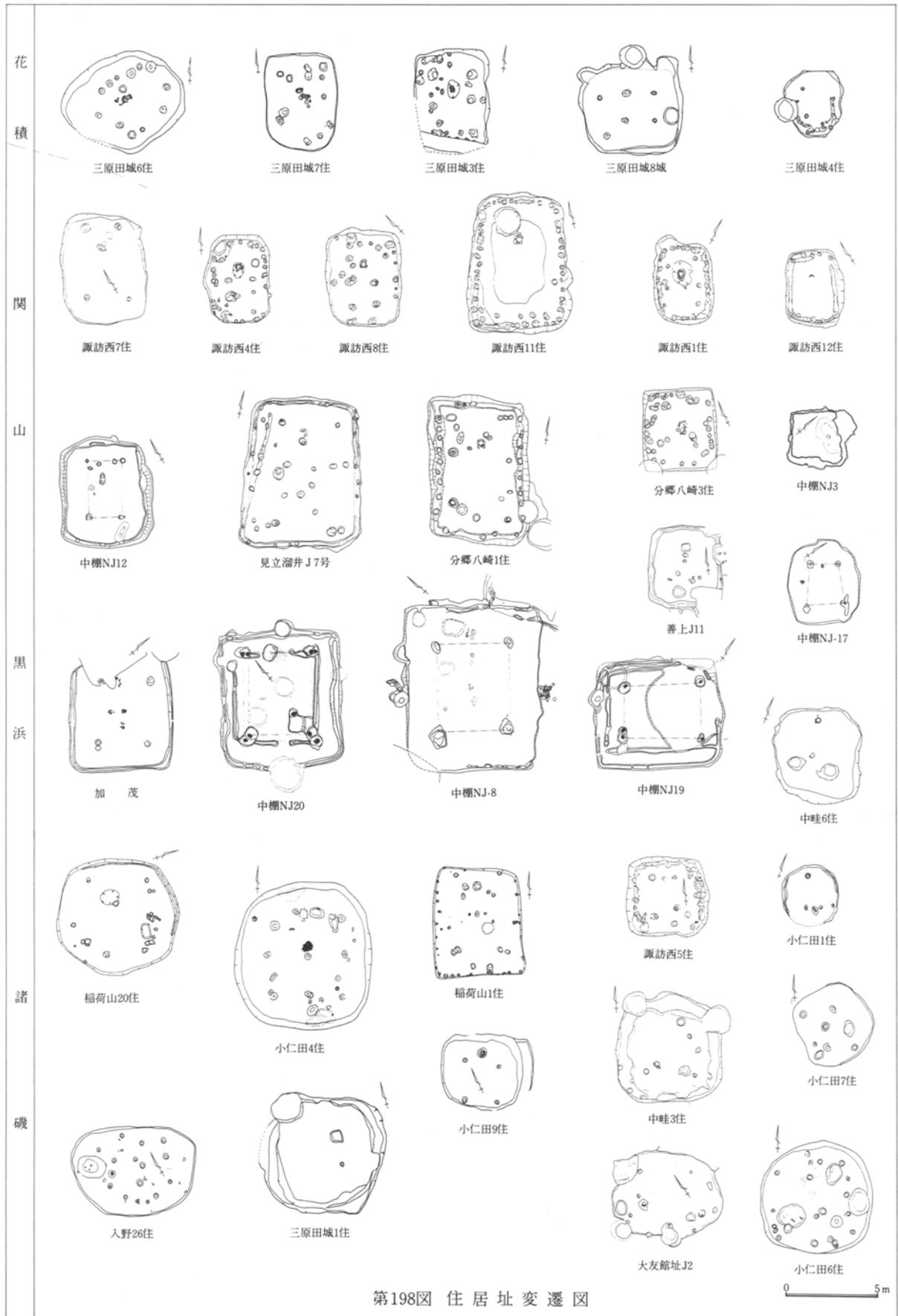
(註4) 会田 明(5)縄文時代早期末葉から前期前半にかけての住居址構造について 打越遺跡 富士見市文化財報告第26集 富士見市教育委員会 1983(昭58)年

(註5) 倉沢和子 付篇2 花積下層式期における竪穴住居址の集成と解説 黒川東遺跡 川崎市 1979(昭54)年

(註6) 年報2 1983(昭58)年 群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和61年度報告書(縄文編)刊行

#### 参考文献

- ・尾崎喜左雄 市之関遺跡 宮城村教育委員会 1964 (昭39)年
- ・佐藤信之 出土遺構の検討 1住居址 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村 その5 長野県教育委員会 1982 (昭57)年
- ・宮本長二郎 関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷 考古学論叢
- ・山形洋一 第2節 遺構 1縄文時代前期(第Ⅱ群期)の住居跡について 深作東部遺跡群 大宮市遺跡調査会 1984 (昭59)年
- ・小泉 功 第3節 住居構造から見た集落の構成 上野ヶ谷戸遺跡 日高町埋蔵文化財調査報告第6集 日高町上野ヶ谷戸遺跡調査会 1984 (昭59)年
- ・富澤敏弘 第1項 竪穴式住居跡の概要 中棚遺跡 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-VI) 昭和村教育委員会 1985 (昭60)年
- ・荒井幹夫 (6)関山式期の住居址群 打越遺跡 富士見市文化財報告第26集 富士見市教育委員会 1983 (昭58)年
- ・小出輝雄 (3)花積下層式の遺物と遺構 (2)住居址について 同上
- ・笹森健一 縄文時代前期の住居と集落 土曜考古 第3~6号 1981~82 (昭56~57)年
- ・若月省吾 笹懸村稲荷山遺跡 笹懸村教育委員会 1980 (昭55)年
- ・赤堀町教育委員会 八幡村古墳群及び縄文住居跡調査概報 伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告 1981 (昭56)年
- ・下城正 他 前中原遺跡 群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 (昭57)年
- ・中村富夫・間庭 稔 善上遺跡 三峰神社裏遺跡 大友館址遺跡 月夜野町教育委員会 1986 (昭61)年
- ・藤巻幸男・小島敦子 賀茂遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984 (昭59)年
- ・茂木由行 入野遺跡 吉井町教育委員会 1985 (昭60)年
- ・茂木 允・都丸 肇他 見立溜井遺跡 赤城村教育委員会 1985 (昭60)年
- ・黒岩文夫・富澤敏弘 中棚遺跡 昭和村教育委員会 1985 (昭60)年
- ・平田貴正 他 七日市遺跡 吉岡村教育委員会 1986 (昭61)年



## 2 三原田城遺跡の変遷

本遺跡の立地する場所は、赤城山西麓の尾根状台地に在り、北を黒沢川、南を天竜川によって深く削られている。台地は標高400m程の所から始まり狭広を示しながら西へ延び標高270m程の所で急激に落ちて下位段丘面となる。この台地の末端部は大きく広がっており、三原田遺跡(註1)はこの部分に営まれた。三原田城遺跡はこの東方300mにあり台地のくびれ部にあたる、南側は天竜川が大きく抉り込んでおり縄文時代の住居址はこの天竜川を望む台地の南辺に集中するように検出された。調査された範囲はちょうど台地を横断した形で幅は60mと狭い範囲ではあったが、縄文時代前期初頭という極めて限定された時期の集落が検出された事は興味深い事である。以下検出された遺構から本遺跡の変遷を見て行くこととする。

先土器時代については製品と思われるものが1点堀の中より出土しているが、調査区内においては他に検出することはできなかった。本遺跡と相前後して調査が行われた中畦、諏訪西・見立溜井・勝保沢中ノ山・房谷戸遺跡では1～4面の該期の包含層が確認されている。いずれも地形的には極めて近似しており、赤城西麓における先土器時代の遺跡の潜在量の多さと、調査の必要性を改めて痛感させられた。

調査区内において初めて人の居住が行われた時期は縄文時代前期初頭、花積下層式期である、これ以前については早期の遺物が諏訪西・見方溜井遺跡などで散見されているが遺構は検出されていない。この時期の遺跡はキャンプサイト的なもので残りづらいということもあるのであろう。しかし花積下層式期の前段階にあたる時期のものは無く、もちろん遺構についても周辺では全く痕跡も見られない。このことは検討を要することで、最近になり赤城南麓においていくつかの花積下層式期の住居址が調査されており、注目される所であるが、文様、器形などにやや違いが見られるようで、これが時間差的なものなのか地域差なのかは今後に残された大きな課題になると思われる。

従来花積下層式についてはその出土例の量的な差から南関東を中心に論じられることが多かったわけであるが、その成立については不明な部分が多く、器形的には平底の導入、文様については羽状縄文、捺糸側面圧痕文による環状、渦巻き文、刺切文、円形文の組み合わせによる文様帯の確立など、他地域からの影響が複雑に絡み合っている。

さらに、この花積下層式土器に伴う他地域の土器として注目されている東海系の無繊維薄手土器の木島式が本遺跡においても共伴する事実が見られたことにより、新たな課題が生じたわけである。

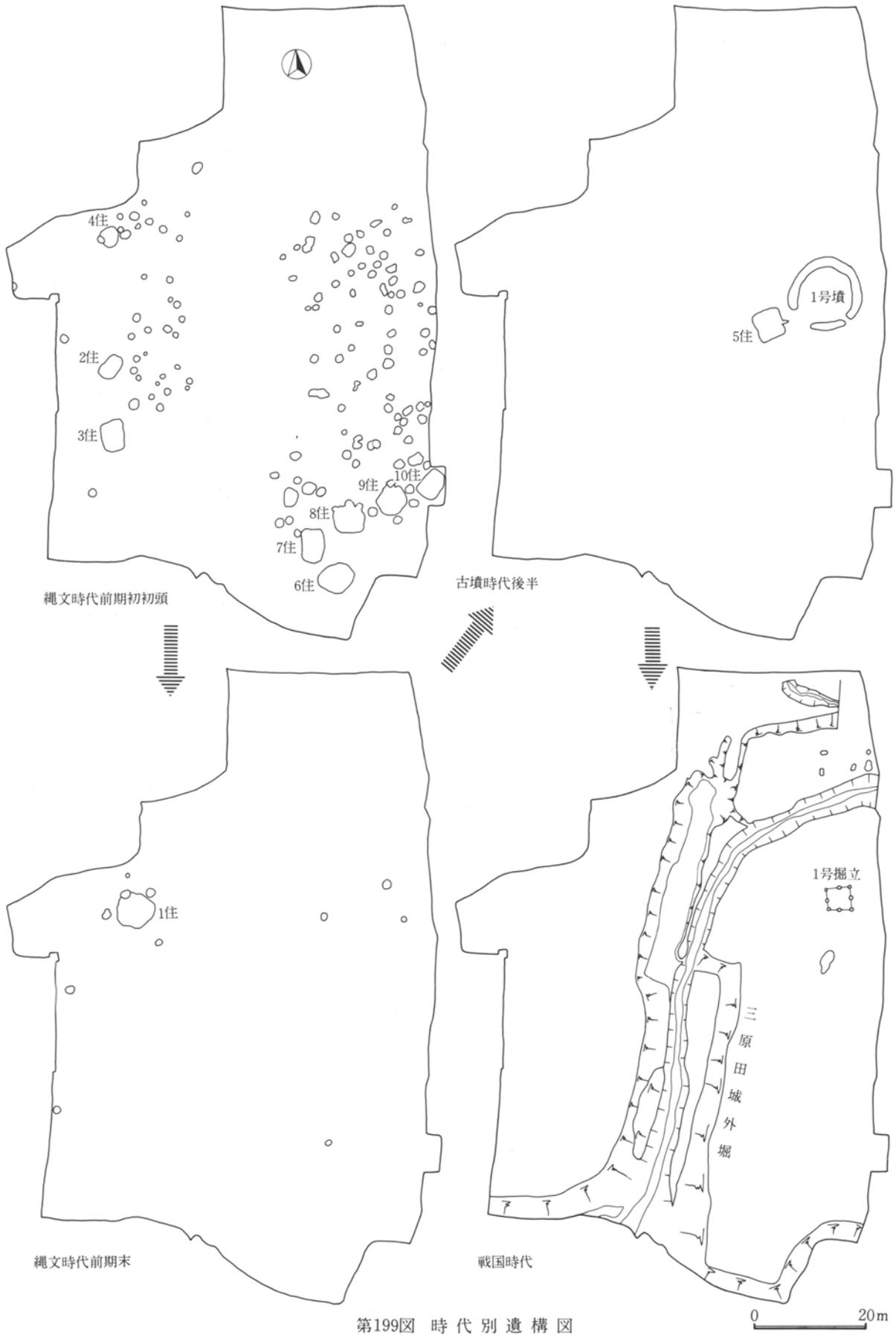
花積下層式以後に関しては遺跡地内において直接続くような遺構、遺物は検出されていないが、諏訪西遺跡において極めて近接した時期と考えられる住居址がほぼ同数検出されている。

いわゆる関山、黒浜式期の遺構、遺物については全く見られず、この時期この場所は居住域としては選定されなかったわけである。諸磯式期になっても終末期までその痕跡は見られない、b式最終末期になり住居址が1基作られている、またこれに伴う土壌も周囲に若干見られる。この住居址の覆土中からは次期の所産と思われる土器片も出土しており周囲に居住域があることを想像させる。なお覆土の最上層より中期前半に比定される土器が出土している。この土器以降縄文時代の住居址、土器は無く、より広い場所にその居住域が求められていったのである。その結果として生じたものが房谷戸遺跡・三原田遺跡であると考えられる。

弥生時代の遺構、遺物は皆無である。周辺では後期に比定される樽遺跡があるが標高はかなり下がっている、台地上にも若干の遺跡は見られるがやはりその中心は中村・有馬条里・有馬遺跡に見られるように沖積地であったのだろう。

古墳時代後期になり再び利用されるようになるが、居住域としてよりも墓域としての性格が強かったよう

第V章 三原田城遺跡のまとめ



第199図 時代別遺構図

である。円墳1基と住居址が1基近接して検出されている、時期的には平行関係にあるものと考えられるが、それ以上に有機的な関係があるものと思われる。

奈良・平安時代の遺構は無いが、薬研堀に関しては浅間山B軽石の存在から開削の時期はかなり古くなるものと思われる。軽石下の埋土中からは縄文土器に混じり、少ないが奈良・平安時代の須恵器片も出土している。

戦国時代になり、南北両側を深い沢に切られている地形を利用して、三原田城が築かれるのであるが、調査区の中央に検出された南北に走る箱堀は古くあった薬研堀を拡張した形で作られており、城の最西端にあたり、城の防御上重要なものであったと思われる。その他城についての遺構としては他に数条の溝と掘立柱建物址、土壌が検出されているが城に直接結び付くものかどうかは確証を得られない。

中世以後の人為的な遺構としては近世以降と考えられる墓坑が1号墳の東部分に在り、その他には耕作による溝等が見られるのみである。

以上、三原田城遺跡の変遷を検出した遺構をもとに見てきたが、本遺跡が最も人々によって占有された時期は縄文時代前期初頭であった。この時期の集落はこれまで調査例が少なかったために、その内容は余り明らかにはなっていない、このことから本遺跡の在りかたは注目されるもので、今回の調査でこの時期の新たな1面が示されたとと言える。

最後に遺跡内における縄文時代前期の主な出土遺物の平面分布図（第200図）を示すとともに、若干の検討を行いまとめたい。

本遺跡内において検出した住居址9軒、土壌120基の時期的な区分については、前期後半にあたるものが住居址1軒と土壌5基で、他は前期初頭に属すものと考えられる。前期後半の住居址はその集落の中心が調査区外に在るものと思われる。前期初頭の住居址は南縁から西側へ弧を描くように位置し、土壌は住居址に囲まれるような形で検出されている。弧状に位置する住居址の西側、南側縁辺には僅かしか見られない。三原田城の外堀で削り取られた部分にもかなりの土壌が存在していたものと思われる。このような遺構の在りかたは形態的にも今後の検討を必要とする在りかたと言える。また土壌の数も比較的短期間に比定されるにもかかわらず数が相当数にのぼっている事も注意される。

第200図に示した土器は器形がほぼ復元できるもので、その多くは住居址より出土しているものであるが、土壌内からも、完形に近いものが見られる。土壌から出土している土器はその大部分が小破片で、完形に近いものが出土した土壌はその個体の外にはほとんど破片が見られず、このことから埋納するという意識が強く働いていたと考えられる。この事象を極めて強く現している土壌は67・101号土壌である。67号土壌は底に横たわった状態で底部を欠く深鉢が出土した、この土器は口縁部に捺糸圧痕文による文様帯を持つ精緻な作りの土器で器面の摩滅もほとんど無い。101号土壌は2個体分の石皿と大形の深鉢が投げ込まれたような状態で出土している。石皿の出土した土壌は他には135号土壌があるが、完形で覆土中位からの出土である。この他注目される遺物を出土している土壌は86号で完形の玉篋（註2）が検出されている。小形で浅い土壌であるが何等かの意図を持ったものとする。その他装身具を出土したものとしては25号土壌から2個の玦状耳飾りが出土している。内1つは未製品である。

石皿は当時の人々にとって最も重要な加工具であったと思われ、少なくとも各戸に1ないし2個は備えてあったに違なく重要な石器であった。そして注目される事として、破損した石皿の多くが第2の用途として炉石として転用される例が多い。このことはかなり一般的に行われていたらしく付近の遺跡でも多くの住居址で確認されている。

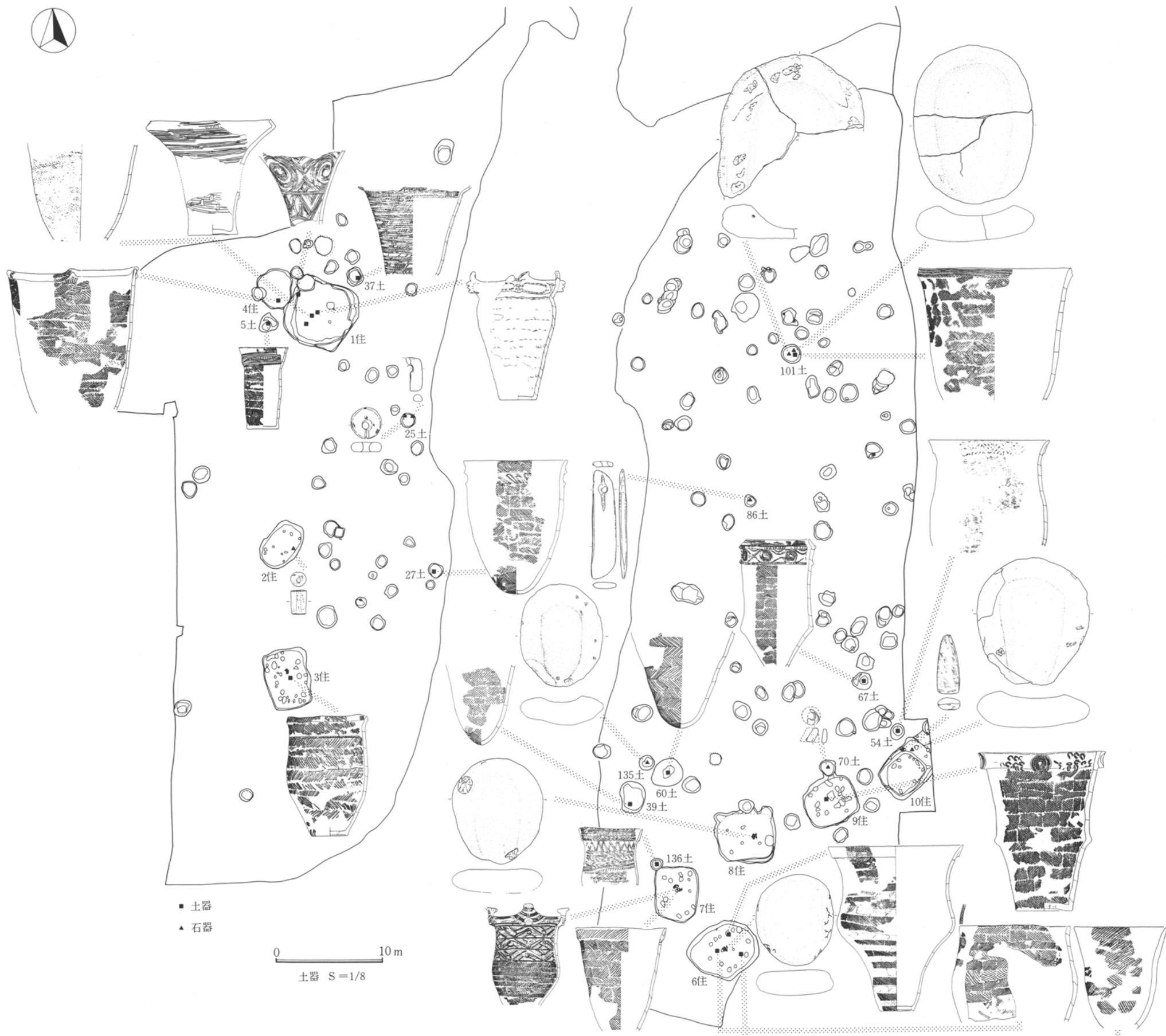
## 第V章 三原田城遺跡のまとめ

完形に近い土器の出土状況は、住居址から出土しているものに関しては3号住居址では床面直上から、また6、7号住居址からは炉に近接して埋設土器が、9号住居址より出土した土器は覆土上層からの出土である。諸磯b式期末と考えられる1号住居址からは西壁際に倒れ掛かるようにして1個体、炉に転用されていたと思われるキャリパー形土器の口縁部が1点出土しており、覆土上層からは中期前半阿玉台式期に比定される深鉢が出土している、住居址の廃絶後窪地になっていた所に廃棄されたものであろう。住居址内における土器の出土位置は炉の周辺が最も多く、次いで住居址の壁際である。他の多くは破片で床面との間に間層を狭むものが多い。4号住居址は覆土中に土器に混じり多くの礫が出土している。

本遺跡の成果は県内において極めて資料の少なかった花積下層式期の集落が良好な状況で調査された事と、これまで検出例の無かった東海地方の木島式土器が伴出したということで、この時期の文化交流、交易圏を考える上で新たな資料の提供と共に、新たな問題の提起がなされた点にある。

(註1) 昭和47・48年に県企業局において調査された。縄文中・後期の住居址300軒以上調査。三原田遺跡(住居篇)は1980(昭55)年に刊行されている。

(註2) 長崎元広氏は(1984)信濃 36—4において中部関東地方の出土例を集成し考察を加えておりその初現は前期末としている、本例のものは共伴土器が無く時期認定し難いが、時期的には諸磯期であろう、しかし状況からして前期初頭にさかのぼる可能性も残る。



第200図 縄文時代出土遺物平面分布図



第2節 遺 構

参考文献

- 鈴木 尚 東京市王子区上十条清水坂貝塚 人類学雑誌第49巻5号 1934 (昭9)年
- 加藤明秀・芦沢長介 静岡県下に於ける細線文指痕薄手土器と其伴出石器 考古学第7巻9号 1936 (昭11)年
- 関野 克 埼玉県福岡村縄紋前期住居址と竪穴住居の系統に就いて 人類学雑誌 第53巻8号 1938 (昭13)年
- 河辺寿栄・佐藤民雄・江藤千万樹 伊豆伊東町上ノ坊石器時代遺跡調査報告 考古学10巻8号 1939 (昭14)年
- 江坂輝弥 縄文式文化について(その7) 歴史評論29 1951 (昭26)年
- 篠遠喜彦 千葉県東葛飾郡二ツ木第二貝塚 日本考古学年報三 1955 (昭30)年
- 坪井清足 石山貝塚 1956 (昭31)年
- 室岡 博 鍋屋町遺跡 柿崎町教育委員会 1960 (昭35)年
- 紅村 弘 東海の先史遺跡 総括編 1963 (昭38)年
- 青木義脩 杉戸町目沼遺跡 杉戸町教育委員会 1964 (昭39)年
- 尾崎喜左雄 市之関遺跡 1964 (昭39)年
- 磯部幸男・杉崎 章・久永春男 愛知県知多半島における縄文早期末～前期初頭の遺跡群 古代学研究第41号 1965 (昭40)年
- 岡本 勇 尖底土器の終焉 物質文化8 1966 (昭41)年
- 村田文夫 花積下層式の諸問題 立正史学第30号 1966 (昭41)年
- 藤沢宗平 中越遺跡 昭和43年度緊急発掘調査概報 1969 (昭44)年
- 藤沢宗平 中越遺跡 昭和44年度緊急発掘調査概報 1970 (昭45)年
- 大久保知己・樋口昇一・藤沢宗平他 有明山社 長野県考古学会研究報告9 1969 (昭40)年
- 青木義脩 花積貝塚発掘調査報告 埼玉県遺跡調査会 1970 (昭45)年
- 岡本 勇 下吉井遺跡 埋蔵文化財調査報告1 1970 (昭45)年
- 林 茂樹 船山遺跡緊急発掘調査報告 第1次および第2次調査 1971 (昭46)年
- 榎本金之丞 平方貝塚の調査 埼玉考古第9号 1971 (昭46)年
- 松戸市教育委員会 幸田貝塚 第2次(昭48)調査概報 1972 (昭47)年
- 今村啓爾・吉田格他 宮の原貝塚 1972 (昭47)年
- 宮沢恒之他 千鹿頭社遺跡 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市その三 1975 (昭50)年
- 岡本 勇 西方貝塚の謎 神奈川県史研究23 1974 (昭49)年
- 庄野靖寿 関山貝塚 埼玉県埋蔵文化財調査報告第三集 1974 (昭49)年
- 武井則道 新田野貝塚 立教大学考古学研究会 1974 (昭49)年
- 伴 信夫 十二ノ后遺跡 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市その四 1975 (昭50)年
- 笹津海祥他 裾野市日向・丸山Ⅰ・丸山Ⅱ遺跡発掘調査報告書 裾野市文化財調査報告1 1975 (昭50)年
- 宮沢恒之他 北高根A遺跡 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 南箕輪村一・二 1973 (昭48)年
- 増子康真 名古屋市鳴海町鉢ノ木貝塚の研究 古代人三三 1976 (昭51)年
- 笹津海祥・瀬川裕市郎 清水柳遺跡の土器と石器 沼津市歴史民俗資料館紀要1 1976 (昭51)年
- 関野哲夫・杉山治夫 横浜市神之木台遺跡の縄文時代遺物 調査研究集録第二冊 1977 (昭52)年
- 高橋雄三・吉田哲夫 高遠宮の原遺跡 1977 (昭52)年
- 林 茂樹 いわゆるオセンベ土器の研究 信濃第二九巻四号 1977 (昭52)年
- 増子康真 東海先史遺跡の諸段階 資料編1 1977 (昭52)年
- 紅村 弘・増子康真他 打越遺跡 富士見市文化財報告書第14集 富士見市教育委員会 1978 (昭53)年
- 荒井幹夫・佐々木保俊・小出輝雄 堂の上遺跡 第1次～第5次調査概報 1978 (昭53)年
- 戸田哲也 上浜田遺跡 神奈川県埋蔵文化財調査報告一五 1979 (昭54)年
- 山本暉久 川崎遺跡(第3次)、長宮遺跡 1979 (昭54)年
- 上福岡市教育委員会 黒川東遺跡 川崎市教育委員会 1979 (昭54)年
- 東原信行他 中越式土器をめぐる周辺 地域研究の方向 研究ノート3 1979 (昭54)年
- 岡田篤子 中越遺跡発掘調査概報 伊奈路第二三巻第一二号 1979 (昭54)年
- 中越遺跡保存対策委員会 駿河山王 静岡県富士川町山王遺跡群調査報告書 1975 (昭55)年
- 稲垣甲子男他 菊名貝塚の研究 1980 (昭55)年
- 桑山竜進 花積下層式土器の研究 考古学研究第28巻1号 1981 (昭56)年
- 高橋雄三 新田野段階花積下層式土器と二ツ木式土器について 奈和19号 1981 (昭56)年
- 下村克彦 清水ノ上貝塚 南知多町文化財調査報告書第1集 1976 (昭56)年
- 磯部幸男・杉崎 章・山下勝年 木島 静岡県富士川町木島遺跡第四次調査報告 1981 (昭56)年
- 渋谷昌彦他 阿久遺跡 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その5 1982 (昭57)年
- 笹沢浩他 木島式土器の研究 静岡県考古学研究11 1982 (昭57)年
- 渋谷昌彦 花積下層式期土器の成立と展開 富士見市遺跡調査研究紀要2 富士見市遺跡調査会 1982 (昭57)年
- 小出輝雄 舅屋敷 1982 (昭57)年
- 小林康男他 木島式の検討 中部高地の考古学Ⅱ 1982 (昭57)年
- 増子康真 北白川下層式土器の再検討 考古学研究第二九巻一号 1982 (昭57)年
- 増子康真

## 第V章 三原田城遺跡のまとめ

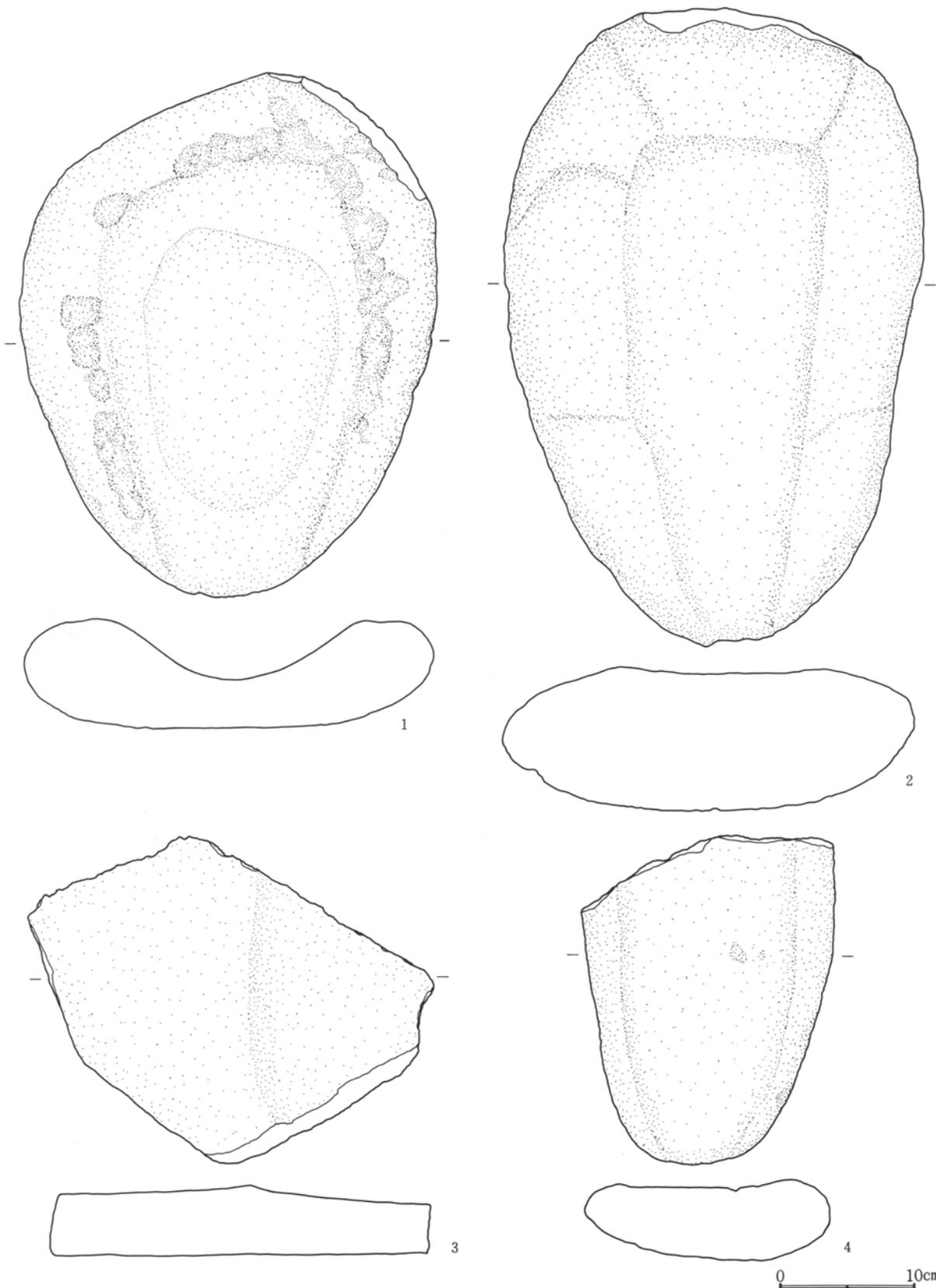
・青木義脩・岩井重雄	北宿遺跡発掘調査報告書 浦和市遺跡調査会報告書 第26集	浦和市遺跡調査会	1983	(昭58)年
・鶴飼幸雄他	よせの台遺跡		1978	(昭58)年
・岡本 勇	縄文時代 神奈川県史 資料編20 考古資料		1979	(昭59)年
・宮本長二郎	関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷 奈良国立文化財研究所 創立30周年記念論文集刊行会		1983	(昭58)年
・立木新一郎・山形洋一他	深作東部遺跡群 大宮市遺跡調査会報告		1984	(昭59)年
・岡崎完樹	多摩ニュータウンNo. 27遺跡 昭和54年度調査概報		1984	(昭59)年
・中村龍雄	中部高地 オセンベ土器		1984	(昭59)年
・吉田哲夫	木島系土器群の研究 考古学研究第31巻3号		1984	(昭59)年
・山田昌久	縄文時代における石器研究序説 論集日本原史	論集日本原史刊行会	1985	(昭60)年
・堀越正行	縄文時代における分業の問題 同上			
・小出輝雄・荒井幹夫他	貝殻山遺跡発掘調査報告書—第2地点—	富士見市遺跡調査会	1985	(昭60)年

入稿後、石皿4点が記載漏れで在ることが判明したため実測図と観察表および説明を加え、補遺としたい。

7号住居址出土石皿 1は住居址の北寄りに伏せられた状態で出土している。使用面の中央が摺り鉢状に深く凹み、その縁辺部には浅く小さな凹みが連なって穿たれている。

10号住居址出土石皿 2はかなりの大形の川原石を利用している。使用面は浅く平坦で周辺部には稜を持つ。3は偏平な川原石を利用している。使用面は平坦で、僅かに浅く凹む。裏面も平らで使用されていた可能性がある。欠損品か。

50号土壙出土石皿 4は長円形でやや偏平な川原石を利用、上端部を欠いており使用面の凹みは浅く平坦である。



番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石 材	番号	出土位置	種類	分類	計測値(cm・g)	石 材
1	7号住居	石 皿	I-A	35.4×28.9×7.5 7.2	輝石安山岩	3	10号住居	石 皿	III	22.3×27.9×4.8 4.2	輝石安山岩
2	10号住居	〃	I-A	43.8×29.0×9.9 17.1	〃	4	50号土壌	〃	I-B	22.5×17.5×5.6 2.5	〃



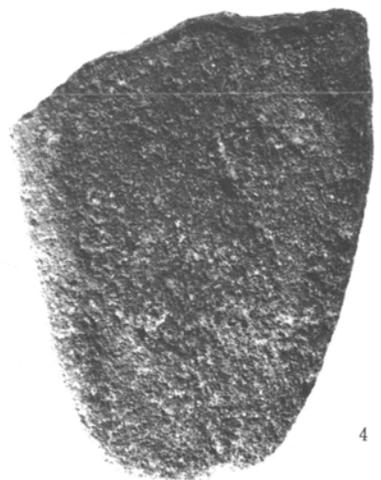
1



2



3



4

## 結 び

三原田城遺跡の調査区は三原田城址の追手口にあたり、外堀の検出が当初より予想されていた、調査の結果南北に走る箱堀と、城の築造以前に掘られたと思われる薬研堀が検出された。この薬研堀は現在三原田城址の本丸にあたる所にある興禅寺の北側を流れていたものと思われ、城の築かれる以前に何等かの機能を果たしていたものと予想される。

古墳時代の遺構は住居址と円墳の周堀が近接して検出された。ほぼ同時期に存在していたものと考えられ、住居址には大形の石組み竈が設けられていたが、極めて短期間の使用であり、古墳との関係が興味深い。

本遺跡で最も多く検出された遺構、遺物の時は縄文時代であった。これらは総て前期に比定されるもので、特に前期初頭花積下層式期の住居址 8 軒と、ほぼ同時期の土壙が120基余りが検出され、北関東では極めて貴重な発見となった。出土土器は羽状縄文を持つものを主体に、花積下層式期のメルクマールとなる撚糸圧痕文を持つものも見られ、注目すべき遺物としては僅かではあるが東海地方にその中心を置く、木島式土器が相伴しており、従来南関東において確認されていた両者の関係が、この赤城山西麓において確認された意義は大きい。その他前期末に比定される 1 号住居址からは諸磯 b 式期末から中期初頭期の阿玉台式期間での時期が混在した状態で出土していた。特に前期末の様相は土器に関して見ても中部関東を中心とした諸磯期から次期の十三菩提式期に移る文様の変遷として縄文、浮線文、沈線文、結節浮線文、陰刻文、が混在する状態で出土している。さらに土壙からは、東北地方にその類例が求められる土器 1 点が出土している。

調査の結果から本遺跡が極めて注目される遺跡であることが明らかとなり、赤城山西麓における縄文時代研究にまた新たな資料を加えることとなり、従来より資料の少なかった時期であるだけに集落の調査が行われた事は特筆される。今後近接して調査された三原田遺跡、中畦・諏訪西遺跡、見立溜井・大久保、勝保沢中ノ山遺跡、房谷戸遺跡、分郷八崎遺跡等との関連も含めて検討が必要とされる。

最後ではあるが酷暑、酷寒のなか調査に従事された方々、また本書をまとめるに当たり多くの貴重な御助言を頂いた方々に深く感謝申し上げたい。



# 写 真 图 版

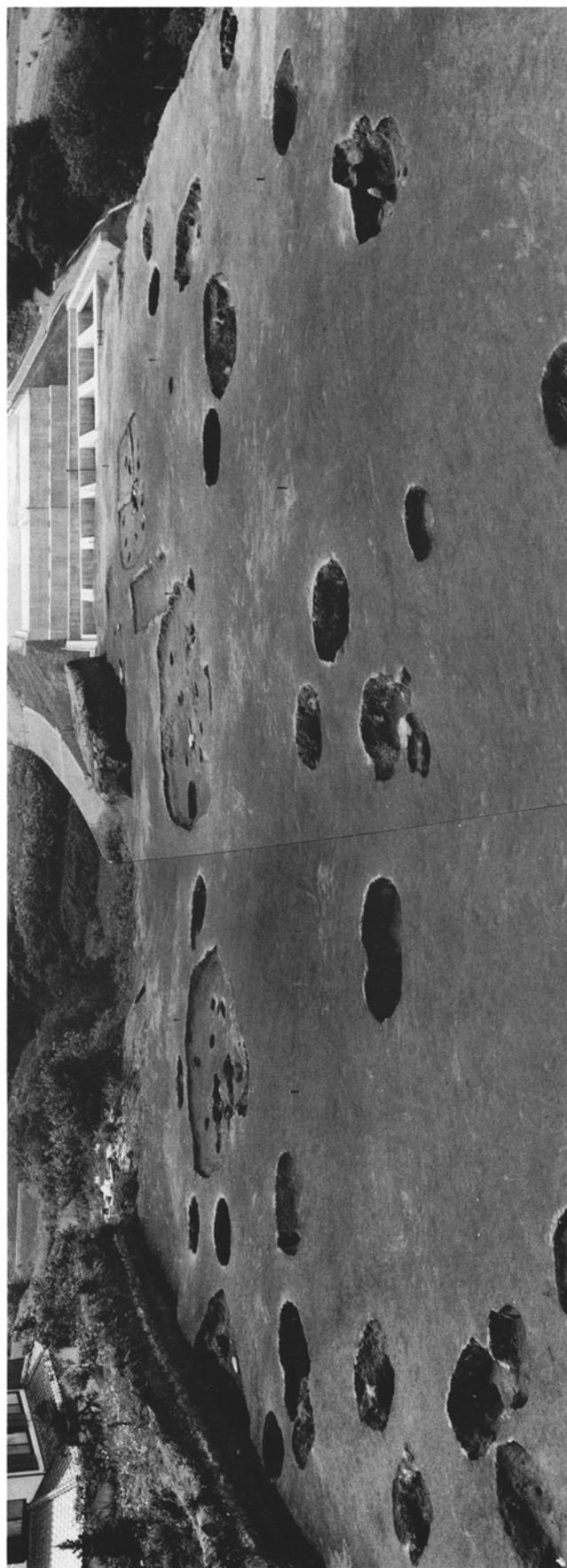




三原田城址航空写真



調査区航空写真



調査区遠景(北から)



1号住居址全景(南より)



遺物出土状態



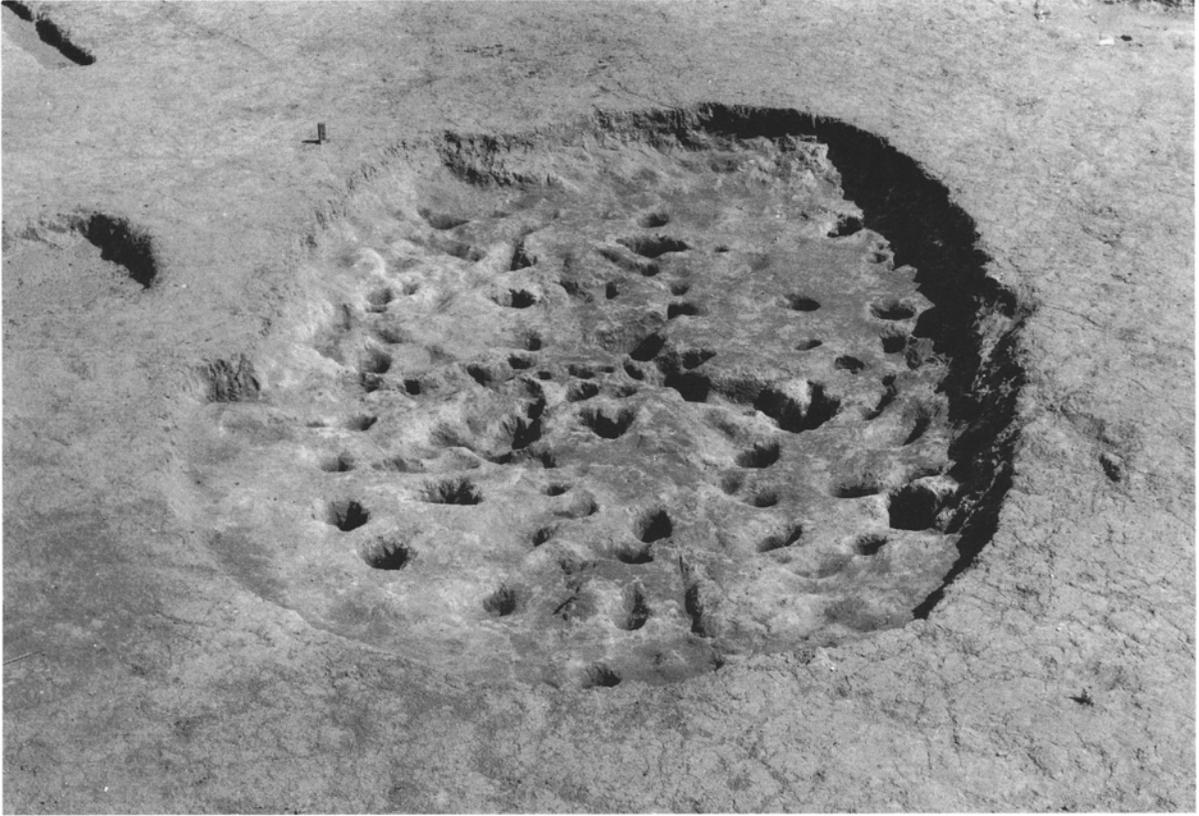
遺物出土状態



遺物出土状態



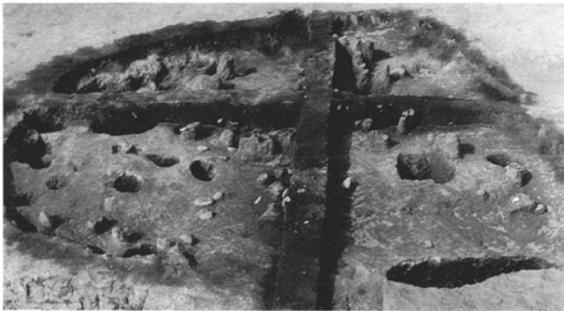
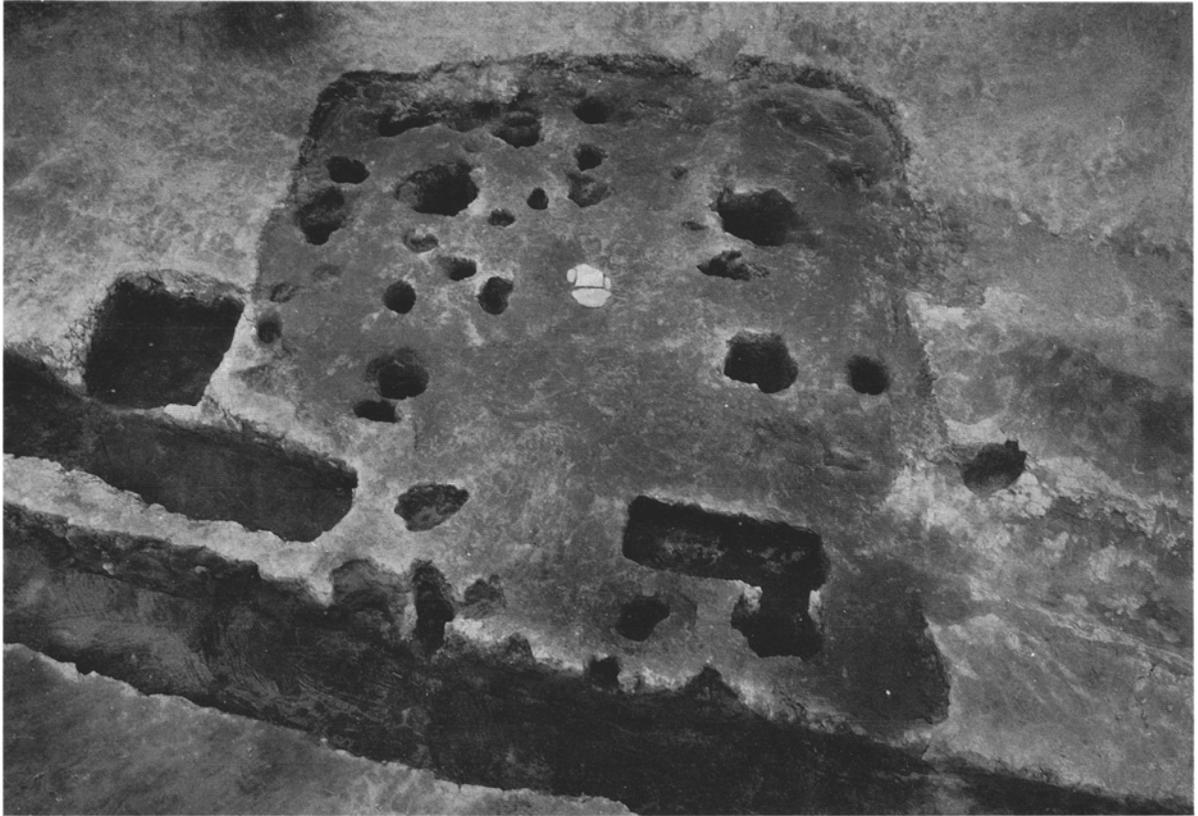
遺物出土状態



2号住居址全景(南より)



遺物出土状態



3号住居址全景 (南より)

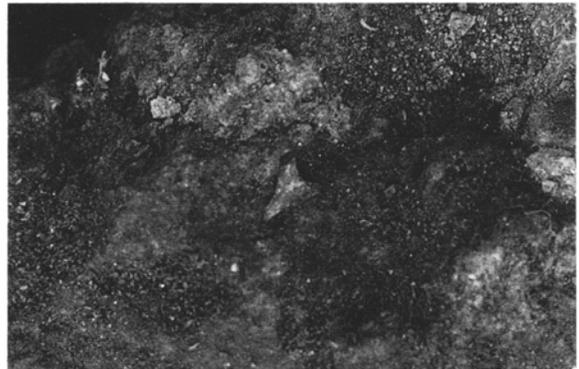
遺物出土状態



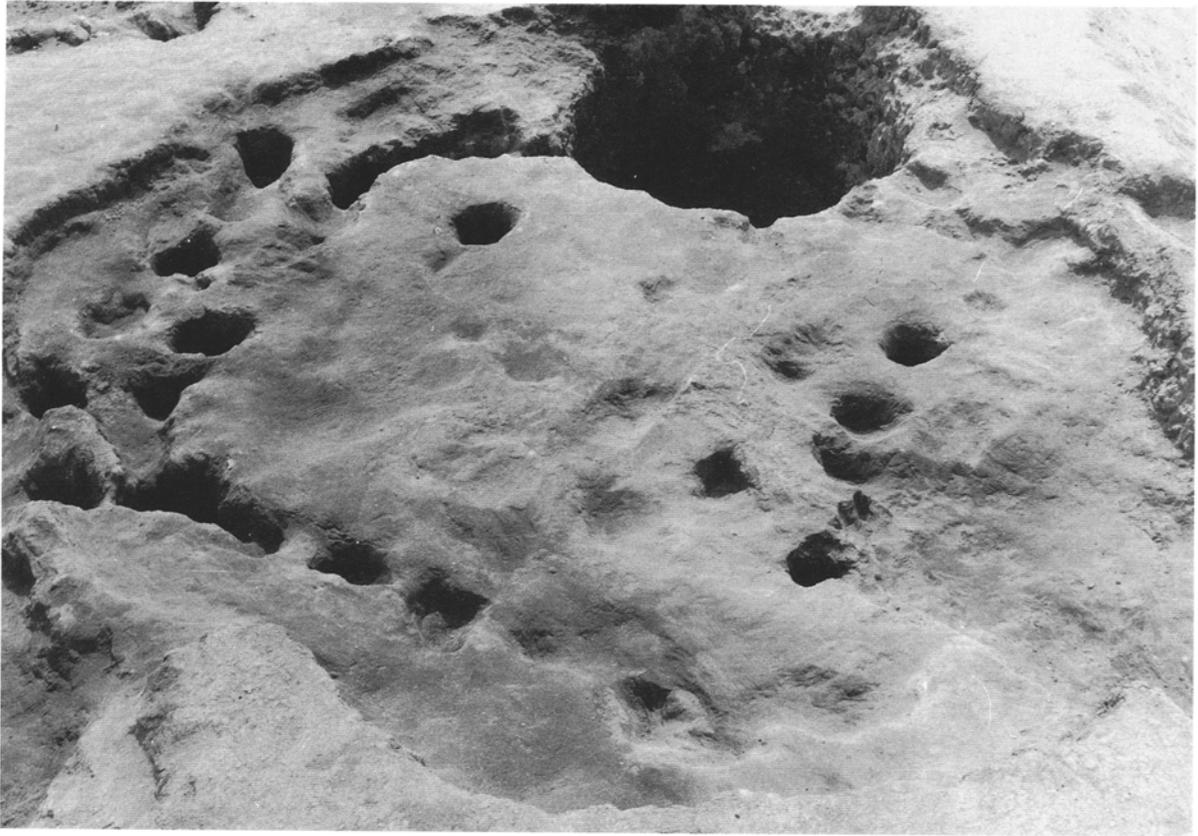
遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



4号住居址全景(東より)



全 景 (南より)



遺物出土状態



住居址セクション



遺物出土状態



6号住居址全景(西より)



遺物出土状態



炉址セクション



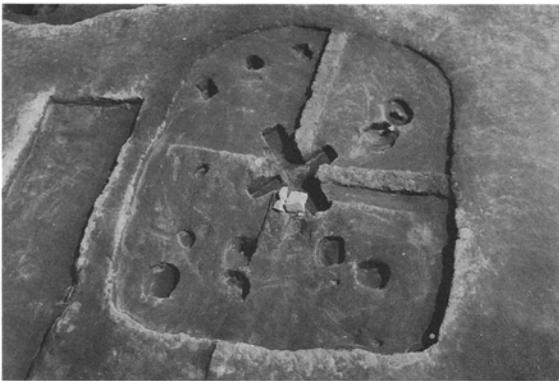
炉 址



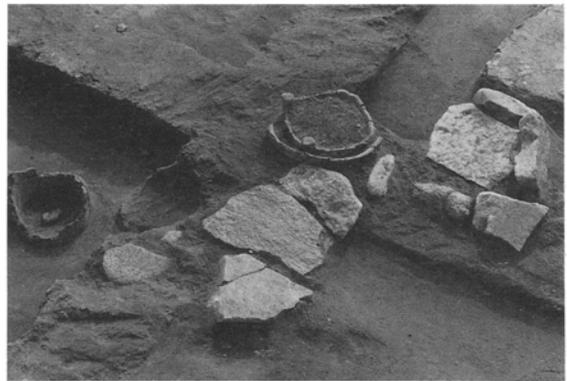
炉址セクション



7号住居址全景(南より)



全 景(北より)



炉 址



炉 址



炉址セクション



8号住居址全景(西より)



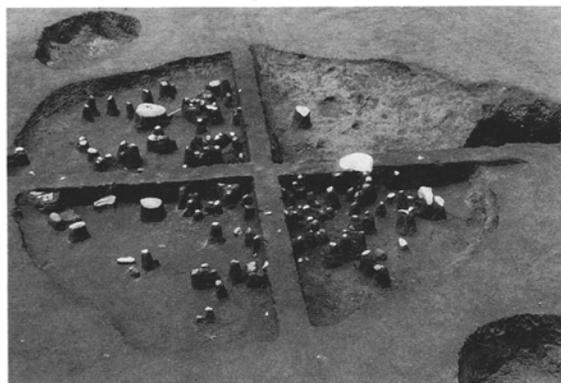
遺物出土状態



9号住居址全景(東より)



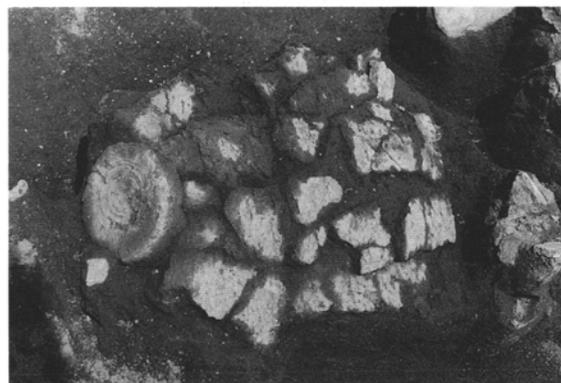
遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



10号住居址全景(南より)



遺物出土状態



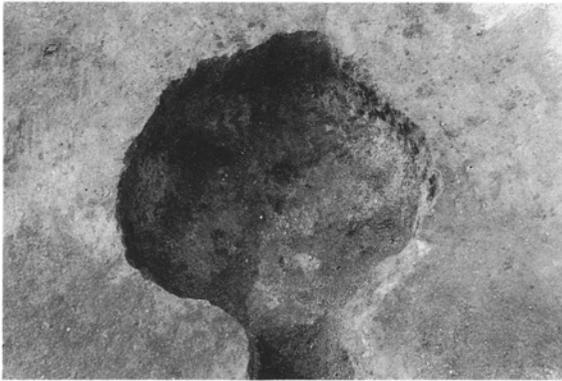
遺物出土状態



遺物出土状態



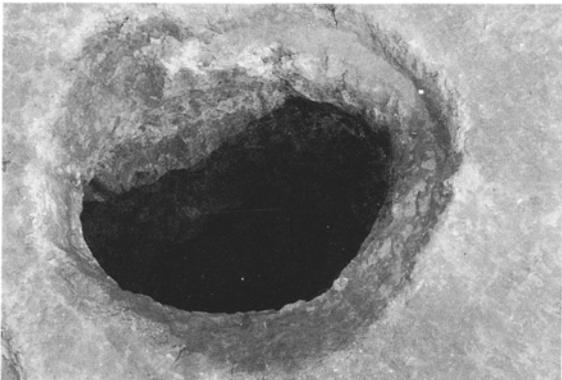
遺物出土状態



1号土坑



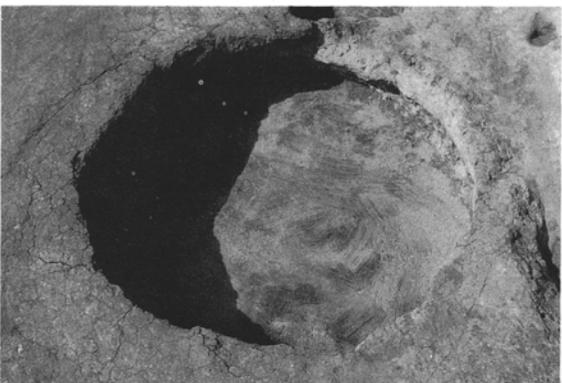
2号土坑



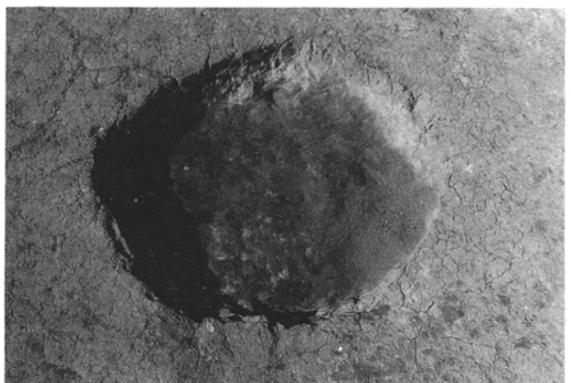
3号土坑



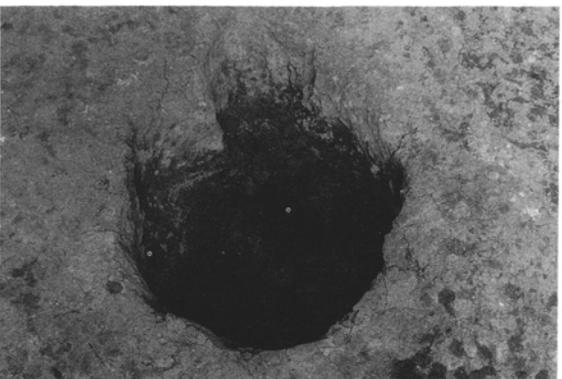
5号土坑



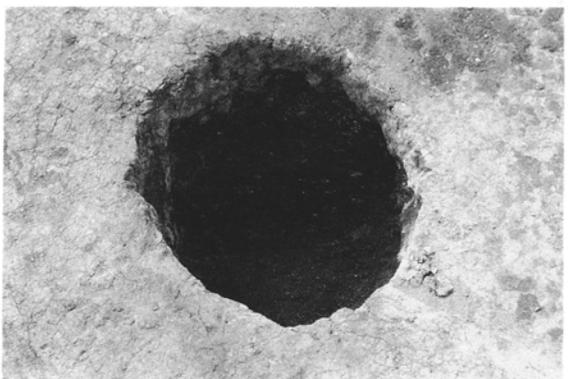
6号土坑



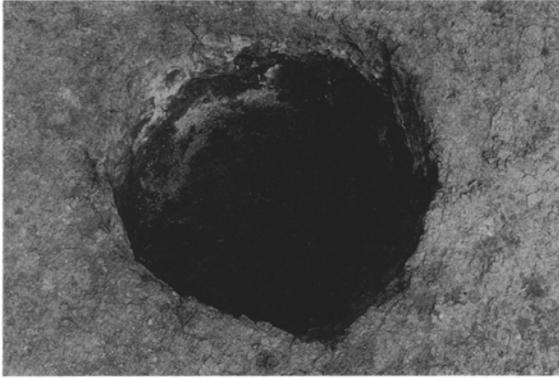
7号土坑



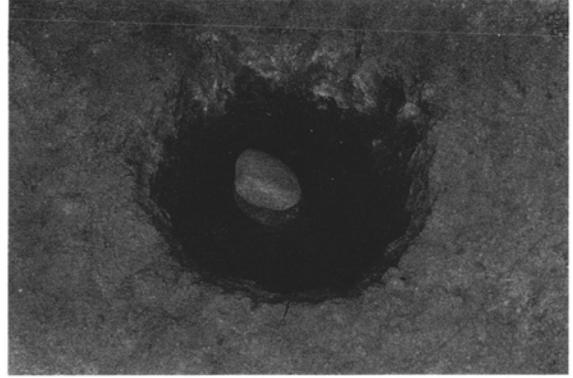
8号土坑



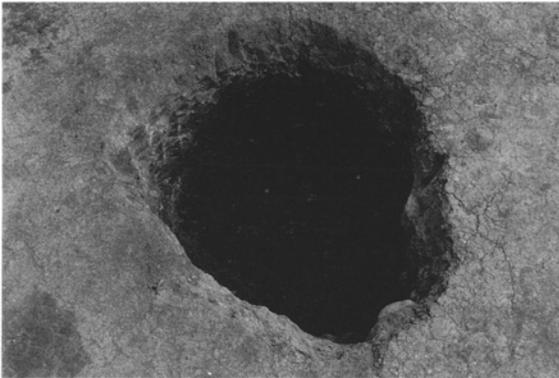
9号土坑



10号土坑



11号土坑



12号土坑



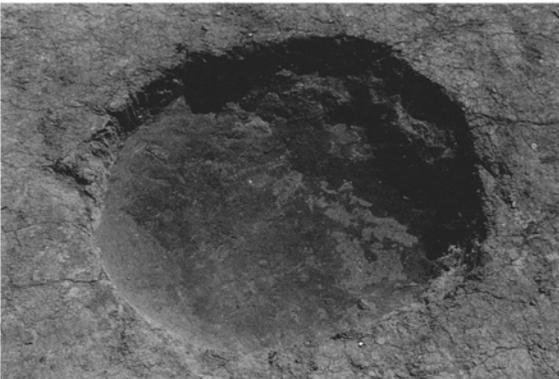
13号土坑



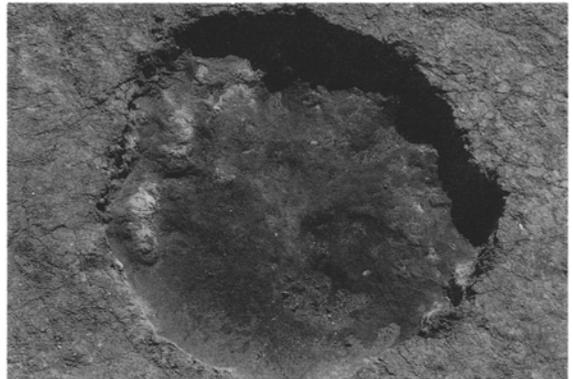
16(左)・35号土坑



17号土坑



18号土坑



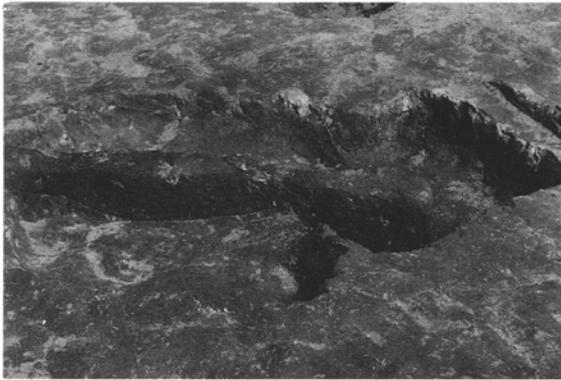
19号土坑



20号土塙



21号土塙



22号土塙



23号土塙



24号土塙



25号土塙



25号土塙出土遺物



25号土塙出土遺物



26号土壙



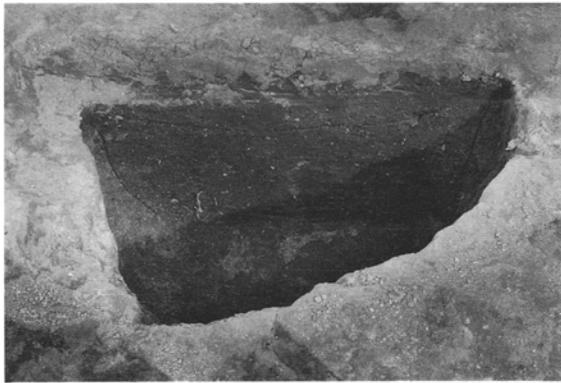
27号土壙



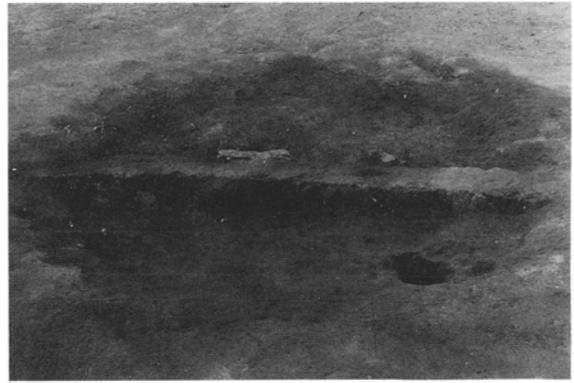
29号土壙



30号土壙



32号土壙



33号土壙



34号土壙



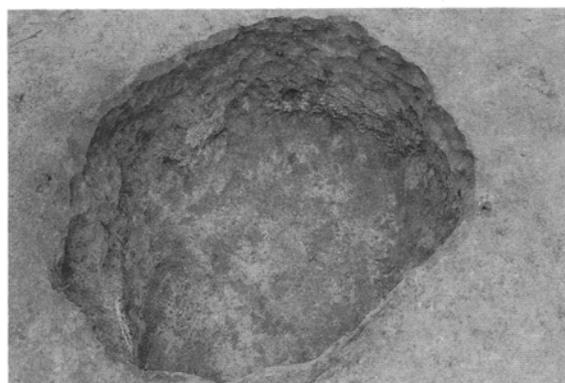
37号土壙



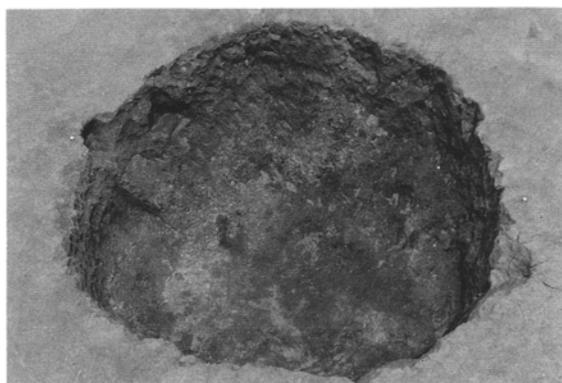
44号土坑



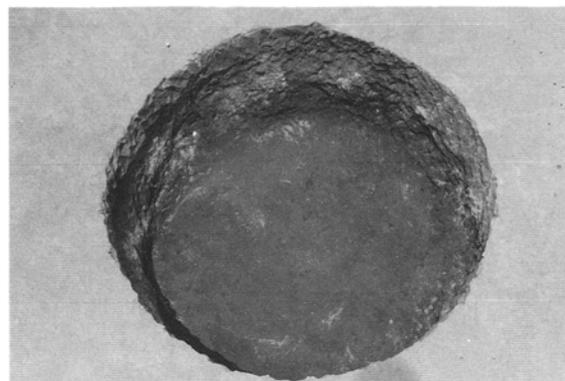
50号土坑



51号土坑



52号土坑



53号土坑



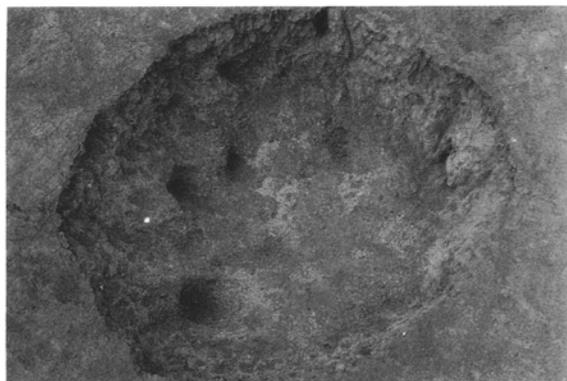
54号土坑



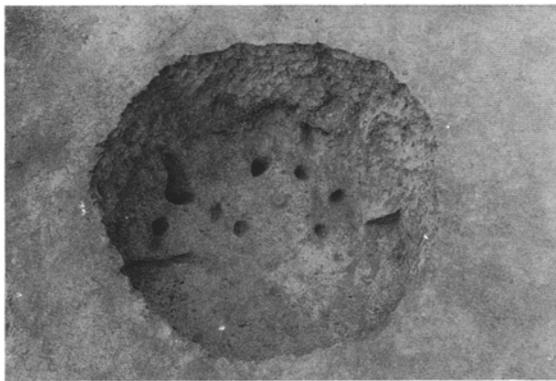
55号土坑



56号土坑



57号土壇



58号土壇



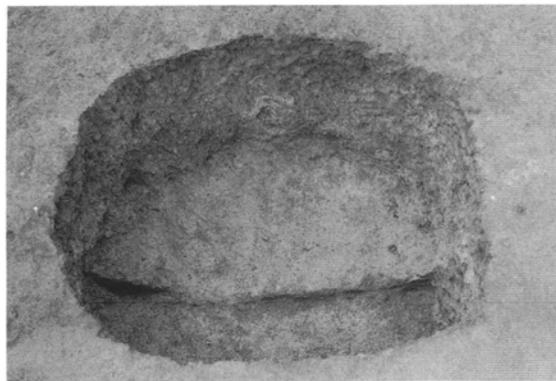
59号土壇



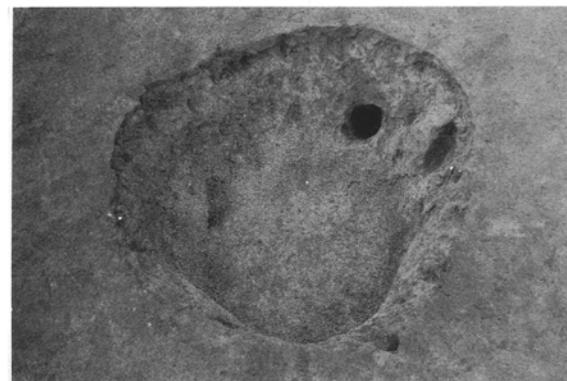
60号土壇



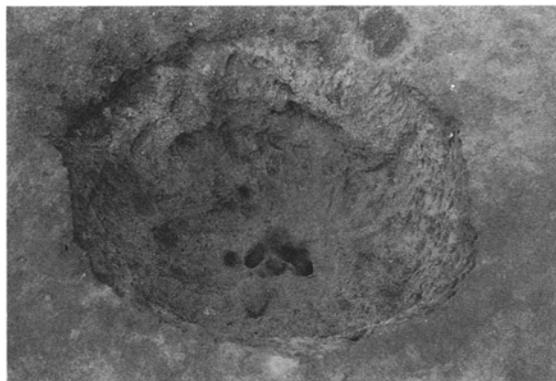
60号土壇出土遺物



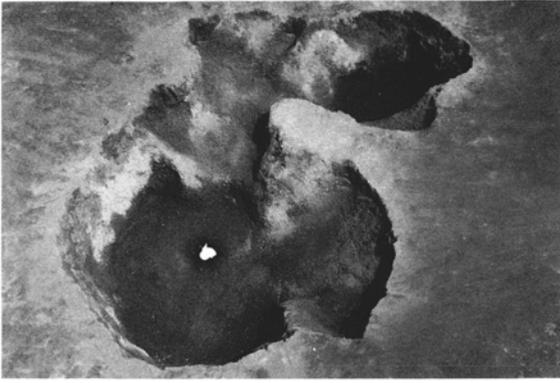
61号土壇



62号土壇



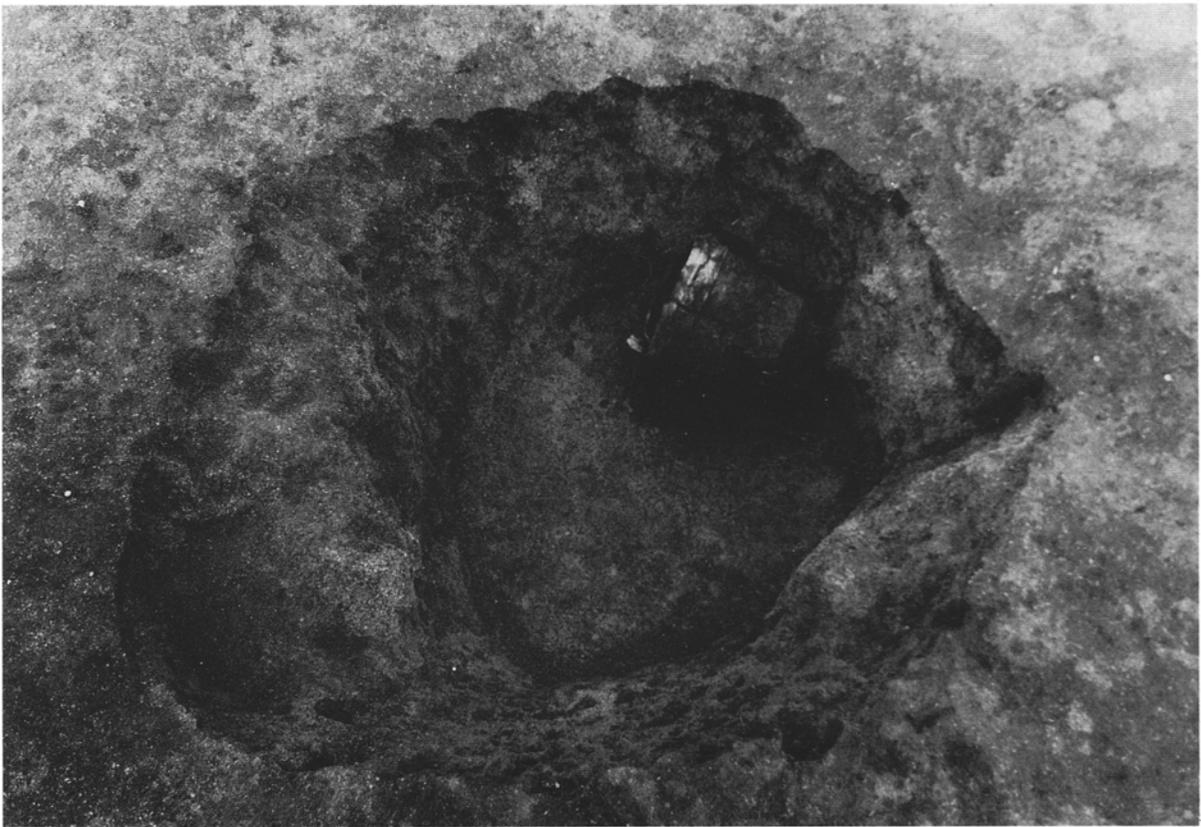
63号土壇



64号土壤



65号土壤



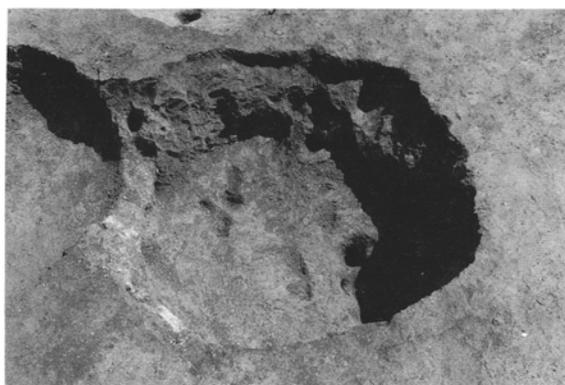
67号土壤



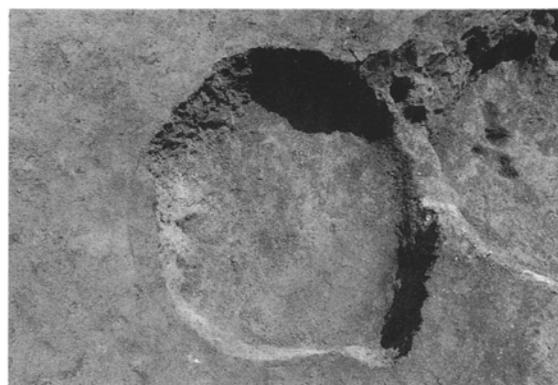
67号土壤遺物出土状態



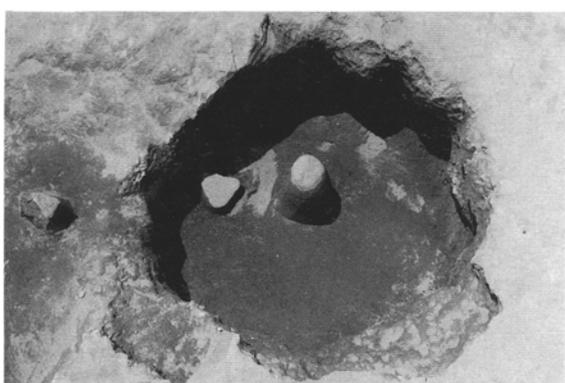
67号土壤出土遺物



68号土坑



69号土坑



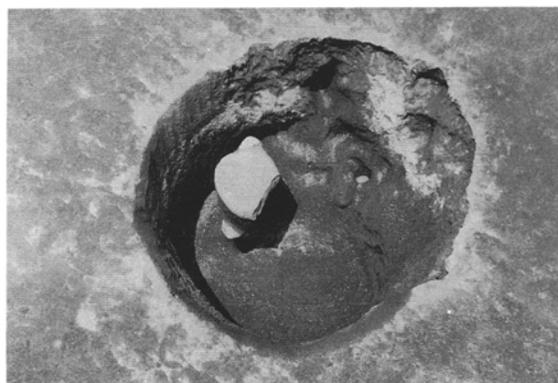
70号土坑



71号土坑



72号土坑



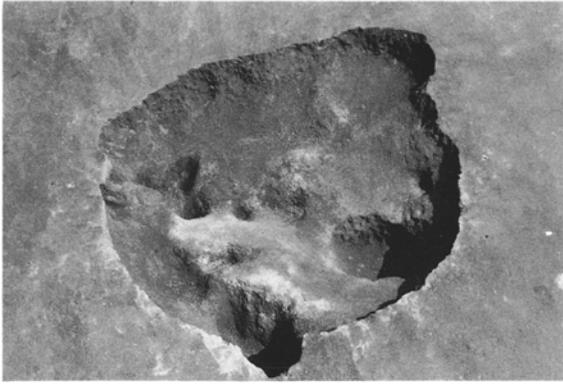
73号土坑



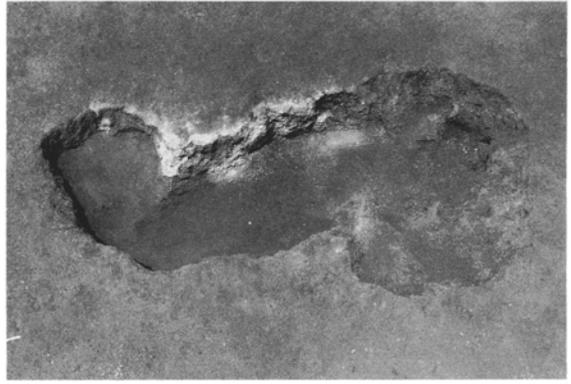
74(右)・83号土坑



75号土坑



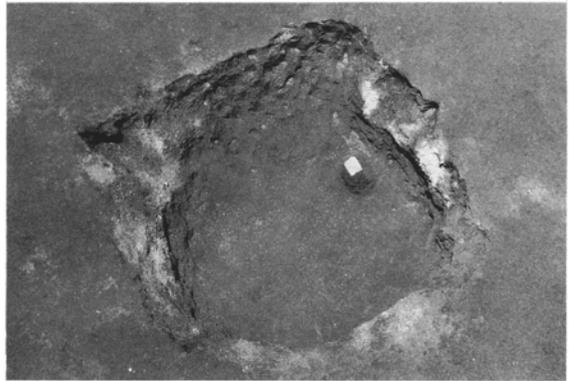
76号土坑



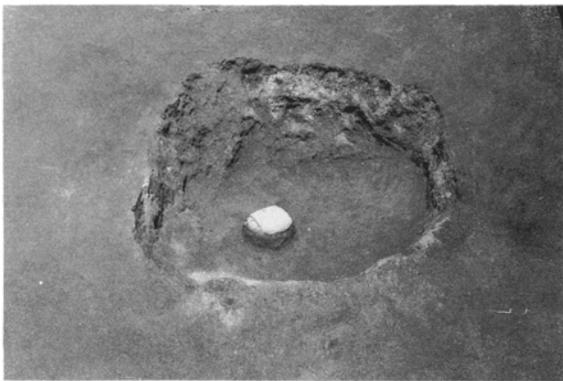
77号土坑



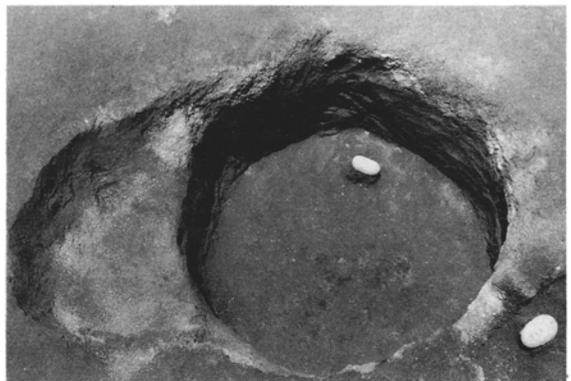
66(左)・78号土坑



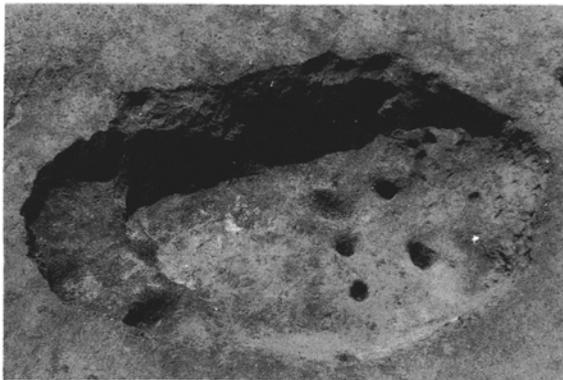
79号土坑



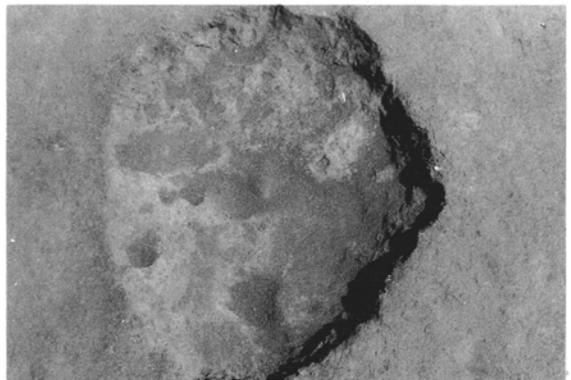
80号土坑



81号土坑



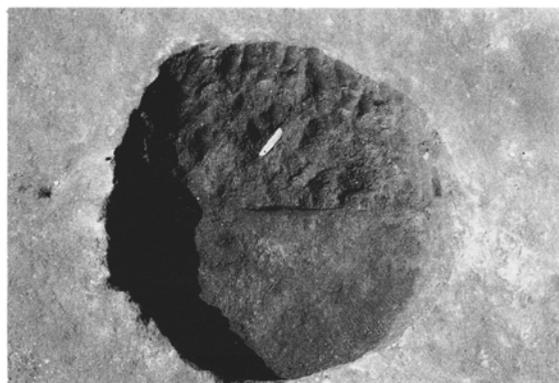
82号土坑



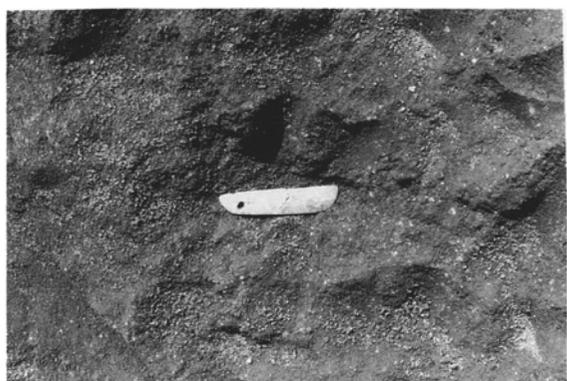
84号土坑



85号土坑



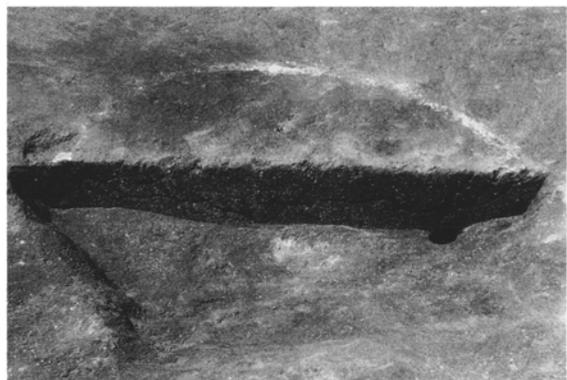
86号土坑



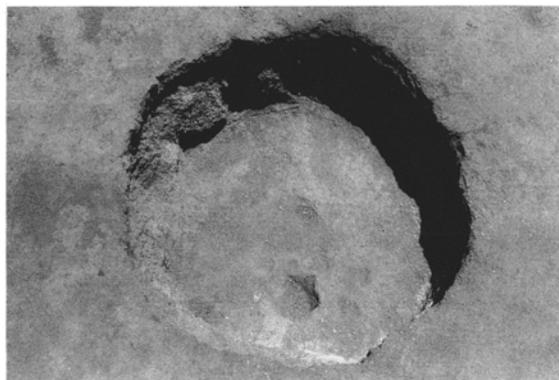
86号土坑遺物出土状態



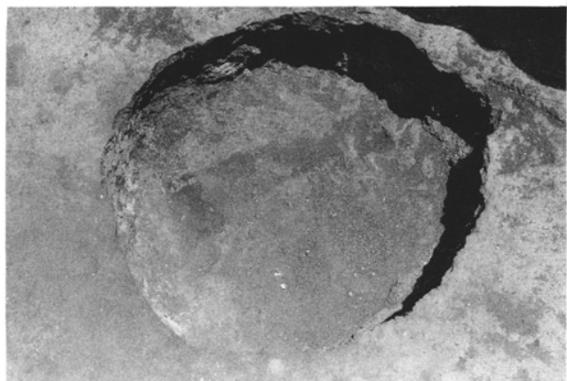
87号土坑



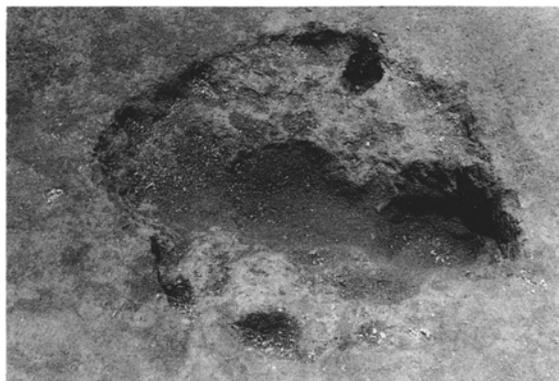
88号土坑



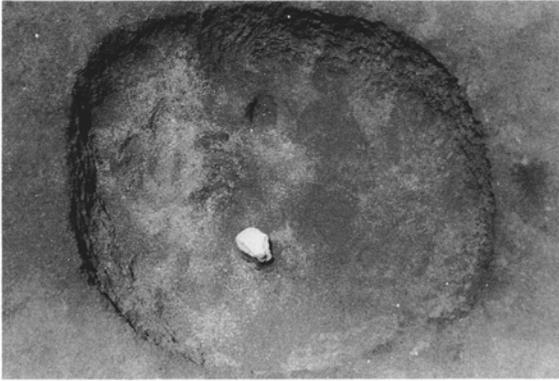
89号土坑



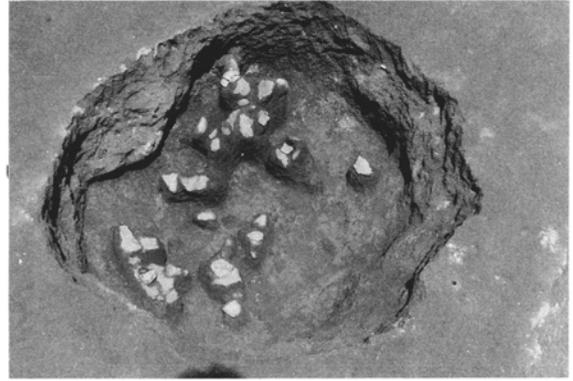
90号土坑



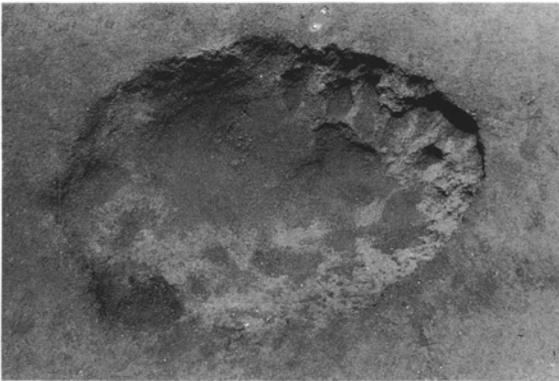
91号土坑



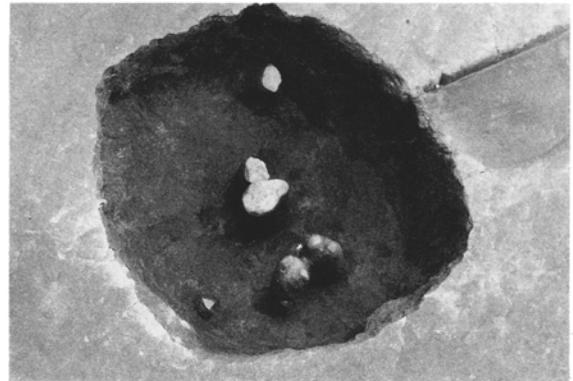
93号土坑



94号土坑



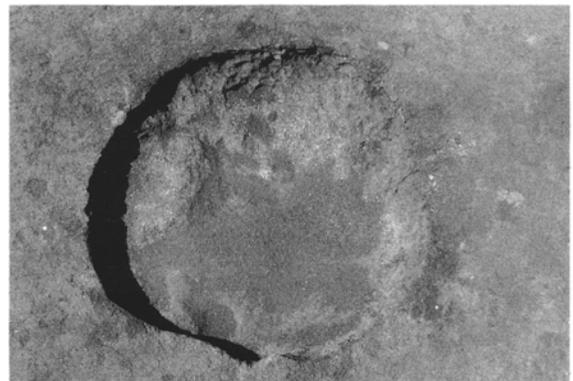
95号土坑



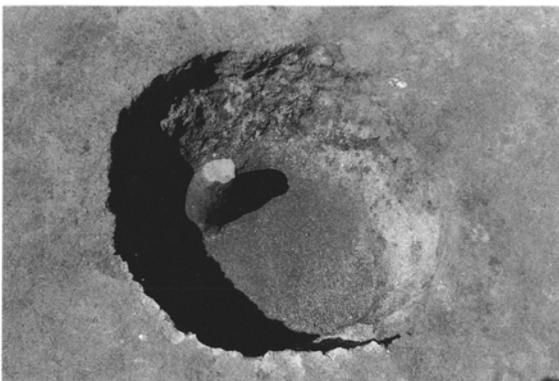
97号土坑



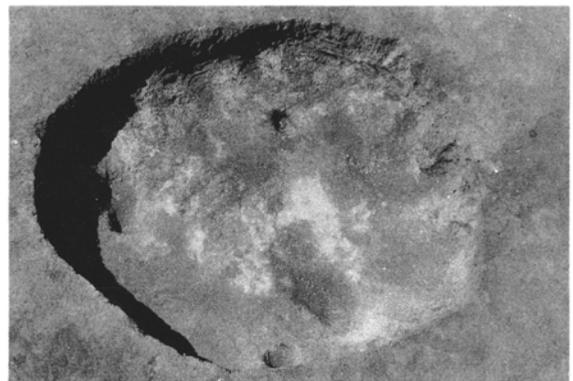
98号土坑



99号土坑



100号土坑



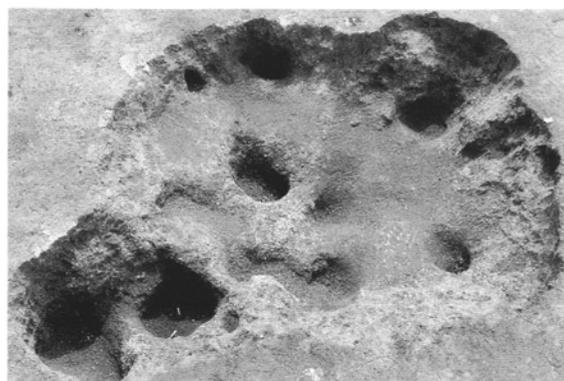
101号土坑



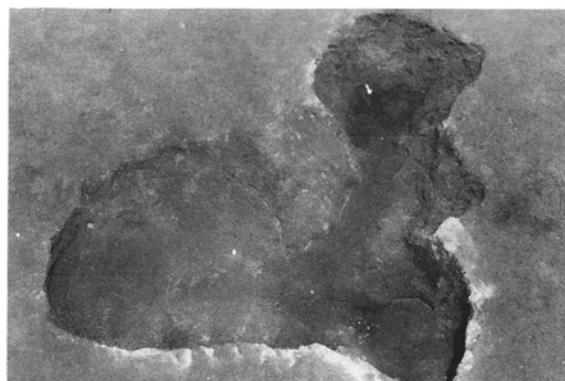
101号土壙遺物出土状態



102号土壙



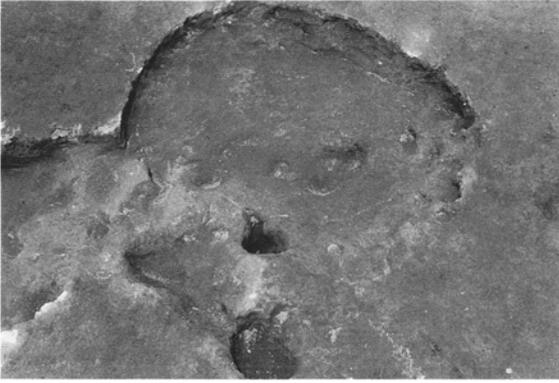
103号土壙



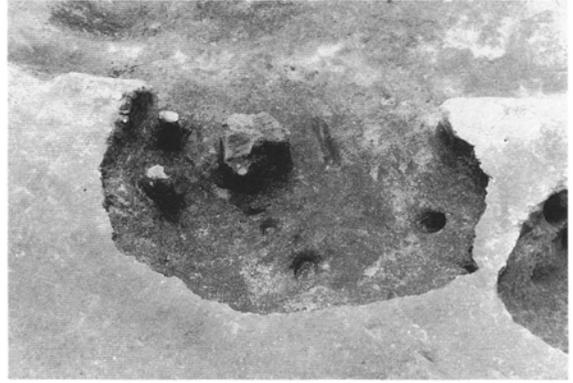
104号土壙



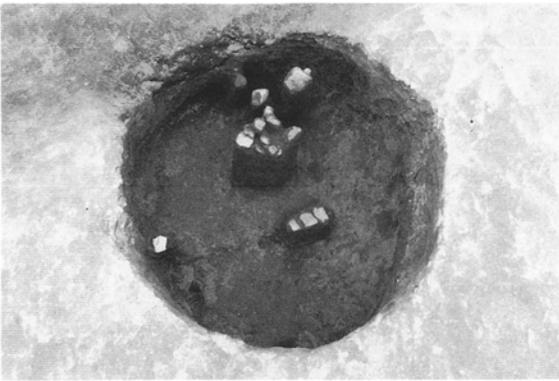
105号土壙



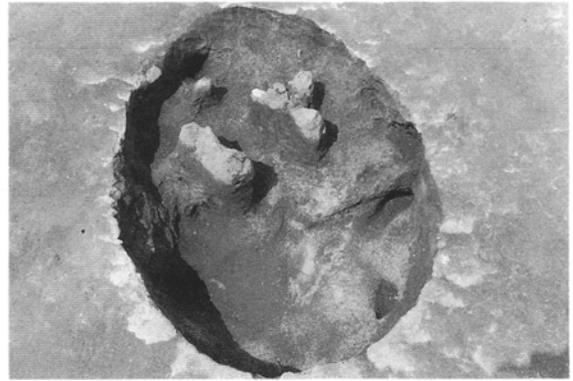
106号土壇



108号土壇



109号土壇



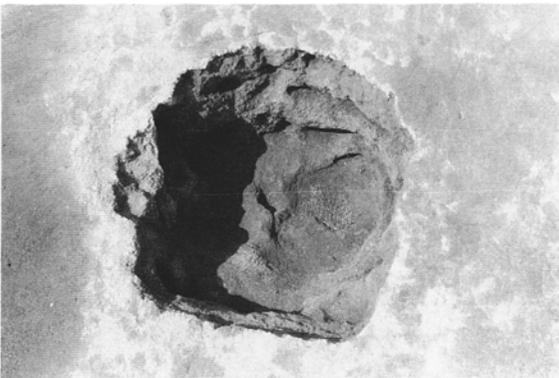
111号土壇



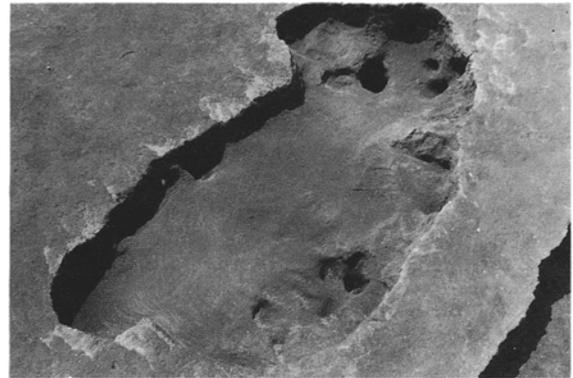
112号土壇



114号土壇



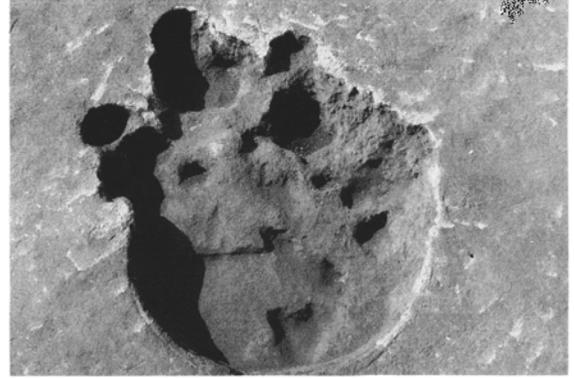
115号土壇



116号土壇



117号土坑



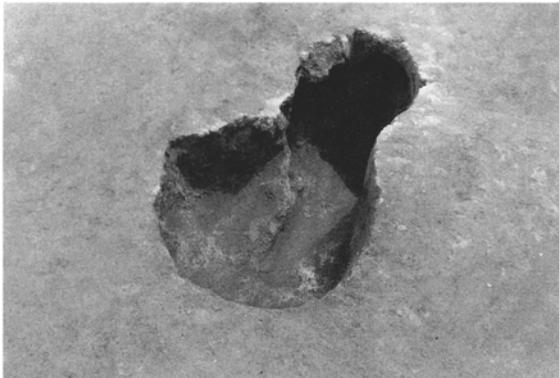
118号土坑



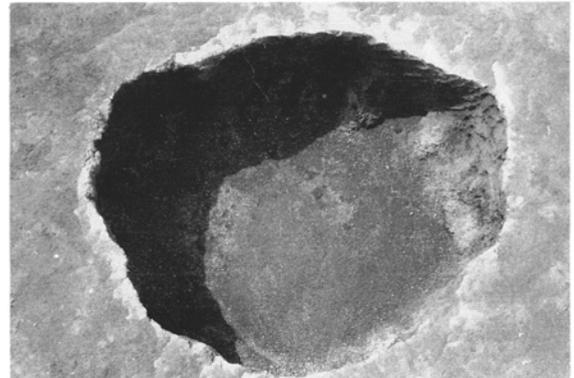
119号土坑



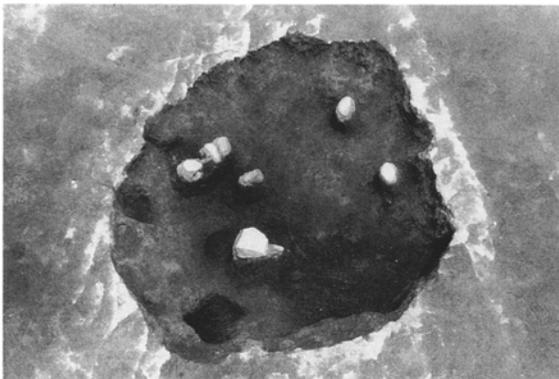
120号土坑



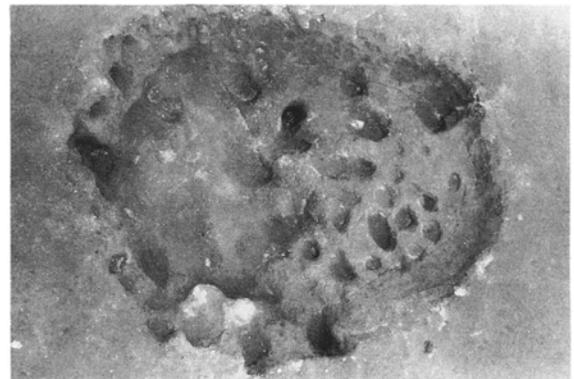
121号土坑



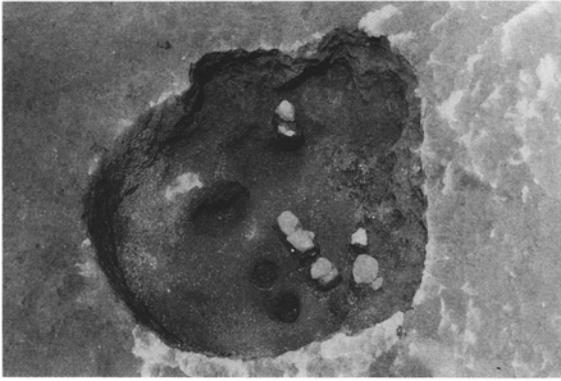
122号土坑



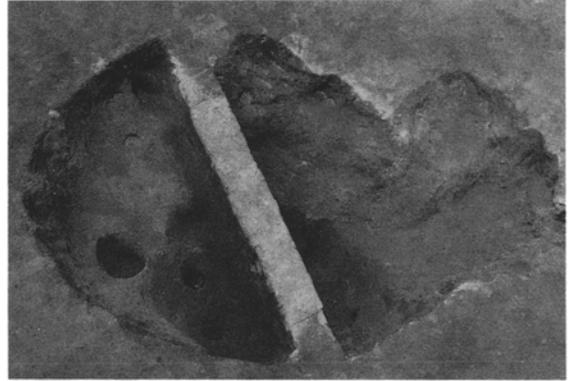
123号土坑



124号土坑



125号土壇



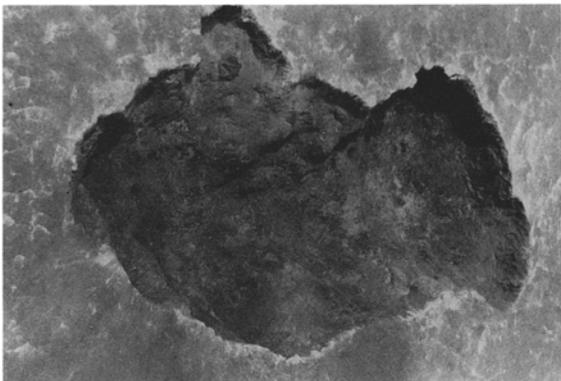
126号土壇



131号土壇



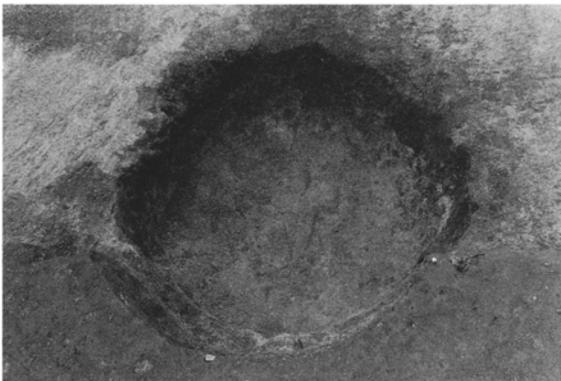
132号土壇



133号土壇



135号土壇



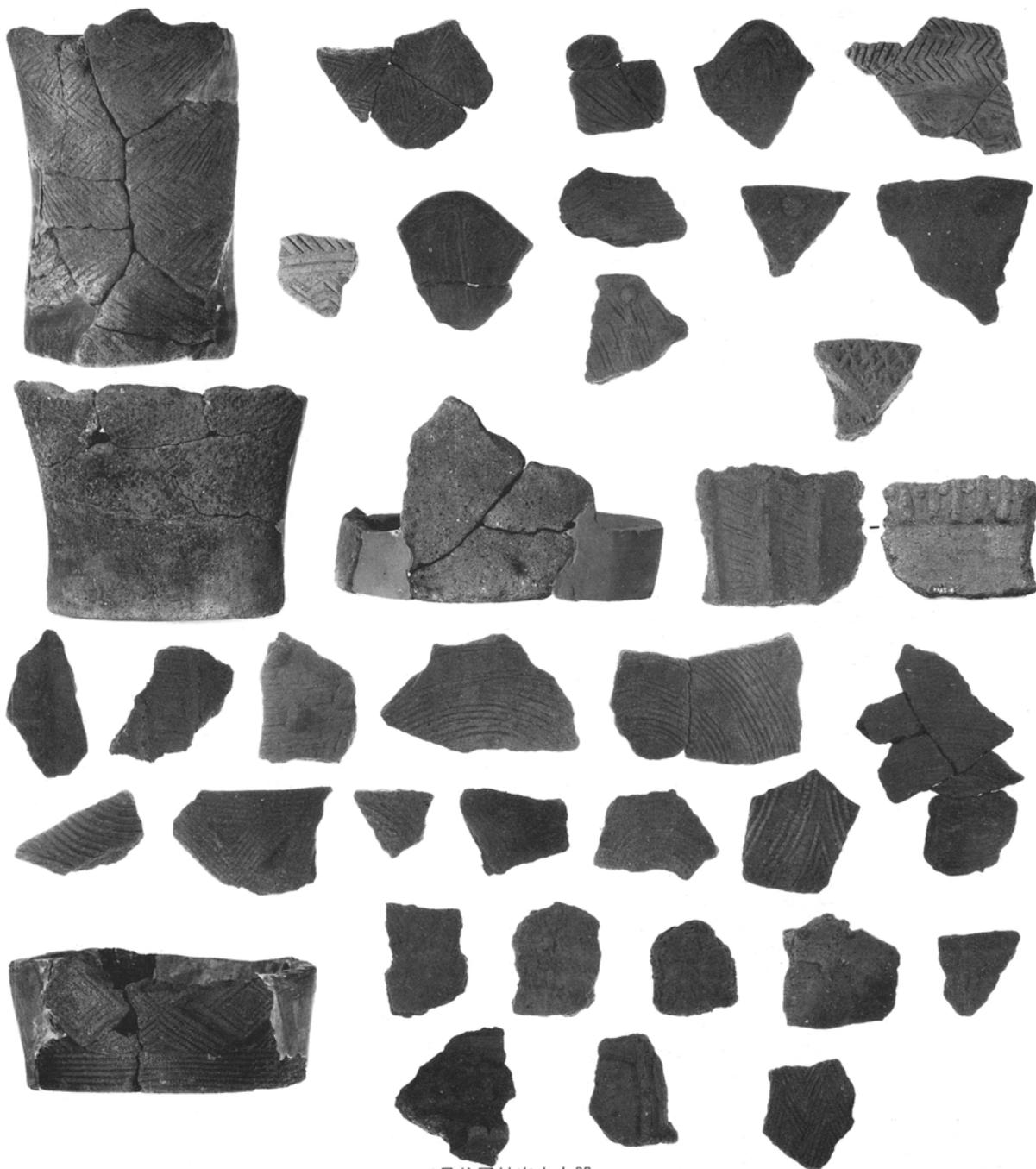
136号土壇



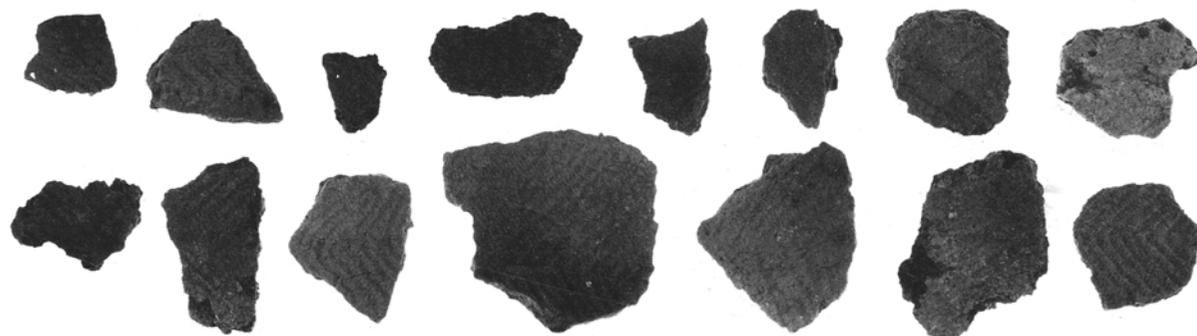
137号土壇



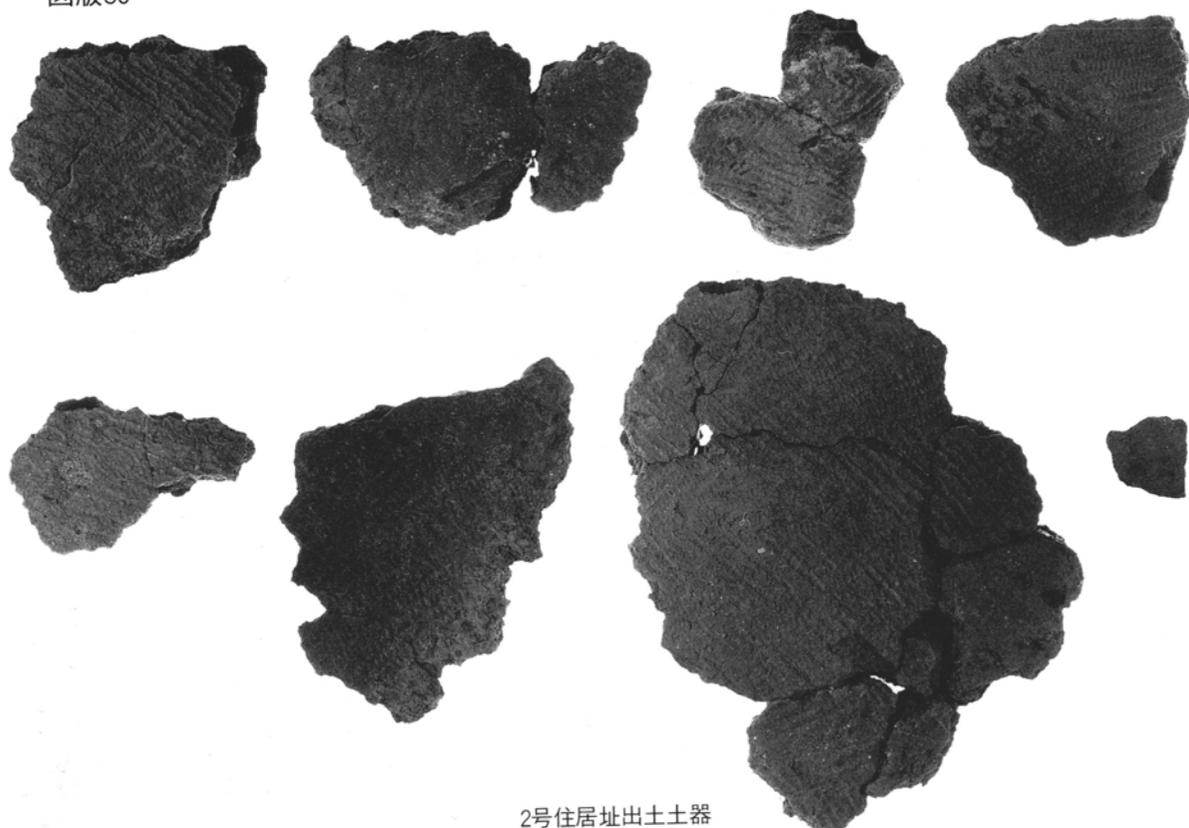
1号住居址出土土器



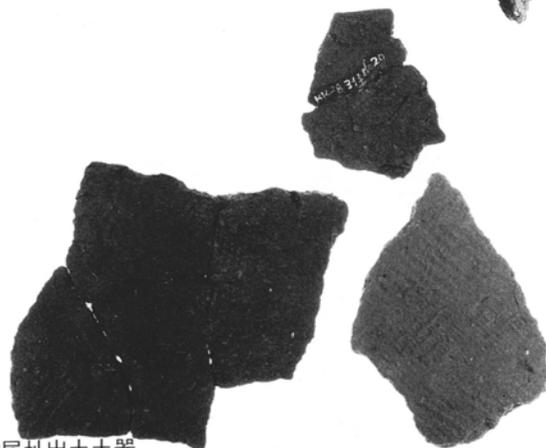
1号住居址出土土器



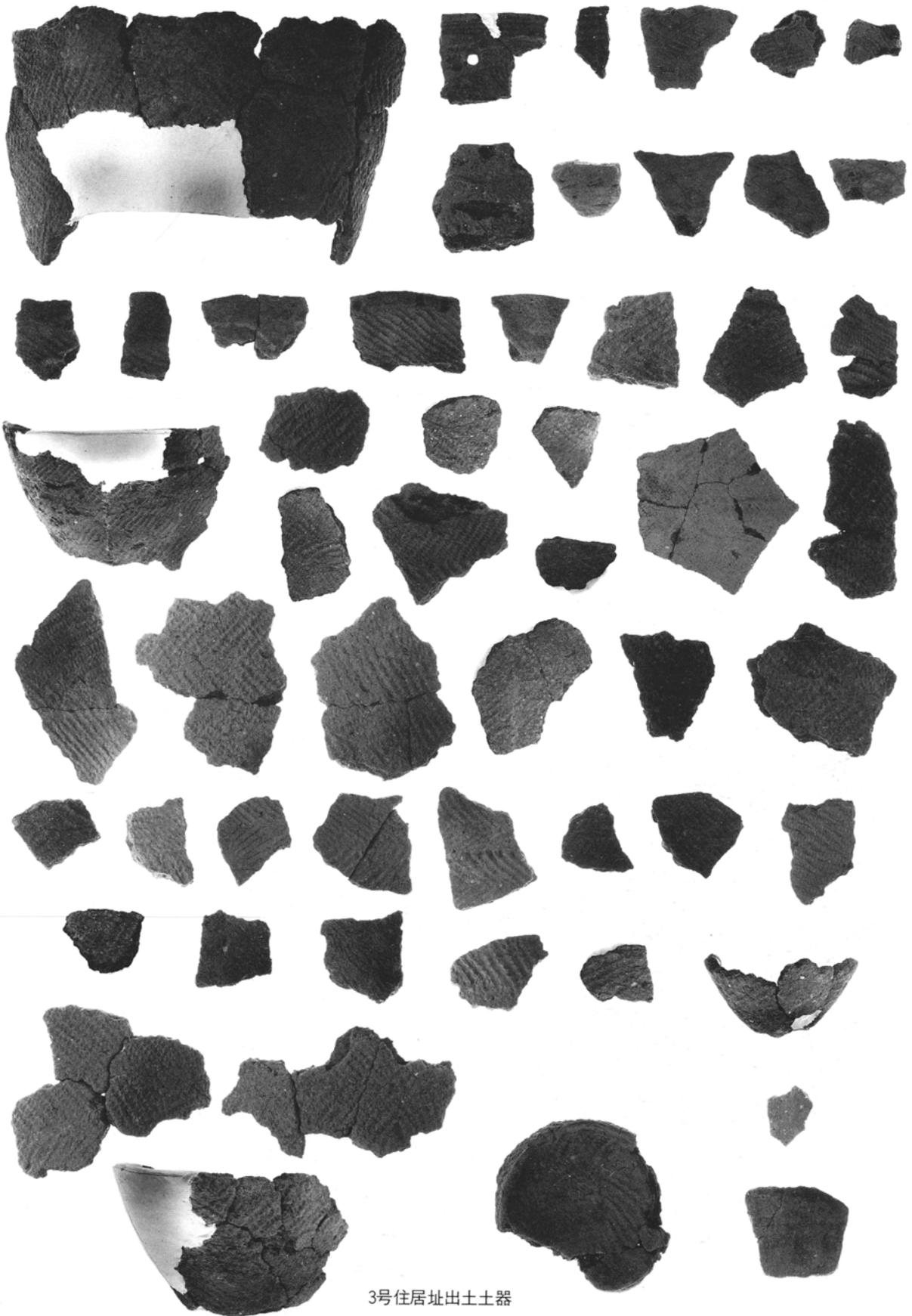
2号住居址出土土器



2号住居址出土土器



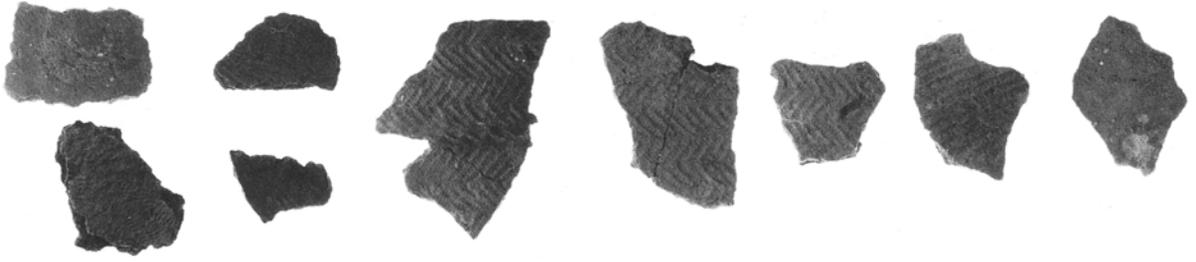
3号住居址出土土器



3号住居址出土土器



4号住居址出土土器

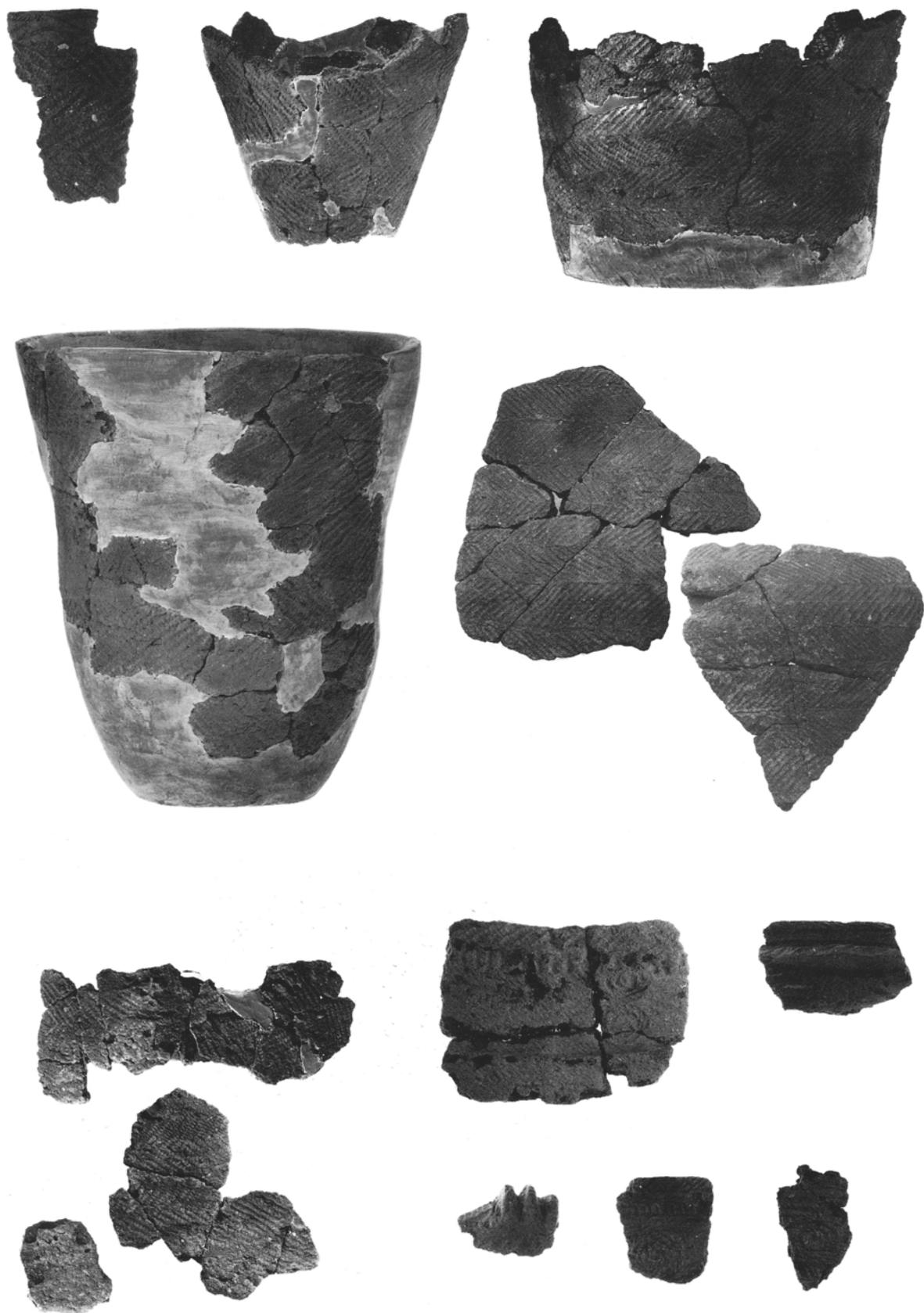


4号住居址出土土器



6号住居址出土土器

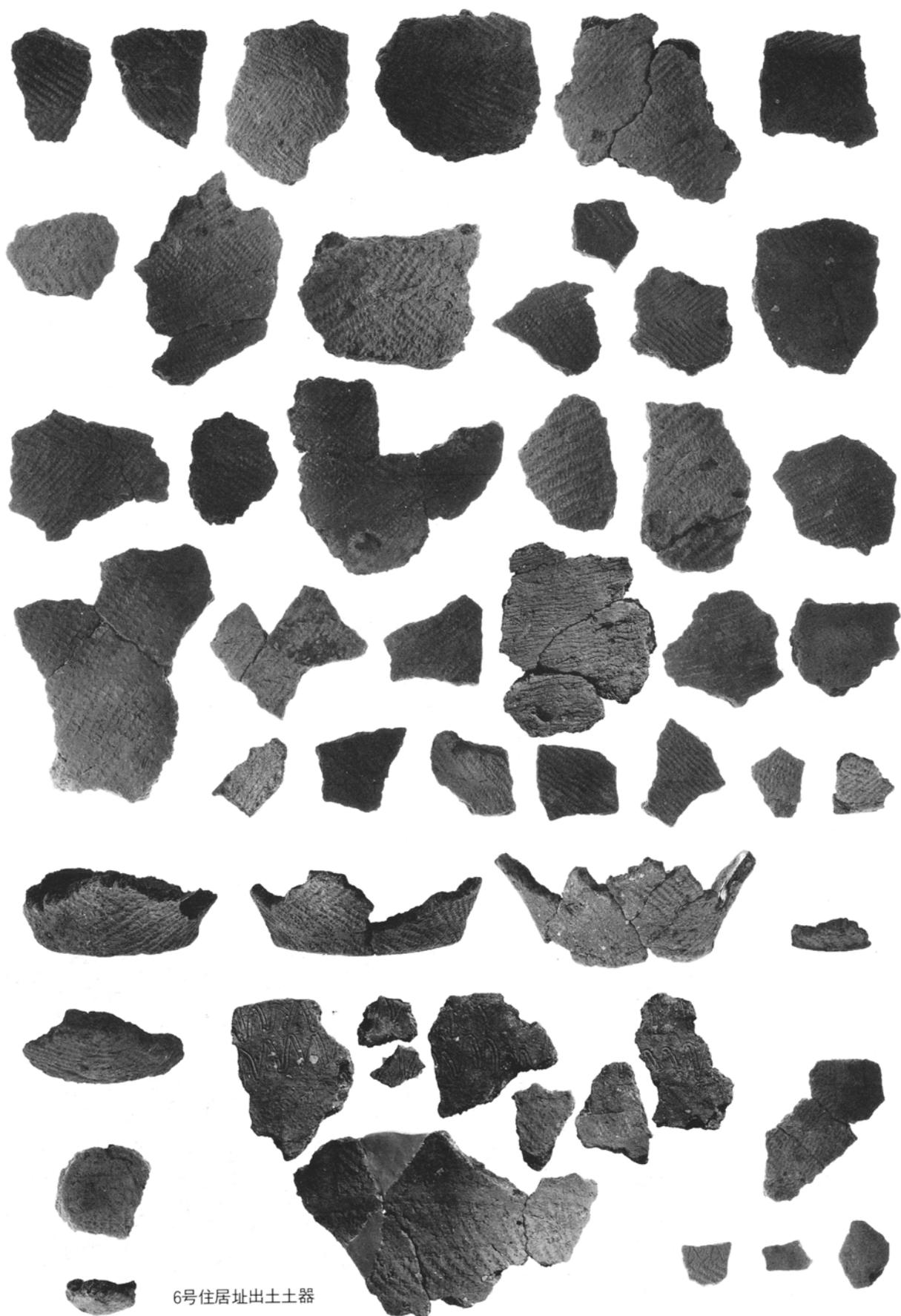


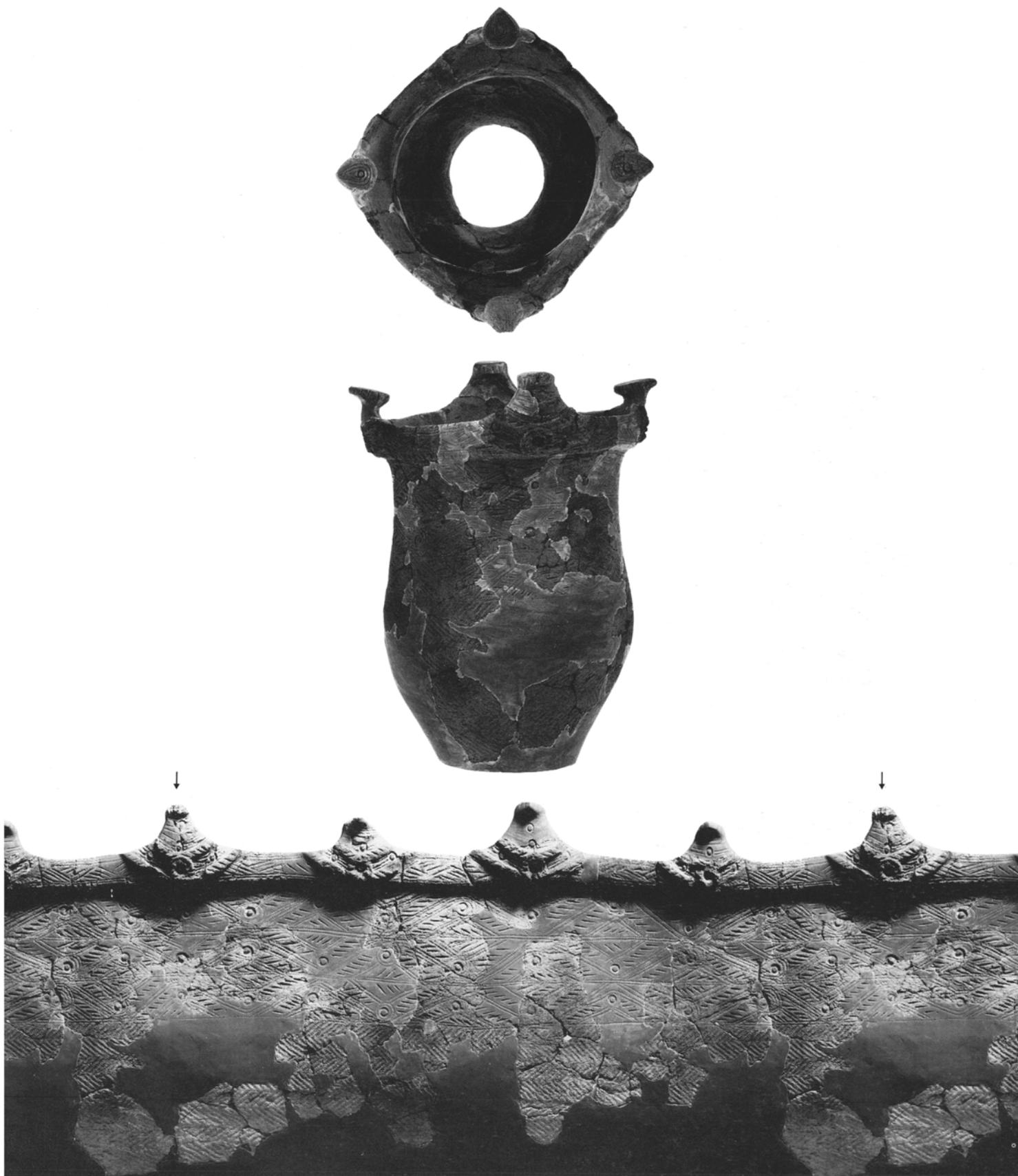


6号住居址出土土器

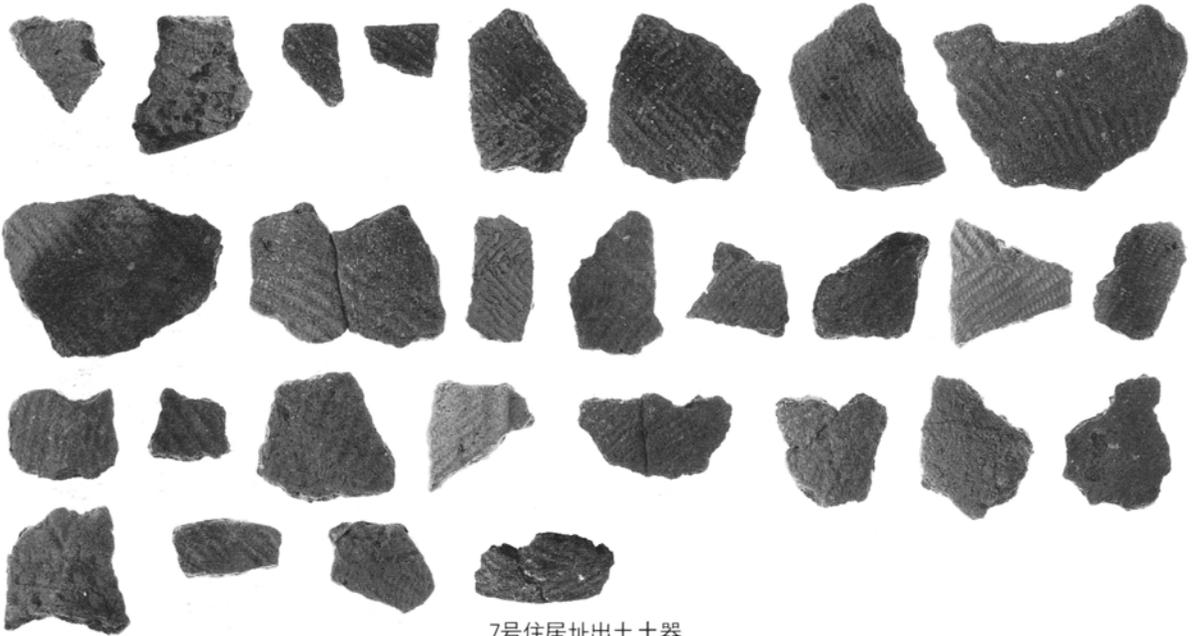


6号住居址出土土器

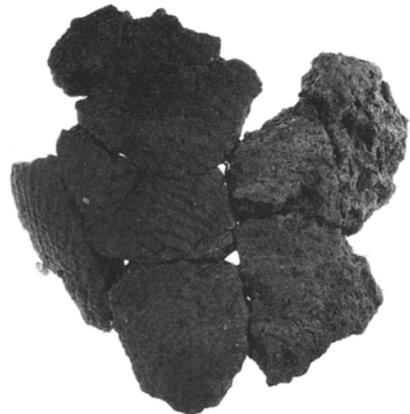




7号住居址出土土器



7号住居址出土土器



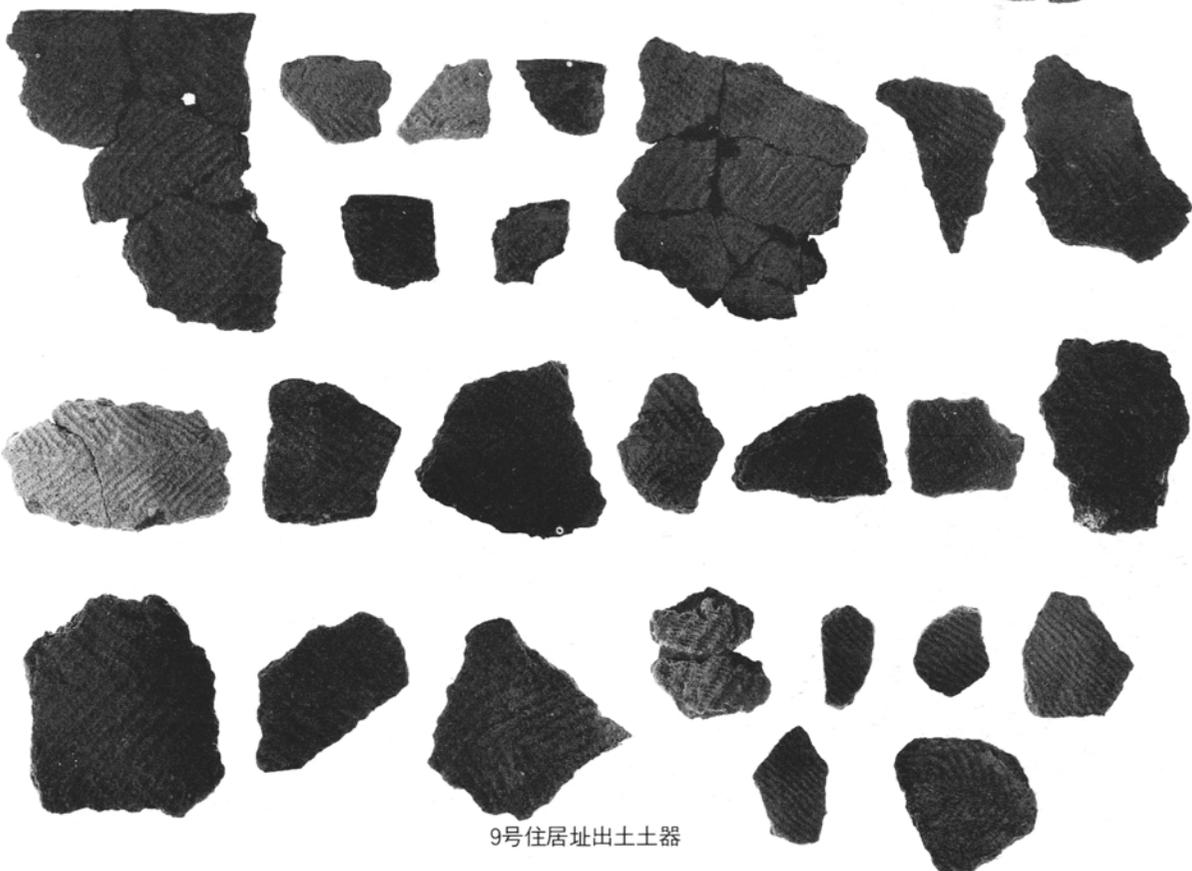
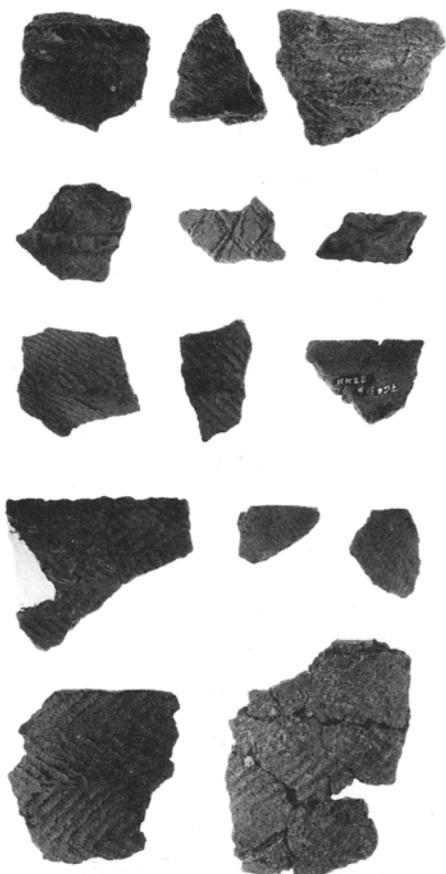
8号住居址出土土器



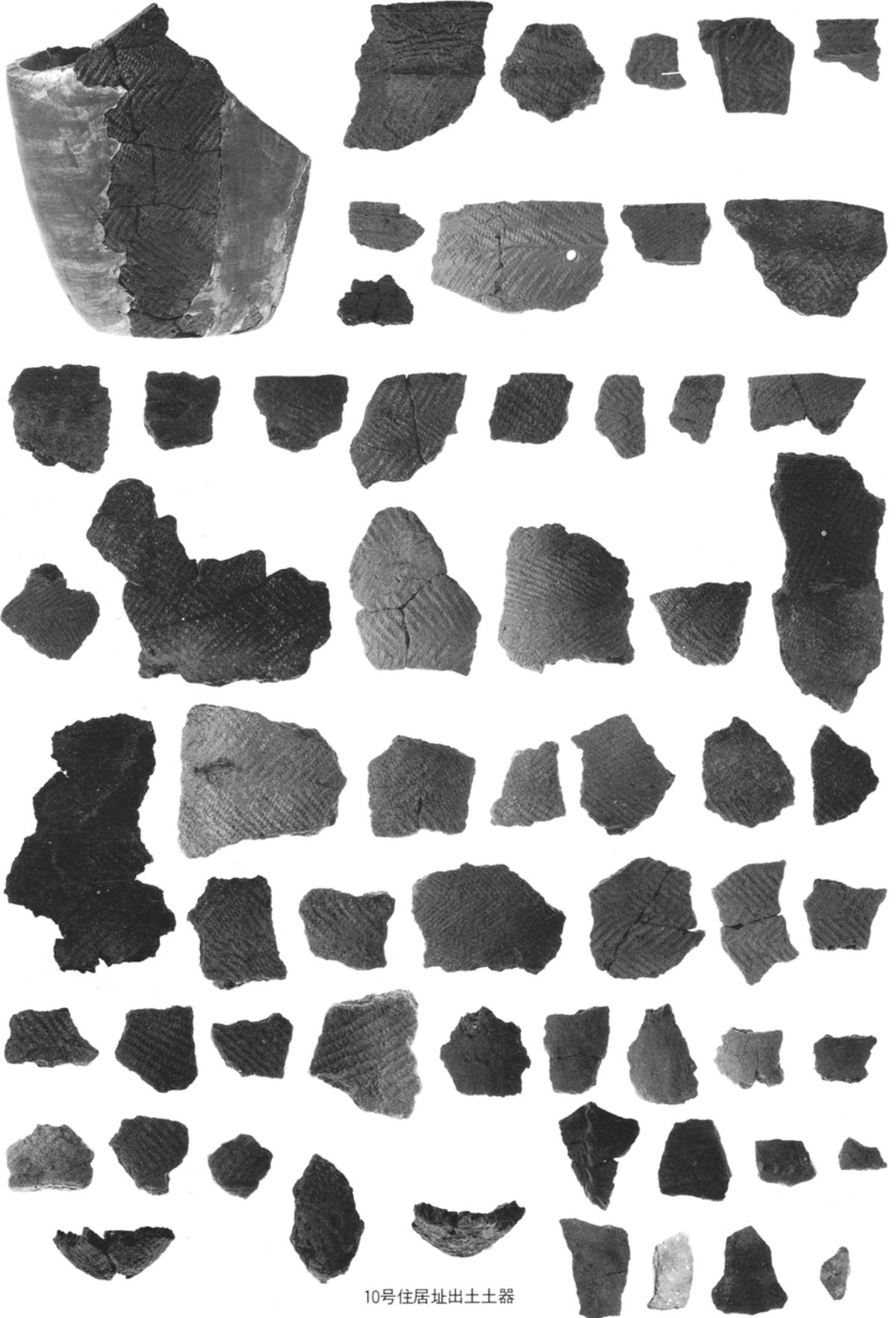
8号住居址出土土器



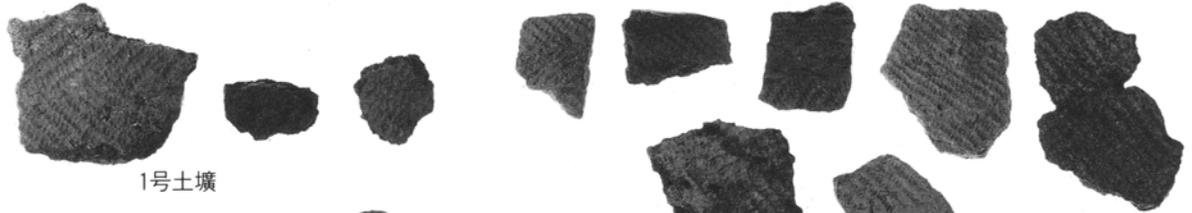
9号住居址出土土器



9号住居址出土土器

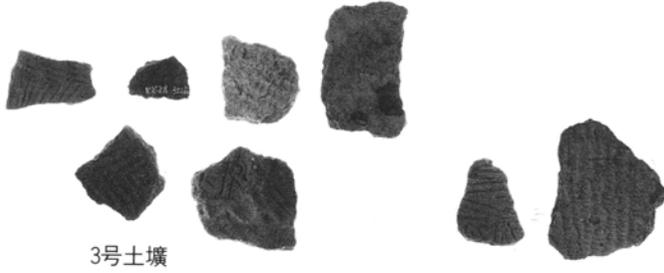


10号住居址出土土器



1号土壙

2号土壙

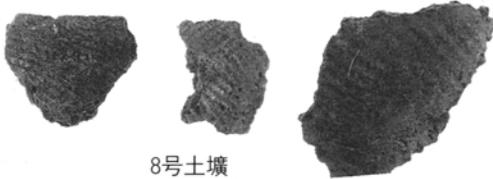


3号土壙

4号土壙



6号土壙



8号土壙



5号土壙



9号土壙



10号土壙



12号土壙



14号土壙



13号土壙

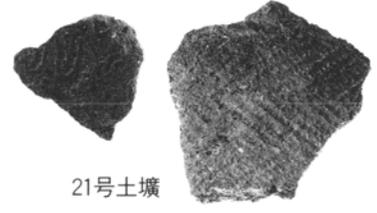


16号土壙



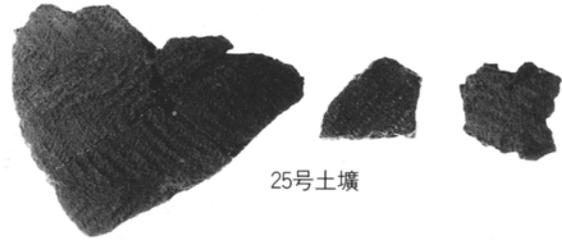
17号土壌

20号土壌



21号土壌

24号土壌



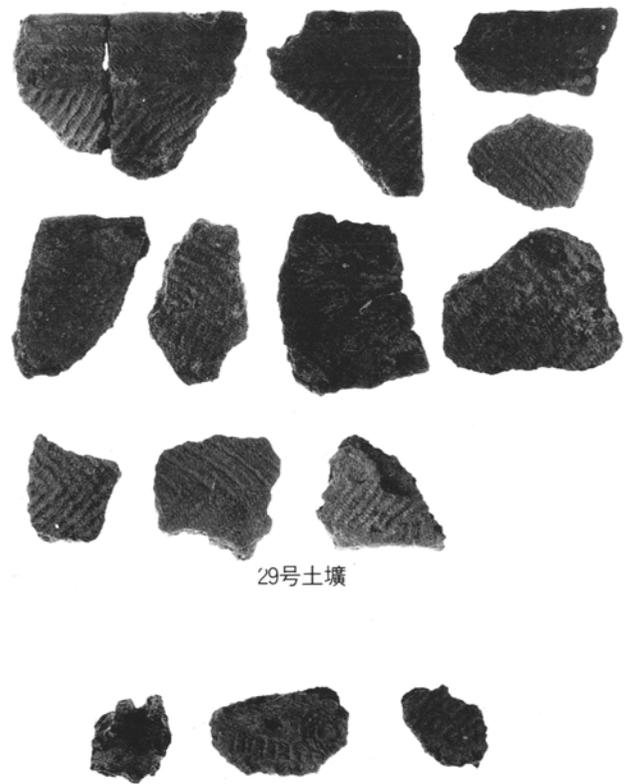
25号土壌

26号土壌



27号土壌

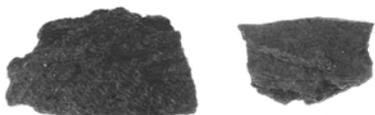
29号土壌



30号土壌



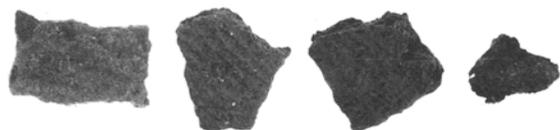
32号土壙



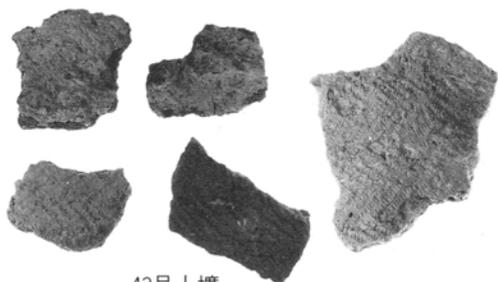
33号土壙



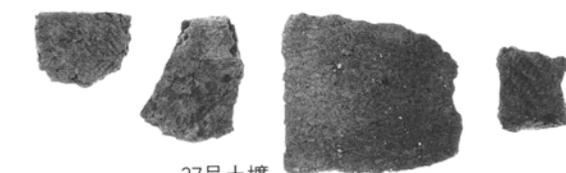
41号土壙



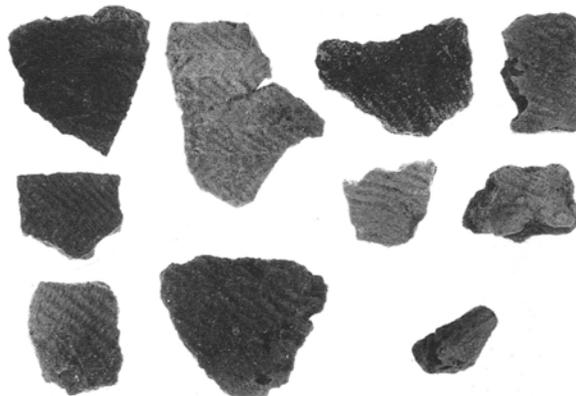
37号土壙



43号土壙



51号土壙



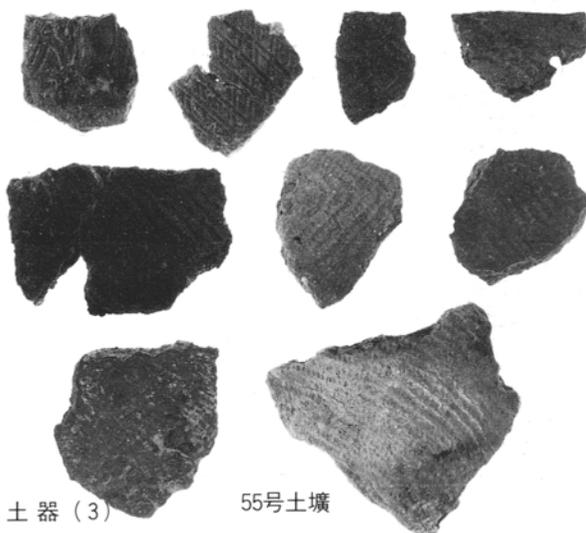
55号土壙

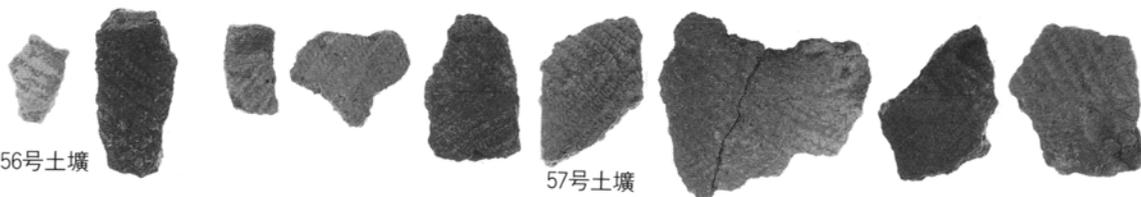


54号土壙



土壙出土土器(3)





56号土壌

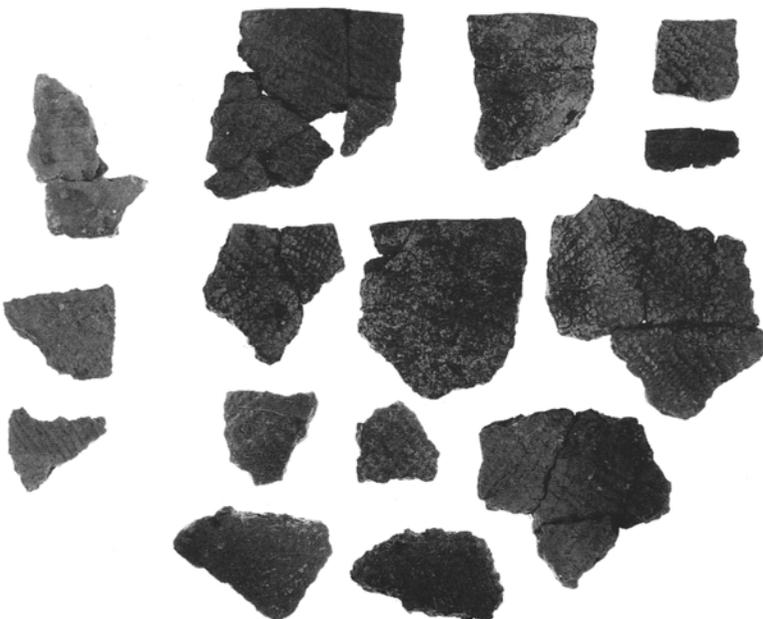
57号土壌



58号土壌



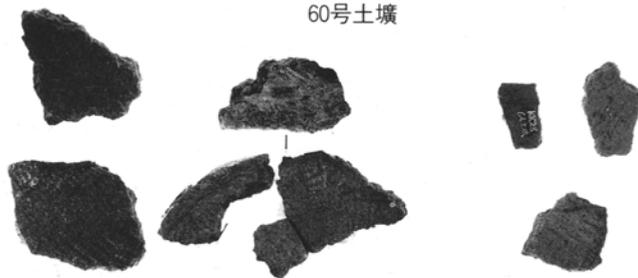
59号土壌



60号土壌



61号土壌



63号土壌

64号土壌

土壌出土土器(4)



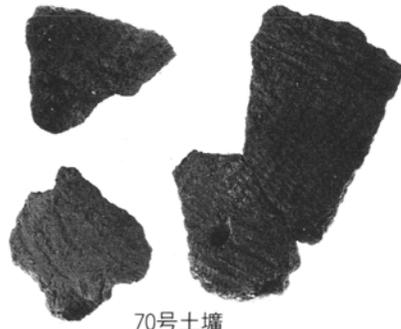
66号土塊



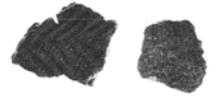
67号土塊  
土塊出土土器(5)



68号土壤



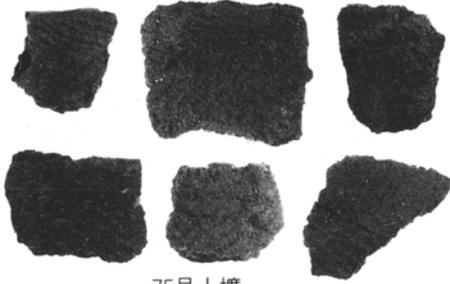
70号土壤



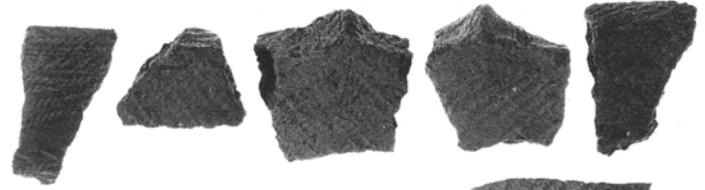
72号土壤



74号土壤



75号土壤



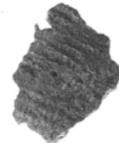
76号土壤



78号土壤



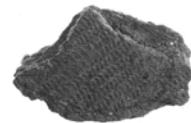
79号土壤



80号土壤



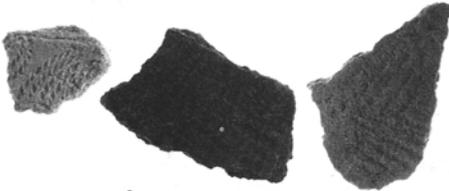
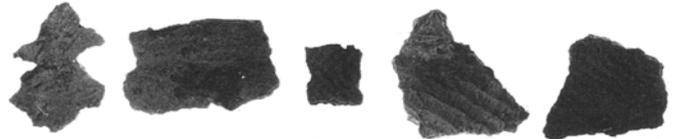
81号土壤



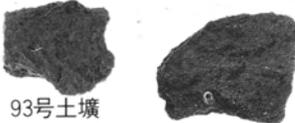
89号土壤



90号土壤



92号土壤



93号土壤



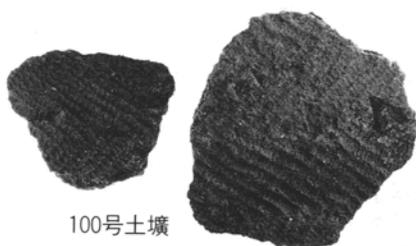
94号土壤



95号土壤



97号土壤



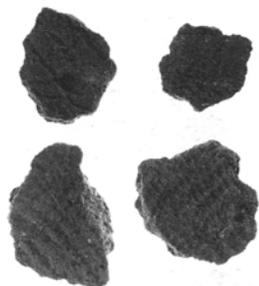
100号土壤



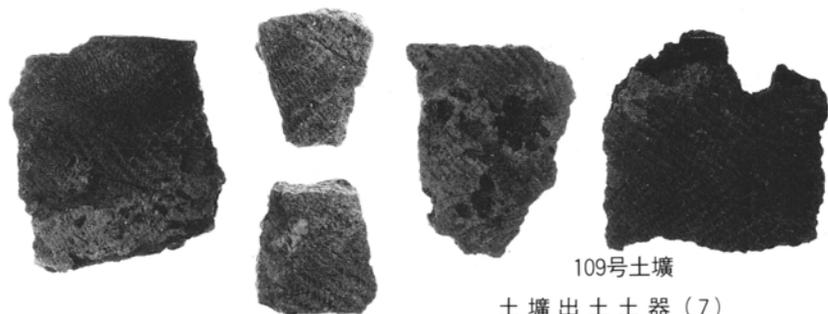
101号土壤



105号土壤

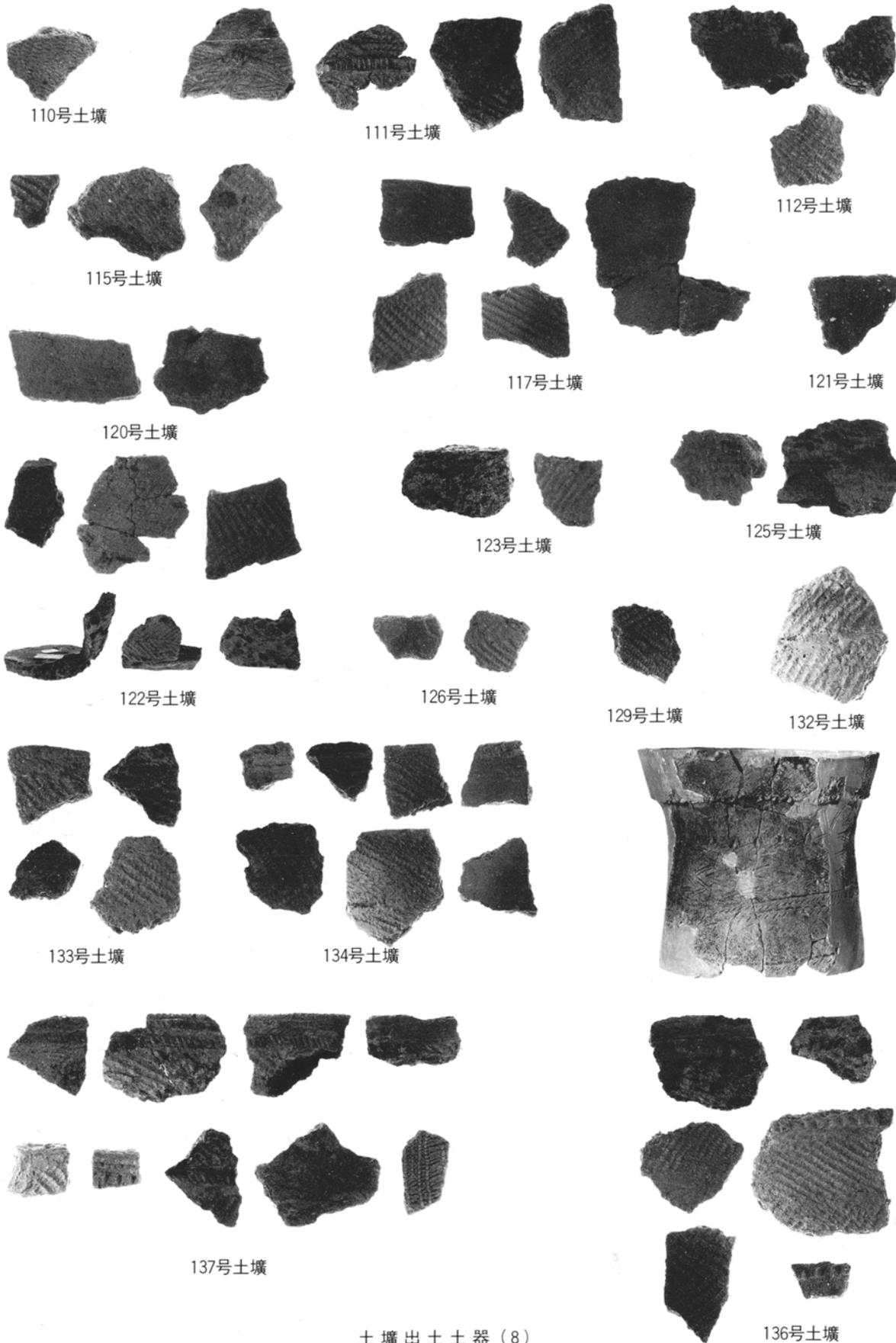


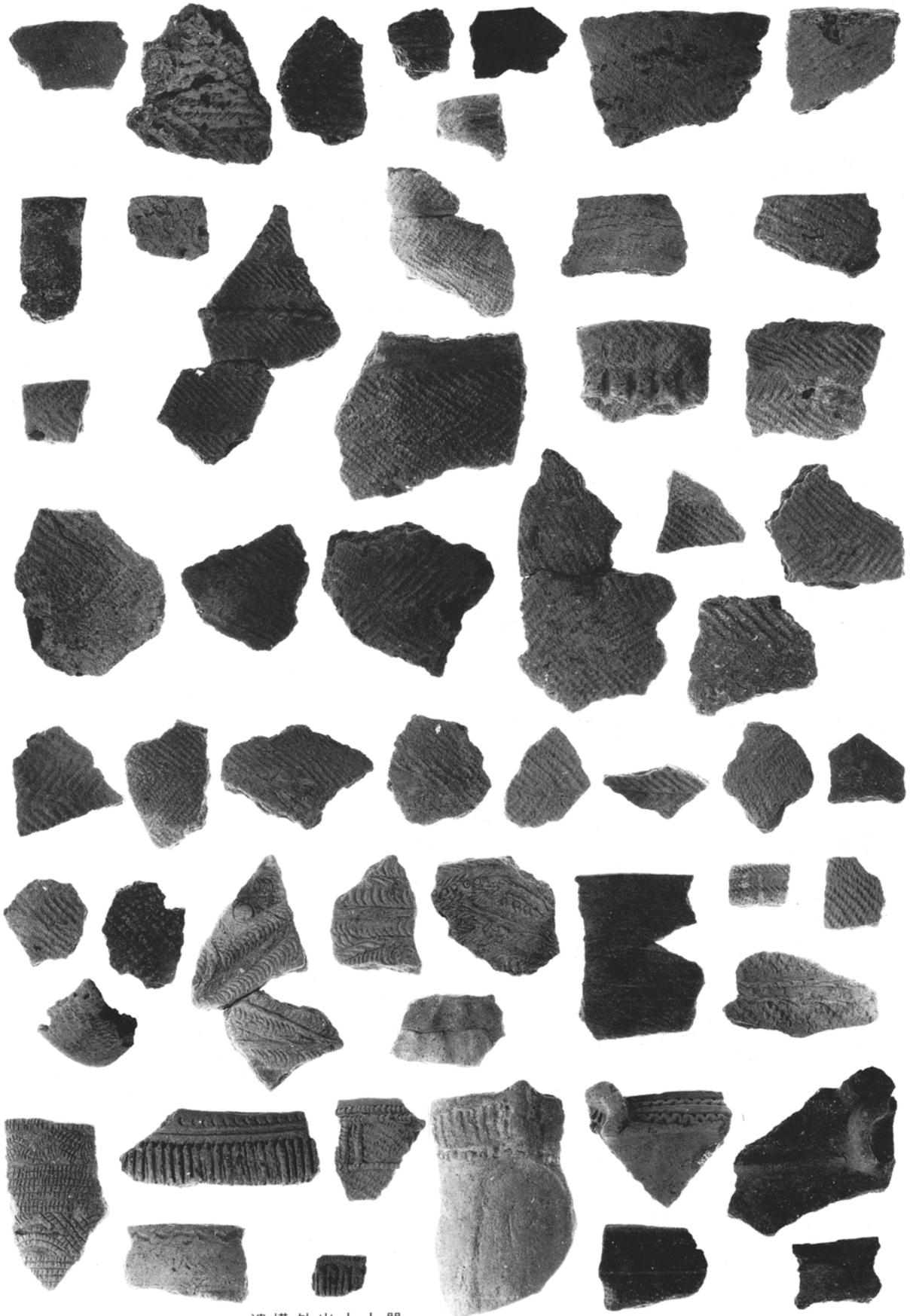
108号土壤



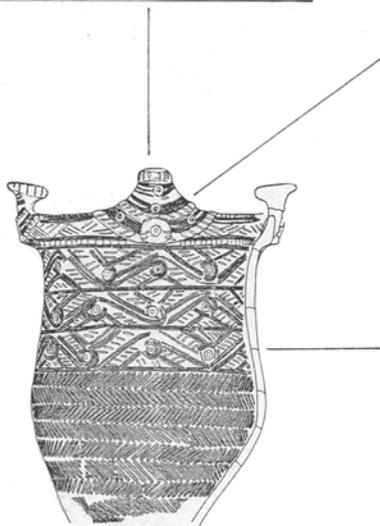
109号土壤

土壤出土土器(7)

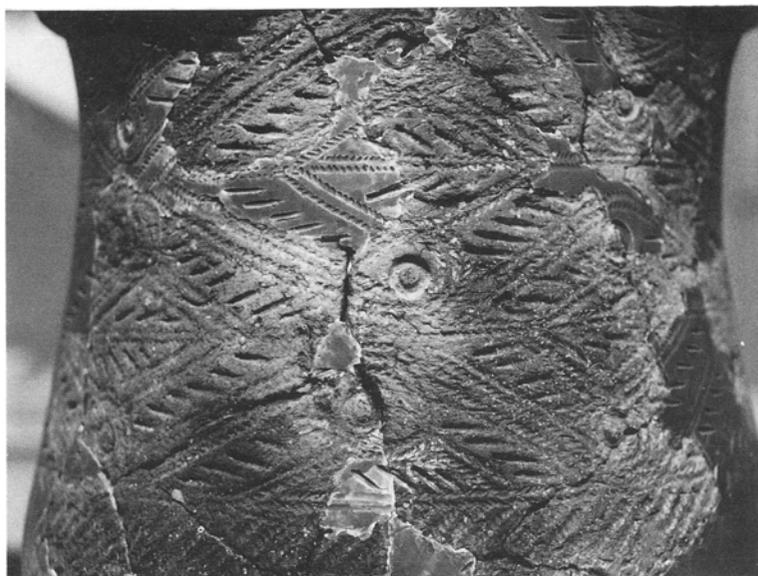




遺構外出土土器



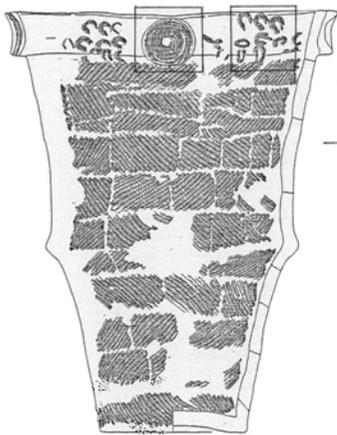
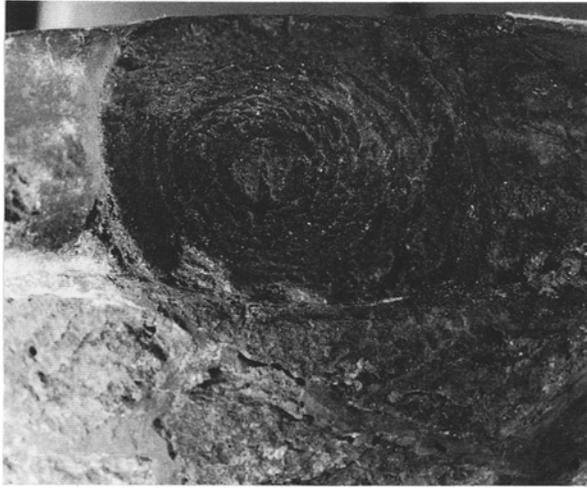
7号住居址 279



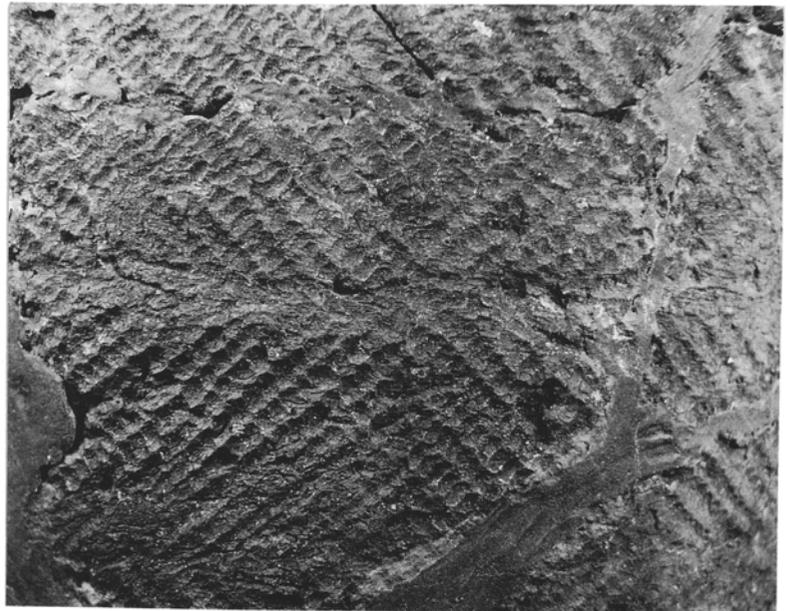
部分写真



復元前写真

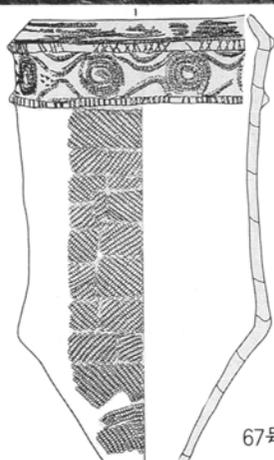


9号住居址 367





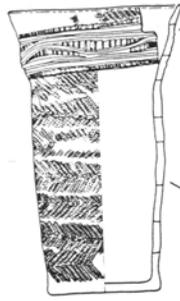
部分写真



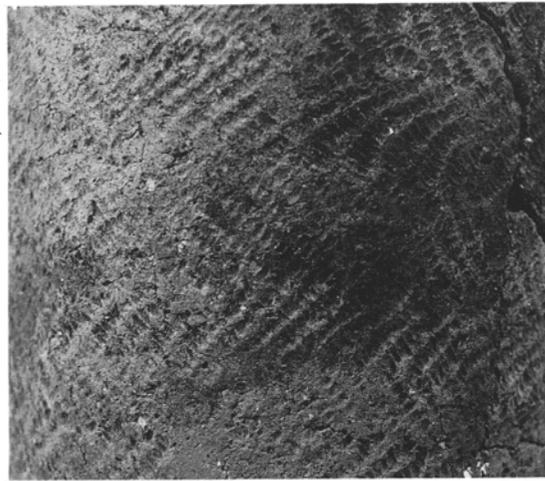
67号土壇 475



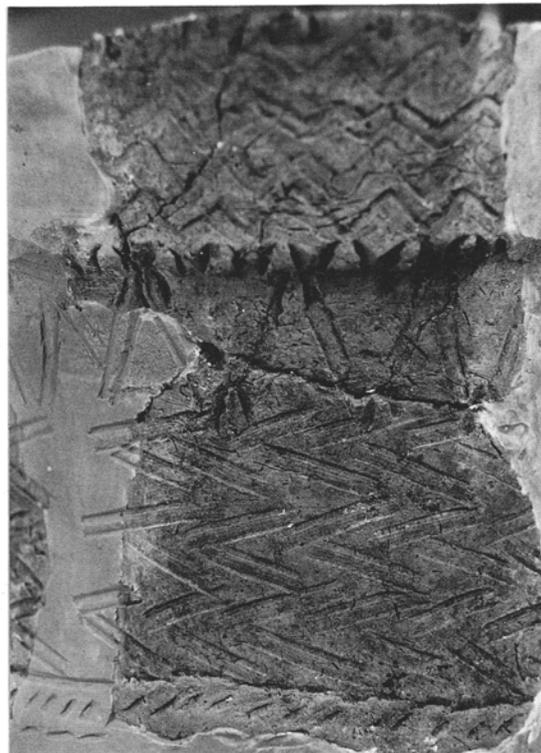
被災前の状態



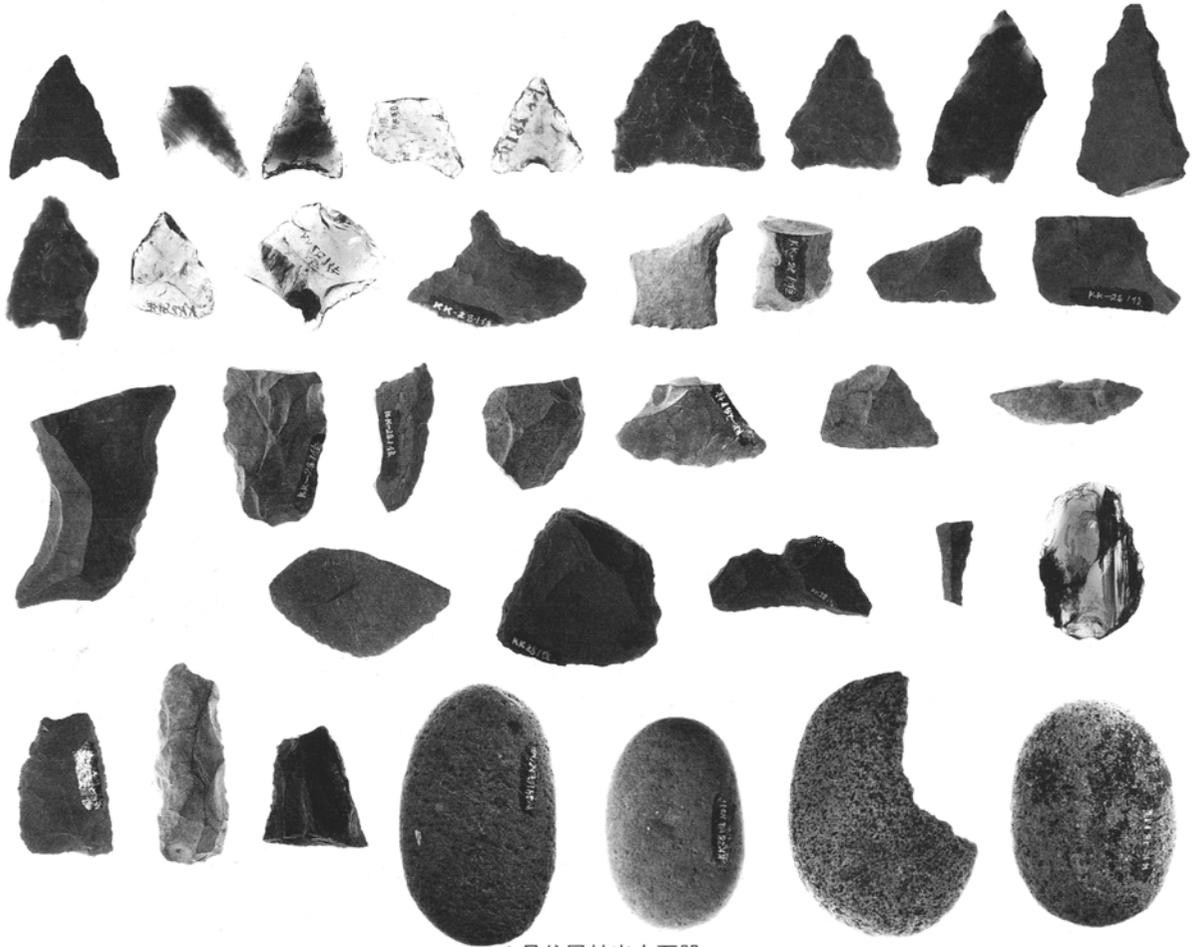
5号土壙 469



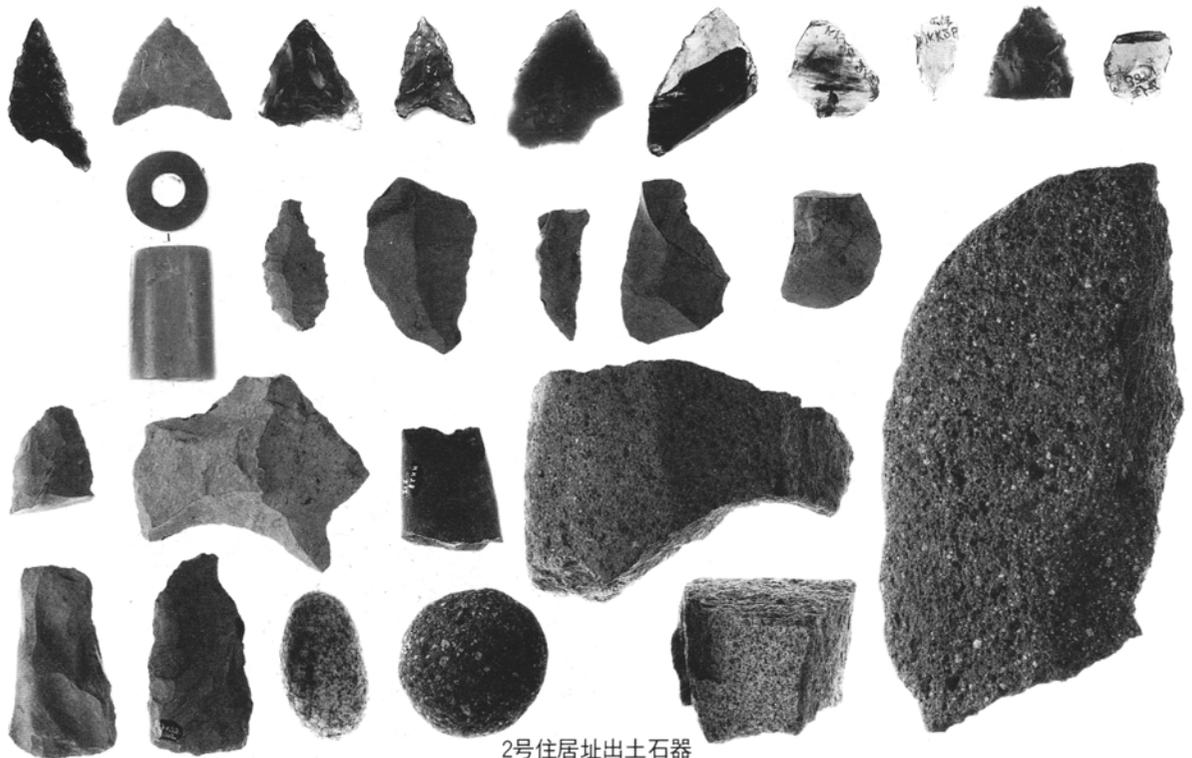
136号土壙 478



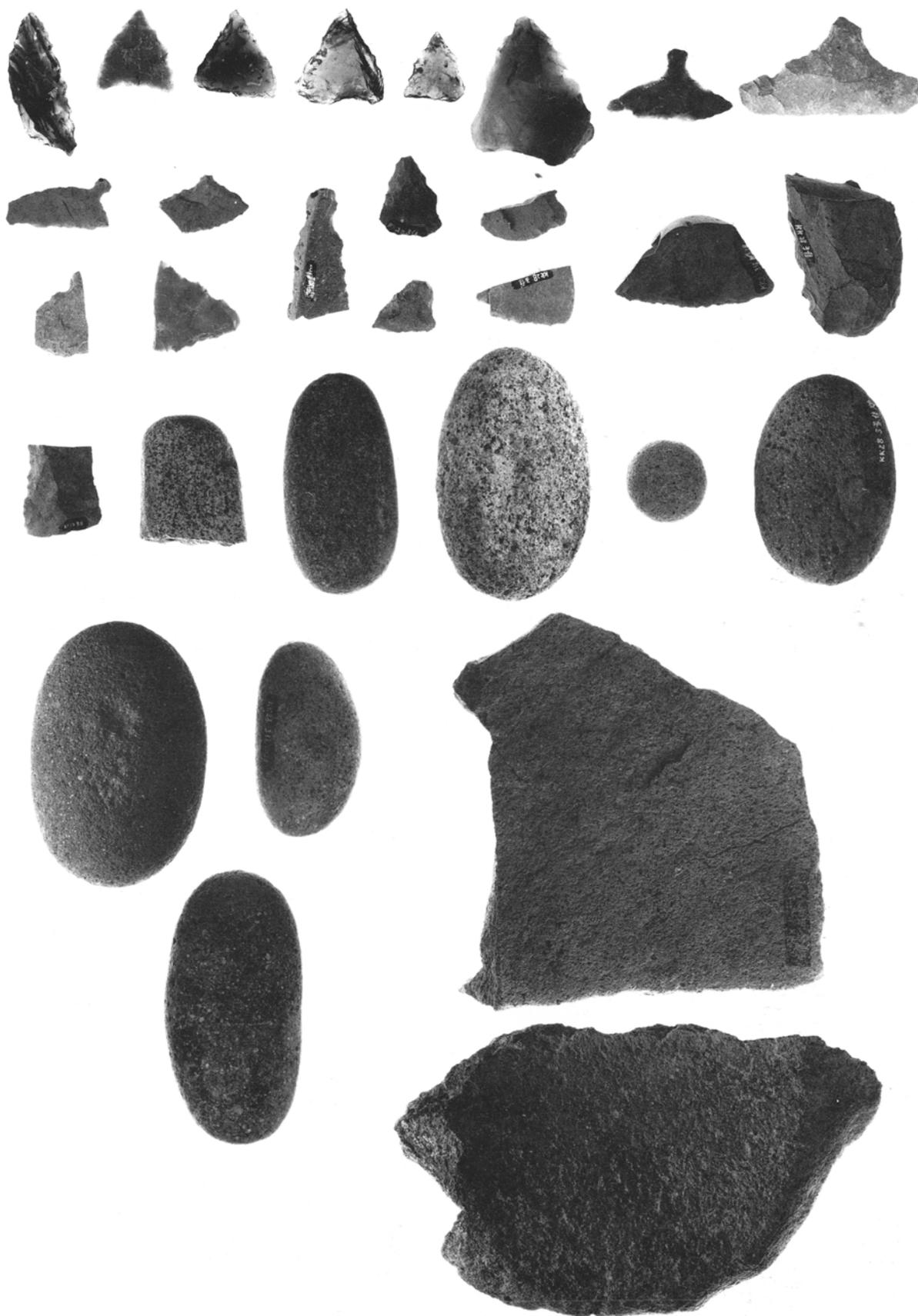
部分写真



1号住居址出土石器



2号住居址出土石器



3号住居址出土石器